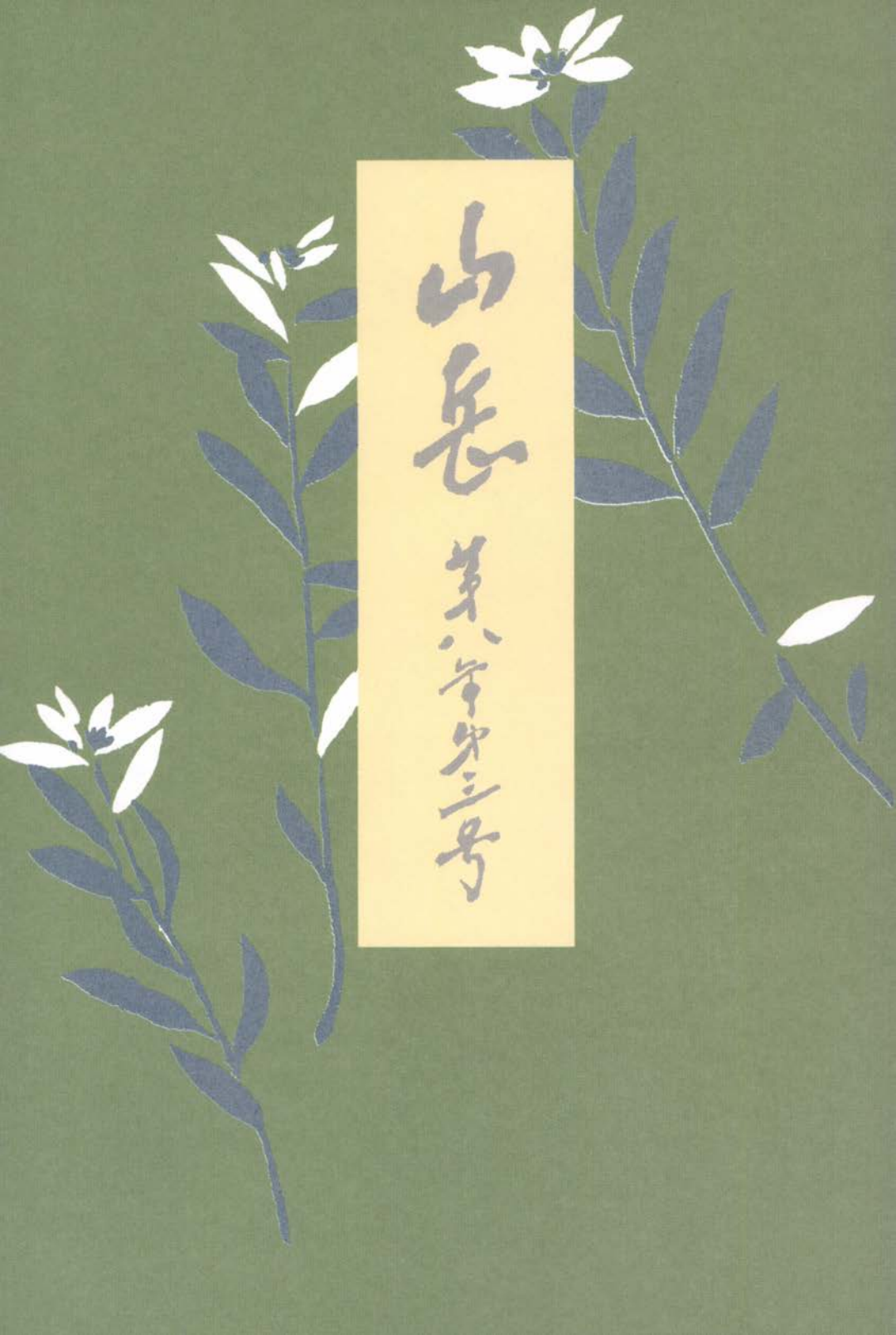
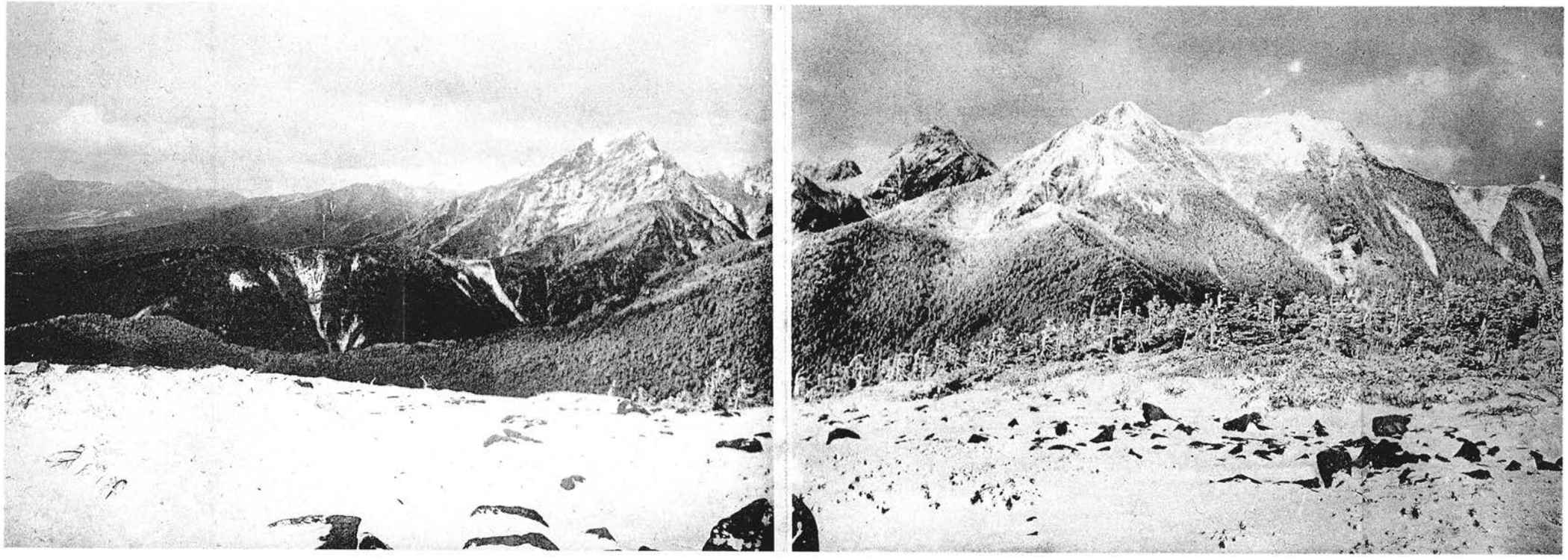
山長

第八年第三号





辻本満丸氏撮影

冬の八ヶ岳編笠岳頂上所望



麗山
蟠龍上人
三號
山岳
八年

THE MESSAGE OF THE RIGHT HONOURABLE JAMES BRYCE

TO THE

JAPANESE ALPINE CLUB.

I have heard with very great pleasure about the progress of the Japanese Alpine Club, and wish its members every success. Mountaineering is the noblest of all active recreations, for it elevates the mind as well as the body: it is amongst the mountains that we see Nature in her grandest forms, and our thoughts and hearts are purified and uplifted there more than anywhere else.

I am sorry I have not had the opportunity of climbing in your Japanese Alps, but I have read of them with great interest, and admire the photographs which I have seen of their beautiful scenery.

Please convey to all your fellow-members my best wishes for the continued and increasing welfare of the Club.

目次

表紙……石版刷……石崎光瑤氏筆
巻頭畫……冬の八ヶ岳……コロタイプ刷 工學士 辻本滿丸氏撮影
タイトルページ……石版刷……茨木猪之吉氏筆

（著作權所有）

挿圖

○大河原より見たる赤石岳……（寫眞銅版）……前澤淵月氏藏……四〇頁
○扇澤岳の西側より西岳の大バシを隔て、立山と劍岳とを撮る……（同　上）……濱谷泰次郎氏撮影……四〇
○駒ヶ岳將棋頭より御嶽を望む……（同　上）……同　上……八〇
○駒ヶ岳本岳より寶劍岳及空木岳を望む……（同　上）……河野齡藏氏撮影……八〇
○赤城の夏……（同　上）……辻村伊助氏撮影……一一二
○秋の高原……（同　上）……同　上……一二〇
○おちばの赤城……（同　上）……同　上……一二〇

○鳳來寺山麓……（同上）……小島烏水氏藏……一二八
○信州淺間山眞景……（同上）……同……上……一二八
○越中立山……（同上）……同……上……一四四

本欄

隱れたる山岳研究家　舊松本藩堀江有忠の事　信濃毎日記者　牧量雅……一
白峰連嶺縱斷記　青柳安茂……一三
赤石岳の麓　前澤淵月……四〇
八ヶ岳　別所梅之助……六二
信州駒ヶ岳遭難始末　上伊那郡敎育會……六八
山陰の名山奇峽　古家實三……八九
丹澤山　武田久吉……一〇二
春から秋まで　關口泰……一一二

雜錄

○高山に於ける寒暑の激變と空氣の稀薄と及び山岳病（小島）○甲斐駒附近に就て（辻本）○越中鯉鮒岳に就きて（中村）○再び北ア

ルプス項談に就て（槇谷徹三）〇山岳地の蜃氣樓（山岡恒夏）〇謠曲に現れたる山岳（鄕）〇後立山山脈旅行談（濱谷泰次郎）〇御座石湯より鳳凰山へ（濱谷泰次郎）〇登山者の注意（河野齡藏）〇山岳畫漫評（安曇ノ梓廬）〇机上談山（ウメモドキ生）〇甲州山村の三升桝の記事に就て（大村忠一）

雜報

〇駒ヶ岳の惨事〇御嶽山〇淺間山〇燒岳の狀況〇鐵道院の登山案〇白峰嶋の秋雪

會報

〇英國大使ジェームスブライス氏より本會への口信〇英國前山岳會頭フレッシュフイールド氏來る〇伊太利山岳會の五十年祝賀〇會員青木忠次郎氏の逝去〇本會幹事の外遊〇三高山岳會に本會幹事の派出〇京阪神日本山岳會々員有志晩餐會〇第十一回有志晩餐會〇高山深谷第五輯の發行〇一高山岳會團體旅行概況〇三高山岳會主催講演會〇東京地質學會に於ける飛騨山脈の地質及び氷河作用に就ての講演（K生）〇山梨山岳會設立〇會員登山報〇新入會員〇退會者

風景畫家歌川廣重傳　小島烏水（未定稿）……二〇三頁

隱れたる山嶽研究家

舊松本藩士　堀江有忠の事

信濃毎日新聞記者　牧量雅

信州と越中飛驒の國境に聳ゆる、重疊たる積巒連峯を、ウエストン氏に依て、日本アルプスてふ名稱を附せられて以來と云ふものは、著るしく此の山岳が世に紹介され、且つ研究者も殖えて來た、尤も今日では日本アルプスも、北日本アルプス、中央日本アルプス、南日本アルプスの三部に分れて、信飛國境に横はる連山は、北日本アルプスに屬するけれども、初めの内は日本アルプスとし云へば、此の連山を指すものと思ふてゐた位である、其の堂々たる雄姿、其の神秘的なる山容から云へば、北日本アルプスは正に、全日本アルプスの代表者と云つても差支えない位に、吾人に或る一種の深き印象を與へてゐるのである、隨つて北日本アルプスの探險蹈破は容易の業でない、獵師の事は別として、ウエストン氏の話は別として、學術研究を目的として此の嶮を跋渉したのは、今の上伊那農學校長河野齋藏氏などは最も初めの人である、其の後幾多の植物採集家、美術家、測量部員、林務官、探險家等が登つて、今日では殆んど人跡未到の峯や谷が無いと云つても能い位までに多くの人々が登り、殊に本年の如きは著るしく學生の團體を爲して登山せるを見たが、河野氏等が明治二十何年かに登つた其の以前には、學術的研究の目的を以て登つた者は無いとしてあつたのである。

然るに天保年間に早くも此の飛驒山脈を研究した人物があるのである、而も其の研究や極めて詳細で、多方面で、眞面目で、一々實際的であつた、此の隱れたる山岳研究家は誰であるかと云ふに、それ

◎隠れたる山岳研究家　牧

は信州の舊松本藩士堀江有忠と云ふ人である、有忠は通稱を島之丞と云ひ、後ち佐喜八と改めた、文化六年五月十七日の生れで、松本藩の足輕馬淵喜平次義清の次男である、有忠は同じ藩中の足輕堀江有親の養子となつた、即ち有親の長女ヤス子の婿となつたのである、其の結婚は出仕より後か前か分らないが、出仕は文政八年二月で十七歳の少年であつた、時の藩主は戸田（當時松平と呼ぶ）丹波守光年である。

有忠は足輕の關李右衛門の組へ召し抱えられ、四石二人扶持を貰つた、其の年の九月に大町騒動と云ふがあつて之に出向て功があり、同十年正月には擊劍では清水流、棒では止心流の免許を貰つた、十九歳でこれ丈けに達したのであるから、武術錬磨にも怠りなく精を出したと云ふことが分る、天保八年正月には組拔となつた、組拔とは足輕より一段進んだのである、今の飛驒山脈一帶、即ち大町小林區署、松本小林區署、安曇小林區署の管轄に屬する國有林は、松本藩の領分であつたので、藩には山方御役所と云ふがあつた、有忠は其の山方御役所の勤務を命ぜられたが、翌九年十月に藩政改革があり、山方御役所は廢止され表御勘定所と合併された、乃で有忠は其の同心となり、表御勘定所の内の山方へ勤めた。

山方奉行は七年に一回づゝ領内の山林を巡視する定めになつてゐた、又た山方同心は毎年一回づゝ必ず之を見廻る例になつてゐる、けれども概ね其の巡視なるものは、一片の形式に過ぎなかつた、今日の如く山岳研究思想が發達してさへも、往々にして山中に不慮の山岳病、暴風雨、空氣稀薄、毒瓦斯、墜落、寒氣、食物缺乏、其他の原因に依て死亡する者がある、近くは上伊那の駒ヶ岳慘狀の如きさへもある位であるから、昔時に於て何等の設備もなく、經驗もなく、山岳に關する智識もない時代に、開闢以來人跡の到らざる、役の行者が雲に乘て行つたと云ふ話さへもない、千峯萬谿の間を巡視するなどゝは嫌な事である、形式に過ぎなかつたのも無理はない、であるから同役の中で抽籤を以て代表

者一名を派遣するのが例になつてゐた、それも山奥の深くまで行くのではない、里近い山林だけを巡視して、復命する位のものであつたらしい、然るに堀江有忠は我から進んで一年一回の巡視役を勉めたのである、而も其の巡視たるや通り一遍のお役目的のものではない、彼のウエストン氏の爲めに、山案内をした處の、西山の谷の主たる老獵師嘉門次と雖も、或は舌を捲く底の大探險、大跋渉、大踏破、大縦斷、大横斷であつたかも知れない、夫れも單に無意味の山廻りをすると云ふのではない、有らゆる方面から實際的の大研究をしたのである、今日の學術的研究眼から見れば、有忠の遣り方は專門的でない爲めに、或は餘り價値のないものであらうと評する者もあるかも知れないが、事實は然う薄つぺらな研究ではなかつたらしい、有忠は餘りに記憶力が強健であつた爲めに、曾て備忘録を作つたことがない、故に惜しいことには何等の記録遺稿の據るべきものがないから、如何なる程度の研究であつたかと云ふ事を、一々示す譯には行かないが、未だ有忠を識つてゐる古老もあり、今の信濃銀行松本支店長堀江浪治氏は、有忠の孫であるから、是等の人々に就て略々其の偉業の一班を知り得たのである。

有忠は自分から進んで、人の嫌がる山廻りの任務に就いた位であるから、多大の興味を以て、規定以外の區域にまで踏み入て視察した、渠の剛膽は猛獸毒蛇を辟易せしめた事も幾度か、愛用の山刀（やまがたな）を揮て荆棘榛藪を切り開きつゝ、危險を冒し辛酸を嘗め、今で云へば北日本アルプス、即ち西山一帶の踏破研究を爲すこと、實に二十有餘年間の永きに及び、一年たりとも其の山廻りを休んだことがないのである、南方は尾州藩の領分たる境界の乘鞍岳より、北方は越後境まで跋渉したと云ふから、白馬岳の北方なる横前岳、籏岳、蓮華山まで究めてゐたに相違ない、有忠は此の大山脈、此の自然の魔力より成る大塊を視察研究するに、大體三區に分けて置いた、即ち北は野口入、中部は烏川入、南は島々入で、今日でも北は大町小林區署、中部は松本小林區署、南は安曇小林區署に區分されてゐるのも面

◎隠れたる山岳研究家　牧

◎隱れたる山岳研究家　牧

白い、有忠は年々之を代り〳〵に視察することにしてゐた。

で此の山林全部を扶育林と稱して居つた、扶育林と云ふのは、藩政の上に設けられたる一の制度から出來たもので、扶持米の代りに、藩士に對して其の林産物を與へたのである、薪炭、板、用材等を現品で與へた場合もあり、換算して金で與へた場合もあるらしい、扶育林と云ふのは其れから生れた名で、松本藩は此の山の爲めに、多くの藩士に與へる扶持の足しになつたのである、而して藩士に與へた餘りは、皆な拂ひ下げた、用材其他の林産物を最も多く出したのは島々入からであつた、山方奉行は此の扶育林の管理を爲したので、其の實際の任務に當り、施業の監督をし、林政上の計劃を立てた者は、堀江有忠であつたのである、島々入や、烏川入からの木材搬出には、非常に苦心をしたものであるが、是等の事は後に記すことにする、又た北安曇郡の大町には、御陣屋もあり、木場役所と云ふもあつて、有忠は其の木場役所に常勤をしてゐた。

有忠の山岳研究は、多方面に亘つてゐた、地理は勿論の事、有らゆる植物、動物、主要林産物、副林産物、氣候の事に至るまで詳しく、林政上の施設に至ては最も意を用ゐたもので、今日の林學者が理想とする處の、輪伐法や植林法は、既に有忠の腦中には組み立てられてゐたのである、又た實際に之を行つた、之れほど有要な事業施設案も、之れほど貴重な研究事項も、有忠は一も記錄に遺して置かなかつたのは、頗る惜しい事である、何故に記錄を遺さなかつたかと云ふに、前にも述べた通り、渠は非凡な記憶力を有してゐたので、三年間の事なら、如何なる微細の點に至るまでも、能く之を暗記してゐた、故に備忘錄を作らず、曾て手帳を持つたことがない、何んな事でも腦中に殘らずあつた爲めに、奉行より下問があれば即問即答であつた、地理、地質、面積、立木の數、樹木の種類、施設案其他總て立ち處に答へるので、藩中では佐喜八（後の通稱なり）の即答と云ふて有名なものであつたさうである、有忠は算術には達してゐたが、字を書くことは甚だ嫌ひであつたさうである、上手か下

手が、それも分らぬ位に渠の筆蹟は見ることが能ない、記者も是非其の筆蹟を見たいと思ふて、堀江家に就て調べたが分らない、或る人の借用證文に保證人となつて、姓名を書いたものがあるが、之れとても果して有忠の自筆であるか何うか、疑問であると云ふ話であつた、斯う云ふ譯であるから、總べての事柄は、腦中に保存して置て、記錄には遺さなかつたものと思はれる、當時の人の見聞錄さへも無いのは、寔に遺憾の至りである、地圖も昔のは誤つてゐた、假令へば梓川は野麥峠より發する如くに描いてあつたが、有忠は實測上から之を正し、明治十八九年頃發行された地圖から、始めて梓川、高瀨川の水源を槍ヶ岳より發する樣に改正されたが、之れは元は有忠の意見に基いたものである、白馬岳の名稱も、以前は誰も知る者がなかつた、其處の麓邊の者でも單に『タケ』と呼ぶのみで、白馬とは云はない、其れを河野氏等が登山して後ち、世に紹介されたが、有忠は既に之れを調べて置き、元松本中學校敎諭松原榮氏などは、明治十四年に、初めて白馬岳の名を有忠から聞いたと云ふことである。

有忠は山を跋涉するに、常に愛用の山刀を帶びて居つた、其の刀は何の飾りも施して置かない、下緒とも云ふべきは、麻繩の三十間もある長さのもので、之れを青色に染めて置いた、此の麻繩は斷崖險岨を渡つたり、上つたり下りたりする時に用ゐたのである、山岳探險に麻繩が必要であることは、ウエストンが說いてゐる、同氏は今年も此の麻繩に依て、槍ヶ嶽の裏を探險したと云ふ話である、有忠は其の岳繩を、命の綱として、西山を隈なく踏破したのである、渠の愛用したる刀は、現今長野市の堀江忠明氏の家に藏してある、忠明氏は有忠の三男で、分家した人である。

或る時、松本藩の領分と、尾州藩の領分とで、境界の紛爭が起つたことがある、其の結果小八森山から發し、梓川に注ぐ處の、大白川の一溪谷は、尾州藩へ奪はれて仕舞つた、由來乘鞍以南は、尾州藩の領分であつたが、重疊たる山嶽溪谷の間であるから、境界線が明かでない、其時有忠は大いに憤

◎隱れたる山岳研究家　牧

慨して謂へらく、是れ畢竟松本藩の領域地理の明らかならざるに由る爲めであると、山岳模型の製作に着手した、是非とも松本藩の領地を明瞭にして置かねばならぬとて、更らに諸高岳に攀登し、獵夫小屋、炭燒小屋、樵夫小屋に宿り、或は露宿し、辛苦艱難を極めて、其の地形を觀察測量し、二十年來試みたる實地踏査の記憶に依り、微細なる點までも、其の山系模型の上に現はす事にしたのである。

有忠が西山（北日本アルプス）山系の模型を作つた場所は、北安曇郡の大町である、大町には木場役所があつたから、其處に常勤してゐて作つたのであるが、役所は狹いので、實際の製作所は、御陣屋の土藏であつた、製作の助手は加藤悅之助と云ふ人で、弘化の末から嘉永の初めに亘る約三ヶ年の日子を費して、苦心慘憺の末、遂に之れを完成した、模型は粘土を以て、長さ三間、幅三尺餘のものを作り、之れに幾重かの紙を貼付して後ち、其の型を拔き、其の中へ支柱を細かに立てゝ、模型の潰れぬやうにし、又た之れに、夫れ〴〵の彩色を加へて、分水線、合水線、樹林、荒地、原野、水脈、岩容、雪溪等に至るまで、悉く之れを表はしたる、極めて精巧のもので、模型は三つに切れる樣にして、長持に納めるやうに拵えて、大切にして置いた、之れに附するに、詳細なる說明書を以てし、其の地形、廣狹、樹木の種類、輪伐の區域、木材搬出の一班、其他有らゆる事項を詳記し、截斷されたる模型を、符號によりて幷列し、之れに照合すれば、宛然西山一帶の地形を眼下に集むるが如くであつたと云ふ、現存せる舊藩士の古老で、此の模型を見た人は、二三名ある、其の話に據れば、島々入方面が、最も詳密に出來てゐたと云ふことである、之れは尾州藩の領分に隣接したる處であるから、特に意を用ゐたものであらうと思ふ、此の苦心に依て成つた模型は、御勘定所に保管され、明治初年の廢藩置縣までは、存在してゐたが、惜い哉、今は無いのである。

其の頃は學術の未だ開けざる時であつたのに、此の如き事業を成し遂げた有忠の勞苦は、實に察するに餘りある、今日若し此の模型が在つたならば、山岳研究家に取つて、多大なる參考となつたであ

らう、惜しい哉、今は無い、古老の話に依ると、廢藩置縣の際、無慘にも此の苦心の塊を燒いて仕舞つたさうである、明治初年の廢藩置縣當時に、跡始末をした役人は、神方新五左衛門と云ふ人であつたから、神方が模型を燒いたと云ふても、差支えないやうなものである、神方は御用人であつて、僅かばかりの間、藩が松本縣と云つた時は、權參事を勤め、大いに權威を振つたものである、松本で寺院廢止を斷行したと云ふ荒療治の張本人も、神方新五左衛門である、何故に斯んな事をしたかと云ふに、由來松本藩は佐幕黨であつた、處が段々と時勢が變遷し、朝廷に着かねばならぬ仕宜となり、藩中の大評定をしたことがある、其時藩士の三分の二は、佐幕論者で、頗る頑強であつたけれとも、時勢の推移は致し方がない、朝廷の方へ着くことになつた、が朝廷の眼から見れば、松本藩は頗る危險分子である、油斷も隙もあつたものでないから、常に注視を怠らなかつた、松本も愈々官軍となり、會津征伐に繰り出すことゝなるや、或る隊長は心底は相變らず佐幕なので、足は進まなかつた、途中で獨り言のやうに『官命だから仕方もないが、愈々戰となつたら、鐵砲を背後の方へ向けて、放つまでの事サ……』と云つた、此の事を直ぐに藩へ注進する者があつて、途中から引き戻され、祿を取り上げられたと云ふ話もある、斯んな樣な行き掛りもあるから、松本は始終朝廷からは睨まれてゐたのである、一ッ間違へば、何と成るか分らないから、藩主以下家老職などに至ると、ビク〳〵者であつた、故に朝廷の方から言はるゝ事なら、何でも御無理御尤もと聞くやうになつてゐたので、寺院を潰したのも詰らぬ理由に基いてゐるのである、有忠の作つて置いた山の模型も、斯んな物を筑摩縣へ引き繼いで、若し叱られゝば困ると云ふやうな淺墓な考へから、無慘にも遂ひ燒いて仕舞つたので、其の頃未だ山岳趣味の無い、有忠の苦心に思ひ遣りのない者等が、只だ譯もなく燒き棄てゝ了つたものらしい、スヰッツルの案內記でさへ、今より二十年前のには、山登りなどは益のない事であると云ふ意味が記してある位であるから、神方等が深き意味もなく、斯樣な物が有つては惡いとか、若くは邪

◎隱れたる山岳研究家　牧

◎隱れたる山岳研究家　牧

魔物と思つて燒却したのも無理のない話であるが、左りとは惜しい事をしたものである。

當時の山方奉行は、尾州藩との境界紛爭事件を、如何に結末を着けたか知るに由もないが、堀江家にある有忠の小傳に依て見ると『嘉永二巳酉年正月二十二日、年來の勤筋、誠に司役より申達候場厚相心得、容子能取計、去年是迄に無之、多分の御爲有之、旁々拔群に付、五斗御加增被下置、同日二十ヶ年皆勤に付、金百疋被下置、同二十八日表御勤定所帳役被仰付、同三庚戌年正月十五日勤筋出精拔群に付、五斗御加增被下置』云々とあるから、山の模型を作つて後ち、其の功を賞されたに相違ない、シテ見る境界紛爭事件にも、好影響があつたのであらう、今日の地圖に據ると、尾州藩に奪はれたと云ふ大白川の溪谷は、南安曇郡内の國有林になつてゐて、小八森山の西筑摩郡内なる鉢伏御用林の境界線は、溪谷の合水線が境界になつてゐる、松本藩の主張は、充分には達せられなかつたにもせよ、或る程度までは境界を押し返したものと想像される。

有忠は公務を奉ずるに、極めて謹愼であつて、苟も私事を以て勤め向きを休んだ事がない、公務精勤の爲めに、褒狀を得たる事七回、金品の賞與を受けたること五十回、扶持米の御加增に預りし事四回の多きに達してゐる、其の内山方役勤務中に得たるものは褒狀一回、金品賞與四十回、扶持の御加增四回である、以て如何に有忠は拔群の精勤者であつたかと云ふ事が分る、今ま有忠の小傳中より、山方在勤中の部だけを左に抄記する。

天保八丁酉年正月廿八日山目付へ組拔被仰付△同九戊戌年正月十五日、御用多の處、出精に付、銀子二兩被下△同日相續、御才覺金出精拔群、幷に去年着木百五十間餘過木有之旁々に付、紙二俵被下△同日流方の節川邊番所へ罷出、御人少に付、當年も一小屋隔に相立、手廣の場所見廻り、格別骨折相勤候に付、銀子二兩被下△同廿八日御司役より南鐐二片被下△合同年十月十三日御改革に付、山方御役所相疊み、御郡所へ一體被仰付、御引渡に相成、同年十一月十五日、表御勤定所

同心被仰付△同十巳亥年正月十五日出精相勤候に付、銀五匁被下△同廿八日出精相勤候に付、御司役より南鐐三片被下△同十一庚子年三月九日御改革後、御用多の處、出精相成御爲も有之に付、銀子二兩被下△同日流方に付、川邊へ罷出、一小屋隔に相立、手廣の塲所晝夜骨折、出精相勤候に付、銀五匁被下△同日出精相勤候に付、御司役より南鐐三片被下△同十二辛丑年正月十五日、御改革筋出精、山方御爲金も有之、拔群に付、籾一俵被下△同日流方仕法世話行屆、旁々拔群に付、金百疋被下△同十三壬寅年正月十五日勤筋出精、格別の御爲金も有之、拔群に付、粉二俵被下△同二十八日木尻出役の節、雪中幷に出水等にて、難塲多の處、骨折樣子能取計御爲相成、拔群に付、金百疋被下△同十四癸卯年正月廿五日、勤筋出精、殊に格別の御爲も有之、拔群に付、籾一俵被下△同日於所々召捕者出精に付、銀子四兩被下△同日去年流方世話行屆、着木も多、旁旁格別に付、銀子三兩被下△同日十四ヶ年皆勤に付銀子三兩被下△同日流方に付、大籠塲幷に川邊筋、所々へ罷出、一小屋置にて塲廣の處、晝夜骨折出精に付、銀子三兩被下△同十五甲辰年正月十五日勤筋出精、御爲も有之、御山林御締掛り、骨折其上流方牛木永久の御爲に相成、旁々拔群に付、籾七俵被下△同日於所々、召捕者出精に付銀子二兩被下△同日流方仕法世話行屆、去年の儀は着木も多く、旁々に付二朱金一片被下△同日流方に付、大籠塲へ出役塲廣の川筋取締方別て心配、村役人へ差圖行屆、晝夜無怠相廻り、取締方懸心頭氣配行渡、出精に付、銀二十匁被下△弘化元年甲辰年十二月十五日、年來出精上薪夏流目論見樣子能取計ひ、其外永久御爲筋有之、拔群に付、五斗御加增被下△同日當夏流方世話行屆、着木も多、旁々格別に付、銀子三兩被下△弘化二乙巳年正月十五日御司役より、申達候筋厚く、相心得、勘定方、其外仕法替樣子能取計ひ、多分の御爲金有之、出精拔群に付、籾三俵被下△同日滿水の節、出役出精に付、蒙御褒詞△同日去冬流方多分の過木有之、拔群に付、金二百疋被下置△同三丙午年勤筋出精、殊に上河地山末木仕

入、並に拂方檢も行屆、且御爲も有之、旁々格別に付、銀三兩被下置△同日流し方に付、大籠場へ出役、寒氣の時分、難澁も不厭、川筋晝夜無油斷相廻り、役人共へ着木方行屆、御入用も少く、取扱方念入出精格別に付、御酒代銀五匁被下置△同廿八日去年流方世話行屆、着木多く、旁々格別に付、銀子三兩被下△同四丁未年正月十五日出精相勤、橋場入四ヶ村柄取直し、流木留新規薪板子拂方、改法御爲相成、且多分の御爲金有之、其上他屋詰差止め、須浪堰流方詮義骨折御上下御爲に相成、拔群に付、五斗御加增被下△弘化五戊申年正月十五日出精、相勤下山にて御例も無之、薪多分御仕入樣子、能取計ひ、其外御爲金有之、拔群に付、二朱金三片被下△同日流方の砌、滿水にて薪押流候節、出役樣子能取計ひ候に付、銀二兩被下△同日去冬流方過木有之に付、銀三兩被下△同日流方に付、大籠場へ出役、寒氣の節晝夜相廻り、指圖行屆出精に付、金百疋被下△嘉永二巳酉年正月廿二日年來の勤功、殊に司役より申達候場厚く相心得、容子能取計ひ、去年是迄に無之、多分の御爲有之、旁々拔群に付、五斗御加增被下置△同日二十ヶ年皆勤に付、金百疋被下置△同廿八日表御勘定所帳役被仰付△同三庚戌年正月十五日勤筋出精拔群に付、五斗御加增被下置△同四年亥年正月十五日、勤筋出精拔群に付、籾一俵被下△同日薪板子流し方、出精御爲有之に付、金百疋被下置△同日御山內、御拂木の儀に付、御爲有之、格別に付、二朱金一片被下△同月廿八日御山內御拂木の儀に付、御爲有之、御司役より十二人へ金千疋被下置△同五壬子年正月十五日勤筋出精格別に付、籾一俵、被下置△同日薪板子流し方出精、御爲有之に付、銀一兩被下置云々

以上の記錄に據て見ると、有忠が木材の搬出に苦心した跡が歷々と見えるやうである、谷の中の搬出路は、丸太で筏の樣に組んで拵え、雨の降るのを待て、滑らせて木材を落し、水路の便のある處から、木流しをして、里へ搬出させた、東筑摩郡の嶋內村や、嶋立村には土場と云ふがあつて、其處へ

薪や板や屋根板などを澤山に積み、藩士に配與したり、拂下げをしたり仕たものである、斯う云ふ工合に、谷々へ搬出路を拵え、人夫に競爭心を起させて、搬出したので、一番澤山伐り出したのは、嶋嶋入で、次は大町入である、一年に幾萬間と云ふ程伐り出したさうであるが、一間とは板子などを、幅三尺、長さ六尺、高さ六尺に積み上げたものを云ふのである、其の木流しに就ては、出水の折は云ふに及ばず、寒中などでも、晝夜盡力したことが度々あると云ふから、其の勤勉は素より、餘程身體も健康の質であつたと思はれるのである。

有忠の所屬であつた表御勘定所では、今日の銀行の遣るやうな事もして、人民に金を貸したものである、隨つて金の融通をせねばならぬので、山方の役所を廢して、之れを表御勘定所に合併したのである、詰り山方で拂下げなどした其の金を、流用するに都合が能いからである、松本藩には、常に流通してゐた現金も、餘程あつて、藩主戸田侯が東京へ引き移る時は、十五萬兩も持て行つたさうである、表御勘定所の整理殘金、即ち貸金の取立などは六萬兩もあつて、何處へも遣る處がなくて、困つたことがある、斯る金を生み出したのは、有忠の小傳中にも見ゆる『多分の御爲金も有之、出精拔群』云々の功績であつたので、有忠は林政上にも、非凡の智識があつたのである。

之れ程の拔群精勤者たる、有忠も懲罰を受けて、閉門を仰せ付かつたことがあるとは、實に以外のことである、それは嘉永六年七月の事であるが、藩では其の當時御儉約と云ふので、家中の者は萬事質素を旨とするは勿論の事、物見遊散をしては、相成らぬと云ふお觸れであつた、然るに有忠の妻女ヤス子は、芝居が好きなので、或る時コッソリと、獨りで芝居を觀に行つた、夫れが有忠の同僚の者に知れて、奉行所へ大變に惡い事でもしたものゝ如くに誇大に訴へられた、其れが爲めに、有忠は家事向き不取締と云ふ廉で、表御勘定所の帳役御免、元の足輕に取り戻されたるのみならず、七十日間の閉門を仰せ付かつて、仕舞つた、妻女が芝居見物をした位の事で、斯の如き懲罰は餘りに過酷であ

◎隱れたる山岳研究家　牧

るが、有忠は山方勤務中の功勞で、幾度か破格の御加增と、名勢が頓に高くなつたので、同僚から嫉まれてゐた、其の上性質狷介で、權貴に媚びることなく、侃々諤々の議論は、四邊を顧慮せず、決して主張を枉げないので、上下は畏れてゐたが、又た嫌がつてもゐた、氣に入らぬ事があれば、家老職でも誰でも搆はず『馬鹿野郎』と大喝したものだ、藩中では佐喜八の「馬鹿野郎呼はり」とて有名な話柄であつたが、之れが爲め一部の人々からは忌まれてゐたのも事實である、過酷の懲罰を受けたのも裏面から觀察すれば、成る程と思ふ點もあるが、左りとは稀有の名物男に、大なる汚點を附したものである。

有忠は閉門處罰を受けた後ち、元の足輕となり、駒井彦右衛門の組に編入されたが、家老の中柴縫之助や、御用人の藤井甚助に用ゐられて、又た徒士となつた、有忠は中柴家老や、藤井御用人の家政上の事は、大いに力を入れて世話をしたので、之れに愛せられ、蔭ながらの藩政上の顧問であつた、其の後渠は黒船來航の騒ぎの時に、江戸へ行つたこともある、武田耕雲齋の變亂の際は、扉峠まで出陣し、長州征伐にも出掛けたことがある、其の外、火事や出水の際にも、能く功績を擧げて、褒狀や金品の賞奬に預つたことが度々あつた、老後は風月を樂み、最も謠曲を善くし、明治十七年八月十七日、松本市天白町の自邸に於て永眠した、享年七十六歲、法名は大義院有忠日悟居士と云ひ、墓は同市字澤村の賢忠寺境内に在る。

有忠の容貌は剛偉、能く其の志が面に表はれ、眼中一種の光彩を帶び、人を壓するものがあつた、耳の非常に大なる、一見奇なるが如きも、偉丈夫の相はそこに現はれてゐたと云ふことである、渠に三男三女あり、長男は夭折し次男の有義が世を嗣いだ。（終）

白峰連嶺縦斷記

青柳安茂

白峰連嶺を南より北に、縦斷する目的にて、大正二年七月廿九日午前甲府出發、南巨摩郡西山村、奈良田よりシロカヴチを登り、縦走の目的を達したるも、風雨と濃霧に苦しめられ、歸路を誤つて、谷に入り、更に野呂川の谿谷をさ迷ひ、糧食の欠乏を來たしたるも、幸にアヤサシの小舍に救はれ、八月三日漸く中巨摩郡芦安村に出でて甲府に歸る。

一

出發の前夜は、田舍娘が夢に迄描て居る、東京へ出て行くのと同じ樣な心持で、碌々眠られなかつた。

七月廿九日午前五時四十五分、食料、防寒具、露營用具等を携帶して、甲府太田町から、馬車へ乘つた。空が忌やに曇つて居る、降るだらうかと心配すれば、朝曇りだから、いまに晴れやすと、案内に立つ爺さんに安々と受け合はれて安心した。

車窓に凭れて、心は西の空に許り奪はれた、薄い雲を隔てゝ、纔かにそれかと思はれる間の岳、農鳥二蜂のスカイライン!! 頂へ雪が來たと云つては、胸を躍らせ、滿山悉く白衣を着けたのが初春の日に燦々と輝き渡るのを見ては、あちこちと甲府の町の中を眺めに恰好の場所を探し歩いたり、農鳥に鳥形の殘雪が現れると、思はず足を停めて眺め入つたりして居た、白峰、甲州の山の奥の奥に靜まり返つて、然も嚴かに其存在を示して居る白峰、山から來る風に、山に懸る雲に、雪に、少くも自分一個の感情を支配して居た白峰、其頂へ愈よ自分の足跡が印せられるのかと思ふて、何かしら故里へでも歸つ

て行く様な嬉しさが、込み上げて來て、思はず草鞋を穿いた足を踏み締めた。

七時三十分歐澤の手前增穗村字追分で馬車を捨てる、追分は增穗村の內、青柳に屬して、鳥渡した宿場である、西山の溫泉へ行く者は、多く此所から入つて行く。「西山溫泉行御支度所」と云ふ看板を掛けた林屋と云ふ茶屋へ寄つて、卵など買つたりした、溫泉行の客を待つて居る强力が、私達の一行に目を峙てる、之から白峰へ行くと云ふ樣な話が出ると、其家の主人は白峰で捕獲したのだと云つて、鷲の雛を見せて呉れた、寂寞とした高山の空氣を搖り動かす猛鷲の凄じい羽搏きが、聞える樣な氣がした。

此家の橫手を町裏へ脫け、爪先上りの野良道を愈よ西山へ面して急いだ。日が照り始めて汗がヂリヂリと流れる、戶川の瀨の音を右手に聞いて山を上り乍ら一里も行くと、桑畑があつて女が桑を摘んで居た、山はシンとして瀨の音が遠く、小鳥が鳴く、家があるんだね何んと云ふ村だらうと女に聞くと、日影林だよ村は知らねえと云ふ返事だ、聽て藪家が五六軒、山の中腹に噛り附いた樣に建てられて、或る家の裏口から汚い婆さんが不思議さうに此方を見て居た、淸水が湧いて居る所へ來た、咽喉が乾き切つて居たので、突然顏迄突き込んで思ひ樣飮んだ後で上手の汀に肥料桶を發見したのは滑稽だつた。

南巨摩から中巨摩西八代邊の町や村、森、田それから釜無川などが段々に遠く下になるのを樂みに下を眺め眺め上へ上へと山又山を登つて行く、右すれば谷を隔てゝ山の上に見える平林村に通じ、左すれば小室へ行く山の一角に立つた時、谷から吹き上げて來る風が汗を氷らせる程冷たいのでも餘程高くなつて來た事が判る、雜草に雜つて點々と百合が咲き、初雪草が一ぱいに開いて居る、外にコマツナギ、山シロギクなど、腰を行ろして南の方をヒヨイト見ると、紫の壁を立てた樣に大きな富士が半天に懸かつて居た、眼下には釜無川が紗を延べた樣に靄の內に光つて居る、鷲が頻りに鳴く、春の鳥が鳴き、夏の花が開いて居るのに季節の送迎に遽たゞしい移り氣の深い山の中には、もう秋めいた風が、ヒヤリ

ヒヤリ吹いて、春と夏と秋の色彩と音樂が相錯綜して居る。自分達は其處で折詰の鮨を開いた——明日からはもうこんな贅澤のものは喰べられないんだと云ふ考へが等しく三人の胸に湧いて居た。

夏の旅人にとつては青い草原と路傍の木蔭とそして清水が何より嬉しい、小室の上の組を峠路の稍下に、五六軒見た時態々道を廻つて水を飲んだ。養蠶に忙しくて親達から捨てられた様に、攀つて貰へない幼い兒の、ヒー〳〵と云ふ泣き聲と、牛小屋の内に唯肥料にする糞をする爲に、飼はれた牛の、暗い光つた瞳、遠く離れた山の中のかうした生活を見ると、私の胸には、必ず或る佗しい思ひが往來する。

それから暫らくの間莫蓙を着た三人の姿が凉しい木の間を縫つたり、赤ちやけた道を日に眞正面に照り附けられ乍ら登つて行くのが見られた。頂上へ頂上へ、峠を登る者の心の内は唯これだけである、だから自分達が頭の上に空を劃つた山の一面の青草の内に、忘られた様に取殘された老朽の針葉樹が、所々にポツ〳〵と立つてサルヲガセを垂らして居るのを見た時、頂上へ來たと云ふ事を意識して、第一の完成の喜びを感せずには居られなかつた。

デッチョウの茶屋へ來たのは午後一時頃、恐らく沙漠を旅する者がオーシスを探し當た時の心持と同じであつたらう。間口七間位屋根には石が置いてある疊の黒さは爐の燃火で煤け切つた天井の黒さと色を競つて居る、家の前の稍平な所には山から取つて來たらしい楓や松の類が二三十本植付てある。十五位の女を頭に子供が三四人、クチャ〳〵と飯を喰つて居た、自分達も辨當を開いたり茶を呑んだりした、綿入れを着たおかみさんが井へ入れて出して呉れた鹽漬の大根の葉は甘かつたが、井の醬油の海の底を見ると、十日も前に入れた様な葉が眞黒になつて漬かつて居る、上に來るに從つて青く新しい所を見ると、それからそれへと重ねて行つたものらしい、木目の様にそれに依つて年代いや日數を知る事が出來るだらう。新しい所だけ摘んで喰べる、「爺さん今年も草（高山植物の事）取りかい、

◎白峰連嶺縦断記　青柳

さしく見えなんだで俺あ亡者になつたと思つた」と草鞋穿きで框に腰掛た四十六七になる髯だらけの主人らしい男が爺さんに聲を掛て笑つた。

時計を見るともう二時が過て居た、此峠の茶屋の柱に掛つた燻んだ時計の針が不思議?に合つて居る聞いて見ると、「甲府の午砲が聞けえるに」とさつきから土間に休んで居た温泉へ行くらしい若い強力が口を入れて、「けんど音はそれ一秒間に三町しか傳はらねえちうで此處迄來るにや、少しは後れやす」と説明して呉れた。

二

そこ〳〵に仕度をして、音響の速度を説明した久さんと云ふ男と一緒になり此絶頂の寂しい一軒の茶屋を後に温泉を指して出發した。源氏山が鬱蒼たる栂や樅の森林を被つて、深山へ來たぞと言はぬ許りに目の前に立塞がつて居る、路は下り一方で樂になつたが、山路と云ふものは上りより下りの方が難澁だと久さんは明かして呉れた。兩側には泡盛草やルリトラノヲが紅白の房を捧げて青い草の間を彩どつて居る、白山女郎花も見えた舊道の方が樂だと云ふので私達は舊道を擇ぶ事にした、大峠の中腹ォチヤ澤で水を強か飲んだり水筒へ詰めたりした、指先が痛い程冷たい、誰かゝ何處か其邊に肥料桶はないかねと言つたのは振るつて居た、考へて見るともう今朝から餘程山の内へ入つて來て居る、と遂淡い旅愁を覺えたが、然し日向窪と云ふへ出て、南に見える七面山の東の肩を遙に遠く伊豆の海を見た時は思はず唾を呑んで爪立つて眺め入つた、墨で塗つた樣に黑く見える七面山の肩から南巨摩の南端、山の開けた間を通して、晴れた午後の青空にも紛れず、魂を吸ひ込む樣な滑らかの濃い輝きを持つた海の寸碧！何んと云ふ思はせぶりの色だらう、たをやめの片靨の樣に——、生れるからして山に許り育つた山人が栂や白樺を相手に振るふ大鉈の手を休め、腰をのし目を擧げて、あの太平洋

の浪に見入る――「久さん此海の見える所に何か話しがなからうか。」と私は堪らなくなつて聞いて見た、「さあ別に話もねえ様だね。」と耳にも止めぬ様子に、何かローマンスでも聞ける事かと期待した私は落膽して、海の方を振り返り〳〵歩いて一行に後れて了つた。

さつき見た源氏山はもう後になつて居る、峠は次第に深くなつて山と云ふ山は悉く、四邊に磅礴する「靜寂」に譯もなく包まれて了つて、しつとりと濕り氣を帶び、木の葉一枚動く音すら聞き逃しはすまい、雨や風に虐められた白樺が無慘の死骸を路傍に横たへて居る、日が蔭り始めて、山の上へ次の山の大きな陰影が靜かに大きく落ちる、中根澤と云ふ所へ來た時、小菅山の後から黒い魔の様な赤石大山脈の連嶺が簇々と顔を出して來た、赤石山、惡澤岳、間の岳など稜々乎として雲表に頭を擡げ人間を威赫して居る。

小菅山裾のを廻つて、初めて脚下の谷に早川の急湍を見た、濃碧の水が滔々と靜なるべき深山幽谷を搖り動かして流れて居る、兩岸の切り立つた様な山に谷を窄められ、向ふ岸に家數四五十、西山村字上湯島の部落である、明に見え乍らも遠いので家根が小さく見える、夕飯の支度の煙がゆら〳〵と立つて山を匿ふ、暮るに早い谷間はもうすつかり日が隱れて、冷凉の氣秋の如くヒタ〳〵と頰を撫でて通る。上流の左に寄つた山の上に暮殘る空を背景にして農鳥山が突如として現はれた、雲が頻に胸の邊りを去來して人間の近づき難い事を示して居る、明日分け入らうと云ふのはあれだなと思ふと、道に恐怖を感せずには居られぬ。農鳥は間もなく再び山に隱れて了ふ。

早川を脚下に見乍ら山をいくつか廻つて温泉を直ぐ其處に見た時は宿の障子に灯影が動いて居た。新湯と古湯と二軒ある。私達は上の方の新湯へ泊まる事にした。座敷の高い縁の下の様な所を潜つて廻ると入口になる、湯の主人は飯を喰ひ掛けにして出て來て迎へた。梯子段を二た所許り下りて中二階と云ふ一間へ案内された、新しいだけが取得だ。先づ何より湯へと三人は交代に入つた。浴場は新

築した許りだ、湯の底が川の砂利で敷き詰めてあるのが嬉しい、微温の瀧が頭の上の桶から可成り太く落ちて居る、落た湯は無數の白い玉を作つて湯の透明な事針一本は愚か塵一筋も人目は逃れない程澄み切つて、浸した膚は空間に於けるよりも更に鮮に見られる。部屋へ歸るとランプに夥しい羽蟲がたかつて居た。

三

早川の瀬の音に山奥の夜が明ける、昨夜は蚤に攻められて碌々眠られなかつた、朝飯が昨夜の膳を其儘辛い汁に鹽の浮いた鮭の切身だつたには閉口して了ふ、宿から味噌梅干鹽などを買て六時と云ふに「おだいちにお登りなッて。」と云ふ聲に送られて三人は湯を後にした。天氣は大丈夫らしい、古湯の横から橋を渡り山の裾を早川に沿て溯る、私達は奈良田からシロカウチを登り口に定めたのである。奈良田へ行く道には蔓苺が多かつた、まだ露の切ぬ紅玉の様な實を取ては咽喉を濕した、白い齒が紅く染まる。頑丈な男にも負ぬ様な女が笊の様な物を後へ下げたのに出逢てから奈良田は直ぐであつた。

今はどうか知らぬが奈良田の女はタホと云ふ麻で拵へた着物を着て、五錢白銅を出すと子供などは逃げ出したものだと母から聞いてそんな所へ一度行つて見度いものだと思つて居た私は、先を急ぐ旅乍ら暫くの時を其處で費すのを惜まなかつた。村へ入ると黒い布の附いた日の丸の國旗が軒端へ出て居たのを見て不圖の話乍ら私は始めて今日は明治天皇祭であることを知つた。

早川の谿谷が西と東に白峰連嶺と早川連嶺を分けた間に西山の温泉から奥へ更に一里、此處も日本の内かと思はれる部落が奈良田である。學校があると聞いて私は寧ろ奇異の感じを起した程だ、村から一段高い所に四間に五間位の平家造り一棟、玄關の柱に奈良田尋常小學校と讀まれた、男の生徒十二三人が庭の草を取つて居たが私達を見ると、古い洋服を着て古いパナマを阿彌陀に被り荷特を背負

つて、活動寫眞へ出て來る西洋の酔ばらい然とした爺さんに迄叩頭して鄭重な敬意を拂つた。十坪許りの校庭に櫻の木が三本、藪蔭に吹井があつて百合の花が咲いて居た、刺を通ずるとたつた一人の先生兼校長の津金三平氏が現れた、年既に五十を越え、七ッ下りの三つ紋の合せ羽織を着て極めて謹嚴に構えらるゝ、私は此僻地にあつて兒童の敎育に關る此禿頭老先生に敬意を拂はずには居られなかつた。先生の居間らしい所へ通る、棚には臨時枯薪取立帳、書籍代金取立帳などと云ふのが五六冊下げて、其奥に敎室が見えて居た。「昨年警醒社の田山宗堯先生が來られたが、手蹟と云ひなか〳〵エライ御人です。」と云ひ乍ら世界寫眞帳と云ふのを出して、「お歸りなると直ぐ斯う云ふものを送つて下さつた、小包でなんと三十六錢張つてあります。」と保存した包紙迄皺をのして示した。それから「元來奈良田と云ふのは奈良朝時代に孝謙帝が逃れて當地へ來られ此上の高い所に居られたが、朕が此處に居れば此處も矢張り奈良ダと仰られたので奈良田と云ふ地名になつた、當時は此一村を山城郡と云つて居た、今は戸數五十人口三百木細工を生業にして歐澤の方へ持ち出して居ります、イヤ粟を喰べたのは昔の事で今は白米を喰べて居ますが斯う云ふ美食を普通の事と思つて居るのは實に不心得の譯です。」と憤慨される、子供と子供の話しを聞いて居つても日本語を話して居るのかどうか一向判らぬ、村には便所と云ふ言葉がない、お閑所と云ふ、タホを纏つて居るものは見なかつた普通の絣の單物を着て居る。

郵便配達が六七里川下の都川村から來るのは月に平均して五回、新聞紙と云ふものは東京のも甲府のも一枚も來ないと云ふ、之れに驚いた、奈良田の人々はどんな事を考へて居るだらう、五十里東の東京の空に飛行機が飛んで居る事など一生知らないで濟むかも知れない。七不思議の話が出て先生は洗濯池で洗つた白い服、檳榔子池で染た温袍などを出されて、其不思議の事を立證された。辭する時「山梨日々新聞は私の多年尊敬して居る新聞でありますから新聞代は必ず上納しますによつて送つて頂き度い」と先生は繰り返されて云つた。いろ〳〵と厚意を謝して此佗しい村を辭したのは八時過

◎白峰連嶺縦断記　青柳

であつた。

私達は愈々奈良田の釣り橋を向ふへ渡つて白峯に足を入れた。

麓に居て却つて白峰を仰ぎ得ない奈良田の人々は、恐ろしい魔物位に考へて居る外白峰に對しては極めて冷淡で道程はどの位あるのやらそれすら知つて居る者が少い、夏日照りが續くと村の人は農鳥へ登つて雨乞ひをするのだがそれも十年に一度あるなし、毎年夏になると目に見えぬ白峰の上から村の空へ押被つて來る眞黑い夕立雲に怖毛を慄ふ。

奈良田から少し逆戻りをして西の岸へ移つた所にシロカウチの溪流が早川へ合して居る、雪を溶かして流れて來る水が川の中へ突き出で美しい文目を見せて居る水成岩を廻つて奔流する、石から石と飛び越えて再び山へ掛つた、左の谷に聞こえるのがクロカウチの溪流らしい。山の尾根から遙に奈良田を眼下に見て、世の中から忘られた樣な村をレンズに納めた、双眼鏡で見ると學校の庭にもう生徒の姿が見えなかつた。

三時間許りと云ふものは尾根傳ひに息もつかずヒタ登りに登つた、もう白樺がチョク〳〵見える、早川の谷を越えて目の先へ聳えて居た山が忽ち低くなつて了ふ、日に照り付けられて遖に暑いがそれでも谷に向つて立止まると吹き上て來る冷たい風に體が冷々する。道が岐れて居る所へ來てハタと困つた、右の方らしくはあるが唯らしいと云ふに止まる、餘程前に山を燒いて居た奈良田の男が居たからそれに聞くより外仕方があるまい、引返して聞くのも大變だが然し此先道を間違へるよりましだと考へ、爺さんは荷を下ろしてスタ〳〵と來た方へ下つて行つた、私は濶葉樹の下へ茣蓙を敷いて横になつて待つて居ると、前夜の睡眠不足で遂ウト〳〵した、

暫くして爺さんが歸つて來た、路は果して右の方であつた。山の頂らしい稍平坦の所へ出ると更に大きな峻急な山が頭の上に姿を現はして、何處迄行つたら眞の頂上やら一向見當が付かない、池の上

と云ふ所へ出たが名許りて邊りの樣子には何等の變りがない、通り端の木に大きな辨當が下げてあつた、試みに搖つて見るとまだ重い、こんな所へも人が來て居るのかしらと思つた、爺さんは辨當がある位だから屹度何處かに水があると言つたが當にならぬと思つて登つて行つた。少し行くと一人の若い山人に出逢つた、叺の樣なものを背負つて腰に鉈を差して居る、木に吊るした辨當の主で、私達が山の中で最後に逢つた人間である、白樺の皮を取りに來た奈良田の男だ、皮は一貫目廿二錢になる、是から五貫目許り取らにやならぬと言つて居た、咽喉が渴いて來た、水が欲しいと云ふと「此先で辨當を見やしつら、あすこの下にありやす。」と男が敎へて呉れた。爺さんは「だから言はぬ事ぢやない。」と御苦勞にも空になつた水筒を持つて又引返して行つた、山の中で山人が辨當を使ふ樣な所には必ず水があるものと知つた。自分達は辨當を使ひ乍ら此の男から熊の話しを聞いた。此所海拔約二、〇〇〇米突

熊は冬になると此邊からもつと下まで下つて來るが、夏になると草が硬くなるので頂上の柔かい草を慕つては皆登つて行く、大概人間を見るとノソ〳〵と隱れるが子を連つた奴になると、屹度向つて來る、三十貫位のは間々居るそうだ「此木なぞは熊が木の實を喰べに上つて、あんな具合にみんな枝を折つただ。」と指さした直傍の大木の膚には成程熊の爪の跡らしいのが殘つて、枝がボキ〳〵と折れて下がつて居る「お前え方も熊にや出逢ふに違げえねえ。」と言つた、此場合此深山がシーンとして語る山人の熊の話は薄氣味が惡かつた、此男がいきなりあの腰の鉈を振り上て私達に向つて來はしないだらうかと云ふ、恐怖がキヨトンと胸を衝く。我に返つて四邊を見るとヤナギラン、ゴゼンタチバナなどがしほらしく咲いて居た。晝に近い日の光が木の葉を透して零れる。今日の內に農鳥迄は迚も六ケ敷い、上へ八町許り行つた所に木小舍がある、天水もとつてあるから其處へ泊まるか、大籠迄行つて寢るより外仕方があるまいと敎へて呉れた、木小舍へ登る途中で夕立に會つて、遽てゝ荷物の中から

◎白峰連嶺縱斷記　青柳

◎白峰連嶺縦断記　青柳

油紙を出して枝から枝へ張つた時には、もう小降になつて了ふ、又荷拵へをして出掛ける、なんとなく寂しい。

男の教へて呉れた八町は可成り長かつた、一時間も掛つてやつと木小舎を發見する、内には空の米箱だの茶碗や土瓶があつて、夜具が天井に吊るしてある、小舎があるだけに人が居ないと却つて寂寥を增す。水はと見ると小舎の横手に大きな木の丸太の胴を抉つたのを横にして上から板を何枚も坂に立て掛てある、板へ降つた雨が自然と溜る様にした仕掛だ。水の中には子子が頻に上下動をして居る、これぢやいくら咽喉が渇いて居ても呑む氣になれない、と思つて居ると爺さんは其水を手拭で漉して、小舎から無斷拜借に及んだ藥罐の内へ入れ、火を焚いて忽ち湯を拵へ用意の茶を煮て見たが、生木の匂ひがいやに鼻へ附く、子子の湧いた水で茶を呑んだのは初めてだ。

小舎から先は路がフッツリと切れて了ふ、山は急になる、倒れた梅や樅の大木を乘り越えたり潜つたり、氣味の惡い程濕めつた柔かな苔に辷つたりして、尾根傳ひに遮二無二盲目的に登つて行くと恐ろしい梅の密林！右も左も行手も櫛を立てた様で一點の空を窺ふ事すら許さない、此密林を脫け出したのは二時間の後であつた、何時の間にか日が暮て居る、農鳥は愚ろか大籠迄も行けない、愈よ露宿と極め平地を見付け出して荷を下ろした。「さあ枯木をドシ〳〵集めなくちやあ。」と言ふ爺さんに勵まされて私とY君とはせつ〳〵と枯木を運んでは積み上げた、火が忽ち燃え上る。四邊はバタ〳〵と暗くなつて行つた焚火の周圍だけが纔に明るい、立登る煙の怪しげの影が木の間へ落ちる、どこか其邊から大きな獸がヌーッと顔を出して來る様な氣がする、灰だらけに燒けた餅を喰つてから、木と木へ紐を渡して油紙を懸けた下へ茣蓙を敷き、毛布に包るまつて草鞋もとらずに、三人は寢た。

四

寒さに不圖眼を覺して夜明けと思つたのは燻しを掛た様な下絃の月の、頽廢した夢を見て居る様な仄かな明りであつた。野營地と同じ位の高さに東の空に見えてる月の下に鳳凰山地藏ヶ嶽がベツトリと墨で塗られた様に黑く横たはつて居る、其方面だけが纔かに明るい許り、右手に口を開いてるクロカウチの谷は全く月とは關係のない様に暗い內に埋沒して居る。時計を出して見ると午前二時、栂の枯木がトロ〳〵と燃えてY君も爺さんもよく眠つて居る。高さに於て二、五〇〇米突、增穗村から十何里か奥へ入つた木の葉も動かぬ深山のデッドナイト！其嚴肅と、其靜寂と、其偉大なるとは宗教者の心にゴルゴタに於けるエスを相ひ起さするに充分であつたらう。あの密かにすゝり泣いて居るのは早川の水か。

甲府の平原は前面の密林に遮られて望む事を得ない、クロカウチの奥に高く月と對して仄に雪の班を見せて居る、山は赤石山脈の惡澤らしい、右にも左にも獸々として山が連らなる、白峰三山は見えない。私は枯木をくべて又横になつた。露が頻に降りると見え、天幕の油紙から滴が垂れて寒さが犇と身に迫る、毛布を頭から被つた。

目を開いた時は鳳凰山の上が白々と明るくなつて、山と云ふ山が悉く青く綠に遠くは紫に蘇つて生生と黎明の呼吸をはづませて居る、デカダンの月の色が夢から醒めた様に白けて了つた。

Y君と爺さんはもう起きて火に當り乍ら朝飯の支度をして居た、「寒うごしたねと。」爺さんが言ふ。昨日の子子の湧いたお茶が惡かつたか、馴ぬ野宿に冷た爲か腹の具合が惡くなつて餅を見るのも忌やだ、生卵を一つ呑んだ切り、「それぢやあ山路は六ヶ敷い。」と爺さんとY君が氣遣はしそうに眉を顰める、當人はどうにかなると思つて心配しなかつた、それよりも水が欲しい、水筒は昨日の內に空になつ

◎白峰連嶺縱斷記　青柳

て居る、遂々私は堪まらなくなつて石楠花の葉へ溜つて居る露を舐めて歩いた。

天幕を疊んで更に上を指して第一の露營地を出發したのは午前五時、朝日が草の葉に置いた露に七色を分ける、腰から下はビッショリ濡れた、唐檜樅が算を亂して倒れた山を登ると、窪んだ所にタテヤマギンバイが所狹き迄あつて、直ぐ其上に偃松が顏を出して居たのは嬉しかつた。枝から枝へ足をふんまへてゆさ〳〵と偃松の海を渡る、偃松の根を見付けると長者になると云はれる程横に斜に蜘蛛手の如く枝が相交錯して居る、高い時は一丈位體が宙へ浮いて、踏み外すと頭が隱れる程深くおつこちる。偃松の間には綠の浪に漂よふ樣にチョイ〳〵石楠花の白い花が見えた。偃松帶を出て石と砂利の稍平な頂きへ出た、大井川の上流—西山附近で云ふ井川の谷を挾んで赤石山脈が暗綠色の連嶂を屛風の如く蜿蜒と南へ引いて赤石山、荒川岳、蝙蝠岳、間岳、惡澤岳なんど、我が白峰と相呼應して雲表に立つて居る、西へ遙に遠く繪で見るヒマラヤ山の樣に雪を被て頂のギザ〳〵した山は木曾の駒、東の方を望めば雲海漠々、全く甲府平へ天井を張つて了つて何者も目に入らない、其天井を突き破つて、右か左へ倒れはしまいかと思はれる程隆起して天球の底を撫でて居る富士が、藍瓶から絞上げた許りの樣な鮮かな色を見せて居る、雲海の上を爪立つて飛び歩るく惡戲者の霧が、其富士を暈したり抹殺したりする。東の谷から山上を目蔓けて疾走して來る霧が井川の谷から吹き上げる風に煽られて反返つて又東の谷へ落ちて行く、兩山脈に挾まれて藥研の底を流れて居る井川の音が神經質な高山の空氣に顫動を與へて、風の具合によつてフッツリ聞えなくなつたり、遽にザワ〳〵と耳許で騷いだりすると。瞬をする間に其谷から巨大な白蛇の樣な雲が赤石山脈の方の中腹に浮き上つて、自分達を流し目に見乍ら南へ流れて間の岳を呑む樣に這ひ上つて行つた。

此無名の峯を北へ行くと稍下りになつて又偃松や白樺が多くなる。東は容易に晴ない、駿甲の國境を山脈の尾根傳ひに北へ北へと進んで行く。大籠山の手前の林は可成り深かつた、草を分けた路らし

い跡がある、爺さんは「熊の通る路だ」と言つた、見ると足跡や糞があつた。

白河内岳は磊々たる石許りで、饅頭笠を伏せた様な山である、忘られた様に白樺が一本、涼しい蔭を作つて居る、其下にイワカヾミやチングルマが咲いて居た、北を見ると農鳥が霧の中から顔を出して居た、そして其肩の雪田、雪を見ると遽に水が欲しくなつた、昨日奈良田の男は農鳥へ行く迄に雪があると云つたが皆嘘であつた。餅が喰へなくて今朝から鰹節許り嚙じつて居た私はもう水を飲まなければ動けない程渇きを覺えて來た。早く農鳥へ、雪のある所へ、それ許りに白河内も越えた、支峰も二つ許り喘ぎ乍ら越した、然し農鳥の雪田は直其處に見えて居て、容易に近づけない、もう四邊の觀察所ぢやない實の所苦しくなつた、其間唯雷鳥が何羽も近づいて來た事を覺えて居るだけだ、そして風化作用を受けて棘々しい鑢の様になつた石許り多かつた事を。私は到頭石の上へ横になつて了つた、赤石山脈の上に現れた夕立雲が雨を降らすのを待つと云ふのだ。其内に井川の谷の方面に當つて轟々と云ふ凄じい音が雷の様に聞えたと思ふと、頬を千切つて行きそうな風が、霧を伴なつてヒューと吹き上げて來た、私はギョットして頭を擡げた。

「アッ風だ！」と言ふ間もなく平地で經驗した事のない様な非常の壓力を持つた風が凄じい勢で猛り出して荷を背負つて立つて居た爺さんはタヂ〳〵となつた、目も口も開く所か殆んど呼吸が止まつて了ひそうだ、莫蓙が煽られて翼の様になる、三人は突然偃松の内へ這込んだ、尾根にでも立つて居様ものなら吹き飛ばされたに違ひないと語つて三人は戰慄した。谷から吹き上げられて來る霧がフッ、フッと目にも止まらぬ速さで飛で來ては、東の谷から登つて來る霧と一緒になつて、東へも西へも落ちずに柱の様に天に冲する、もう天地間の動ける程のものは悉く風に加勢しては飛び、吼え、猛ると云つた風だ。其内に物凄い夕立、斜に來る土砂降り、頭の上で鳴るかと思はれる雷が山腹をのた打ち廻つてビリ〳〵と空氣を引つ裂く。水を飲み度い所の詮議ぢやなかつた。

◎白峰連嶺縦断記　青柳

風雨が始じまつてから恐ろしく寒くなつて、三人共手足が凍て了つた、偃松の内に丸く蹲まつて寒さに顫へて居た姿は我乍らみすぼらしいものであつた。一時間許りたつて稍風も弱くなり雨も小降りになつた私は又水が飲み度なつた、油紙を擴げて雨を溜ては啜り溜ては啜りした。然し之からどうし様と云ふ問題の爲に、水を飲んで體中の機關が生々と活動を始めて來た快よさも、打消されて了つた、何よりも焚火が欲しい、暖まらなくちやならぬと云ふ事が當面の問題だ、然し此の雨の中でどうして火が得られる？爺さんは横に這つた白樺の木を見付けて其下に向いた雨に濡れない方の皮を頻に剝いでは集めてマッチを摺つた、それを風が來ては何十回か消して了ふ、一箱許り無駄にしてやつと白い煙が立ち赤い火が見える様になるとそれからそれへと小枝をくべて行く、次に偃松をくべる、もう斯うなると風の爲に反つて燃え上る、濡れた木でもドン〳〵燃えて行く、雨は依然として焚火の上へ降り灑ぐ、火が風に吹かれては地を這ふ。

此雨ちや危險で進む事も引返す事も出來ぬ、それなら歇む迄山へ籠か、三日、五日、糧食が盡きる——恐ろしい結末を告げる運命がまざ〳〵と目に浮かんで誰の顔も血の氣がない。それでも腹が空いた事だけは感じて居たと見えて誰がするとなく荷を擴げて餅を出した、ジャムと鑵詰の肉を附けて喰べた餅は惡くはなかつた右を見ても左を見ても、谷の方も唯霧と雨に閉ざされて、其中に二、八〇〇米突の山の上にポツンと三箇の生た人間が殘されて居る。

冷酷の自然に捕はれた囚人は、雲の纔の斷れ目から洩れる日の目に無止の歡喜の聲を擧げたり、又ザツと雨を降らして行く異形の雲に忽ちまづい顔色に返つたりする、冷たい風と霧は絶えずしはりしはりと顔を撫でゝ行き過る。夕立だから今に歇むだらうと云ふ望みも失はれた、降つたり歇んだりする所はどうしても荒れ模様だ、焚火を圍んで二時間餘り過ごした日は見えないが既に暮に近い事が判る、差當つて今夜をどうにかしなければならぬ、「こんな風のひどい所ちや寒くて寢る事は出來ない、

先へ進んで適當の野營地を見付ける事にし樣。」と言ふY君の提議に一決して、三人は又荷を肩にして霧の中を北へ向つて焚火を離れた。風は幸ひに勢ひを減じて來たが雨は容易に歇みそうではない。庭先の落葉を叩く雨の音にさへ耳を傾けて物の哀を知ると云ふ詩人は、此高山の雨の寂寥を何と歌ふだらう。(此間富士山の上で濃霧の爲に發狂した男の事が新聞に出て居た)

白河內岳の支峰の樣な所を越えた時、北に面して稍坂になつた窪地を發見した、幸に燃料に偃松もある、もう其時は雨と風の中へ暗い夜の幕が下り掛つて居た。

愈よ其處を夜營地と極めて、下ろした荷の上へ茣蓙を脫いで掛け、三人は雨に濡れて顚へ乍ら死力を盡して枯木を集めたり偃松を切つたりした。賴みにするのは焚火許りだ。腕位の木が燃え出す迄には可成苦しんだ、濡れた木を焚火の傍へ山の樣に積み上て乾かしてはくべて行く樣にしたが雨が歇まないので上にある木はビッショリ濡れて了ふ。柱を立てゝ天幕を張つた頃には、全く暗くなつた。

晩飯の支度に掛る、天幕の凹みへ溜つた雨水を、鑵詰の空で掬ひ出して鍋に入れて湯を拵らへた、それでまだ手を付けなかつた懷中しる粉を出して三人は交る〳〵一つの鑵でしる粉を拵らへて飮んだのは何よりの御馳走だつた、次に西山の溫泉から買つて來た味噌で雜煮を拵らへて喰べた。これで天氣が好くて明日は愈よ鼻先へ見へて居る農鳥へ行くと云ふ希望があつたならどんなに嬉しい事だらうと思つた。

明日はどうし樣と云ふ問題が出た、勿論天候を見なければ判らないが、此樣子では屹度雨に違ひない、雨だつたら危險を冒しても引返す事にしやうと極めた、爺さんは「折角是迄來たのになあ」と頻に氣の毒がつた。食事が濟んでから勞れた體を天幕の下へ橫にした、雨は霧の樣に小雨になつたかと思ふと又ザーッと降つて來る、油紙がバタン〳〵と煽られて佗しい音を立てる、雨は遠慮なく吹き込んで腰から下はしとゞに濡れた、敷いた茣蓙の下を雨水が流れる、天候が氣になつて容易に眠られな

いので、又起き上つては火に當つた、爺さんは甲斐々々しく木を集めて來ては火に加へる、「明日はどうだらうね。」と私は幾度となく同じ事を聞く。

高山の夜明けは早い、碌々眠らぬ内に明るくなつた。依然たる雨――、現在農鳥の麓迄來て居乍ら引返さなければならぬ荷を調へて悄然と踵を元來た南へ向ると、意外！意外！

五

先へ立つて行く爺さんが夜營地を離れて山稜の小隆起の上に出た時、「ハテナ。」と空を見乍ら立止まつたのに天候が一層險惡になつた事かと私は又胸を衝かれて、先づ爺さんの顔色を窺つてそれから空を見た、「こりやア晴れるぞ。」と爺さんの聲は高い、遲れたY君が駈け上つて來て三人は同じ樣に西に向つて空を見た、成程雨は降つて居るが何となく空が動搖して來た樣だ、其内にけたゝましい風が一頻吹いたかと思ふと雨が小降になり纏て霧の樣になつた、「アッ雲が、雲が。」とY君が騷ぐ、不意の事件でも起つた樣に目覺ましい勢で雲の分裂が始まつた、最も頭に近い下層の霧の樣な雲、其上の古綿の樣な雲、又其上の白い輝を持つた厚ぼつたい雲が物に怖けた樣に右往左往に北に南にひつ千切れて飛んで、消えてなくなつて了ふ、雲の斷れ目から濃藍色の空がチラッと人の視神經を惑はす樣に激しい輝きを見せて、ニッと笑つて又雲に隱れたが、其雲が消えた時濃藍の空は湖程になり海の樣に廣くなつて、そしてもうけろりつと何の表情もなく、とり止めのない樣に高く澄んで居た。雨が歇むからして、ケバ〳〵しい日光が四邊の濡れた岩に滑かな光線を迄らせる迄はホンの瞬間であつた。

「晴れた〳〵！」「前進々々！」

自然の内のタイラントである風は自ら霧の軍勢を誘き出して置き乍ら扨て晴るとなると一抹も殘さずに、谷から谷を追ひ廻つて迄も霧を驅逐して了ふ、されば霧の衣を全く脫いだ赤石山脈の連壁がす

つきりと洗はれて、生々と脈を打つて動き出しそうにも見える。遠く木曾山脈更に北へ長く日本北アルプスの精兵鎗ヶ嶽、穂高山なんど偉容堂々として遙に甲州の山を窺つて居る。東の方はまだ脚下に雲海が張り詰めて、富士が見える許り、甲府の空は曇つて居る。

一行の足は輕くなつた、農鳥が直ぐ其處に見えて居る、可成り峻急な峰を尾根傳ひに二つ三つ越えた時、農鳥は北西の方へ山稜を蜿ねらして、其背面は大井川の谷へ磧を立てた様な岩石の崩落を見せて居た。

不圖岩の凹みへ雨水の溜つて居たのを見付けてY君と自分は犬の様に口を突き込んで飲んだ、其邊りにはウラシマツヽジ、イワカヾミ、シホガマ、ミヤマエンドウが荒削りの様な石許りの間を埋めて居た。

雪が見えると私は先へ駈け出して行つた、喘ぎ乍ら其處迄登つて行つて、腹這ひになつて口の方を其雪へ持つて行つて接吻した。

明け暮れ甲府の町から遠く仰いで居た農鳥の雪、それへ口を付けた私の勝誇つた様な喜ばしさは言ふ迄もない、餘程低い尾根を遲れて登つて來る二人を聲を擧げて呼んだ、そして三人は飽く迄も雪を貪つて喰べ、水筒へ詰めたり手拭へ包んだりしたが、それは手を暖め乍ら遣らなければ忽ち凍えて知覺を失つて了ふ。雪は横二間長さ十間位の大きさに勾配をすり下がつて東へ面して途中に支て居る様な恰好だ、厚さは三尺もあらうか一寸位から下はがり〳〵氷つて、石と高山植物計りの間に燦として輝く、(遂五六日前迄農鳥の南の肩の邊にチラリと光つて居たのは疑ひもなく此雪である。)

雪の直上は大きな峰を成して居る、足へ力を入れるとガラ〳〵と石が谷底を目蒐けて押し出して行くのに冷々し乍ら登つて見ると、三角點のあるのはそれから更に山稜を傳はつて行つた隆起の上であつた、然し此處は甲府の方から見る農鳥の最も大きな峰の上であらう、さうすれば甲府平が青葉に埋ら

◎白峰連嶺　斷記　青柳

れる初夏六月の頃、紫色の山の額に雪の鳥形を現はし我が農鳥山をして神秘的ならしめ、山岳愛好者に限りなき渇仰の念を與へる其鳥形の現れる上に、私は今立つて居る。

嚴冬の頃、淨白の雪の衣を被いで曉の日に映えては緋緞武者の様な美しさを見せ、殊に其晩山の上に星が顫へて月でも澄んで居様ものなら、其神秘な、冒し難いそして高貴な夢にでも耽つて居る様な邪氣のない山の姿に、背教者だつて思はず神を讃美する歌を歌はずには居られないだらう、そんな晩窓からでも山を仰いで寢たなら美しい夢を見るに違ひない。正直の所白峰と廣く言つても、敢て甲府から北ヶ岳は見えず、間の岳は半を見せ、獨り農鳥が山容を悉く西に仰ぐ空へ露出して居る爲計りでなく、私は農鳥が最も好きである、西山邊の荒くれ男が農鳥を呼ぶにノウドリと其のノウへ力を入れて言のが、如何にも壯美な山を適切に形容して居る様で或る快感を覺えた。私は今其山上に立ち、水成岩を盛り上げた山容の怪と蜿ねらした山稜の美なるを見て、岩を撫で乍ら、其山に足跡を印した我と我が幸を祝福して遣つた。

三角點に至る迄の山稜は隨分危險だつた、右も左も切り立つた様な岩石の壁で眩暈を感じる様な氣がして、少しの間ではあるが駒ヶ岳の乃渡りよりも危險の所だと思つた、まあ三人共落ちずに、二等三角點に手を觸れる事を免された、大きな石がのつけてあつたので取つて見ると名刺があつた、明治四十五年七月十九日登山高頭仁兵衛辻本滿丸と記してある、私は其の裏を拜借して名を認め、日を書かうとしてハタと閊へた、「今日は何日だらう?」と振り返つて二人に聞いた、二人共「サア。」と同じ様に指を繰る、「八月一日だ。」とY君が答へる迄には鳥度間があつた、八月と云ひ一日と云ふ、要するに人間の付けた「時」の符牒に過ぎない、晝とそして夜とがある計り、恐らく永久に亡びない此山上に、大正二年八月一日何某と果敢ない人間の記錄を止めて私はいろ〳〵の事を思はせられた。三角點の直ぐ傍に石かと思つたのは雷鳥であつた、鳩位の大きさで赭色をした如何にも落ち付いた鳥ではあるが、

征服者の様な凛とした目をして居る、雷鳥は好きな鳥である、然し東京の新しいらいてうは嫌ひだ。

三角點の直下二間位の所に一坪許りの地が均してある、絶壁へ棚を釣つてある様だ、焼杭が二三本轉がつて、遠くで見た時天幕かと疑つたのは、杭を立てゝ其周圍へ大きな石を支へに積んであつたものだ、野營をした跡だと云ふ事は一見して分る、西の空は朗かに晴れて居乍ら東は依然として富士が柔かな空線を見せて居る計りだ。昨日風雨に苦しめられた方を振り返つて見ると、取るに足らない程低くなつて了つて野營をした窪地も見えて居た。農鳥の絶頂を去る時三角點の傍から小石を拾つてポッケットに秘めた。

手拭に包んで來た雪を噛じり乍ら、西へ向つて扉風を立て廻らした様な蜂々を尾根傳ひに辿る、左手の方はさうでもないが右手には屢々恐ろしい岩石の大崩落が、目も屆かぬ谷へ向つて一直線に走つて居た、殘んの雪を抱止めて居るのもあつた。農鳥山の北端へ來た時、眞北に當つて間の岳の偉大な山塊が頭を壓する様に現はれて居た、そして農鳥との間のタルの甚だいのに驚いた、殆んど一度麓へ下つてそして間の岳へ登る様に見える。

楷子を懸けた様な急勾配を岩に縋り乍ら下りて行く、ともすると足を掛た岩がグラつく、先に立つ者の頭の上に落ちる様で危險だから三人は間隔を置いて下つて行つた。下り切つた所で一休する、三角點の所を出發した時は八時だつたがもう十時になつて居る。農鳥の連壁の長い事を知つた。偃松を焚いて餅を焼く。

此處から間の岳を望むと、石の一つ一つも偃松の枝も一々指點する事が出來る程鮮かに山の肌が讀まれる、尾根は西と東に二つ頂へ向つてのして居る、東の尾根を登つてあの雪田の脇を通つて頂きへ出た方が樂だらうと。餅を喰ひ乍ら相談した。其内に又忌やな霧が西の谷を埋めて、風に煽られては狼狽した様に間の岳の山腹を掠めて頂きへ疾走して行く、又しても暴風雨になるのぢやないかと、心

配になつて來た、今日は遲くも野呂川の谷、廣河原の小舍へ下り樣、其處には人が居る米がある、屋根の下へ寢られる、今夜の事を考へると嬉しい、もう幾日も人に逢はない、そろ〳〵人が戀しくなつた。それなら雨にならぬ內に急ぐ事にし樣と、私とY君は爺さんの荷を分て肩に背負つて出發した。

登つて見ると見た程急でもなかつた、磊々たる石計りの間に偃松がチヨイ〳〵腹這つて居る許り、高山植物は少い、目當にして居た雪田へ來た、農鳥のよりは遙に大きい、此處から先つき下りた農鳥の突端を見ると驚くべき大絶壁を見せて、あれを下りて來たのかなと三人は目を見張つた、忽ら霧に隱れる。間の岳の項上は更に進んで行つた所にあつた、先づ目を射る十町にも餘る大きな雪田に三人は思はず足を止めた。甲府から望んで居たのは正しく此雪だ霧が日の光を遮ると、雪は薄い紫を帶びた色に輝く、三等三角點がある、此處にも農鳥にあつたのと同じ名刺があつた、自分も同じ樣に名を記した、

間の岳頂上の大雪田は眞ん中に解けて二つに分れて南北に長く並行して居る、甲府から仰いだ二の字形の雪は即ち之だと思つた、此附近は一帶に雪田が多い、丸く屯して居るもの或は蛇が寢つて白い腹を見せて居る樣に、長く延びて谷へ走つて居るもの、之が酷暑に喘ぐ八月の光景かと思ふと、私達は今正しく一萬尺を拔いた高峯の上に來て居る事が葬と感せられる、邊りにヒメクワガタ、シホガマの紫、シナノキンバイの黃、長之助草チングルマの白が毛氈を織つて雪と相映發する。

霧は愈よ深くなつて赤石山脈は勿論、農鳥をさへ振り返つて見る事が出來ない一行は濃霧に取卷かれた。「さア急いで急いで。」と爺さんは先に立つ。

目的の北ヶ岳はいづれにあるやら、霧の爲めにさつぱり分らぬ、唯磁針を當に北へ北へ進んで行く。

間の岳の直下に石で築いた竈が殘つて鞋の切れたのが捨てられてあつた、三人は無言で此竈を振り返り振り返り此處を人が通つて行つた事を想像して見た。北ヶ岳迄の間は可成り長い、其間にはちよつと大きなお花畑があつて、ミヤマハハコグサ、ミヤマオダマキ、が最も多かつた、それから少し行つて岩の裂け目にウラジロギンバイを二株許り發見した。霧の斷目からどうかすると大きな峰が頭を出す、北ヶ岳だらうと近く行つて見るとさうぢやあない、こんな具合に幾度霧に瞞されたか判らぬ。後で考へると大きいと思つたそれ等の峰は實に北ヶ岳の「靴の紐を解くにも足らぬ」ものだつた。

或る大きな峰を越えると尾根が二つに分れて居たのに三人は惑つた、尾根が二つあると云よりも濃霧の爲に近づいて居る筈の北ヶ岳が見えぬのでどつちへ進んで好いのかそれに困つた。然し此時は實に仕合せだつた、心細い事を考へてる内にホンの一時だつたけれど前方の霧が纔に晴て呉れた「見えて來た、見えて來た。」と誰か狂喜した聲を擧げる、霧は下の方から上の方へ晴て行く、下が晴た時其處に偉大なる山の存在を示した、尾根は右手が正しかつた。霧が上へ上へと晴て了つた時、目の邊りに北ヶ岳の山塊を見て私は呼吸の塞まる程其尨大なると峻急なのに驚いた、私たちは何時の間にか其直下へ來て居たのだ。霧は憐む樣に一度帳を揚げて其畏怖すべき怪異な山の姿を示したが又忽ちバタバタと帳を下ろした樣に北ヶ岳を包んで了つた。始めて我に返つた三人は「あれへ登るのかなあ。」と顏を見合せて壯大の感に撲たれ乍ら密かに戰慄した。

傾斜した岩がピザの塔の樣に高く立つて居たのに、威喝され、掌を立てた樣な絶壁を谷底から何者かにグイ〳〵と足を引張られるやうな恐怖を感じ乍ら登つたりして殆んど夢のやうに、霧の中を攀て、遂に北ヶ岳の絶頂を極める事を得た。

時計を見ると午後三時半、間の岳の頂上から三時間を費やした、此頂上は東西に狹く南北に長い、疊を敷いた所で恐らく八疊は敷けまいと思はれる、北の端に三等三角點があつて其南に石の祠がある、

大日如來の字だけは讀めた。

霧は容易に霽ない、いづれの方面も悉く眺望を封じられて了つた、霧の飛沫に服がしつとり濕つて、もうぢつとして居られない程寒くなつて來た、三人はそこ〳〵に下りへ向つた、甲斐が根神社と記された木の祠の所迄來た時西の空だけ霧が霽て、今迄山と山の間に蹲つて形勢を觀望して居た雲が得たりと云ふ樣に、稍傾いた日の、紅の光線を浴びせられ乍ら、大蓮動を始めた、仙丈岳の肩から動き出して駒ヶ岳を掠め去るもの、木曾山脈の方から遙に甲州へ向つて來るもの、地藏岳から柱の樣に上へ吹き上げるもの然し東、野呂川の谷は依然として濃霧に閉ざされ、此處から見える筈の下山の道筋にあるお花畑も大カンバの池も見えない、目標を失つて了つた、時間は四時を過ぎて居る。野呂川へ下りさへすればと云ふ考へで何等の定見もなく、霧を分て北東へ向つて遮二無二下つて行つた亂暴の話だが此の塲合として據ない、糧食の欠乏は一時でも同じ所に停滯して居る事を容さぬ、出來るだけ人の居る方へ近づきたい。想像して居た廣河原の小舍、米の飯、安眠、空想は譯もなく打毀されて、僅に十五六町下つた時すでに暮の色に追付かれた、もう此處に一夜を明かすより外に仕方がない、自分たちは急勾配を流れて居る谷川の岸に立つて居た。西も東もさつぱり樣子が判らぬ、自分たちの位置が判らぬ、三人は泣き出したい樣に心細くなつて來て、四邊を見廻すと右手に白樺の林の中の岩に人間が腰掛て居る！もう黄昏の色が濃くなつて定かには分らぬが、慥に人だ、然も頻に頭を掻いて居る、どうも老人らしい……「猿だ猿だ。」とY君が頓狂の聲を出した。

人がたつた一人居るには餘りに山が深い事も、時間の晩い事も氣が付かずに、一途に人間だと許り思つて居た私は猿だと言はれてハツとして思はず後退つて花を取らうとした手へ大きな蛞蝓を摑ませられた樣な不氣味な心持で身震ひをした。「ホツ、ホツ。」と爺さんは止めるのも聞かずに。妙な手付きで杖を振り廻し乍ら揶揄ふ、猿と自分たちの間は僅か三間位しか離れて居ない、ヂツと夕明りに透か

して見るとキャアとも鳴かずに尚ほ頻に頭を掻き乍ら向ふから反對に見馴れぬ妙な動物が現はれた事だと爺さんの揶揄ふのを見て居るらしい、唯輪廓が見える許りだ、成程人間にしては腕が忌やに細くて毛も生えて居る樣だ、然し假にも老人と間違へた程だから猿としては隨分大きい。猿は群をなして居ると云ふ事だから、暗くなつた邊りの岩蔭や木の間から、黑い霧が湧く樣にモク〳〵と私たちの周りへ音も立てずに集まつて來はしまいかと、ギョッとして前後を見廻した暗い色が重々しく靜に落ちて來る深山の夕暮の大いなる寂寥は、何も言はずに頭許り掻いて居る、人類に似た悲哀な獸を焦點にして廣がつて居る。

私たちは眞暗になる迄歩いた然し猿の居る所からもの丶廿間とは遠ざからぬ。方角は判らぬが兎に角此谷の下、野呂川の岸には小舍の內に、灯が點いて居るだらう、それよりも見るからに賴もしい頑丈な山人の話聲！私は荷を足許へ投げ出した。後にアユサシの小舍で聞くと此處は大カンバ谷で、えらい所へ入つたものだと其小舍の男が驚いて居た、そして今年は廣河原の小舍へ人が入つて居なかつたと云ふ事だ。

山と山が兩方から逼つて纔に見える空には星が輝いて居る、谷底の向ふの黑い影は鳳凰山らしい、寒さが犇々と應へる、焚火に取掛つたけれど枯木のないのに弱つた、新聞紙やマッチの箱を燃やした所で濕つて居る生木へは却々火が燃え移らぬ、扇子で煽ぎ通して到頭指の內股へ肉刺を三つ拵へて了つた、年の若いY君はガタ〳〵と慄へ乍ら、「僕の友達が何時か秩父の奥で凍え死んだ時も……。」などと頻に悲觀し始める、着て居た毛布を借してやつて「此位の寒さで、火がなくたつてそんな事があるものか。」と言つたが私も密かに心配しないでもない漸く火が燃え出したのは十一時頃、味噌汁へ餅と鑵詰の牛肉を入れて雜煮を拵えたり、懷中しる粉も茶も飮んだ、水に不自由はしないが、然しそれで流れの傍の此寒さを償ふ事は出來ない、火に向いた所は燒ける樣で、背中は氷を附けられる樣だ。

食事が濟むと勞れでもう天幕を張る氣にもなれず、此寒い上に夜露が降り掛るのも構はず三人は火の周りへ、各自に丸くなつたりくの字になつたりして、獸の樣に寢た、私は猿の鳴き聲に屢々目を覺ました、そして惡戲をしないだらうかと思つて幾度頭の上に置いた荷物へ手を附けて見たか分らぬ、それでも何時の間にか眠つて了ふ。

莫蓙の端へ火が付いたのに吃驚して刎起た。鳳凰山の上が仄に白んで、星が寒そうに顫へて居る、楢を加へて欠伸をし乍ら薄氣味の惡い夜の明け放つのを待つた。迷へる者は此朝程暗い世界が明るくなつて行くのを幸福に感じた事はなかつた、不安な醜惡の夜の假面が剝がれ、山の澄み切つた空氣を通して朝の光が鮮明に流れると、山は靑に水は紫に其色を甦らせて、私たちの心も花が開いて行く樣に生々として來る。ひんから、ひんからと鳥が鳴く。

爺さんもY君も起きた。餅はもう一人に就て二切れしかない、鑵詰は食ひ盡した卵などは二日も前になくなつて居る、然し若し私が山脈に入つた第一日に腹工合を惡くしなくて、普通に餅を喰べたなら、既に昨日から、私たちは食を絶たなければならなかつたかも知れない、北ヶ岳も越えぬ內に、間の岳も、いや農鳥へさへ掛らぬ內に……全く何が仕合せになるか判らぬ。

人が居ないとは知らず、直に廣河原の小舍へ行つて米が貰へると考へて居た私たちは二切れの餅に滿足した。もうこれで食物は全くない譯だ。

七

八月二日午前五時愈よ結束して谷の流れを下る、水の上に出た石傳ひに下るのだが辷つて何十回轉んだか分らぬ、下るに從つて水は愈よ多く急になつて殆んど瀧を爲して居る所もある、行手を見ると流れの中の石が直に空線を描いてそれから先は切つて落とした樣で見えない、來た方を振り返ると川

を垂直にした様に、股位迄ある所を渉つたり岸に立つた山の斷崖へ噛り付いて瀧を迂回したりしてやつと野呂川へ合流する所へ出る迄半日を費やした、私たちは意外に高い所へ泊つた事を知つた。

三人は流れない様に手を取り合つて野呂川の流れを向ふ岸へ渉つた、そして全く白峯山脈を離れたのである、振り返つて仰いで見て、もうこれで縱斷を遂げたのかと思ふと、泌々した情に撲たれる。

廣河原の小舍は川を溯つたり下つたりしていくら探しても判らなかつた、第一私たちの今下つた地點がどの邊に當つて何んと云ふ谷やら分つて居ないのだから、遂に尋ね倦んで、それなら直に蘆安へ出様と言ふ、すると今度は山へ入つて行く路が分らぬと云ふ始末、二三度通つた事のある爺さんも、川岸即ち山の麓を行きつ戻りつして見たがどうもおかしいと言ふ、腹が空く、時間が經つ、私たちは遂に里へ出られぬものかと思つて、失望は其極に達した。

再び山に迷ふよりは遠くても奈良田へ出る方が確だと考へて、野呂川の溪谷に沿つて下り始めた、奈良田迄川傳ひに八里、時間は既に一時を過ぎて居た、三里も行かぬ內に日が傾いて來る。日暮て路遠く、無人の境に迷つて糧食を持たぬ心細さは想像以上である。地の底の様な深い谷を南へ走る野呂川の水の清冽な事、其強々しい生た様な水は、山と山に窄められた谷の底を石に躓き乍ら奔流する、急湍となつて息を密め乍ら走つたかと思へば又遽に岩に堰かれて瀧となり轟々と叫喚の聲を擧げる、と又とろりとした靜な潭となり綠色の水は怪しき迄深く澄んで、蛇の様なスラ〳〵とした柔かな太い皺を水面にぬたくらせる、やつと其淵を脫け出した水は小石許りの上をもう周て切つた様にザワ〳〵ザワ〳〵と綠の水の裏を白く返して流れ下る、何も忘れて思はず其流れに引附けられて果敢ない恍惚に入る。

兩岸は直に見上る様な峻急の山となつて谷から仰ぐ空も亦帶の様に細い左の岸を奈良田の衆が時たま通ふ爲に拵へた丸木橋や岩に掛た梯子を通つて、尙半里許り行つた時、遙行手の川の中に山人が見

◎白峰連嶺縱斷記　青柳

えた然も二人三人五人自分だちより外にこんな所に人が居樣とは全く思ひ設けなかつた、空谷の跫音とは正しくこれだ。

すると、これは又どうした事か其四五人の男は狂喜して駈出して行く私の姿に氣が付くと轉び乍ら我先にと逃げ出した、服を着て居た自分を的切り林野の役人とでも思つたらしい、逃げられちや此方が困る、肩にした寫眞器を出して見せたり、躍氣になつて旅の者だと云ふ事を證明すると向ふ岸の岩に隱れて此方を窺つて居たのが、おづ〳〵出て來た其内の薄い髭を生やした男がやつと自分の傍へ來る、皆木を流す連中だ、「これから一里半許行くとアユサシに本小舍が十軒人が十人許り居る、自分だちも其處の者だ、泊るなら取締の邦さんの小舍が廣くて好い、櫻本邦太郎、あゝ泊やすとも。」と敎へて呉れた時は嬉しかつた。それから先は空腹も疲勞も忘れた樣に足が輕くなつて山の間からヒヨツクリ大きな頭を出した農鳥を泌々眺めるだけの餘裕はあつた。

間の岳を發する荒川が合して野呂川が早川となる所から更に半里、甚だ御嶽新道の奇勝に似て居ると思ふ所を下つてアユサシの小舍に着いた時は、もう家へでも歸つた樣な心持がしてすつかり安心して了つた、木の皮で葺いた屋根の上へ石を載て壁の代りに板を張つた小舍が十軒許り、仕事場には板を引く鋸の音がする、邊りには板や材木が一ばい積まれてある、邦サンの小舍は直に分つた取締りだと聞いて年寄だらうと思つた邦サンはまだ廿三四の青年だつた。譯を話すと「そりやアおえらかつた」と快く一泊を諾して呉れた。誰の顏も甦つた樣になる、全く朝、餅を二切れ喰た切り五時から午後の六時迄十三時間水許り飲んで歩きつめて、此上更に夜の道を三里奈良田迄行くとしたら、それはもう到底耐えられない。

早川の流れが曲をなして居る東の岸の上に山の裾を僅かに開いて建てられた小舍が十軒、邦サンの小舍は四間に三間半位一番大きくてそして新しい、天井のない屋根は矢張り杉の皮で葺いて頭大の石

が澤山載せてある、入口に大きな爐を切つて其周りと奥の一間へも莚を敷いて置く、爐には自在鍵が吊られて松の大きな丸太を横に平に切つたのが燃えて居る。邦サンは男の手一つで、早川へおりて米を磨いだり、隣の小舍へ味噌汁の實を貰ひに行つたり、茶をいれて呉れたりして旅人を懇にする數日の間自然の牢獄の內を彷徨して來た私たちにとつては、土瓶から注ぐ茶も、お茶菓子の赤い砂糖もそれから又石油の燈を見るのも身に過ぎた果報の樣に思はれた、邦サンは自在鍵に懸けられた鍋の飯が煮えると、汁を拵へる、汁の實は一尺位の草で莖が紅く櫻の樣な葉が互生して莖へ附いてる見た事のないものだ、これがほん莖の水菜で此上の夜叉神峠にいくらでもあると敎へて呉乍ら、邦サンは味噌を一摑み鍋へ投げ込んだ。

脚胖を取つて幾日振りかで空き腹へ喰べた米の飯は、味も何も分らぬ程甘かつた、野生の菜の味噌汁も惡くはない、邦サンと一緒に喰乍らアユサシの話を聞く、邦サンは源村の者で、偶には村へ歸る事もあると云ふ、此小舍へは多く源や蘆安から來て居る、今は十人許りで一軒の小舍に一人宛位居る、勿論男許りだ、共同に使つて居る製板機は村の物で、板は一日に平均五百枚出る、板は每日蘆安の女——荷背負衆が廿人位峠を越えて來ては里の方へ運び出す、冬になつて蘆安邊りも雪に埋まつて山の仕事がなくなると木挽きが二百人も此アユサシへ板を挽きに來る其時はどの小舍も人で一ぱいで、每日〳〵どつちを見ても雪許りの山の間で仕事をする、そして春、雪が解け始めると里へ歸つて行くその頃あの早川の向ふの山が下から段々雪がとけて行くと後から〳〵青くなつて行きやす、その時分又お出でなつて、好いですよ。」と邦サンは詩的な事を言ふ。憔悴な男衆が時々私達を覗いて行く。

「邦サン明日は小割の方をするかね。」と入つて來た男は爺さんと知つた仲と見えて頻に話しを始めた。

入口の戸を開けると闇を流れて居る早川の水聲が、待ち設けて居た樣に小舍の內へ騷ぎ込んで、爐

◎赤石嶽の麓　前澤

の火がパッと煽られる、山の間に細く見える空はどうしても秋の色だ、寒さに思はず嘘をして内へ入る。明日は間違ひなく歸れると云ふので荷拵へをしたりした、「サアお寢みなつて。」と邦サンは枕を貸して呉る、爐端へ毛布にくるまつて寢た、早川の水聲がいつか夢の中へ。（終）（大正二ノ八）

附記

△北澤の小舍には、今年二百人程の人夫が入つて居たが、來年からは人夫が入らぬ、此所では、米から燧詰の準備迄出來、極めて完備した小舍であつたが、今年限り引上げたのは、遺憾である。

△廣河原に人夫の居ないのは前揭の通りである。

△野呂川から蘆安へ入る路は、非常に荒廢して、案內者にも、一寸分らぬ。

△今の所、野呂川の最奥で賴みになるのは、アヤサシの小舍許りだ。

△序乍ら高頭式氏の臆測圖中、カレイ澤とアヤサシ澤の間に、小舍を置いてあるけれど小舍はアザミ澤の直ぐ上にあるのが正しい。

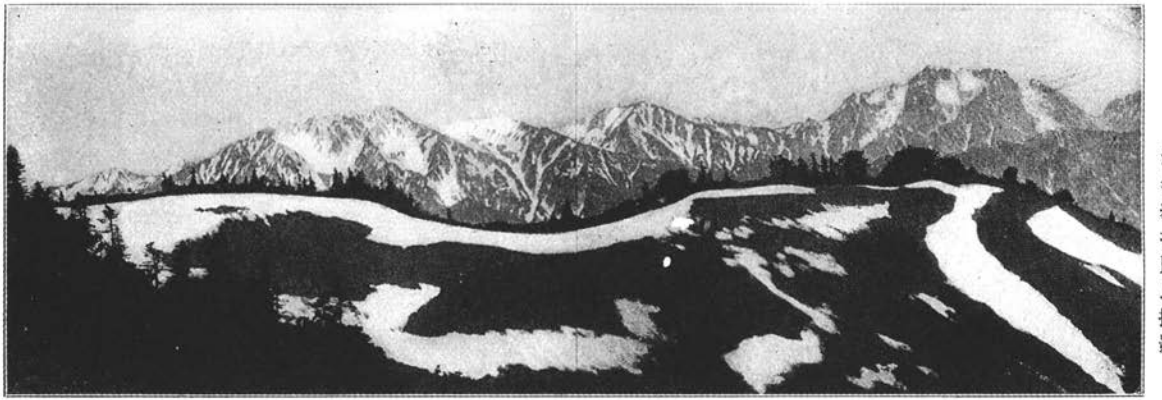
赤石嶽の麓

前澤淵月

（一）天惠

渴したる者は先づ泉に走る。自然に飢ゑたる者は何處に向ふであらう。

天龍川の浸蝕谷に沿うて上れば、最後に、周圍三里に餘る湖を中心として、四方山岳に包まれた盆地諏訪に入る。八ヶ嶽裾野一部の溪流を集めたる宮川、立科、鷲ヶ峯より生る、音無川、横嶽の傍をよ



濱谷泰次郎氏撮影

扇澤岳の西側より大バミを隔てゝ立山連山を見る



前澤淵月氏寄贈

大河原より見たる赤石山

ぎる湯川、其の他幾つを合せたる上川、横川川、出づるもの湖に集注して先づ足を休むる其の間に、三稜洲を沈積して、山間稀に見る平坦なる肥沃土をつくる。

しかも、上諏訪北半は、到る處に單純ながら温泉を涌出せしめ、赤沼近傍、井を穿てば直に温湯迸る、之に又、高島附近沼氣沸々、割烹燈火之に依つて辨ぜられ、精米機械之が爲めに運轉す。明治四十四年の如きは、其の生産力、生絲、眞綿、寒天等を控除して、猶一戸當り二百九十三圓三十七錢六厘、一人當り五十一圓八十七錢一厘、嗚呼晴空晝の如き富士、湖をめぐる四巒の風光、八ヶ嶽噴火によつて遠く甲州に及ぶ釜無川の溪谷遮られて、此天惠の盆地をあらはした事は、諏訪人士の等しく感謝するところであらう。

然り、天惠地、もし其れ信陽の暖地下伊那に其を求むるならば、私は第一に指す赤石岳、其の裾大鹿村、敢て小なりとなす勿れ。面積九二一九七〇六八坪、四千餘の住民は、純樸山河精靈の權化。たゞところは浮華を離れたる武陵桃源の境、平均一人當り、壹町壹反參畝拾四歩の山林は、彼等生活の水をも糧をも供する大事な藏になつて居る。

(二) 洪積層

飯田を起點とすれば（四九二、六米）順路此處に明神橋を渡る。肥沃なる冲積土を踏んで一時間餘を歩めば、北より時に筏を浮べて下る一蛇、下流西行法師をしてかこたしめたる、柴野栗山をして前途の多望を窺はしめたる、而して中部下伊那に於て、年々出水汎濫毎に、郡費の支出二三千圓を厭はしめぬ天龍川である。之に架したる釣橋明神橋は、百二十五間（巾八尺）貯金組合組織九を有する市田村と、拂戻額は預金額の殆んど二分の一ぐらゐな（明治四十三年度）神稻村とは、「天の中川」（天龍川の歌名）何の苦も無く交通を許されて居る。（橋錢貳錢）橋を渡れば、道は程なく川に沿うて、東北

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の麓　前澤

を指す。福與より分れて東に曲れば、かなりな上り坂（龍東腺に分るゝ所に道標あれど、見出し惡ければ、注意を要す）踏む所あらはなる洪積層となる。

洪積層は第四紀に屬するもの、學者によつて全地球面、氷河に掩はれたりと推定せられる時で、吾等の祖先は此末期にあらはれたものなる事を想へば、一歩々々事も無げに踏みにぢり行く石の數々が、『其の上を忘るゝ勿れ』と耳語するやうな氣もしやう。少時にして冲積層を經て又洪積層を通る。

瀧本理學士（鎧三）の信濃地質圖によれば、天龍川以東の下伊那郡は殆んど片麻岩で色どられて居る。而して、大鹿村方面に此道より向ふ者の、明瞭に認め得るは、北條峠を下りつくした桶屋よりはじまる。

（三）片麻岩系

龍東腺を離れて坂路にかゝつてから、しばしは見返る天龍西岸の村々も、駒ヶ嶽を盟主として掉尾を恵那山に示す木曾山系も、めぐり行く山の木立に隱れてよりは、渇を醫すべき快い水にもあまり逢はずして、鎌倉峠を登りつめた時、峠頭の一軒茶屋に、漸く澁茶の一碗を啜り得るであらう。

之より緩傾斜の、上り下りは、意にも留まらず、秋ならば紅葉知るべき山の腹を縫つて、最後を一氣に驅け下りてしまへば、人の香の先づするところ、此處が即ち桶谷である。

道は之より離れがたなき小澁の流れに沿ふ。相對峙する兩岸は、元太古代老連志亞紀に屬する黑雲母片麻岩、白雲母片麻岩、兩雲母片麻岩、花崗質片麻岩、或は砂質片麻岩の肌を見ることが出來る。

更に進んで一橋を渡れば、道は向つて左岸に移り、風化したる片麻岩が、屢々頭上を摩せんばかりの所を通る。其の間に、角閃石を含み斑狀組織顯著なる鹿塩片麻岩を採取すべきである。續いて角閃片麻岩も。

間も無く二流相會する處、此處を落合と云ふ。右すれば橋を渡り、大河原市場を經て赤石に向ふべく、左すれば、鹿塩市場を過ぎて、上伊那郡高遠、或は赤穗にも達し得る。もし此地に名高い鹽泉の一浴を望む者は、此落合より殆んど半里、鹿塩市場を過ぎて、道を右に取り、塩川沿岸に沿うて五町程を溯れば二つの浴舍に達する事が出來る。(一は平瀬氏、他は熊谷氏)

(四) 鹿鹽の背景

鹿鹽に就いて、小說のやうな奮鬪生活を續けた事實の梗概は、先年故保科五無齋氏と、此地に礦石の採集を試みたをり、地方紙南信に、『鹿塩行』と題して之を投じた。其の一節を引用する。

予は金槌を携へて川端に立つた。對岸に横穴がある(浴舍近し)又這入つて見たくなつたので川をザブ〳〵渉る。流石に山深き谷川の水は身に泌みるやうだ(明治四十三年八月三日午前十時)入口は高さ六尺、横五尺もあらうか。眞直に穿つた三十七間の所々からポチリ〳〵と水滴が落ちる。之を口に受ければ鹽辛い。之が鹿塩の名ある所以、又今日ある所以、而して面白い未來を孕む所以である。

扨て其の食塩と云ふ奴は、吾人の胃液の重なる鹽分を成し、又膵汁の實質を成すを以て見るも、必要缺くべからざるもののやうに思はれる。彼の英米兩國に於て、年々三百餘萬噸の産出あるを見ても、必須なる品だと云ふ事は、うなづかれやう。我が國に於ても、年々の消費高が七百萬石からに達して居るさうである。而して、鹽の所在地はと云へば、有り難い事に海にも陸にもある。太西洋の海水は、チヤレンヂヤー遠行隊中化學者の發表したる如く、其の成分は全體等分量で、其の結果は、平均千分中、無機鹽分三十五を含有して居ると見られて居る。然れども、大洋中に集聚する鹽分は、海洋に全く排出口を缺いて居る以上は、礦物質となつて、次第に濃厚の度を加ふるに及び、遂には沈澱堆積するものであるから、全く一樣だと云ふことは出來ない。其處で、デヰトマー氏は、別に約七十七パアセントの含有量を指示した。そして、千分中、二七・二五は鹽化ナトリウムで、殘餘二二・二四二は、重に鹽素、硫酸、マグネシウム、硫化石灰、硫化ポツタアシウム、臭化マグネシウム、炭酸石灰等であるとした。

◎赤石嶽の麓　前澤　四三

◎赤石嶽の麓　前澤

今かりに、海水千分中、鹽化物（重に食鹽）三・二五九を含むとのフランクランド博士の所説を基礎として、世界海洋中に分解包含する鹽の總額を計算する時は、約二一二九五〇〇〇〇〇〇〇〇噸となる。之を毎噸十六立方呎の固形體に換算する時は、全世界の陸地全面積五一〇〇〇〇〇〇方哩を被覆して九一四・九呎の深さに達する層が出來る事になる。話も斯うなると、偽か眞か一寸見當がつき惡くゝなる。

統計の示すところによれば、千九百年（西曆）に消費した鹽の總額は一二五七二〇七六メートル噸だと云ふ。之を換算すると、三十三億九千四百四十六萬五百二十貫からになる。

此樣に消費せられる鹽は如何にして手に入るかと云ふと、極世話の無い奴は土中から掘りだし物だ。岩鹽が即ち之である。之が得られぬ處に於いては鹹水から鹽の結晶をつくる。コルセット氏の調査によれば、其の結晶を得る方法として六つをあげてある。

一、燃料を使用して、鹹水を釜中に蒸發する方法

二、海水を放蓄器中に充して、之を氣中に放置し、日光及び風力を藉りて其の水分を蒸發する方法

三、枝條架法により、海水を蒸發する方法

四、海水を砂層に浸潤せしめ、後其の砂より浸出せしめて、濃厚鹹水を得る方法

五、地下温熱（熱湯）を使用して海水を蒸發する方法

六、海水を凍結せしめ濃液を得る方法

などで、實業者は、各其の信ずる所に從ひ改良に改良を加へて製造に從事して居る。

しかし從來の製鹽法は、降雨或は氣温の下降に伴なひ、その事業に支障を蒙りつゝあつた事は幾何であるかわからない。よしや流動式鹽田を使ふとしても亦此厄は免れなかつた。だから、こんな年には我が國などでは、勢ひ外國殊に獨逸や亞米利加支那などからの輸入を仰いで居たのである。

其處で、僕等は食鹽々々と一日に云つて居るけれど、此食鹽其の物の品質には非常な相違がある食鹽の含有物として化學上の分析表を見ると、次ぎのやうな名が列擧してある。

鹽化曹達　鹽化加里　鹽化苦土

硫酸石灰　硫酸苦土　硫酸曹達

不溶解分　水分

といふ次第、中には硫酸曹達の無いのもある。而して、之等の中で一番必要な品は、第一に記した鹽化曹達である。同じ一斤の鹽

を使用するにしても、塩化曹達の含有量の多少によつて損益がある。古い分析ながら、如何に品質の差があるかと云ふことを證する爲に、單に塩化曹達の含有だけを記してみれば

八家鹽	七二・六六九
阪本新齋	七一・七四九
本齋	六二・〇八〇
東京古積原料本齋	八二・九一一
大鹽	八〇・一三二
赤穗	七五・三四三
東濱眞鹽	九二・二七七
臺灣	八二・一四五
支那鹽	七七・八九三
獨逸	九五・八〇二
米國	九四・一九七
松永試驗所	九四・六六四

之で見ると、獨逸に次いでは松永試驗所、米國、東濱眞鹽といふ順序だ。最も劣等が本齋で、赤穗だからとて威張る資格は更に無い。日本で優等な松永試驗所は、彼のカナヅ式を用ゐて居る。此カナヅと云ふのは合衆國オハイオ州の首府コロンバスから東南凡そ百二十哩を隔てたオハイオ河の沿岸で、今は人口八千餘を有するロメロイと云ふ町になつて居る。何しろ此處らは、日本のやうな小規模ではない。食ふ鹽だけが精一杯といふ哀れなものとは比較にならぬ。之といふのも、凡てを海鹽にばかり仰がなくとも、土の中からドシ〳〵出て來るのだから仕方がない。だから、ミシガン州のアルソウから出る岩鹽は、鐵路直にマヂソンアルカリー會社に運ばれて、數萬斤の棒狀糊狀の曹達となり、二萬有餘斤の晒粉は、二十四時間たゝぬうちに出來上るや積詰となつてかせぎに出かけるのだ。

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の鹽　前澤

又ユフタア州には、鹽晶宮と云つて悉く鹽で作りあげた遊戯場がある。その鹽はときけば、ソットレイキ湖のほとりから産出するのだといふ。同じ鹽にしてからが、一石四五十錢で彼は賣るのに、僕等は、餘り上等ならぬ品に一石七八圓を拂はねばならぬとは、さてもカライ此世かな。もし此處に岩鹽層があるとしたらどんなものだらう。

然るに、此處に一大岩鹽層がある、此下伊那郡大鹿村字鹿鹽に其の緒が開かれてある。斯くと目して三十餘年一日の如く、其の志の貫徹を計りつゝある二異人がある。一人は黒部銑次郎氏、他は工藤欣八氏。

黒部氏は弘化四年の生れ、阿波德島藩蜂須賀重昭の家臣黒部權之助の次男で、兄弟は五人、十八歳の時、藩の英學校に在つた一日、ビッチエルの地理書の學習中、ふとソートマインの語に出逢つた。時の師速水重敬氏に之を質した所が、鹽の礦山と敎へてくれた。しかし、氏にはその鹽の礦山なるものがわからなかつた。今でこそ、岩鹽或は山鹽と云つたところで、別に不思議に考へるものも無からうが、此時代、殊に海に接した國の事とて、海水製鹽を見慣れて居る氏にとつては、世にも不思議なるもの丶一つとして印象せられたのである。

後出で丶慶應義塾に學び、更に兩國相生町の共和塾主尺振八氏に業を受けて居た。時たま〳〵加祿奉還と云ふことになり、一時の下賜金を拜受して、各自何かの職に身を委ね丶ばならぬ境遇となつた。之は明治七年の事である。

此時分、長野から來た善光寺の御用人成瀨庄治氏が話に、信州輕井澤の近傍望月在から鹽水が出るとの事であつた。しかし、傳聞したばかりで、事實目擊したのではなかつたから、內心深くは信じなかつた。けれど、或はそんな事もあらうと、先に世にも不思議の一つとして印象せられた鹽の礦山が頭にポッと浮び出た。

間も無く伊那高遠の人山下志賀八氏が、伊澤修二氏の舅森雄助氏をたよりに上京した事がある。此時

森氏は、北海道の拓殖主務になつて居たをりで、志賀八氏は、今の鹿鹽に涌出する鹽水の鑑定を乞はんが爲めの上京であつた。人一代に辿るべき徑路のヒントは何處で如何に與へられるものか。此事を聞いた黒部氏は、遂に斷然意を決して、明治八年十月信濃に入り込んだ。

黒部氏は、先づ佐久に向ひ、望月在の鹽井を踏査したところが見込が立たないので、さらばと高遠に到り、山下志賀八氏を訪ねる事にした。

此時志賀八氏は既に七十餘歳、黒部氏の來訪を壯として歡び迎へたが、身老衰爲に東道の主人たるに堪へられないからと云ふので、婿野澤氏を以て案內せしめたのが、黒部氏をして、一生を其の谷底に終らしむべき運命を齎らしめた、

其の當時に於ける未來の夢はどんなであつたであらう。遂に明治八年十二月、時の長野縣權令立木兼善氏に宛て、願書を差し出した。着手したのは九年二月である。

やがて同志は順次加はつた。工藤欣八氏、本村重信氏、三宅憲章郎氏、集堂惟德氏、大類剛太郎氏、何れ劣らぬ頑强の武士氣質、昨日に變る今日の境遇とは云へ、慣れぬ其の手に獲物を執つて、人足に交りつゝ、當てのあるやうで無い山の橫腹を、倦まず撓まずコツ〳〵と堀りかけた。四五尺すると、飮むには堪へぬ程鹽辛いのが何處とも無く泌み出て來る。『辛いぞ。辛いぞ』とコツ〳〵續ける。越えて十二年、遂に美事な三十七間の橫穴が穿たれた。しかし、豫想した岩鹽層は現はれ無かつた。しかも、既に此時資力は殆んど使ひ果たしてしまひ、手足の動きが自由にされなくなつた。

其のうちに同志は一人減り、二人減り、後に踏み止まつた者は唯二人、一人は先きに記した工藤欣八氏である。

工藤氏は安政二年の生れ、父を集堂惟宜と云ふ。黒部氏と同藩で、江戸留守居役を勤めて居た。氏は其の六男で、兄弟十六人、幼名は左吉又小次郎、後に謹輔と改む。工藤角兵衛の家名を繼いで欣

◎赤石嶽の麓　前澤

八と改めた。十八歳の時大阪兵學寮に入つて軍事研究中、明治三年德島藩に紛擾が起つた。氏は此難に赴かうとして願をあげたが許されなかつたので、同士三十一名と共に、大阪阿治川番所川口番所を破つて歸藩してしまつた。後に其れが爲、大阪に居つた德島藩邸幹事佐藤直衛、安富角兵衛も同罪に問はれ、大阪に於いて三十日の禁錮を申し渡された。此時、大阪府知事後藤象次郎は、斬つて棄てよと迄云つたけれど、兵部省の寛大なる取計らひによつて、三年の禁錮といふことになつた。禁錮は明治三年九月にはじまり、三十日を過ぎて德島藩邸に歸り、此處に錮中の身となり、六年三月漸く解く。後募りに應じて東都に出で敎導團には入つたが、故あつて中途歸郷し、遂に九年四月鹿鹽に來たのである。

此時黑部氏は、鹽原耕地字上の平に横穴を堀りつゝあつた。既に四十二間にも達したけれど、やはり失望に終つてしまつた。ところへ幸ひ礦山寮長ゴットフレイ氏の來遊があつたので、その鑑定に基づき、鹽原坑を棄てゝ三十七間の坑に手をつけたのである。其れも新式の機械でやるのではない。八百五十匁からある片口玄能を以てタガネを打ち込むのだ。手ごわい所は二貫百五十餘匁の大鐵鎚で叩きつける。しかし、此邊は一帶綠泥片岩が意地惡るく堅く疊み込んで居るところだから、一日漸く五分位しか堀れなかつたと云ふ。(他略)

深きを以て有名な鹽井、佛蘭西のグレネエ（一八〇〇呎）北米ケンタッキー州（二〇〇〇呎以上）支那四川省の自流井、貢井などの（二千尺——二千七百尺）の其れ等にくらべては、當底角力は叶はぬけれど、しかし、學界に提供したる問題と、三十餘年を奮闘の頁に費した其の人とは有名ならしめる價値は充分ある。若し人あつて、痩軀鶴に似たる黑部銑次郎氏を訪はんとするも、其は遂に不可能の事である。明治四十四年十二月六日、此日は黑部氏母堂の五十回忌に相當するので、此月はじめ鹿鹽を後に東都に上つて宿痾發し、翌年五月二十七日、鹿鹽を背景としてのからい終りを東都に告げた。

今同氏の遺稿中、獨り筐底に秘むるに忍びざるもの一を採る。（本稿は本號雜錄に載す）

終りに近くなつて、鉛筆走り書きの草稿は破れて居る。後三四行で終りを告げて居るらしいけれど。其の結末を缺いて居る。しかし、黒部氏の主張する意志は明了に看取せられる。即ち氏は岩鹽層存在を自信して、三十七間の横坑に屈せず、更に最後の手段ボーリングを試みて黒白を決したかつたのである。けれど此時もはや資金なし、之を贊助する者なし、少なくも其の機械を借り入れるとしても三千金を投じなければならない時、事此處に出づる能はずして隔世した。

もし赤石登攀のをり、元鹽湯平瀬氏に泊りを求むるならば、旅の疲れを鹽に清めて、美しい綠泥片岩の上をすべり行く谷川の音樂を聽きながら、故人の面影を偲ぶ事が出來やう。ともすると耳にする七不思議も此處にある。

（一）猫に蚤がつかぬ。

（二）駒ヶ池（客でもあつて膳椀不足の場合、一日前に、其の池に祈願しておけば、いつの間にやら賴んだゞけの朱膳朱椀が浮び出る。禮を述べて返せば、ポカ〳〵浮んだ其れ等が、渦と共に巻き込まれて、しまふと云ふ）中峯山

（三）倒さ公孫樹（弘法大師が巡錫の途次、倒さに植えた公孫樹の杖に、根がついたといふ）入澤井

（四）夜啼松（松が啼くのではない。夜泣する子の枕の下に、その松の枝を入れておくと、夜泣きがやむといふ）

（五）あくなし蕨（北川の夕道（ユフミナ）邊にある）

（六）八ッ鹿（中山邊に鹿が揃つて八頭來る。獵師が獲つても、とつても、同じく八頭）

（七）鹽泉

の鹽泉の分析表を記して此項を終る。

◎赤石嶽の麓　前澤

大日本信濃國伊那郡大鹿村鹽河耕地鹽坑より涌出する鹽水分析之報告

此鹽水二パイント（四合六勺）を蒸發せしめ、二百三十四グレイン三分の殘留物を得たり。即此殘留物は鹽水の量目一千分ノ十三なり。而して此殘留物を分析して得る所左の如し。

鹽化曹達	九二・九七
鹽化石灰	三・八一
鹽化マグネシウム	〇・三三

比例

海水中に含める溶解物は、一千分ノ二十八乃至三十九にして、此中に所含の鹽化曹達は、百分ノ九十なり。

明治九年七月九日

大日本工部省御雇教師
英人　ゴットフレイ

鑛山寮に於て分析

（五）地質

もし人あつて、下伊那郡に於ける古い地質の研究に指を染めやうとするならば、先づ赤石の山麓大鹿村に入るにしく所は無い。太古代老連志亞紀に屬する中で、彼の變成岩中最古のものと目せられる片麻岩は、信濃上伊那郡下平出の南方より起り、天龍川の東岸に沿うて南下し、同郡三峯川附近に至つて、近世代第四紀新層の覆ふ所となり、春近に至つて幅員を廣め、稍下りて天龍川の東西に跨り、更に南して下伊那郡鴨目近傍に至るや、第三紀層に頭を覆はれて居る。其の一部が桶屋より道に沿う

て目の前に肌を現はして居る。

角閃片麻岩
黒雲母片麻岩
石英片麻岩
白雲母片麻岩
眼球片麻岩
砂質片麻岩
兩雲母片麻岩

小澁川、鹿鹽川の合流地點落合近くなると、風化の度が進んで居るので、雨後雪解の頃は屢々崩壊するから、うつかり通行が出來ない。しかし、荷車駄馬などは常に往來して居るのである。『どうも險呑だね』と聞いたら、『何よくしたもので、遂けが（負傷）をした人はありません。もつとも、一度肩へ當つた事はあるけれど、大抵は夜崩れます』と車引きながらの話であつた。さりながら、此危險がある爲に、桶谷から大河原へ通學する生徒は、雨と云へば大概缺勤するのである。自然の惡戲か子供には慘酷である。

落合から道を右に取つて、落合橋を渡ると片岩系と交代する。綠泥片岩の出るのは之からである。石墨片岩の出るのも之からである。或は絹雲母片岩、角閃片岩、石墨絹雲母片岩たま〳〵、その間に蛇紋岩、飛白岩、更に進めば石灰岩、角閃岩、白色硅岩、角岩、赤色硅岩、砂岩、粘板岩、輝綠凝灰岩、輝岩、輝綠岩、氣まぐれに水晶も出ればアンチモニーも黃鐵鑛も出る。大きな穴を堀らせた黃銅鑛も出る。かくて水源を極めつくせば、ラジオラリア板岩も出て來るのである。

此片麻岩系より同じく變質の片岩系に移り、古生大統に變り行く有樣は、小澁川の支流なる鹿鹽川

◎赤石嶽の麓　前澤

の一支流鹽川に沿うて溯るも、小澁川について上り行くも同じことである。中に大鹿村の誇とした鹿鹽の浴場より一里といふ澤井の鹽類石、原名アラクリーと名づけられる霰石は、明治卅六年大阪に開設せられた內國勸業博覽會へ出品のをり、即刻帝室博物館へ買ひ上げられた日本の珍品であつたけれど、今は其處に跡方もなく採取せられてしまつたのは誠に遺憾にたへられぬ。其の他之に類似の炭酸カルシウム結晶は、種々なる形となつて所々に出現して居る。他日をりを得たら本村鑛物露出狀態を一纏めとして發表する事にする。

(六) 土質

信濃に、水源を古生紀岩層地より發する川を求めたなら、奈良井が其れであらう。千曲川も其れであらう。木曾川、三峯川、小澁川、遠山川も亦其れである。しかし、もし之等の中で、古生層より發し、片岩片麻岩の二系を貫流するものと云へば、唯三峯川、小澁川の二流に過ぎぬ。即ち此二川は其の流域に於て形成したる土質は全く同一のものである。さりながら、三峯川は片麻岩系に屬する下流に於て、沿岸近く小なる平野を形成して居るけれど、小澁川下流は未だ風化し盡さゞる礫磽の土地なるが爲め、三峯川に於けるが如き灌漑の恩澤に浴する場所がない。

地質系統から土質を考へて見ると、古生紀岩層地の土壤は、石英閃綠岩地土壤の如く鹽酸に可溶解成分多からず、主要成分中ポタアス含有量は少なくない。しかし燐酸は少量で、概して粘着性があるから、水分透過の孔竅を塞いで、大氣の流通を阻害する。隨つて酸素の缺乏を來し、地温を低からしめ、肥料の分解を遲延させる事になる。

片岩の土質は如何かと云へば、石灰や苦土には富んで居る。けれど植物營養の主成分には富んで居らぬ。其れに加ふるに吸收力高度ならずであるから、土性劣等は隱す事が出來ぬ。然らば、片麻岩分

解の土壌は如何にと見れば、ポタアスには豐富の土地ながら燐酸分が缺乏して居る。然れども、幸に燐酸に對する吸收力は高度にあるから、先づ之を補へば他の二者に勝るものがある。

此三者より成る大鹿村が有する島河原田地（青木川流域の上流に向つて、右岸は片麻岩なれば）殆んど四十町歩、中に忠實なる老農が、一年たつた一度の米作に、良く出來て一反歩より四斗入四俵半を夢見て過ぐる此頃であるから、其の他は推して知るべしである。

加ふるに此地へは、赤石山脈の雪解の水を運び込む。赤石登山者が徒渉の際、骨迄泌み込むやうに、身ぶるひさせるあの水が、此處へ流れ込む。濁つた時には、灰を容かしたやうな色を見せて、細泥が流れ込む。水が退くと、乾いた後は糊をひいたやうに、固くしてしまふ。之に比較すれば、水源が近いだけに、雪解の水を餘り持ち込まれない爲に、小澁本流程、泥土を持ち込まないだけに、青木川田地の稻の發育が良好である。

畑と云へば、大概丘陵の傾斜地ばかりである。傾斜も傾斜、如何して種を下ろすであらう。どんな樣子で收穫するであらうと危ぶまれるほどの傾斜地が、立派に拓かれて、桑や麥などが安らかに成長して居る。靄は雲雀にはなるべきを、雲雀の棲まぬ此處は燕に明けて、黃ばんだ麥が刈られると、代るべき豆は最早四五寸高く拔き出て居る。豆なき山畑の九月から十月初旬へかけては、雪を欺く蕎麥の花である。かくて暮れゆく秋を、山は栗と薯に賑ひを見せて、漸く寂默の境に入る。此時早く里人は

『寒くなつたなあん。嶽が白つなつた』

と挨拶する。嶽とは赤石のことである。今迄は忘れて居たやうな里人も、冬のよそほひをする時から、驚異の眼を以て赤石を仰ぐ。小澁川の奥の奥に、之が村の境、國の境ぞと、その守るべき領土を示すやうに、彼方を背に隱して、なだらかな稜曲が水晶のやうにかゞやく時、獵師は武者振ひして、羚羊を狩りに出ける。肥えて居るとも思はれぬ此土地が、生れた人を固く引き附けて、めつたに人を他處へ

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の麓　前澤

手放してやらぬ。此處大河原の里から僅に九里の飯田をさへ見ずして、世を去る人が少なくない。此不思議な土地から、毎年體格檢査に行く壯丁の成績は、何時も上位に位して居るので、係りの人々の一つの疑問となつて居る。

（七）大河原

桶谷より一里、小澁沿岸のやゝ家居立ち並ぶ所、此處を大河原市場と云ふ。魚屋もあれば菓子屋もある。旅屋、理髪店、藥種屋、其の他料理屋もあつて、日常生活の必要品は、大概此處で用が足りる。交通關係からであるが、鹿鹽市場と大河原市場とでは、物價に少し違ひがある。同じ村の相距る僅一里の間ながら、高遠（タカトホ）近い鹿鹽の方が、一駄の背中で米の價が五十錢から安い。其の他も類推する事が出來る。

行政上の區分から云へば、大鹿村は鹿鹽、大河原の二區に分れて居る。其の以前を云へば、鹿鹽村に大河原村である。大河原の大と鹿鹽の鹿とを取ると大鹿となる。大河原區は又其れを十耕地に分ける。桶谷からはじまつて、進み行く沿道の順序に云へば、中尾、文滿、下市場、上市場、澤戸、上藏、釜澤、上市場の郵便局の傍から、道を右に取つて小澁の支流青木川に沿つて上れば、下青木、上青木、此處から地藏峠を越して遠山の鄕に入るのが秋葉街道で、和田迄凡そ九里と云はれて居る。

大鹿村でふと想ひ出した。此下伊那郡の天龍東岸に、千榮（ちはえ）村と千代（ちよ）村との二つがあつた。明治になつてから、いよ〳〵此二村が合併する事に決した時、各村民が我田尊しで自分の村の固有名を主張する。仲裁する者があつて、千榮からも千代からも一字宛を出し合つて、其處で出來上つた名にしやうと云ふ事になつた。之は名案と云ふので、千榮からは頭字千を出した。千代では先きを推してか僥倖か代の字を出した。つき合せて見ると出來上つたのが千代、今では千代村で無事に治まつて居る。大

鹿村もやはり其れの結果で、大鹿其のものに何等の理由はない。

秋葉への分れ路から半里足らずで上藏に着く。その入口、向つて左の小高い所に松樅の大木が見えるところは、南朝の忠臣香坂高宗の石ぶみの立つ所である。

眼下に眺めた小澁と稍離れて、僅の勾配を上り終ると、道の左に火の見櫓が天を突く。右には其れにも劣るまじと公孫樹の古木がそゝる。其の傍に古い建築物がある。山岳（五年一號）に

『道右に一宇の古寺を見る、醫王山福德寺といふ。本堂は平治元年、名匠竹田與作の建立にして、實に七百四十年前の古建築、元文及び寶永の奉納額あり、年代の威嚴を崇拜する小島獨り大に悦ぶ』

とあるのが之、此藥師堂は攝津の多田から移したもので、かしこくも後醍醐天皇の皇子、宗良親王の祈願所の一つである。

其れから僅に進めば、野々宮神社の華表を左に見るべき地點に進む。其の前面、小澁の流れに近い平な所は、建武の昔大河原城の築かれたといふ懷古の料になる土地で、此處に時節を待たれた宗良親王、其の御子尹良親王、世が世なれば、かゝるいぶせき深山の御籠居、今は悉く桑と豆との占むる所となつて、麓は次第に小澁川が、呑噬の牙を鳴らしつゝ、趾を堙滅させやうとして居る。此處を離れて程なく、道左の木標が眼に入るであらう。

尹良親王御陵墓ヨリ二十九町三十間

小日影鋼山　凡二里
向テ右釜澤ニ通ズ　小澁冷泉　凡二里
赤石嶽　凡五里

向テ左山道甲州ニ通ズ

甲州の文字を見る時、私は未見の山岳の會友荻野音松君を想ひ出さずには居られない。明治四十年八

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の麓　前澤

月四日午後六時着として

東京市日本橋區本銀町一丁目二番地　平民　學生　荻野音松　廿六

と記された宿帳を見たのは、其の月七日、酒井政衛（明治大學生）湯澤重一（長野師範生）原誠人（農科大學生）中山彌次郎（小學教諭）の四人と共に、はじめて赤石登山の時である。今は相惡自分の手許にないから、しかとは云ひかねるけれど、駿州田代山奥横斷記の題名のもとで君の筆を見たやうに記憶して居る。中に挿まれた圖の、ザカ澤、東マタ、西マタ、ヤナギジマ、ジヤヌケノ澤、西ノヒロサク澤、東ノヒロサク澤、中マタ、小西マタ、サンブク峠などの名は其時に覺えたのであつた。殊にサンブクの峠といふ名は、デンック峠と同じやうに、何とも云ひ現はし得ない不思議なものを潜めたやうな名として印象されて居る。其れが緣でもあつたらうか。遂此八月二十一日、雨になり行く荒川嶽の腹を離れて、午後は次第にぬれそぼちつゝ、小西俣竹澤川少し下りの木小屋を驚かし、翌二十二日、中俣を上りつくして三伏峠の上に立ち、一行十人此處に唇の色迄變へて身ぶるひした事もある。

上藏から甲州に通ずる山の、そば路を上り行けば、一里半ばかりで廣い草原に出る。此處はアクナシ蕨の出るといふクロノタ（黒ノ田）である。山家の一里半は、朝飯前である。漸く罩衣にうつる頃になると、日曜などに子供は『クロノタへ行かまいか』と誘ひ合はす。『何處へ』と問へば、エンメイ取りにと云ふ。エンメイと云ふのは、アツモリサウの事である。氣持のよい廣やかな綠の葉の中から、すういと擢ん出た莖の先に、赤に紫味を帶びた大黒樣の頭巾のやうな袋が着く、之をエンメイのヲブクロと云ふ。大人でも子供でも、其の美しい姿を見ると吾を忘れて手をかける。草刈る人の歸る背には、何處かに其れが挾まれて來る。家に歸れば待ちかねた子供は、『エンメイは』と第一に云ふ。

やがて、夏蠶も過ぎて、秋蠶の漸く終る頃ともなれば十月だ。その一日に山の口があく。此時になると大河原中どの家でも、中には泊りがけで此黒ノ田へ行く。しばらく打ち捨てられた此あたりは、

夢のあとなる夏草が身たけを没するばかりに延び〳〵て居る。之を吾勝ちにせつせと刈る。之も四日の間である。青草のまゝでは重いから、其のまゝ日に晒して乾草にしてしまふ。頃よい頃都合を見計らつて勝手に運び出す。此賑はひは一年に唯一度、其れに又、土がボカ〳〵する所で大根などを作るに都合がよいから、中には好いただけ地をおこして種を下ろす者もある。朝霜を踏んで、黒ノ田と云はれるだけに、眞黒な土の中から、此處ばかりは見ゆる綠葉を無造作につかんで引き抜くと、嶽の雪をも欺くやうな肌が輝々として現はれて來る。

之から一里を上ると、豐口山の頭に出る。それから一里をかなりな傾斜で上りつくすと、三伏峠となる。三十三まがりなどの名があるので、羊腸の坂路が察せられるだらう。

もし天候の都合がよければ、東北の方かけて、本谷山、鹽見嶽、北荒川嶽、尾根を隔てた農鳥、間ノ嶽、遙かに駒ヶ嶽、其の前左に王者の如く仙丈ヶ嶽等の赤石山系の一連を、あかず眺める事が出來る。

上りつくしてから木立を拔けて、珍らしく草茂るだら〳〵下りとなる。クサボラ（草洞）も其處から名づけられたのであらう。低きを求めて左に下れば、誤る處も無く先づ偃松を見て中俣の上流に出る。其の川に沿うて道無きこころをひた下りに下る。元より道もないから小さいを幸、右に左に流れを越えながら、たよりを求めて二時間も下ると、ハタと水は何處かに消えてしまふ平な所に出る。奇麗にならされた土砂の中には、抱へるやうな柳が林を爲して居る樣子は、宛然油畵に見る英吉利あたりの公園である。其處を通り拔けると、直左手の方から、板岩の崩壞が恐るべき自然の威力を示して押し出して居る。其の裾から水が現はれて前の二倍の水量となる。此崩れの眞上は三〇四六・九米の鹽見嶽で、今から五十年計り前の押し出しだそうだ。その柳の生えて居る地點は、一時たゝへられた瀦水の跡で、その上流の水は、地下を通り越して下に現はれるのである。

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の麓　前澤

之から四時間も下ると、右手から今下つた中俣より少し水の多い小西俣がやつて來る。大河原市場から此處迄近い八里と云ふ。その中俣と小西俣の相合ふ傍に二つの小屋があつた。一つは九尺に二間もあらう。カナギを打ち込んで柱とし、木の皮や草で屋根が葺かれ、中には二升炊きの鐵鍋が一つ、信州の人と甲州の人との話をするのが此小屋であつた。舊暦七月廿日、夏蠶の漸く手がはなれる頃、大河原地方の若い同志が、四五人三日分位の糧食を用意して、保養かたゝ〳〵、投網を肩にして此小屋に來る。此處を本陣として、小西俣を上へ上へと打ち上げる。甲州方面からもやつて來る。『今日は』が挨拶のはじまりで、一つ鍋の飯を食ふ。晝の間に仕事するのであるから、夜は獲物の多寡比べから、榾火を圍んでお國自慢もするであらう。しかし、之も一昔となつた。今では其の小屋の跡片もない。

元の道すぢを云へば、此大河原から他へ通ずる道と云へば、鹿鹽から市野瀬峠（市野瀬方面では鹿鹽峠と云ふ。又分杭峠、峠などの名もある）を越え、高遠から諏訪に出で東京へ行く道と、澤戸から下青木に出で、大西山を息せき上つて唐松峠を越えて飯田に通ずるのと、も一つは、桶谷から今の北條峠にかゝり、生田村を過ぎて、天龍東岸に達する道、も一つ黒羽澤山の裾の岩角を攀ぢながら、小澁川の流れをたよりに、南向村の瀧澤や四德に通じる道、青木川を溯つて低い處を目當に、分水嶺地藏峠を越えて、遠山川の上流に出る秋葉道、此谷底から他の村に出る道と云つたらそんなものであつた。だから、めつたに生々した魚などの拜めやうも無い。『いま〳〵しい。一つ甲州へぶち抜いて、東京へ近くしてやらうか。出來ぬまでも、生の魚ぐらゐは、口にはいるぞい』とかゝつたのは明治七年の蒼八月、其の發頭人は澤戸耕地の澤戸龜作である。村の者もやつつけろと云ふので、先づ山道の測量役に獵師があたり、其の見當をたよりに道の里程を定め、何處から何處迄が何耕地の某と、持場持場を割り宛てゝ遂斬り開いてしまつたのが此三伏峠にかゝる道すぢである。其の翌年珍らしや秋の收

獲の終る頃、甲州切石からさして、眼から血の出るやうな秋刀魚が此里へ躍り込んだ。そして此時は、大河原から八里の山坂を中伏と小西伏との落合まで、迎へに出たのであつた。

それから後、身延へ參詣の人などは此道をとつた。今でもたまには通るので、道の形は何處やらに殘つて居る。三伏峠を上りつめて、中伏下りは本道ではなく、川から右に五町ばかりを離れた黒木の中をずん〳〵下り盡くせば、いやでも小西伏へぶつかるのである。しかし此道は、案内があるか、余程山めぐりの心得ある者が、地圖や磁石の用意してやらないと少々險呑である。もし三伏峠に出られたとすれば、二三ヶ所の立木を削つて記しておいた峠の名が（河野齢藏前澤政藏）見出されるであらう。

二十九町三十間、上藏から更に小澁川に沿うて上る。此中程道左の岩角に小さな祠がある。此村の人々は、行くさ歸るさの誰彼となく、木の枝草花を必ず手向けて行く。いつの頃からか『折り草觀音』と呼ばれて居る。此處を過ぐる程もなく、行く手を遮る赭肌の惜し氣もなく雲をぬいで、群峰を膝下に跪まづかせしめた一座を見出すであらう。高距三一二〇・一米、まがふかた無き赤石嶽である。漸く釜澤に入れば、道左に枝葉鬱々盤垣老龍の如き赤松を見る。『宗良親王遺愛の松』と之を云ふ。眼を移せば、脚下に東より來る一流小河内川を趁へば、直に赤石の眷屬なりとうなづかるゝ小河内嶽（二八〇一・六米）大きな公孫樹のかげなる大河原學校釜澤分教場を眼下に見て、木立深き境内に入れば、木柵に圍まれて苔蒸したる五輪の塔がある。即ち、大龍寺殿と申されたる尹良親王の御陵墓とぞ承はる。傍に神社あり。

我を世に在りやと問はゞ信濃なる
伊那と答へよ嶺の松風　（宗良親王）

一度朝の霞を分け、夕に靈鷲の花を摘まれし御身の、思ひもかけぬ相模風、下野嵐、吹きあれて、世は刈菰と亂れしゆゑ、遂に忍辱の袈裟を脱し、無上等堤の珠數を棄て、腰には降魔の劍、手にとり

◎赤石嶽の麓　前澤

◎赤石嶽の麓　前澤

しばる大悲の弓矢、叡慮を休め奉らんと、心を千々に碎かれしも其の甲斐なく、三十餘年の憂き月日は、老いの御姿を影と止めて此處に流れ去つたのであつた。

少しく下れば、時によつて桑麥、葱豆などにとりまかるゝ其が中に、約伊の妃のしるしがある。

慕へども見し世の春はうつつ哉て
　仇なる花に殘る面影　（紀伊妃）

こは宗良親王より、山奥の花に想ひを寄せ給うて

散らぬ間に立ち歸るべき道あらば
　都のつとも花も折らまし

と、吉野に在した妃のもとに、詠みつかはされたをりの御返歌とぞ。長き御恨み、千々に碎かれた御心のうちを、小澁の流れは盡きせず其を物語つて居る。

小河内川（釜澤とも云ふ）を渡れば、屋根新に葺き代へられた三正坊大權現の祠が右に立つ、其の上り口には石段があつたけれど、明治三十一年八月大洪水の際、直ぐ前の山が押し出して全く埋めてしまつた。祠も其の爲三尺ばかり後へ退いたまゝ今に存在して居るのである。

その左手の、人も住まない小家の軒に、妙なものがかゝつて居る。氣がつけば立ちよつて見るも一興。おかみ三、私はからだがわるくてなりません、どうしたらなをりませう、おいしや樣でも、佛樣でも、なをりません。

それはあなた、此ノ奥に小澁の湯が有ます、どんな病氣でも、豆ニなります、私も病氣はきらいて有ます。

くすりも、きらいでアリますが、からだがわるくて〳〵、小澁ノゆニ行ましたら、このように病はなをり、豆にナリマシタ、今テハまいばん內の旦那が、こいしく有ます、此之小澁ノゆで、な

をるとよろしと思います。

全く原文の儘である。之からも常に小澁の流れを右に見て一時間半ばかりで、川に近く小澁湯の旗飜る宿に入る。山岳（五年一號）に

温泉は冷泉にあらざるも、温度頗る低く、火力を加へて、僅に入浴し得るのみなれば、寧ろ鑛泉と稱するを可とせむ。浴場は母屋を少し離れたる別棟なるが、圓き小なる浴槽三ッあるのみにて、頗る快からず、温泉宿は木賃宿位なところにて、二階に導かれたれども、煮しめたる如き疊は、大腸を露出し、板に土壁なく、新聞紙を貼りつけたるのみ。

その時から見れば幾分進化した。疊もかへられた床には不思議な虎の一軸が掛かつて居る。湯槽も樂々と足の展ばされる角桶になつた。あら木彫りの阿羅漢十座ぐらゐは湯殿に鎭座ましませるやうになつた。去年の七月行つた時には

左多メ

一金二錢　壹入金　六錢壹日入場料

御泊リ定メ

一金拾貳錢五厘　木錢一ヨ止リ　外ニ呑食ハ御注文ニ應ジル、但シ良料は一飯一汁金六錢より拾五錢まで

多分先の『おかみ三』と同じく、此宮古館主人なる耳の遠い釜村所平治老爺の名筆であらう。何れにもある樂書だが此處の二階は又偉い。しきりの襖は下張りだから良いやうなものゝ、べた一面にぬたくりつけてある。その中に

こしぶ湯のおのなききつね、いきたはたしがだまされた。

などの實懷めいた名文がある。

◎赤石嶽の麓　前澤

◎八ヶ嶽　別所　六二

赤石荒川などの登山者は、行きか歸りに大概此處に草鞋を解く。一寸宿帳をひつくり返せば、何年何月何日から、族籍職業氏名年齡まで眼の前に展開される。四十二年の部に、七月二八日、行先地飯島として、小島君、高頭君、三枝君、中村君、高野君、外に人夫が九名『六時三十分、温泉宿に到着するを得たり、人夫は少し後れて來着せり』の時が髣髴として來る。

八ヶ嶽

別所梅之助

矢ヶ崎ごまり

颱風とやらが南島にあるといふが、空は人を誘ふ靈のやうに澄みきつてゐた。體の工合の少しおもしろくないのを思ひきつて、信濃町發九時廿分の列車で、信濃の茅野にむかふ。體温三十六度八分、平熱以上だが、暑いからだらうにしておく。

蒸されるやうな四十のトンネル、汽車は、山あひを縫ひ、高原をすべるやうに走つた。甲斐に入るころから出でそめた雲は、茅ヶ嶽、金ヶ嶽をのこして、あとの山々を大方包んでしまつた。長い〳〵七里岩の集塊岩は、釜無川に沿うて灰色のきり岸をなしてゐた。私はこの泥流をおこした火山にゆかうとするのだ。日野春あたり百合科の黄なる花に、野はいろどられてゐた。午後六時茅野着。車をはしらせて、矢ヶ崎の玉屋をとへば、宿屋は止めてをりますが、ほんの雨露を凌ぐだけならばと、アクセントのつよい主人の言、とめて貰ふことにする。

おなじ蚊帳にはいつた藤枝邊の繭買のいびき、一間と隔らぬ水車のゴトン〳〵が、眠り藥の力に勝つてしまつた。それでも三時と四時との間に、少しは眠つたであらう。八月六日。

夏澤越

荷背負をつれて朝七時に矢ヶ崎をたつた。大石川を渡り、田の道、畑の道をゆく。霧がはげて、日がかん〳〵照り出す。蝶がまふ。コヅミ、オホヅミとか案內者のいふ山の一を右にし、一つをまへにしてゆく。シドミが澤山はえてゐる。すると、おぢいさんが、その實を籠に入れて、天秤で背負つてきた。それからヤナガハとかいふに出て、鹽ノ目近くの小丘に一休み、八時十五分。

ほどなく高原になつて、堂々たる立科山が左手に見えそめる。裾野、赤松林、蕎麥畑、ところ〴〵に長い崖がある。牧場にでもしたらと思はれる處、つめたい水が滔々とながれてゐる。案內はあまり地名を知らぬ。フウロ紫に、ヨメナ徒らにのび、さてもシドミの夥しさ。八月といふに、紅を吐いてゐる。殘んの花もみえる。下つてのぼる槻の木あたまの山の神、九時四十五分、檜の老木とシナノキとが並んで旅人に蔭を與へてゐる。せいのびしてシナノキの垂れた梢を折らうとすると、その心臟形の葉がはげしくふるへて、黃みをおびた白い小さい花が、ほそい香を放つ。

やゝ登る。キキヤウに、アカユリに、ワラビに、マツの原。ところ〴〵に植ゑられたるはカラマツ、あらはれたるは岩。くろい小い蝶。黑き翼に白き星を點した蝶、赤黃の菊科植物、マツムシサウ、山はくもれど、かゝる風趣に、眼は忙しい。用水だといふ池の水は澄んで樹影をひたしてゐた。そこからも石高道をつまさきあがり。川あり、岩ある頭一休み、十一時五分。カンバがみえる、シラタマノキが岩にきものを着せてゐる。石川原のなかを僅の水が白く、うねつてゐる。案內がまた、休むとて荷をおろす岩のほとりに、君影艸がはえてゐた。シラカンバちひさく、イタドリやゝ高い。雨堀とかい

◎八ヶ嶽　別所

ふ處に、伐木の爲に設けられた木小舍があつて、そばに茶店がある。木を伐り出すうち設けられたものだといふ。斯るところに似つかはしからぬ仇なお神さんがゐて、茶をすゝめる。店先にはハリブキを心とし、コマクサとミヤマリンダウとを下くさにしたのや、キバナノシャクナゲをおくにイハヒゲ、イハウメ、タウヤクリンダウなどをあしらつた鉢があつた、ミヤマリンダウは萎びてゐたが、コマクサなどは咲いてゐた。こゝについたのが十一時五十分、中食をして十二時廿五分についた。どうもさきから案内の足がおそい。すぐ休みたがる、こゝまで來るうち馬力にすら道を讓つた。こゝを出てから段々あがる淡黄のヤマヲダマキ、紫のトラノヲがやゝ多い。ツガなど角材にきりこなされてゐる。澤を左にして進むと、水際とは大分離れてゐるのに、ヤナギランが手負になつてゐた。シャナゲも見えそめる。ツガの枝でしつらへた森道は、絨氈を踏むやうに、柔い。岩、コケモヽ、リンネサウ、ゴゼンタチバナ、針葉樹帶、陰林なところもある。一時五十五分、峠の清水、案内はまたごかりと休む。ヤマオダマキが夥しくなる。橋を渡つて溪流を左にしまた渡つて右にし、かうした事を繰りかへす。溪流は處々かゝりたいやうな小い瀧をなしてゐる。それがいつか水音もきこえずなり、林立せる針葉樹に苔が白い。峠近くでまた休みたいといふ、三時。朝九時過に茅野を立つた人と一緒になる。二時間半もちがふのだから、この案内ののろいのも、愛嬌かも知れぬ。岩間の清水をむすべば、手が氷る。こんな高いとこだのに、蚊が來てさす。三時十五分峠。霧が谷を埋める。その谷へと下る。宿についてかれこれするうちに四時。

案内にはいろ〳〵いたはつたり、物をやつたりしたにかゝはらず、一圓四十錢くれといふ。多分おそい賃であらう。それでもおあしを貰つたら、まへに泊るといつた男が、急いでかへつていつた。

本澤の湯は、すこぶるぬるい。しかし出てから曖かい。それに室もまづよく、食事もまづくはなかつた。敷蒲團三枚、かけ蒲團二枚、火鉢には火がうづ高い。七日。

九千尺

晴れてゐる。六時四十分、山の案内とともに宿を出て、夏澤峠へとのぼる。カニカウモリ。ゴゼンタチバナ、ツマトリサウなどが下草になつたり、ショクダイゴケが岩にしがみついてる針葉樹の間をゆくと、案内者はヒカリゴケがあるといふ。あんなに光りますといふが、私の眼にはあまりうつらない。コフタバランを收めて、七時三十分に峠。左をとつて、峯づたひ、樹のきりたふされたのを跨いでゆく。ゴゼンタチバナの花瓣のつまべにをさしてゐるのを、普通のと競べて、興を催しながら進むと、ハヒマツやらごろた石、岩間に滴る清水に咽喉をしめし、なほ石上をのぼれば、霧が次第にせめよせる。タウヤクリンダウは白く、ミヤマダイコンサウは黄にさき、岩梅はまるまつちく固まり、ウラシマツヾジはふくやかな葉をしてゐる。岩をふまへて、いゝ山だなと息をつく。硫黄嶽の火口は大きな口をあいて、霧にそこを見せずにゐた。斷崖には、ムシトリスミレが何氣なげに獲物をまつてゐた。チシマキヽャウは濃き紫に匂つてゐた。八時半、硫黄嶽の三角點、海抜九千四十八尺。ほとりに杭が立つてゐた。先年諏訪郡原村の案内者某が、變死したとこだとの事、霧は山を包むで、むかうの赤嶽も、いや横嶽も、しかと認めかねる。されどゆけるところまでと、私は尾根を傳つていつた。ミヤマシホガマの紅花をめで、ムカゴトラノヲをあはれみ、九時にオホタルミ。ウルップサウの花期は過ぎて實が物々しく殘つてゐた。チャウノスケ卿も、大方は坊さんになつてゐた。美濃戸山の絶壁が見え出す。横嶽の中腹にかゝつたのが。九時三十分、針金につかまつて、する〳〵と岩の腹をとほる、それが二個所横嶽は峯が十もあるといはれるほど長いし、それに火口壁が極めて薄い。足下の其塊岩の崩れさうなのを用心しながら、横嶽の最高點についたのが九時五十分、九千三百三十九尺。雪がはるか下に消えのこつてゐる。タカネツメクサの白花が岩間を白くしてゐる。イハヒゲが夢みるやうな

◎八ヶ嶽　別所

◎八ヶ嶽　別所

花を乗れてゐる。ハクサンイチゲも白い。霧いろ〳〵に吹き迷ふ。今し右の火口内はくもつて左の側は晴れてゐる。懸崖に紫なすは、グンナイフウロか。ながい横嶽もおしまひになるころおむすびを食べて、するどい赤嶽へとりかゝる、十一時十分。急な崖を傳つてゆく、ふりかへると横嶽が嶮しい。

十二時廿六分やう〳〵赤岳の最高點、九千五百六十六尺、小祠がある杭が立つてゐる、三角點の石もある。あたりは霧、空にかけるはイハッバメのみ、富士山や、御嶽のみられる空でない。そのうち西嶽が少し顔を出す、權現嶽もそれかと指される、阿彌陀嶽はひくい。

阿彌陀まで無理にいつたら往かれようと思つたが、大事をとつて引きかへす、十二時四十五分。すこし眠い。採集はもとよりする氣もなかつたし、準備もなかつたが、かへりにはすこし誘はれ氣味になつた。チドリるゐ、ムカゴトラノヲ、シナノキンバイ、ウラジロキンバイ、オサバグサ、ウスユキサウ、シロバナシャクナゲなど、殊に目にとまつた。オヤマノエンドウは花あざやかに、實はふつくりしてゐた。石尊二時四十分。横嶽の火口内でウルップ艸の紫なす殘花をみつけたのを愛で、また殘りのむすびを食べる、オホダルミにくると南が晴れて、さきに足を印した山々が見える、かへりみ勝ちに硫黄嶽、野澤中學の上級生が三四人、採集をしまつて休んでゐた。一緒にくだる。ミヤマハンノキにつかまりながら、オニクがこの下にあらうなどいひつゝ、峠、五時十五分、湯についたのが五時四十五分。八日。

根石嶽

夜、窓を明くれば、星が月のやうに大きく光つてゐた。明方近くなると、里でみる星のやうに光が收まつてゆく、けふは根石嶽へと志す。立つたのは七時半すぎ。日がさしてゐるので、ヒカリゴケがよく見える。硫黄嶽の火口壁も光をうけて、白いさつぱりとした、然し重々しい感じを與へる。夏澤

の峠で小林區の人だといふのに五萬分一の地圖を見せたりなどして、むかうは峠をくだり、こちらは、昨日と反對に北へと登つてゆく。たふれた樹々をふむ事、きのふよりもやゝ多い。サルヲガセが面を拂ふ。風死して蚊がうるさい。フタバラン、イハカヾミなどのつやのよい葉を踏みながらゆくと、針葉樹の立枯、樹々はありしまゝに天を指せども、骨は晒されて白い。樹ひらけて遠くにシラナギがみえそめる。上は白く、その中から出てゐる岩は黒く、下はやゝ赤い。根石嶽にのぼつたら、あちらから歸らうといふ心がまへ。足下に深さうな穴がある。熊がすんでたのを何年かまへに、獵師がとらうとしたが、手を負うたまゝ茶臼山の方へにげてしまつたと、案内がいふ。すこしうちひらいた處に出たかと思うと、また林間をぬふやうになる。バイケイサウは澤山あるが、花はもとより枯れてゐた。オサバグサもかはゆい穗を出してゐる。すこしゆくと下り、まちがはでもの道をちよつと違へて、いくらかハヒマツの中をおよぐ。

石の白いタルミに出た。コマグサだの、タウヤクリンダウだのが咲いてゐる。噴火口の一角に近いたのであらう。みあげると硫黄嶽の肩から、赤嶽がせいのびをしてのぞいてゐる。十時火口壁の一角。案内のはふる右にヤマガラスが飛んでゆく、ハヒマツの實をたべてゐたのだつた。また高點、十時三十分。私どもは尾根づたひにゆくのだ。すぐ一高點。ミヤマダイコンサウがさいてゐる。またタルミ石が白く、コマクサがつゝましげなるさま、さきに似てをる、また岩山、イハツヽジ、コメツヽジ、ウラシマツヽジ、チムカデのしとねはともすると滑る。絶壁、おそろしい岩山の上、十一時廿分。さつきから去來してゐた霧が濃くなつた。空が怪しい。頭がいたい。根石の最後の一峯をあとにして引きかへす。溪ではウグヒスがなく。峯づたひ。ハヒマツの香を浴びて、いくつかの高み、十二時十五分。高いところにわかれ、雪の澤におりるつもりで、草の中をころがるやうに、すべりおちる。クルマユリや、ナデシコが、ところ得がほにさいてゐる。道のない谷をおりてゆく中に雨がぽつり。降つて來た

◎八ヶ嶽　別所

よと注意するうちに、あゝ大分ふり出しましたと案内がいふ。はやく歸らうと、林やら、草やらの中を、むやみに下る。シラカンバにぶつつかつたり、ミヤマハンノキを踏んづけたりして、大急ぎ。蚊が眼鼻にはいつて、うるさい。口もあいてゐられぬ。どう〳〵澤におりた。雨もあらかたやんだ。雪の澤にも格別花もさいてゐないといふので、よらずじまひ、雨のおかげで一時四十七分、宿にかへつた。クモマベニヒカゲなど二三種のものを採らうとする捕蟲網の人も、二組ほどとまつてゐた。九日。

岩に踞して何心なくまさぐれば、リンネ卿さく、白く、つめたく。

きり〳〵とみそさゞいなきて谷の朝は、夏も寒けし、旅の衣手。

帝坐近き安山岩の上しめて、千島桔梗は禁色を著る。

自らを持するに難きこのごろは、物も思はず、日記などをかく。

信州駒ヶ嶽遭難始末

上伊那郡教育會

駒ヶ嶽山上に於ける大慘事

あゝ、駒ヶ嶽の慘事は、蓋し稀有の慘事であつた。八月廿八日黎明飛報は西に東に傳つた。忽ちにして警鐘は鳴る消防夫は繰り出す、泣くあり、叫ぶあり、憤るあり、午後には駒ヶ嶽及其山麓一帶は、人もて埋められた。其中に呼べば答へんとする様な平和な顔して永き眠に入つた、可愛らしい小供は、或は負はれ、或は棒に結び付けられて、順次搬出さるゝ。平素極めて靜寂な莊嚴な駒ヶ嶽山麓一帶が、

忽然修羅場となつた。此有様を見たもの、聞いたものが叫ぶのも、憤るのも、蓋し無理はない。斯くて日は一日と過ぎて、新聞に雑誌に毀譽褒貶とり〳〵の間に、郡村當路者警察官消防夫其他有志者各方面の人々の、晝夜兼行の努力によつて今や跡始末の方法が、殆んどついて、近く九月二十七日に、赤羽校長以下十一名の、村葬儀が、擧行せられ様とするに至つた。此際に當つて此慘事の始終を、詳かに調査して、此眞相を社會に報告し、邦家將來の敎育に資すると共に、殪死者吊慰の法を立てる事は、本郡敎育會の任務である事を感じ、委員をあげ、調査し其結果を、左に錄して大方各位の前に呈する事とした。一讀の勞を惜むなからん事を切望する次第である。

伊那と駒ケ嶽登山

駒ケ嶽は、伊那と木曾との間に在る頗る美しい山である。山の頂迄這松を以て被はれて居る。其間に大きな岩がある、雷鳥が飛んで居る。何處ともなく莊嚴で雄大である。山多き我信州にも、此の如く美しい山は、蓋し稀である。偉人坂本天山先生は大に此山を愛せられ、折々一週間から十日間位此山中に遊ばれたそうである。先生が此山を如何に見られて居つたかは、先生が、此山上の通稱「錄銘石」に刻まれてある數句がよく之を明にして居る。

靈育神駿。　高逼天門。
長鎭封域。　是岳以尊。

我伊那郷の人々は亦古來此山を愛して、男子は少くとも、一度は此山に登るが常である。吾人の希望は十四五才以上のものは、毎年一回宛は是非上る様にしたいと思ふ。駒ケ嶽を學生の公園としたい。伊那から此山に登るには、殆んど費用を要しない。高さ凡そ九千尺以上で、相當に高いが、上るに差したる困難は、感じない。此附近の村民は、殆んど頂に近い處迄、薪炭取にいつて居る。從つて我が、

◎信州駒ケ嶽遭難始末　上伊那郡敎育會

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

上伊那郡の小學校では、既に十數年前より、年々登山するものが極めて多い。今日迄登つた小學校兒童數は、何千人だか數へきれぬ程である。然かも今日迄嘗て死者のあつた事がない。否駒ヶ嶽開山以來茲に一百年、此山で死んだといふものは、僅に三四人である。高い割合に危險がない事がわかる。又實際兒童も愉快に此登山をなして居る。今日迄伊那の住民の爲めに、駒ヶ嶽が與へた効果は、精神修養上、身體鍛錬上、ざれ程であつたか、固より計る事は、出來ないが、其多大であつたといふ事は疑ない所である。

中箕輪小學校の登山

伊那住民と、駒ヶ嶽との關係は前述の通りである。從つて中箕輪校も十數年前より、登山を奬勵してゐた。殊に四十四年以來は、殆んど學校の行事として、毎年登山して、教育上勘なからざる効果を得て居た。本年も例年登山期とする八月が來た。季節としては上旬がよいが、暑中休暇や、講習會で思ふ樣に行かない。勢ひ下旬になるは已むを得ぬ。其處で大體二十六日と定めて、正確なるところは、其前日に決定する事とした。引率教員は成る可く、多勢を望むも、他の學年の授業が有る故、そう多く行く事も出來ぬ。殊に本年は軍籍にあつて、演習に召集されたものや、喪中で遠慮する者などあつて、遂に赤羽校長及び征矢、清水の兩教員が、行く事に決定した。然し引率者としては、赤羽校長は數回登山の經驗があり、征矢、清水、兩氏は軍人で、充分鍛へ上げた體である。其に引率者ではないが九名の同窓會員が、同行する事とて、左迄淋しいとも、困難とも感じなかつた。愈々出發の前日二十五日となつた。そこで、午後高等二年の登山者一同を一室に集め、豫て研究作成せる、左の旅行案によつて、注意事項を講話した。赤羽校長は、登山一般の注意につき、征矢教員は山岳に關する話をした。斯くて一同勇躍、家に歸り準備を整へ、夜の明けるを待ち遠く思つて床についた。校長は家に歸つて

居ると、近所の友人が來る、二人して縁側に出て空を眺めたが、日の入り合ひの具合が宜しい。『ヤア明日の天氣は大丈夫だぞ』といふて友人に別れ、準備を整へて眠りに入つた。然し校長も、今日新聞にあつた天氣豫報の「東海東山は北東の風曇」とあつたのが、大分氣にかゝつたらしい。

高等科第二學年男駒ヶ嶽登山修學旅行案

▲期日　大正二年八月二十六日出發、同八月廿七日歸校、但し雨天順延。

▲目的地　駒ヶ嶽、但し伊那町内ノ萱より登山し、歸路を權現蔓根に取り、西春近村小出口に下山すること。

▲登山の目的

一、訓育的方面

1、至誠奮闘的意志の鍛錬を爲すこと。

2、自治協同的行爲の實踐指導をなすこと。

二、智的方面

1、駒嶽を地理的に觀察せしむる事。

2、駒嶽頂上より木曾伊那兩谷及び眼界の及ぶ限りを眺望觀察せしむることにより鄉土的觀念養成に資すること。

3、土地の高低と植物との關係並に高山植物を實地に採集せしめて理科的觀念を明瞭ならしむること。

三、情的方面

1、無邊偉大、崇高無上なる天地の莊嚴美に接せしめて敬虔心の養成に資す。

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡敎育會

◎信州駒ケ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

2、教師朋友と苦樂を共にする點よりして社會的犧牲的精神同情的仁愛的精神の養成に資す。

四、身體的方面

1、強行遠足により身體を鍛錬陶冶すること。

2、高山跋渉渓谷探險の方法に熟せしむること。

▲準　備

一、兒童一般各人の準備

1、服　裝

イ、股引、脚胖、草鞋の輕裝を爲すこと着物は袷のこと

ロ、雨具として「ゴザ」(合羽)麥藁帽子(笠)を用意する事。

ハ、防寒用として眞綿五枚、冬シャツ一枚を用意すること

ニ、草鞋はハキ居るもの丶外に二足を携帶すること。

ホ、金剛杖(普通の杖にて可)を用意する事。

2、食　料

イ、食料は六食分を用意すること、但し登山する時は一食と云ふも、普通の一食よりも多きものなれば注意すべし。

ロ、食料としては、餅は最も可なり、握飯ならば其の內に梅干を入れて防腐すること、味噌漬を入れたる、握飯、燒餅等は腐敗早きものなり。

ハ、其の他の食物として用意すべきものは、

1、スルメ、鰹節、蒸田作等の內を少しく持つ事。

2、糖分として氷砂糖、砂糖、金平糖の內を少しく持つ事。

3、鹽氣として味噌、味噌漬の內を少しく持つ事。
4、水筒は各人必ず一個を持つこと、ひさごにても瓶にてもよし。
3、其他の携帶品
イ、手拭、鼻紙、紐一筋を用意すること。
ロ、手帳、鉛筆、小刀を用意すること。
ハ、藥品として、寶丹、仁丹等の持藥を用意すること。
ニ、學校にて分ちたる地圖を持つこと。

一、學校にて準備
1、鈴を二個用意すること。
2、提灯二張、ローソク十挺、マッチ十個を用意すること。
3、仁丹、寶丹、龍膽末、繃帶ヨードホルムを用意すること。
4、鎌を一挺用意すること。手斧一挺用意のこと。
5、細引（長さ二十間）を一筋用意のこと。
6、案內者を一人雇ひ入るゝこと。

一、注　意
1、征矢先生は先頭に立ち、清水先生は殿後し、校長先生は中間に立ち、兒童は一列となり同行の青年は兒童の所々に加はり、進むの隊形を取るにより之を覺へ居る事。
2、兒童は身長短きものを前方とし順次身長長き者を後とすることを心得居ること。
3、便する時も、植物を採る時も、如何なるときも、敎師に告ぐることなしに列外に出づるを許さゞる事。

◎信州駒ケ嶽遭難始末　上伊那郡敎育會

◎信州駒ヶ獄遭難始末　上伊那郡敎育會

4、至誠奮闘、みだりに人に依頼せざると同時に、自治協同よく人を助けやるの考を以て此の行を成功せしむべきこと。

5、自己の携帯品は、如何なる場所に置くにも、必ず自分にて所持し、之を人に渡さざること。

6、休みたる際は、立ちたる跡を必ず顧みる事。

7、如何なる場合にも、鈴の聞ゆる範圍に居らざるべからず鈴の聞えざる樣のことあらば既に危險なるなり。要は列を離れざるにあり。

8、高山は霧の俄に出づる事あるにより、其の時には、細引を出して、各人之にて繋り合つて、行進するにより、其の心得ある事。

▲實地指導案

1、日　程

一、出發、午前五時學校出發、內ノ萱に向ふ。學校より內ノ萱までの行程約三里、中途一二個所に休憩して、午前九時內ノ萱に到着、茲にて一休。第一回の食事をなす、水筒に水をつめしむ。

二、午前九時半內ノ萱を出發し槳棋頭に向ふ。內ノ萱より槳棋頭に至るの行程約三里半、中途十數回休憩して、午後三時槳棋頭に到着の豫定、中途清水ある所にて水を充分充めしめ、少しく登りて黑木の內に於て、第二回の食事をなさしむ。

三、午後三時槳棋頭を發して伊那小屋に向ふ。此間の行程約二里、午後五時伊那小屋に到着の豫定中途、天水岩、農ヶ池、駒飼ノ池等にて休憩。

四、午後五時よりして、伊那小屋に宿營の準備を爲す、同夜は茲に宿す、第三回の食事を終ふ。

五、翌日午前九時迄の間に於て眺望觀察、植物採集、山上講話をなし、午前九時出發、槳棋頭に向ふ、第四回の食事を終ふ。天水岩にて水をつめしめ。伊那小屋より槳棋頭に至る行程約二里、

此の度は馬の脊を經て、午前十時槳棋頭に到着の豫定。

六、午前十時槳棋頭を出發して西春近村小出に向ふ。此の行程約三里、午後二時小出着の豫定。此の間數回休憩、中途に於て第五回の食事をなす、權現の神社の處にては眺望休憩すること。

七、午後二時小出出發歸校す、此の間の行程約三里、午後六時歸校解散の豫定。

2、講話要項

一、地理的觀察眺望を實地に就き、地圖と對照して講話すること。

二、植物の垂直的分布に就きての講話を爲す。



三、高山植物につきては實地につきて敎授す。

高山植物は、水分を得ること困難にて、常に强風に當り又烈しき日光に洒され、晝は體温著しく昇り、夜は急降するを以て、葉は大抵此の激變に堪ふるを要す、されば多肉にして、毛を被り、堅く强く、組織よく發達し、幹短くして葉は叢生せず、幹は往々平伏す、根は之に反して、比較的太く長くして、植物體を支持す、故に採集にも又困難なり。

四、神靈に接すべきこと。

諸子の現在の狀態（山上に於ける）之れ神靈に接したるものなり、天地の偉大壯嚴に感應して

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

己が精神より一切の邪念雲霧を一掃し、本心に歸へり良心の光明を現はし、至誠獨愼、居敬の狀態を持する、之れ靈に接したる狀態なり。

正直の頭に神宿る。

至誠神の如し。

心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん。

見る人もなき山かげの櫻花さりとて色香かわりやはする。

此の良心此至誠、君に對しては忠となりて現はれ親に對しては孝となりて現はれ、兄弟に對しては友として現はれ朋友に對しては信となりて現る。一切の道德は皆之れ此の良心、此の至誠の發現たるなり。古より修業者が常に高山に登りたるは此の本心を得んが爲めなり、諸子は今日此の本心、此の道心を實觀したり、下山せる後も、常に此の心を想ひ起しては益々至誠の純なる域に達せん事を望むなり。

二十六日登山當日

校長は午前三時頃起きて、直に天候を見た、西より南の空に渡つて白雲を認めたが、北より東に渡りては青空で、雨模樣とは思へない、後に至らば晴れるだらうと思ふた、然し兒童の樣子は、どうかと思つてねまきのまゝで、學校へ來て見た、其時既に二名の兒童は、甲斐〳〵しい扮裝で來て居つた、校長は「ヤアよく早く來たなあ」と云うて復空を見たが天候はよさゝうである、其中に續て兒童が元氣よく集つて來る、そこで校長は、家に歸つて仕度をして來やうと歸らうとしたら、其處へ來た兒童が「先生山へ登らんかね」と大きな聲でいう、校長は「登るから皆まつて居れ」というて行つた、本朝登山の便宜の爲めに、昨夜學校に泊つて居つた、清水敎員は其校長の聲に驚かされて、はね起きて

見たらもう校長は、門を出て行く處であつた、清水教員は取急いで仕度をして居ると四時頃には校長は仕度をして再び登校した昔附屬の訓導時代に着た縁付黒羅紗の洋服に、脚胖、草鞋を着け、莫蓙を着、麥藁帽の大きなのを被り、右肩より左腋にズックの革袋に何やら一杯つめたのをかけ、夫れとタスキ掛に、昨日篤志家より借り入れた双眼鏡をかけ、杖をついて中々勇ましい扮裝であつた、來るや否や小使室へついて、小使に鋸を出せと言つたが無かつた、夫れなら鉈でよしといふて持つて出た、これ山上にて、這松を切つて薪とする爲めに、用意したのである、だん〳〵時も過ぎ、出發の豫定の五時が來たが豫定の人員丈集まらない、暫くまつて五時半に至り勢揃が出來た、引率者三名、生徒廿五名、同窓會員九名である。此頃駒ヶ嶽方面の空模様を見たるに、薄雲は山の上部を覆つて居るけれども、空には細長き青空を認め、後刻晴れ渡るべきを豫想された、五時四十分校庭に整列人員の點檢、携帶準備品及各自の着裝に就きて、充分の檢査をして、左の隊形で出發した。

（先頭）征矢教員……生徒……校長……生徒……同窓會員……清水教員（後尾）

道を春日街道にとつて、午前七時南箕輪村大泉に着いた。此間約一里北端の公園に於て、第一回の休息をした、此間に着裝に故障あるものは直さしめ、特に草鞋の穿き方に就きて注意を與へた、此頃は空は南北に細長く開き、日の影を現はし、やがて快晴にもならんとする模様であつた、涼しい内に成るべく多く行かうと言うので、十五分間許休んで出發した。大芝原を横ぎつて、西箕輪村大萱の西部を經て、學校附近の林中に於て第二回の休息をした、此行程約一里今回は體を充分に休ませる樣に、裝具を全部取除かせ、食事をさせた、時に午前八時で、此頃は空も餘程晴れて、暑つかつた爲め、殊に林中日蔭涼しき處に休ませた、此休息三十分間許りにして出發、梨ノ木、中條を經て、午前九時伊那町平澤についた、小澤橋附近にて小休止を爲し、横山を通過して、内ノ萱發電所に到着した、時は午前十時四十分であつた此間暑さ隨分烈しかつた爲め、時に帽を脫がしめ、風を通はす事等に注意をさせた。

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

正午迄休息の豫定で、發電所西の芝原に於て大休息をした、體を充分に休ませ、食事も十分に取らせ、各自携帶の水筒に清水を補充させた、兒童の元氣は頗旺盛で、一名の、よはつた者も無かつた。

此休息中山の雲靜かに下り、雨が降り出したので、さてはと思ひ空をながめて、心配したが、僅か數滴にして、忽ち霽れた、天は吾等一行に幸して、呉れるものと、一同喜び勇んで豫定の通り正午仕度を整へ、各個に就きて檢査を爲し、特に身體の異狀の有無を檢べ、これより愈々山地急傾斜なればとて、山地行進上の注意を與へ、既定の隊形を以て、發足した。

登る事約十町、又微雨に襲はれたが忽ちにして霽れた、其中に喬木帶の手前なる清水の有る處に着た、依て休息して水の補充をした、山麓より此地點凡そ一里位である、再び發足して數町登つた處で、一行數名の下り來るに會ひ、赤羽校長は早速山上の天氣模樣を尋ねたら「昨夜は少し降つたが、今朝は全く霽れた」との事であつた、これ迄は一行意氣は頗る盛なれども、校長始め引率者の胸につかへて居る心配は、天氣の事であつた、然るに今茲に此返辭を聞いたので、大に安心した、是れより尚隊形を亂さざる樣、時々注意を與へて數回の休止を爲し、全員無事行者嶽の東の山巓に出た、此處で暫く休息し例の通り、着裝上に就き注意した、此時雲は各高峰を覆ひ、遠望は出來ぬけれども微風だになく、極めて靜かであつた。

これより豫定の通り、農ヶ池に向ひ午後四時に到着した、此附近は霧が非常に多く、岩陰には雪があつて頗る冷氣を感じた、豫定の通り休息し隊を解いて植物採集をした、何れも元氣少しも衰へず、我先きにと驅け廻つて採集した、斯くすること約二十分再び隊形を整へ、伊那小屋に向つた、これよりは道最も峻險で、歩行は隨分困難であつた、時々小休止をなしつゝ、駒飼の池附近に至るや天候一變し、俄然黒雲捲き來て冷たき谷風が襲つて來た。

此時に至つては、稍々疲勞を感ずる者も見へたが、急ぎて伊那小屋にたどり付かんと、勇氣を鼓し

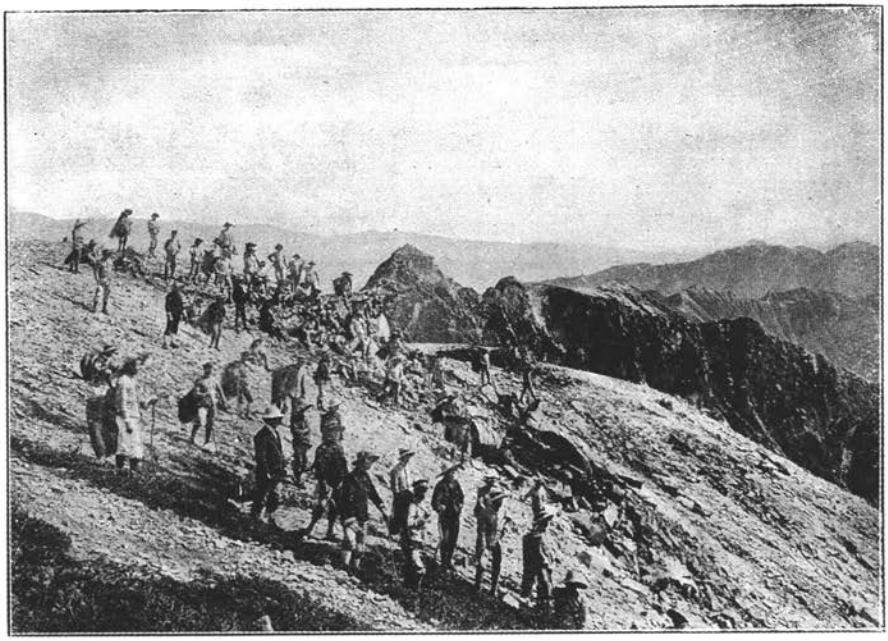
つゝ登つて午後六時小屋に到着した。豫定より壹時間後れた。これ出發に於て三十分後れ、途中に於て三十分の齟齬を生じたのである。

伊那小屋は、豫て腐朽し、且破壞された事は承知して居つたが、材木類は、豫想より僅かで、角材十數本のみ、誰か數人が之れを利用して宿つた形式がある丈である。然し今は躊躇すべき時でない、全員直に輕裝して、空腹を感じたる者には、急ぎ食事せしめ、二班に編制し、一班は校長清水教員指揮の下に、小屋の改造に着手し、一班は征矢訓導指揮の下に、薪の採集に着手した。兒童の元氣は頗る旺盛で、其働きは實に目醒しきものであつた。訓育上目的とする處の至誠奮闘的精神、自治と協同の精神は、別に左迄の注意もなく、自ら遺憾なく發揮された。約四五十分間にして、豫定の作業は完了し、小屋は三尺許の高さの石垣に材木を斜めに渡し、其上に這松をおき、更に各自の茣蓙合羽を覆ひ、屋根を葺き、石垣に接して屋根に空窓樣の口を設けた。其中は辛ふじて、三十七名の一行を入るに足りた、此作業の終る頃は天、既に暗く、風漸く烈しきを加へ、雨も少し降り出し寒氣頓に加はつて來た。依つて急速兒童を小屋内に入らしめ、携帶の防寒衣（多くは冬シャツ）を着せしめ食事をすまし休息させた　斯くて刻一刻風は愈々猛烈に、雨も亦烈しくなつて來た、急造小屋の事とて、雨は漏る、衣はぬれる、寒氣は益々加はつて、何れも疑懼の感にうたれて來た、此に於て校長始め引率者は、兒童を勵ますと共に、よく暖を取らせんと、焚火に苦心するけれども、中々燃へない、無理もない、濡れた古木と青い這松である。加ふるに其上へ、雨が落ちる、校長は身の疲れも忘れて苦心し、豫て用意せる蠟燭數丁に點火し、其上に材料をおいたが僅かに、むし燒きにする迄である、烟くて、目も口もあけぬ、又息も出來ぬ。遂に愛藏の手帳を出し、其紙をむしつて、附木の代用とし、其手帳を團扇に代へ、且吹き且あほり、如何にもして、寒威の襲來に抗せんとした。

此時客内には中央に、提灯が一つ吊され烟りの中を、僅かに照せるのみ一同默して聲なく、遂に晝

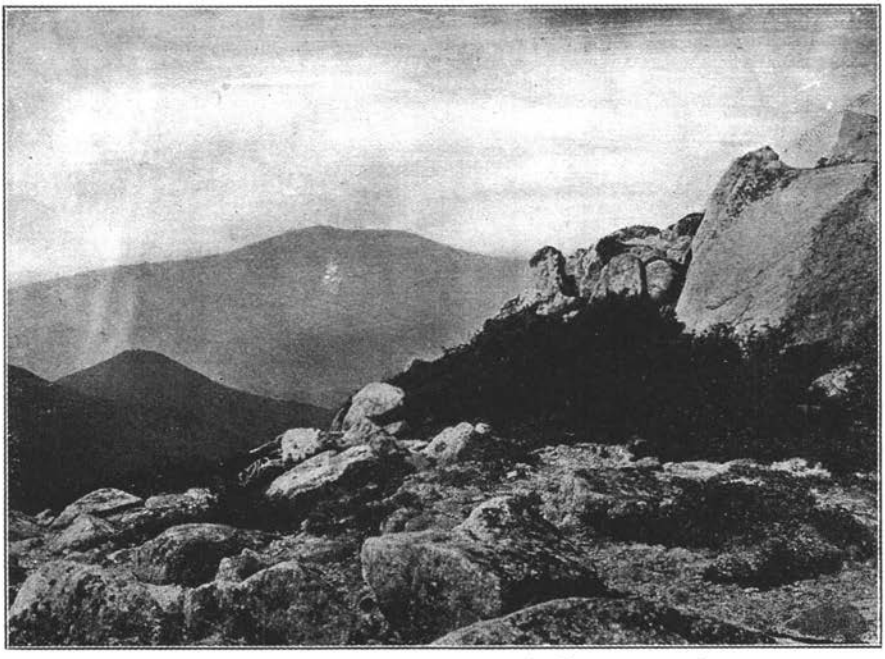
間の疲勞と、寒威の爲め、眠りに入らんとする者が出來た、校長は此に至り、令して、三人宛相擁して、暖をとると共に、互に制して眠らない樣、警戒せしめた。然して相變らず焚火に苦心して居る、其側に居つた、古屋なる兒童は、最も衰弱の色を現はし「先生ねむくて困る」といふ。校長は火を吹きつゝ「古屋眠るな、元氣出せ、明朝はよい天氣になるぞ」と古屋を勵ましつゝ居る中に、遂に夜が明けた。此時最早火をたく唯一の根本材料たる蠟燭も盡きた、マッチも盡きた、天明けなば風息まんとの希望の綱も切れ果て、夜は明けたれども風も止まぬ、雨も止まぬ、否益々暴風は猛りくるつて、僅かに造つた小屋の屋根は、固より一同の體迄も、一擊に奈落の底に運ばんず勢である、然かも、寒威は益々加はり、意氣愈々消沈する、全員只默然として居るのみである。此に於て校長は、熟々外圍狀況を眺め、此位置の頗る危險なるを認め、協議の上木曾の小屋を探索し、之に收容せんといふ事に決し、校長及清水敎員の二人其任に當る事となり、直に結束して出かけた、出るには出たが、風は强く、礫は雨と共に打ち付け、目も口もあかれず加ふるに風强くして、立行する事が出來ないので、四ッ這ひとなつて進んだ。處が四面、霧に鎖された上に四ッ這ひになつて居るので、如何とも方角を認める事が出來ない、辛うじて三四丁進んで見たが、到底木曾小屋に行き得る見込が付かない、二人は茲に斷念して、岩蔭傳ひに辛うじてもとの小屋に歸つた。時に午前七時であつた、小屋の中に居つたものは、誰れも默したまゝ、木曾の小屋では火もたけるだらう、風に吹き飛ばされる患もなからうなど、想像して、其歸るをまつて居つた。今此報告に接したので、室內は大に不安の空氣に滿たされた。

此に於て再び策を講じて、校長及征矢敎員の二人が、內ノ萱迄下山し屋根を覆ふべき材料、食料、着替への衣類等を整へ、人夫を雇ふて此小屋に運搬し、嵐の止む迄此處に留らう云う事に決し、後事を清水敎員に依賴し「マア君出來得る限り、注意して、僕等が人夫を連れて來る迄維持して呉れ玉へ」と言ひ殘して發足した此時二人と共に、下りたいといふ兒童の切なる希望が有つたが、其危險を諭し



河野齢藏氏撮影

駒ヶ岳本岳より寶劍岳及空木岳を望む



河野齢藏氏撮影

駒ヶ岳將苔頭より御岳を望む

て止まらせた。そこで校長征矢教員の二人は、相も變らぬ烈しい嵐の中を、でかけて思はず再三あちらこちらの、岩に吹き付けられたが幸にも道の兩側に、這松や岩などが有るので、吹きまくられずに進む事が出來た。斯くて七八丁下つて駒飼の池迄下つた處が、山上に比べては、餘程靜かである、そこで校長は思ふ樣、此分ならば兒童にも、下れぬ事はあるまじ、余等が下山して所用の品を整へて登るには、少くも八九時間を要し、夕刻ならでは來られまい、今日一日あの位置にて、安全に生命が保てるか、どうかという事は、すこぶる疑問である。そして見れば、此際十分なる注意を與へて、しつかり連絡を取つて、下るが安全であらうと、征矢教員に相談し、茲に再び議を改め、小屋に歸つて來た此時は、午前七時半頃である。歸つて小屋の口に來た處が、何だか中が騷がしい、何事かと思つて急いではいつて見ると、清水教員は古屋時松を抱いて、寶丹を口に入れて居る處である。今より十分許り前に、俄然氣絶したという、古屋は目を見開き齒を喰ひしばつて居る、此刹那に於ける校長の心事や如何に「アヽ困つたナア」と言ひつゝ共に看護して、顏に水をかける、背中を打つ、大きな聲で、古屋〳〵と呼ぶけれども返事がない、そこで體を毛布で包み、よりあつて、手足を摩擦したが、更に反應がない、人工呼吸もやつて見たが駄目だ、脈は刻一刻と細く、且遠くなるのみである、一同只々不安の面持にて、默然として居る。かくて、古屋の看護に苦心する事約一時間、古屋は顏色蒼白に、目を開いたまゝ、遂に他界の人となつた。不安の念に打たれつゝ、寒氣におそはれ人心地もなくて居る。一同が目の當り此悲慘の古屋の最後を見たのである、一同は既に死の運命が、目の前に迫まれるが如く感じ、云ひしれぬ恐怖の念に打れた。此時校長は顏色土の如く、古屋を抱いたまゝ、一時無言であつた、然し、かくてあるべきにあらねば、いざ急ぎ下山の準備をせよと、用意させた、用意と云ふて多く改むる迄もなく、小荷物を腰に付け屋根のゴザを取て着けた、中に一人「僕のゴザがない」とのふ聲が聞えた、征矢訓導は「誰れのでもよい、早く付けよ」と言うて、順次小屋を出した。最後

に校長、征矢教員、有賀同窓會員の三人が殘つた、さあ古屋をどう云ふ風に負つて行かうかと、相談した處が、此の風では一人身さへ危險多きに、人を負ふては如何とも行くすべなかるべし、むごたらしけれども、一人此に殘して行かうと、其場にねかした。此時古屋は紺がすりの袷に、黑の三尺をしめ、ずつくのかばんをかけ、着たゴザを下に上向にねかした、いざ去らんとして、三人共に只涙あるのみであつた。校長はどうしても、古屋が死んだとはいへ、こゝ迄、連れて來たもの、獨りおいて去るに忍びなんだと見へ「僕は古屋を見て茲に居るから、君等は生徒を連れ早く避難して吳れ玉へ」といはれた、此時征矢教員は涙を振つて「そうだが先生、古屋はもう死んでしまつた、死んだ一人よりは、他の多勢の生命が大事だ、一所に下りて下さらねば困る」と言うた。校長は「そうさなあ」と考ふる處あつたように、古屋を見返りつゝ小屋を出た。此時風は愈々猛烈に、雨は宛然氷の様に、砂と共に顔をうち吹き、すさむ風は岩に激してゴウ〳〵と鳴り響く、全く此世の沙汰とは思へない有様である。愈々進み出した先頭は征矢教員その後が生徒及同窓會員、後尾が校長清水教員同窓會員中、屈強者二名であつた、連絡を絕たぬ様注意したが、思ふ様に全員に通じない、各眞向に風に向へば呼吸が出來ないから、兩手で帽子或はゴザを持つて、鼻を覆つて、呼吸を助けて、進行を始めた、此時が午前九時頃である。

斯くして駒飼の池附近よりは、路が最も峻險で、一人ならびでなくては、進む事が出來ない、勢ひ隊形が漸次長くなる、征矢教員は後方の樣子はどうかと思ふて、うつ向したる儘、後方を呼びつゝ進んで、農ヶ池を越へて、小出道との分岐點の處で踏み止まつて、來るものを纏めた、十八人は來たが、後は途切れて來ない、蓋し後は後で一團になつたであらう、嵐は相變らず強い、ぐず〳〵しては居られぬ、兎も角も此一團は一刻も早く、喬木帶へ入れやうと思ふて、先頭者に行者嶽への、分岐點の處を注意して進行させた、是れよりは山巓傳いの道故、木曾方面から吹き上げる嵐は、頗る猛烈で、一

行の生命も今か今かと思ふことも度々あつた。幾度か吹き飛ばされんとしつゝ隊伍も亂れ、三三伍々岩傳ひに進んだ。斯くて漸く此一圍は喬木帶の安全界には入つた。これよりは危險の所もなしと思つた故、征矢教員は一同に、山麓の社附近で待ち合ふ樣にと、注意してやつて、後獨り茲に踏み止まつた。一息して後圍の樣子を見樣と思つて居る處へ、淺井なる一青年が傳令として、かけ下つてきて校長よりの命令を傳へた「今農ガ池の處で、復々一人斃れた、猶外に衰弱者があつて、背負て下りつゝあるから、征矢先生は、急ぎて內ノ萱に下り、人夫六七名を雇つてよこして呉れる樣に」との事であつた。之を聞いた征矢教員は、そは容易ならぬ事、これ先鋒の任務なりと、韋太天の如く、內ノ萱に向つて馳せ下つた。先づ路傍の家に飛びこみ、山上の樣子を語り、應援を求めた、此時征矢教員は、過度の疲勞の爲め十分に語るを得ず、漸く意を通ずることを得た。是を聞いた老人は直に諾して附近を語らひ、僅か三十分許りの間に一圍の應援隊を組織して發足さした、時は午後四時頃であつた。先鋒隊は斯くて一同無事に、內ノ萱に着した。

後尾の方は先鋒圍と、連絡を絶ちたるのみならず、殆んど各人の連絡を失ひ、別れ〳〵になつた、蓋し落伍した衰弱者である。

最後尾に居りし淸水教員は、小屋を出立して、約十丁許りの處迄來た時荻原三平なる兒童が「先生目暈がして」と叫んで倒れてしまつた、急ぎ抱き起して手を引きつゝ、歩んだが歩行が頗る困難の樣子故、背負ひて辛じて農ガ池迄來た。一行は皆通過した後で、唐澤武男と云ふ兒童が斃れて居つて、駈け寄つて見たが脈が全く絶へて居る、體も全く冷て居る如何とも仕樣がない、多分校長であらう側によつて、色々と介抱した形跡がある。涙を以て別れて農ガ池を越へて、少し來た所が、こはそも如何に三名の兒童（有賀直治、北川秀吉、堀峰）が殆んど相並んで、上向きになつて倒れて居る、其の三人目の兒童の側に校長がよつて介抱して居る。此時も暴風が雨と砂とを矢の如くに、射り付ける淸

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

水教員は精力全く盡き、一歩も進む事が出來なくなつた。附近を見たら僅かに、一二人を入れられる、岩蔭があつたそこで荻原三平を連れて、其岩蔭に身を潜めた、そして荻原を、マントに包んだ、其時校長に「先生も此岩蔭にはいりませんか」といつたが、「僕はそうしては居られん、此の先に行く兒童を助けねばならぬ、君其兒を頼む」と言ひ殘して駈け出したァ、八千餘尺の山上に、然かも四面雲霧にとざされ、嵐はくるひ廻り、今にも山も崩れはつるかと、思ふばかりに響き渡る其中に、只二人、余は我命のある限りは、此兒を救はざるべからず。死ぬも生くるも、もろともにとは、此時清水教員の獨り言とせし處であつた。

綿に如く疲れはてたる、此身心せでは眠るべし。

眠らば萬事休す、夢ながら黄泉の人たるは明かだと思つて、荻原に「元氣よくせよ」「眠るな」と搖りつゝ、勵ましつゝ折々大聲を擧げて援けを求めて、時の移るを待つて居た。九時頃風も雨も漸く靜まつた、十時半頃には、全く晴れた然し體も心も最早や疲れ果てゝ、どうする力もない、何んとなるとも、茲に一夜を明すの外なしと、覺悟をきめた。

斯くて其儘何時知らず、眠りに入つた、翌朝目が覺めた、時に日は東天に輝いていた。さて下らんとすれど氣は唯遠々しく、足はたゆ〳〵して意の如くならない、荻原の手を引きつゝ、靜かに下りつつあつた處へ、援護隊がかけつけた。

校長は清水教員に別れて平井を負ひ、早く喬本帶に入つて、此兒を救ひたしと、將棋頭の分岐點より、少し下るや有賀基廣(同窓會員二十四歳)が弟邦美(十五歳)を細引もて負ひたる儘仰向に打ち倒れて居た、山巓に於て一人の古屋の死を見てさへ、既に己が安危も忘れ、其破れ小屋に共に留まらんと考へた情あるこの校長、身を潜まするにより、位置を後にして、僕はさうしては居られぬ、先の兒童を助けねばならぬと、烈風暴雨の中に突進した、責任の感に滿たされた、此の校長が五人の死に接し、

今、又兄弟共に斃れた現狀に接したのである。はねよつて脈も見たらう、呼んでも見たらう、然し身には子供を負ふて居る、少しも早く風雨を避けねばならぬ、事茲に至つては、涙もつきたであらう、聲もかれたであらう、然かも勇を鼓して、更に飛出して、數丁下つて、大きな岩を越さんとする時、遂に人事不省になつて倒れたであらう。喬木帶を去る四五丁の處に、仰向に右手を上に擧げ、左手を股につけ、足を投げ出し、眼も口も開いたまゝ、苦しかりし樣子もなく斃れて居つた、負はれた兒童（平井）は、校長が斃れたので寄る邊を失つた、然かも力がない、苦しみながら、更に三四丁下つて、終に倒れた樣である。

先是征矢數員の報告に依つて、內ノ萱捜索隊十數名は登山した、其最先鋒唐本喜高氏は、夕刻六時半頃平井の位置に付き、障つて見たが、既に冷へて全く見込みがない、更に駈け上つて赤羽校長の屍に付き、胸に手をあてゝ見た處が、幾分脈の氣味がある、これは見込があると、手を持つて引き起し「これから助けるから、しつかりなさい」と大聲で呼んで居ると、救援者の一人（唐澤龜吉）が飛びつけ、後より校長を抱いた。其時力なき微かの聲で「おれ一人だあ」の一語を發した、此の位置は、尙風も雨も劇しくて、援護者も共に倒れんず有樣故、校長を帶で背負ひ三丁許下つて、安全の位置に下ろし、二人て背をさすつたり、肩を揉んだりして、看護した。此時「アゝうれしい」の隻語を殘して、眠るが如く遂に逝かれた。

アゝ校長の「おれ獨りだあ」「うれしい」の隻語これ氏が、幽明境を越へんとするに當つて、放つた最後の叫びである「おれ獨りだあ」其言簡單なれども意は自ら明かである。

最早死者數人を、目の當り見た、死する者「おれ一人」と言ふ謂れがない、助かるもの「おれ一人」と思ふ筈は尙更ない、即ち、此失態の責仕は「おれ一人だ」の意である事は明かである。赤羽校長が將に息の絕へなんとする際に當つて、尙自己の責任を、叫んで居る、君は殆んど二晝夜に渡つて、一

睡もせず、最善を盡して奮闘した、君が體力を知る者は、如何にして此大活動が出來たかと、怪まずには居られない、然かもなほ足らざるを感じ、責任の叫びを放つて逝かれた。君が昨夜來一晝夜間の活動は全く兒童に對する、赤情と、職に對する責任の感より出たもので、他に一點の私もない、其崇高なる誠に神の境界である。

尙最後に「うれしい」の一語は救助者に對する、感謝の表示に外ならぬ、一時も早く、救護隊を送れとは、征矢教員に下した命令である。今其の救護者に逢つたのだ、感謝の辭ある君として必然の事である。

結　論

以上遭難當時の大要を叙した、吾人は今回の事が將來の登山者旅行者の參考に資すべきもの、極めて多きを信ずる、又赤羽校長の至誠奮闘、人事を盡し斃るに當つて、尙責任の叫びを發せる、其崇高なる心事は、吾人が深く、敬慕して止まぬ處である、蓋し君が靈は、未來永劫其責を負ふて、駒ヶ嶽の山上に、横はるであらう。

昔文化年間寂本行者が、駒ヶ嶽の秀靈に感じ、山を開きて茲に一百年、然かも、登山者未だ甚だ多からず、今回の事により、急に世人の注意を喚起し、登山道路の開鑿、小屋の建設等著々進行を始めた、蓋し山靈邦家將來の爲め、涙を振つて、犧牲を出したかの、感なき能はずである。

是を思ひ、彼を考へ、茲に吊慰の一法として、駒ヶ嶽山上に建碑の擧を企てた、次第である。

（附）

赤羽君は明治四年西春近村に生る、同廿六年三月師範學校を卒業し、古牧東鹽田赤穗附屬赤穗宮

田の諸校に勤務し、四十三年中箕輪小學校長となり、今日に至る、家に老母と子女六人あり（長は女にして高等二學年末は二才にして母の膝に在り）

碑は山上天水岩附近の直立せる自然石（高一丈一尺、巾一丈六尺）とせり、此石の前後に死者各五人あり

碑の字句左の如し

大正二年八月二十六日中箕輪小
學校長赤羽長重君爲修學旅行引
率兒童登山翌二十七日遭暴風難
遂死矣

遭難記念碑

共殪者

……　……
……　……
……　……
……　……

殪死者表

字名	氏名	生年月	備考
西春近村	赤羽長重	四、（羊）	森林ノ上三四丁

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

◎信州駒ヶ嶽遭難始末　上伊那郡教育會

木下	平井　實	三三、二	森林帶ニ入ラントスル處
木下澤	小平芳造	三一、五	天水岩ヨリ二丁西方ノ崖ノ半
松島	有賀邦美	三二、七	兄基廣ニ負ハレテ天水岩北方
上古田	古屋時松	三二、六	伊那小屋
八乙女	唐澤武雄	三二、八	農ガ池ノ邊
大出	有賀直治	三二、五	農ガ池北東四丁
南箕輪久保	北川秀吉	三三、三	同六七丁
上古田	堀　峰	三二、六	同五六丁
澤	唐澤圭吾	三三、一	行衛不明
	有賀基廣	二三、四	有賀邦美ト同處、同窓會員

以上遭難當時の一般を記述せり、然れども事唐突にして、字句修正の暇なく、爲めに未だ盡さざる處多し、宜敷御推想を乞ふ。

（編者曰）本文は、上伊那郡教育會より、遭難の始末を世に公にせんが爲め、各學校官衙、及有志者に頒布せるものにして新聞の傳ふる所と多少の異點あるを知るべし、本會は此一文を特に轉載し、永遠に駒ヶ岳山上に眠る赤羽校長以下若き殉難者の靈を弔ふ。

山陰の名山奇峽

古家實三

大山、斷魚溪、三瓶山

明治四十四年九月上旬より五十五日を費して山陰道九州北部を旅行したる紀行の一節なり。

大山裏山越

九月七日伯耆倉吉の町を發して、大山に向ふ、是より大山へは裏路にして、盛夏登山の頃と雖も、行人至つて稀なりといふ、然れども路深林荒潭に沿ひ、山水の奇ありと聞きたればこの道を取るに至りしなり。

倉吉町を出づれば、大山の東面なる二子山は、雲を戴きて峭立し、大山は其背後にありて、澎湃たる山雲に雄姿を沒す。鉛筆を走らせて、覺束なき寫生を試み、行く行く左方に三千尺內外の峰巒相連れるを望み見て、路人に山の名を問へば蛭山なりと答ふ。峰は分れて三山孤立し、上蛭山中蛭山下蛭山と稱すとか。上蛭山は樹木鬱蒼として全山を覆ひ、山容頗る幽美なり。中蛭山下蛭山は共に半腹以下裸體にして上半身に翠衣をまとふ。

午前十時大山峰頭、猶山雲凝滯して動かず、正午に至りて漸く雲散じ、嵯峨たる危峰を霄漠に突破せり、山頂恰も鋸齒の觀を呈し、山骨稜々として、怪奇の狀を恣にす。嘗て想像に描き居たりし大山とは甚しく風貌を異にせり。

◎山陰の名山奇峽　古家

◎山陰の名山奇峡　古家

田圃村落の間を縫ひ、前面に大山を仰ぎつゝ行くこと數里、小丘に圍まれたる一村に入り、道を尋ぬるに、この谷を溯れば小峠あり、峠を踰へて三本杉といふ所に下り、そこにて委しく問はるべしと、叮嚀に敎へられたり、倉吉より此村落まで凡四里、この間は道路概ね平坦なり。

村落の背後より、雜樹の間を辿りて、小丘を登り、稍廣き草原に出づ、此處眺望頗る快濶なり。右には滄茫たる日本海の遙かあなたに、薄霞める隱岐の島山を望み、左には近く蛭山連峰の秀潤温雅なる姿を眺め、後方を顧れば伯耆平原に亂臥せる小丘の間に、點綴せる村落を下瞰し、前面には二子山を擬して雲際に峠立する大山の峰頭を仰望し、雄大壯觀、殆んど手の舞ひ足の踏む所を知らざらしめむとす。

草原を過ぎて細路を下り行けば、大山の支峰より流れ來れる一溪眼下に横はれり、連日の旱天に、水やせ石乾きて、一面の大河原となり、沙石白きこと雪の如し。

溪の兩岸は斷崖をなし、明瞭なる地層を現はし、火山噴出物の堆積に依りて成れること一見して知らる、溪流に沿ひて村落あり、即ち三本杉の里なり、溪を渡り西南より來れる一支流に沿ひて、奥深き谷に入る。是より路愈々細く滿目の景物悉く仙なり。

溪水は脚下遙かに亂石を蹴つて流れ清冽なること玉の如く、山は古木をまとひて、秀潤なること畫の如く、路の傍らには秋の七草咲き亂れて、天然の花壇を造り、蟲聲晝も喧しく到る所玉の如き清泉は、火山岩の間より迸出して、渇せる口には甘露に勝り、照る日の光も暑からずして、風徐ろに來る。是に至つて余の全身悉く詩なり。足益々疲るれども意氣益々盛んなり。

谷を上り行くこと凡そ一里餘、二子山の南に方りて、谷いたく狹りたる所、大木の下に板屋造りの荒屋數軒あり、木挽の假住居なるべし、立ち寄りて路を問ふに、頗る難じて云ふ。是より大山に登るには、この谷の密林の間を登りつめて又下り、川床に至つて登り得れども、川床まで二里餘の山路は頗る險惡にして、里人すら白晝猶忘れて、通ふ者稀なり、況して日は已に傾き、暮るゝも遠からず、

路を知り給はぬ遠來の客、唯一人にても如何あらん、思ひ止つて三本杉に引返し、赤崎に廻りて登り給ふては如何にと答ふ。

得意は消えて、失望到り悄然として默すること稍久し。

然れども、路を返す事は、誰しもあまり好む所にあらず。如何にもして、前途に活路を見出さむとするは、人情の常なり、乃ち更に念を押して問ふて曰く、迷ひ路さへなくば、險惡なりとも恐るゝ所にあらず、たとひ山中に日を暮らすとも、野宿の如きは何でもなし、道路は複雜なりや如何と樵夫答へて曰ふ、路は雜草恣に繁茂して障害をなし、歩行頗る困難なれども、一筋道なれば踏み迷ふ憂はなかるべし、其位の元氣ならば大丈夫ならんと、この一言に元氣再び回復し、草鞋の紐を引き締めて、猶路を委しく問ひ、假屋をあとに進み行く。

溪水に遠ざかりて、右方の山腹を草ふみわけ、小溪に架せる丸木の橋を渡りて登り行けば、路は鬱蒼たる密林に入る、聞きしに勝りて草深く、稍もすれば路を失はむとす。太初この方、未だ嘗て斧を入れざる、大森林、鬱々蒼々として晝も猶ほの闇く、立ち並ぶ老幹は、碧苔をまとふて蒼古の趣淺からず。枝より枝に囀ずる怪禽の聲は、谷に響きて靈妙の樂を奏し、風物悉く人間のものにあらず。余は天然を愛す。天然の美觀は、絶對的にして、滔々たる美學者などの批評を許さず、げに天然界の森羅萬象一として美ならざるはなけれども、樹木の美は余の最も愛する所なり。殊に太古のまゝに生育し、毫も人間の手に傷められゝことなく、天壽を全うして、千年の後自ら枯死し、新陳代謝生滅榮枯悉く天然のまゝなる大森林程、珍重すべきものはあらざるなり。風吹かば葉々枝々相摩して、美妙の音樂を奏し、雨降らば、點滴葉より、枝より、幹よりこぼれ墜ちて、綠のとけて落つるが如く、月漏るれば幽美の極をつくし、日光梢の間よりもるれば、斑點陰翳の趣捨て難く、星の夜には、重々天を遮る枝葉の間より、神秘の靈光燦々として落來り、時として興深からぬはなし。將た暮れなむとする

◎山陰の名山奇峡　古家

黄昏の樹林亦興なからんや。然れども路は聞きしよりも遠かりき。足も次第に疲れたりき、谷を上りつめたる處、老幹の間より大山の峰頭を仰ぎ得たれども便るべき川床の里は、更に見當つかず、路は又もや樹蔭を縫ふて下る。行けども〳〵窮らず、已に黄昏れ行く深林は、次第に闇くなりまさりて、路明らかならず、幸に登り路よりは巾廣くして注意すれば踏み迷ふの心配もなかりき。

野宿も却て望む所なれども、樹陰は夜間炭酸瓦斯に滿ちて健康を害するのみならず、猪狼等の害なきを保し難し、かるが故に野宿を試むと欲せば須く場所の選定最も肝要なり。

即ち、今宵野宿の理想としては、第一月色の大觀を恣にし得る所（今宵は舊曆八月十四日、即中秋明月の前夜なり）

第二に大山の高峰を眼前に仰望し得べき所、次に渺茫たる日本海の夜色を俯瞰し得べき所ならざるべからず、

川床の人家に達し得ずとも、この理想的宿所を求め得ば、我望み足れりとせむ。

勇を鼓して闇黑の樹下を辿り、辿りて下り行く。深林つきず、人家見えず、風梢を動さず、鳥も啼かず、闇は次第に迫りて、月未だ出でず、只梢の間より、星の光を眺むるのみ、

星の位置によりて考ふるに、北方に向ひつゝあるが如し、路を踏み迷ひしにはあらざるかと、心そぞろに穩ならず。

漸くにして森全く盡き、草原に出でたり。北及東へは草原限りもなく續きて、裾野らしき地勢をなし、西は傾斜頗る急峻にして、大山の支脈より來れる溪水轟々として鳴り、谷底遙かに燈火二三點を認め得たり、西南を仰げば大山此に在焉といはぬばかりに、嚴然として聳立す。見る〳〵雲は谷底より起りて、むら〳〵と昇上し、冷氣にあひて、復た下降す。大山の絶頂は、夜雲一團屯して動かず。

程なく一輪の明月、樹林の間より忽ち出で、清光碧山に滿ち、四邊の翠樹は青白く輝きぬ。

海岸一帶の平原は、夜色朦朧として、海陸のけじめ分明ならず、東南に鐵拳の如く屹立するは、二子山にして、今踰え來りし深林は、即ち大山と二子山との間なる、凹所なりしなり。

余は幸にして好個の露宿地を得たり。後に峰あり、樹林あり、側らには水聲賑しき溪流あり、前面には遠くつゞく大草原あり、草柔らかく、蟲聲面白く、月輝き風來る、實に理想的の露宿地なり。

乃ち徐ろに露宿の準備を整ふ。余の露宿は到つて簡單なり、軟かき秋草の上に、風呂敷をまとひて寢轉び、雨合羽の大なるを覆ひ、書籍二三冊を重ねて枕し、靜かに仰臥するまでの事なれば、二分間を費さずして整ふ、シャツ二枚を着し、ズボン二足を穿ち單衣一枚を着たるまゝなれども、毫も寒氣を覺えず。

大空は白雲絶へ間なく動きて、月光ために明滅し、皎々たり又朦朧たり。織女星は天心に輝き、木星は西天に在り。

その水聲、遙かに響を傳へて、林を搖かす夜嵐に和し、松蟲鈴蟲枕頭に聲を競ひて鳴く、寢ながらに秋草の香を貪るなど、實に富者王侯の夢にも、想像し得ざる樂天の境界なり。

思へ、山陰山陽の大王、大山の半腹、人家遠く俗塵至らず、瑠璃一碧大空の下、群星の寶玉を滿堂に聯ねて、黃白碧紅さま〴〵の光を點綴し、皓々たる明月を燈火に代へ青山綠林の扉風を繞らし、芳草美花を褥として、妙なる自然の奏樂を聞きつゝ、天地を我物顏に眠る、

天上天下唯我一人、此眞樂を恣にして淨樂の夢を結びしが、夜半を過ぐる頃、俄かに雨聲に驚かされて、起き出でたれど、唯一時のしぐれならむと、深く意にも介せず、悠々として再び寢に就きしが、又もや夢を破られて、空を仰げば滿天暗黑一點の星影もなく、雨は嵐に伴ひて次第に猛烈ならんとす俄かの降雨に淨樂の夢を破られて、未熟の仙人、周章狼狽し、樹蔭に避けむとすれど、何時しか漏るる滴の繁きに困り果て、谷底の燈火を目あてに、細路を下り行き、漸くにして人家に辿り着かむとす

れば、猛々しき犬の吠びに再び膽を冷しぬ。もはや夜半を過ぐる頃なるに荒家の中には、賑かなる人聲あり、賭博に夜の更くるを知らざりしものと合點ゆきぬ。家の外より大山詣での旅人が野宿中雨に逢ひてかく〳〵の始末なる旨を述べて、軒下に夜の明くを待てり。

露宿地より、人家までは僅かに十町ばかりなりしかど、密林中の細道に、燈し火を携へざるを以て、困難一方ならざりき。

九月八日雨。

やがて夜は明けたれど降雨は益々甚し。

地は大山の半腹、川床の里、人家僅かに三戸、荒木細工を以て世を渡る。大山神社へは二十町、淀江、御來屋へは各三里の地なり、家の内に入りて、圍爐裏に身を温め家人に大山の登路など聞く朝飯の饗應を受けぬ。粗末なれども、家人の親切は、旅の身には殊に嬉しかりき。雨のやゝ霽るゝを待ちて、十時前發足し、裾野を斜に西し、大山寺に到る、寺の下なる宮本旅館の厄介になりぬ。此地は大山の裾野を登りつめたる所に在り、海抜凡二千尺の高地なり。大山寺、大神山神社其他僧坊、旅舍、商店などあり。有名なる牛馬市は此地にて行はるゝなり。

午後一たび雨はれて又降り頻り夕方に至りて全く止む。

山雲次第に散じて、大山の列岳は、大屏風の全幅を、樹木の間に現はし、豪壯雄偉の觀轉た心魂を奪ふ、宿を出でて石徑を辿り上ること數町、大山寺本堂の石段の下より、左折して、綠苔滑らかなる大道を辿りて、大神山神社に詣づ、本社の前には大石段あり、火山岩を以て作る、獨り石段のみにあらず、社寺の燈籠より、手水鉢敷石に至るまで、悉く火山岩を使用す、青銅大華表の傍らなる直徑一丈餘の天然石、大手水鉢も、亦火山岩なり。

青銅大華表（宮本旅館の傍に在り）より、本社まで約十五町、石徑大木の間を通じ、本社附近は殊

に老木森々として、幽致眞に愛すべし、社殿は頗る宏壯なり。森列せる老樹巨木を背景として鎭座せり、歸路大山寺本堂に詣で、更に堂の右側より路を下りて、里稱切り通しと、呼ぶ處に至る、

此處大山北面の大谿谷の口を扼して、左右に巨巖相對峙し、大石門を成す、兩巖の距離僅かに一丈餘、高さ各數十丈綠樹をさしはさみ、兩巖の間より翠峰の突立せるを仰ぎ、頗る奇觀なり。

石門の下方は、亂石堆積して、大河原となり、河原を隔てゝ北方を下瞰せば、美保灣の景、畵の如く展開し、美保の松原、中の海一帶の顯光實に絕佳なり。隱岐の島影、水天髣髴の間に橫はり、西北には遠く宍道湖の一部を見る、雨後の殘雲、片々として遠近の山岳に、纏綿たるも亦趣あり、山腹の眺望、已にかくの如し、六千尺の絕頂や、果して如何の大觀をなすや。

九月九日。雨、

昨朝獨逸人二人、絕頂に登らむとして、降雨のため空しく引き返せりといふ、今朝東京帝國大學の敎授某氏、亦天候不良のため、登山を見合はせたり、初め某氏の宿の主人道伴れを請ひ來りしかば、こちらよりも望む所なりと思ひ居たれども、某氏は天候のために見合はせしかば、余一人登る。

午前六時宿を發し、山腹即ち傾斜緩漫なる裾野と急峻なる突起の境目の處を、西に向ひて進む。

曇り勝なる空模樣、次第に險惡となり、俄然降雨を催し來りぬ。降雨は元より覺悟し居たれば、更に驚かず、たとへ盆を覆すが如く降り頻るとも、午後に到らば昨日の如く霽るゝならん、雨後の景こそ、却て奇觀なるべしなど、思ひつゝ悠々閑々として進む。樹林つきて草原となり、裾野の大原野は脚下に展開せられ、放飼せる馬、三々四々草間に戲れ、時々一聲高く嘶くを聞く。

行くこと凡そ二十町にして登り口に達す。是より俄かに急峻となり、且路は巾極めて狹く、短草の間を絕頂めがけて一直線に登る、降雨は益々甚だしく雲は四邊を鎖して、只白朦々たり。風は山麓より頻りに吹き上げて、余が五尺の小軀を、白雲と供に山頂に運ばむとす。絕頂に近づく頃、雨少しく

はれて、雨雲逢々たる間より、下界の一部を眺め得しが、雲次第に散りて、眼界次第に廣し。

登りつめて、偃松の間を進み行けば、路は崩壞せる絶壁に沿ひ、さながら、立てめぐらしたる屏風の上を傳ふに似、危險云ふべからず、這ふが如くにして、經過し、遂に最高點に達す。

眼を放つて四方を下瞰すれば、雲散じて眼界次第に大を加へ來り、壯快言語に絶えたり。

近くは大山の支峰、突兀として頭骨を現はし、裾野の大草原は脚下に連り、削れるが如き絶壁の下、老木大樹欝蒼として谷を埋むる所、大神山神社を眼下に見る。

稍遠くして東南に蛭山々脈の連綿たるあり。西南には美作伯耆の境上なる岩穴山、備中備後伯耆の境なる三國山、雲伯備の境上なる三國山、雲伯境の船通山、雲備の境なる猿政山等、中國山脈中の錚々たるもの、悉く雲霧漂盪の間に濃綠、紫色藍、靛色の峰頭を現はし、北には日本海岸の白浪躍れるあり。美保灣、中の海、宍道湖、島根半島は一幅の大活畫を展べ、日野川の流れは、白蛇の如く横はり、伯耆の全部、出雲の大半作州の一部及近國の山岳は悉く我兩眼の間に在り、眺望の濶大、中國一なりといふ、世人豈吾を欺かんや。雨中の登山困難は、即ち平日に倍すれども、青山白雲の大觀を得るは、實に雨霽後の瞬間に在り。

大山眞の最高點は、前面に近く突立する岩石の峻峰なるべし、然れども、峻峭危巉到底達すべからず、高さは今立てる地點よりは、數米突高かるべしと思はる。

頂上に蹈して辨當を喫す。

前面の奇峰を寫生せむとせしも、寒風と細雨とに妨げられて、果さず。

山を下り行けば、雨全く霽れて、眼界益々鮮明、雲にかくれし遠山も次第に姿を現はし、石見の三瓶山と覺しき山を認め得たり、正午宿に歸る。即ち上下六時間を費せり。

絶頂を仰げば、再び雨雲の鎖す所となる。余は實に天龍を得たりしなり。温湯にて全身を洗ひ、又

衣服シャツの類悉く洗濯す、午後雨降もつゝき夜に入りて猶やまず。

九月十日曇り

午前八時米子に向つて大山を發し、緩漫なる裾野を西北に下る。裾野には草原の間に、姿面白き黒松點綴して、頗る風趣を添え、牧牛點々其間に戯る、何となく興味ある景色なり。草原を下ること約五十町、赤松村（赤松池は、此附近に在り、舊火口なり）より、道は小流に沿ひて下る。十二時米子に着す。

午後米子を發して母里に向ふ。米子町の西端より顧みて大山を仰げば、一抹の白雲中腹に横はり、裾野と頂上附近とは、白雲の上と下とに麗はしき紫色の膚を現はし、雄麗壯觀を極め、顧望低回去る能はざらしめき。

三瓶山に登る

正午乙立を發し、神門川（一口神戸川）の上流に沿ひて、三瓶山に向ふ。是より三瓶山の麓まで約六里。乙立より約一里の間は、山勢峻峭にして樹木斷崖に繁り、畫趣に富みたる景象多し、窪田といへる所に到りて小學校に立寄り、三瓶登山の路を質す。畧要領を得たれども、或は困難といひ、或は危險なりといふ。

進みて山麓に近き山口の里に至る。道は三瓶山より發する溪流の右岸に沿ひ、途上の景物凡ならず。三瓶山愈々近づき來りて、うす紫の空に、濃き紫の全身を擡げて屹然たり。

山口の旅舍に投ず。

九月十六日。晴

宿の主人を招きて、三瓶登山の順路を問ふ。主人の答ふらく、是より街道を行くこと、約十町、石

◎山陰の名山奇峡　古家

見との國境に到りて、路左右に分る、三瓶山に登らむと欲せば、左道即ち志學温泉道を取り、行くこと廿五六町にして、根堀れ松に達し、右方に通ずる山路に入り、裾野を斜にこつて、一直線に進み、凡十五町にして、稍急峻なる登路となる。是より根ほれ松に約一里、根ほれ松より絶頂まで約一里なりと、簡單にして要を得たり、山口を發して登路に向ふ。

三瓶の聖壇は、雲にかくれて姿を沒すれども、雲は次第に散りて、天候次第に回復せむとす。根ほれ松附近に到れば、雲悉く散じて、大三瓶の翠色空高く聳え、裾野の麗はしき景色は、眼の前に展開せられたり。

根ほれ松と呼べるは、錦繍の如き裾野の中央に立てる一もとの老松にして、幹の周り一丈餘、地上に根を露出し、枝葉延がりて、千年の綠滴らむとし、頗る雅趣ありて、書家の品題とするに足る。松の傍らに、明光上人指書の名號を刻せる石あり。

根ほれ松より山徑に入り、栗林の間を過ぎて、登り行くこと十餘町、雜木林中に入れば、右の方に曲れる岐路あり。此岐路こそ眞の登路なるに、氣附かずして、直線に進みて登り行くこと十數町、大三瓶と小三瓶との間なる凹處に達し、眼下に舊火口を見下すを得たり、即ち舊火口は大三瓶の、即ち男三瓶及女三瓶、子三瓶、を以て之を圍み、摺り鉢形の窪地をなして、東南隅に一小池あり。

地圖によりて地形を相し、志學温泉場に下るべき方向を豫想して、荷を殘し置きて、身輕に出で立ち、馬脊の如き嶮峻の內壁上を、大三瓶の絶頂めがけて登り行く。或は雜木の繁茂せる間を拔け、或は崩壞せる內壁に沿ひて進み、辛じて絶頂に達す。頂上は數千坪の廣さを有し、一面の草原にして、秋草亂開し、さながら百花壇の美觀を呈し、虫聲耳に滿ち、キリギリスの聲最も多し。

大三瓶の東西北の三方は、樹木叢生して、翠色滴らんとすれども、南方舊火口に面せる內壁は、大崩壞をなして、茶褐色の地層を現し頗る奇觀なり。

初め絶頂に達するや、眼を放ちて四方を下瞰するに蓬々たる雲の間より、江の川の銀線に沿へる田野村落、山麓の裾野、小丘、樹林などを眺め得たりしも、須臾にして山雲襲ひ來り、全く眺望を遮り、且つ細雨を亂射して、久しく止るに堪へず、又元の險路を下り東面の山腹をめぐりて、亂開せる百花を踏みつゝ、裾野に下り志學に向ふ。

實に美はしきは裾野の秋の景色なるかな、夏は青毛氈を敷きつめたるが如き觀あれど、秋風起りて朝夕の露滋くなる頃に至れば、野菊、萩、桔梗、女郎花、撫子、その他さま〴〵の秋草は、蕭洒に雅趣ある花を亂開して、錦繡を織り、虫の聲、草叢に滿ちて、幽韻の調味はふべく〻仰げば纖々たる白雲の翻る空に、圓錐形の頭を擡げて、まこへる樹木の黄ばみそめたるけはひ、實にたとうるにものなき優美の景色ならずや、さても火山國に生を享けたるものは、幸多きかな。

三瓶原野の一部は、廣島聯隊の演習地となり、志學附近に兵舍の設けあり。

志學に到り三瓶山より發する溪流に沿ひて下る。溪水は火山噴出物の堆積せる地層を深く浸蝕して流れ、磊落なる火山岩の、石塊溪底に散亂して、急激なる流水之に激怒飛散し、淙々又轟々の響を起しつゝ流る。

志學より二里にして、粕淵といへる所に至り、江の川の岸に出づ、是より道は江川の流れに沿ひて西南に下る。

連日の降雨に、水濁りたれども、洋々として群山繚繞の間を流れ行く光景は、一種雄大の趣あり。江川は中國一の大河にして、備後の大半、安藝の一部、石見の大半の水を集めて、群嶺の間を曲折又曲折して、濱田の東北に至り、日本海に注ぐ、全長五十里舟行二十里に達す。大陸の大江に比すれば、元より云ふに足らずと雖も、水量の多き點に於て、兎に角我邦の屈指なり。

顧みて三瓶山を仰げば、大三瓶雲に沒し、子三瓶孫三瓶のみ全身を現はせり、志學より行くこと四

◎山陰の名山奇峽　古家

◎山陰の名山奇峽　古家

里乙原といへる所に泊る。

斷魚溪に遊ぶ

九月十七日未明、乙原を出發し、斷魚溪に向ふ。

江川の左岸に沿ふて徐行するに、江を挾める兩岸の翠巒には、晴靄淡く横はり、大空かすみて、半月峰頭に懸り、斜に江流を照らせり。オリオン星座を中心とせる一等星二等星の光輝は、さながら寶石をまきちらせるが如く、樹影の間に隱見し、幽情禁じ難し。

川本に至る頃、夜は明け離れたり、因原より江川に別れて、左方の支溪に入る、路は玉の如き清流に沿ひて進む。

川中の石白きこと雪の如し、この水や、余が想像に來往して、離れ難き斷魚溪を躍り出でゝ、流れ來るかと思へば、懷かしさに堪へざる心地す。

斷魚溪は、山陰の絶勝と聞けども、果して如何なる景色ぞや、詩客歌はず、歌人詠まず、畫師も描かず極めて僻地に隱るればなり、地理書名所案內等にも、未だ詳しき記述あるを見ざりしが、島根縣地圖はこれを說明して曰く、

斷魚溪は俗に「魚斷ち」といふ、中原中野の間にあり、凡そ一里の絶勝にして溪流或は淵となり、潭となり木曾の寢覺に似て、更に豪壯、處々に散在して二十四景あり、

と豪溪に似たるか、寒霞溪の如きか、はた又神奇峽の如き處なるか、その優劣は果して如何にや、或は意外の絶景にして、手の舞ひ足の踏む所を知らざらしむやも知れず、或は反對に實況に臨んで、こんなものかと失望せしむるにはあらざるか、などゝ想像は足より先に馳せて、進み行く程に、兩山迫りて次第に峻峭なる峰頭現はれ、水流亦次第に急激となりて、音益々高し。忽然として、巉巖峭壁の前

路を壓して、屹立するを見る。已に勝區の門に近づきし也。峭壁の下より右折して進めば右方に溪底より直立せる巉巖あり、高さ百尺、岩面一帶岩松（一名イワヒバ）叢生す。更に左折し山骨稜々たる峻峰を右に仰いで進めば壘々たる岩石を載せたる小峰あり、枝ぶり面白き松、岩腹の裂罅より生じ風趣頗る愛すべきものあり、

小峰の下に到れば、路は溪流より、甚だ高く、右の方溪流の上流には、白絲を幾條ともなく亂しかけたるが如き急湍あり、急湍の左岸、岩壁直立數百尺、道岩壁を穿ちて通ず、曲折して、かの岩壁の下に到る、俯して眺むれば、脚下遙かに白布の懸水を臨み、仰げば對岸には小岩丘を隔てゝ、直立約三千尺の峻嶽全溪を下瞰して峭立し、豪壯偉觀を極む。

溪流は峰勢に隨ひて曲折し、道路は溪流に沿ふて、岩腹をめぐる。幾度か路を折れて、遂に斷魚溪の代表的奇勝の地に至る白色雪を欺く岩石の間を、溪水奔馬の如くに突進し來つて、空洞を穿ち、萬雷の轟くが如き響きをなして、怒號し、白浪奮躍し、飛沫四散し、水勢の激烈殆んど言語に絶し、久しく見るに堪へず、魚の下流より溯るものこゝに至りて、遂に水勢に抗し得ずといふ、故に稱して魚斷ちといひ、後雅名を附して斷魚溪と稱するに至れるなりといふ。

魚斷ちより上流は、山容水態却て平凡なり。特に云ふに足るものあるなし。

既に山陰の山水を洽く跋渉し盡したり、山陰の景象は大山、蜃山、三瓶山を雄大の趣あるものとなし、而して雄大の最なるものを大山となす清穆雅美の景趣は、若狹丹後の境上なる青葉山（圓錐形の舊火山）丹後の天の橋立、宍道湖、湖山池等、之れを代表し、天橋の時雨の景最も勝れたり、豪壯雄偉の景象は、出雲の神飛峽、石見の斷魚溪を以て雙絶となし、絶奇譎怪人を驚かすものは、但馬の玄武洞ならんか、山陰道七國の代表的景象概ねかくの如し。

余はこれより石見の濱田に出でそれより、津和野を經て長門の萩町に出で、小郡（山陽綫）府中を經て、徒歩下關に至り、九州に

◎山陰の名山奇峽　古家

◎丹澤山　武田

渡りて、豊崎の耶馬溪の山水を深く探り、彦山に登り、再び中津に出で、宇佐を經て別府に至り、豊後富士の稱ある、由布岳に登り、筑渡川に沿ひて久留米に出で、佐賀に立ち寄り、歸路は鐵道の便を借り、汽車にて山陽線を驅り、幽美なる瀨戸内海の景色を車窓に眺めつゝ十月廿三日、無事故郷播磨に歸着す、徒歩里程二百數十里に及ぶ日を閲すること五十五日、元より商用を兼ねての旅行なりしも、山水の勝を探ること、少なからず、實に壯快なりき。

序に告白せむに、余は高等小學さへも、完全に卒業せざりし程の無學なれば、文筆頗る拙く、到底諸君子の高覽を忝ふするに足るべき記事を作す能はず、慚愧の至りなり、然れども性極めて天然の美を受し山水の間に放浪するを以て、無上の樂しみとなしつゝあり。目下農業の係ら少閑を偸みて、荷車に古本を載せ、田舍の小學校寺院などを廻り、極めて放逸の生活を送るの間、深く自然に親しみつゝあり。

丹澤山

武田久吉

本會が產れてから、大抵の山は會員によつて登攀され、山又山の奥の無名の峰までも、記錄を有する樣になつたが、なぜか京濱に近い丹澤山塊は、兎角繼子扱にされ、此の連脈にて登山記のあるのは、僅に塔ノ岳にすぎまいと思ふ。

數年前から兩三回計畫した登山も、天候やら何やらに妨げられて遂行出來ず。また先年渡英前に山麓の某氏に依賴して、調査して貰つた、丹澤山の登路については、本誌第五年第二號に揭げて置いたが、自分の不在中に、此の山に登られた方もない樣であるのは、些もの足らぬ氣がする。

此の夏は久しぶりで、一寸歸朝する事となり、かねて渴望して居た日本の山——美しい森林で蔽はれた峰、清い溪川の流れ出る岳——に接する機會を得たので、八月の初めには梅澤君の御供をして、

南信に遊び、美しい三峰川を、其の源まで溯つて、荒蕩なる荒川の谷に沿つて、峻險極なき荒川嶽に攀ぢ、更に雄大なる前岳の頂上をも極めて、多少登山心を滿足させる事が出來たが、兎角氣がすまぬは、例の丹澤山塊！　今回も復其機がないかと、半ば以上も斷念して居た折柄、幸にも山中太三郎君に誘はるゝがまゝに、急に結束して、丹澤山に向ひ、終に其の頂を極むる事を得た。今次に其の紀行を簡單に綴つて、貴重なる本誌の一隅を拜借する事とする。

八月卅一日の朝、曾屋の旅宿を出たのが四時半であつた、前日來の快晴なりしに似ず、空には雲が多い、山にもちぎれた雲が掛つて居て、朝暾に映じて色は紅に、所謂朝やけだ、あまり有望な空あいではない、念の爲めに宿の者に、此の邊の朝はいつもかうかと問へば、へいこんなに疾く起きた事がありませぬからと云ふ答へを得て、一歩引退つたとたんに、案內兼辨當持の人夫をせき立てゝ山に向つた。

四時出發の豫定であつたのが、案內が遲參した爲め三十分を空費した、それを補はうと云ふので可なり急行して行く。十分間で、町はづれの俚俗一本榎と云ふ所へ着いた、五萬分一の地形圖（東京十六號、松田總領、明治三十年製版のもの）に一四九米突と高距の記してあつて、道の二岐する所がある、一行は右の路を採つて西田原に向ふ。名物の煙草が大分栽培してある。大山は右に嚴然と座し、菩提の山は正面に手に取る樣、塔ノ岳の方面は雲に隱れて居るが、富士はものゝ半分もぬけ上つてヌッと雲から頭を出して居る所がうれしい。

西田原の村落の西のはづれに、鎭守の八幡樣がある、それについて右に折れて、足が北に向ひはぢめてからは、只上り一方、雜木林の中を行くのだ、道はよいが暑い、先に立つて草苅馬に乘つて行く者が羨ましい、雜木が段々少くなると、スヽキを初めとして、種々の雜草が現はれる頃から、右の方の展望がそろ〳〵きゝはぢめる。五時三十分、東田原から來る間道が合する所へ出た、東南方の平原が

◎丹澤山　武田

一目に見える所で一息入れる爲めに休むだ地圖によると四八〇米突許ある。ボンヤリと霞のかゝつた海上に、江ノ島が朧げに見える。

此處から山の中腹に沿つて暫時行つてから、草山の背を行くのだ、ミシマサイコ、ヒナノキンチヤク等此の邊の山野でおなじみの草が大分ある、露出して居る岩石は御坂層に屬するものと思はれたが、概ね激しく風化して居る。日が漸く照り出したので、暑い事夥しい、休むよりは寧ろ日に輝りつけられる時間を減じた方が得策と云ふ方針で、前面に聳ゆる大山を睨みながら急行する事にした。

一時間許り息をもつかずに登つて、六時三十分に峠の頂上に出た、高距は八〇〇米突餘である、此處は諸戸の切通しと稱する所で、丹澤村への關門である、南北に通じて一と息に吹はらす處なので、大風の時逃げ込む爲めの洞がしつらへてあるのも妙だ、成程去る廿七日の大風雨の痕跡を見ると、雨が殆んど十度位の角度で降つた形跡がある。昔諸戸氏が所有の山林の事務所へ通ずる路をつけた時には、尚よく馬力を通じたそうであるが、毎年雨の度に山がくづれるので、修繕はするものゝ、今は只駄馬を通ずるに過ぎない、しかし道巾は三尺内外は充分にある。

左側の細い谷に水晶の様にすき通る水が流れて居る。フシグロセンヲウや、オトコヘシ等が美しく咲ける路を、此の流れについて下つて行く事二十分許りで、門戸口と云ふ所に出る、嘗ては門があつたそうなが、今は只家一軒あるのみである。(門戸口の位置は二萬分一の地圖には出て居るが、五萬分一には載つて居らぬ)。此の邊より諸戸氏の所有林で、スギとヒノキが栽殖してある、又所々にこれ等の樹木の苗圃も見える。古いトノキがそこにあるのは多分野生のであらう。

門戸口をすぎて五分許りも行くと、諸戸氏の事務所がある、其他家が二三軒もあつて、しきりに犬が吠へ立てる此の先きには追々人家が現はれ、菓子屋などさへある、しかし何れも穢くろしい茅屋にすぎない。五萬分一の地圖に「俚稱新宅」と記してあるのは、恐らく此の邊の小部落を意味するもの

と思はれる。

澤について益々下る、左右の山はヒノキと、スギの混殖林である、木は未だ二十年を經ぬものらしく望見した。遠くを見ると、まつ黒なもみの老木で蔽はれた山の一角が見える、そこは官林で、諸戸氏の山林との境界に當ると聞いた、其の麓間近く來ると、復た少數の人家がある、札掛と呼ぶのは此所だそうな。

人足が朝飯を認めると云ふので、吾々兩人は第一回中食をやる。家の前にシノブノ球、セキコク、サジラン等をつるせるは、何れも樵夫が山中にて獲たものであらう。眞の水の清らかなのも心地よい。

人夫の豫定では、札掛から更に前進して、丹澤山の頂より出る溪流の直北の尾根——三ツ峰と云ふて、峰尾根の上に小高い峰が三ツある、其の一番東のはづれの峰には、三角測點があつて、地圖面には九三一米突と記入してある——をズット絶頂まで登りつめよう、寧ろ登りつめたら頂上に出られるだらう、それも途中までしか、道は知らないのであつたのだ、然るに札掛けで聞く所によると、それは不可、それよりも塔ノ嶽へ出て、それから尾根を行つた方がよいと云ふ話であつた。

路程變更に決した吾々が、札掛を出て塔ノ嶽に向つたのは、彼是八時であつた、今迄沿ふて來た澤を對岸に渡り、人家の間をすぎて、菩提の山の裏より、流れ出る水澤と云ふ「二萬分の一による」澤に沿ふて行く事數町、一寸景のよい路を右へ〳〵とつて、やがて小溪について尾根に登る、此の樵路は地圖に記載はないが、可なりよくつけてある、只所々數日前の暴風雨の際、崖がくづれ等して路が亡せた所もあるが、概して言へば惡路ではない、只スヽキがいやが上に生ひ繁つて居るのと、日かげが少しもなく、暑さの猛烈なるのは辟易せざるを得ない、しかし荒川嶽の登りに、五十度もあらうかと思はるヽ急坂を、眞一文字に上らせられたことを考へると、僅々三十五度位の傾斜を、千鳥にからんで登るに、苦情を言へた義理ではない。

◎丹澤山　武田

◎丹澤山　武田

莫蓙でスヽキをおしのけながら、勇を奮つて突進を試み、尾根へついたので一息入れる、此處は大凡八五〇米突許、札掛より高い事、約三五〇米突程の地で、此邊を金林と云ふて居る、前回には深い谷をへだてヽ、所謂三ッ峰の尾根が見える、丹澤の頂上は、おしや陰雲にとざされて望む事が出來ぬ。望遠鏡を把つて三ッ峰を眺める、三角測量臺は中部以上破壞されて居る、其の下の澤の近くには石小屋と云ふ樵夫小舍があつたのが、過る廿七日大嵐れに崖が崩れて川におし流され、五名の樵夫は非命の最後を遂げたとやら。

此處から先きの尾根路は頗るよい、昔あつた大木は皆伐られて、今はスヽキなどの雜草の間に、若いヒノキが栽えつけられてあるのみ故、左右の眺望は頗るよいかはりに、暑いことは更に甚しい。傾斜は始めは割合に緩漫であるが、進むにつれて出て來るのは、アザミとキイチゴのたぐひ。可なりに幅の廣い路も中々に草が生ひ繁つて、時には容易く通り切れぬ所もある、高距が增すにつれて、現はれるのは、此の邊の山で、通有のスズダケ、しかし幸ひ切り明けてあるので、通行には差支へない。右側には伐採の運命を免れた老木が、生へて居るが、通路は其の南にあるので、日は容赦なく照りつける、例の主義で急行する、大抵の所なら駈け上る、勿論汗は淋漓たるものであるが、別に涼しくなる工夫もないからだ。喉が干く、勿論水など出て居る處はないのだ、液のありそうな實としては、只バライチゴの鳩卵大の紅果累々たるものあるのみだ、所が此のイチゴと來ては、キイチゴ類中惡棘を有てるものヽ一つで、よく熟して居ても、いヽかげんまづい所へ、萬一未熟なものを口にしたら最後、二度と試みる勇氣がなくなる。あるものはこればかり、それも無上に澤山あるのが尙癪にさはる。

初め尾根にとりついてから、西南を指して上つたが、やがて大體眞西に向を轉ずる、此の邊から一上一下があつて、時には恐ろしい急斜面を上ることもある。尤も、恐ろしいと云つても、別に危險はないのだが、只急な所へ、かのアザミやキイチゴが一つぱいにはへて居て、人間を虐待すること夥

しいのだ。

塔ノ嶽の頂上へ近づいてからは、木立が厚くなつて、草木も大分趣を異にする様になる、老梢參差たるブナの大木の幹や枝には、種々の蘚苔があつく生じ、それに種々の植物が着生して居る、マツノハマンネングサの如きものもある、リヤウブが所々に花をつけて居る、グミの果實も熟して人の手折るを待つばかり、樹下はハンクワイシホガマが美しく咲き亂れ、ハクサンオミナヘシ、フジオトギリは果實をつけ、ウスユキサウは何となく涼しさうに見える。

いよ〳〵頂上に達する前に、平坦な美しい草野がある、それから少しだら〳〵と上ると、塔ノ嶽の絶頂だ、ツリガネニンジン、シラゲシャジンなどをふみわけて、頂上についたのが十一時に五分前、例のムメバチサウもそろ〳〵綻びはじめて居た。

途中から吹き出した風は、益々暴威を逞しくして、霧を横なぐりに吹きつける、勿論帽子など冠つて居られるものでない、樂しみにして居た眺望は絶無だ、兎に角孫佛(そんぶつ)樣へ御參りしたら、天候が恢復するか、少くとも雨天になることはあるまいと、咲き亂れたるミヤマギクをふんで、北方に少し降りた、木立に入ると午前中だと云ふに、いやに暗い、下草は露にしと〳〵としめつて居る。孫佛の石は山かげの妙な處へ只一つ生へぬけた樣に立つて居る、高さは一丈許もあらうか、頂に小さな地藏佛を安置してある、恐る〳〵はひ上つて、生へて居るトウヒレン、イハキンバイ等を採集し、加之丁度手頃な石のかけ一つ謹んで頂戴する事に申上げた、岩質は恐らく凝灰岩でゞもあらうか。

水を搜しに行つた人夫は、終に水を發見し得なかつたので、止む事を得ず水なしで晝食する事とし、丹澤山へ連る尾根の一小平地に陣取つた、莫蓙を褥にふく〳〵した蘚苔の上に心地よく休息して中食を認める。霧が木の葉に凝つて、時折ぽり元にポツリと落ちる。兎に角霧の多い山に相違ない、木の幹や枝にはこけ深くむし、それに種々の寄生植物がある、中にも珍中の珍稀中の稀と言ふ程でもない

◎丹澤山　武田

が、伊勢、紀伊、土佐の如き暖地より知られて居る、ツリシュスランを得たのは、此の行の採集品中の白眉である。

◎丹澤山　武田

中食後、不用な荷物は盡く此處へ殘す事とし、とある木の枝に吊るして、萬一の雨をよける爲め、油紙で蔽つてから、いざと丹澤に向つたのが、丁度十二時であつた。北に向つてだら〳〵と少し下つてから、路が兩岐する所に出た、左の幽なのが頂上へ向ふ路、右のはよくふめては居るが、丹澤村の何れへか出る樵夫路であらう。これから暫時可なり平坦に近い所を行つてから、段々の上りになる。初めの間は丈も短く、ひどく繁つても居なかつたスヾダケが、進むに從つて深くなる、ブナ、ウリハダカヘデなどの大木の幹には、コケがむして、それにマツノハマンヂングサや、イハギバウシなどが生へて居る、其の花が黃に紫に美しい。段々つま先が上を向いて來ると、笹が益々深くなる、狂暴なる風が霧を飛ばして來るので、少しも暑い事はない、止まれば寒い位である。

丈に餘る笹の中を、がさ〳〵やつて、向ふから下つて來る者がある、しゝでゞもありはすまいかとぎよつとして見上げると、思ひ掛けぬ人間が、荷物を背負つて來る、聞けば此の奥に泊つてこまどりを捕つて居た老爺で、これから里へ下るのだと云ふ。丹澤の絶頂への里程を聞くと、これから一里半あると云ふ、そして笹が深くて到底も樂ではないと言ふ、それでも路のあとはあるだらうと問へば、路はあつても此のスヾではと、淋しい嘲笑的の眉をひそめて行きすぎた。

この位のおどしで、びつくりする自分達でもないので、平氣で突進する、少し行くと復人間が二三人居る、往來(?)の眞中へ陣取つて、中食をやつて居るのだ、是等も鳥捕であるそうな。此の徒には御免を蒙つて、前進を續ける、やゝ平坦になつて、これから少し下つてから、また深い深い笹の中を登るのだ、倒れ木があるやら、笹の上をヤマブドウがからむで縺れ合つて居るやらで、進むに可なり時間と勞力とが入る。笹やぶを登りつめて、草原に出てホツと息をつく、右には眼下に丹澤（村）の奥

の伐木の跡が見える、左は山の端まで雲が巻いて居る。笹籔を出てから、奇麗な草山を登るのだ、イハガリヤスが一面に茂つて、それにウスユキサウと、ヤマハハコが美しく點綴されて居る。東面は斯の如く平らで美しいが、西に面した部分は山が半分崩れ落ちて、恐ろしい岩崖が露出して居る、其岩の上には、コメツヾチ一面に生じ、イハヒバだの、ウテウランなどが岩のすき間に、しがみついた様にして生へて居る。雲のふきはらした間から、東北には關東平原の一部とそれを貫いて流れる多摩川とが見える、東南には大山が肘をはつてひかへ、それと菩提の山との間から、湘南の平野と海とが朧氣に眼に映ずる、景のよい處だ、高距は一五〇〇餘米突である、龍の御場と名づくるとか、(此處を龍ケ馬場とも云ふ様である、或は此の方が正しいのかも知れない)。一行の到着したのは、零時三十五分であつた。

龍の御場から北には尚高い樹木の繁つた峰が雲間から隱見して居る、丹澤山の絶點は其方なのだ、例の深い笹をかきわけて進む事二十分で、いよ〳〵丹澤の頂上一、五六七米突へ着いた、頂上は可なり廣い平坦な草原で、東西に狹く、南北に長い、三角測量の標石の他は何もない、櫓は無論腐朽して居る。路は幽かに草の間に通じて、蛭ケ嶽方面に向つて居る。生憎霧が深くかぶつて、豫期した眺望は絶無である。

頂上を一周して見た、ヤマトリカブトの紫濃く、シホガマギクは紅にアザミの淡紫と交はつて叢生せるカリヤスの間にさびしく咲いて居る。所々に木が立つて居る、マメザクラ、メギ、ヒメシャラ、イボタ、グミの如きものである。草蔭にノビネチドリが一二本立つて居る、此の邊では珍とするに足るべきものである。

時間に制限がある一行は、蛭ケ嶽方面へ探險の餘裕がないので、往路を塔ノ嶽へと逆行した。途中は龍の御場で多少植物採集をした他、一回も休憩せずに、荷物を置いた場所に歸り着いたのが二時二

◎丹澤山　武田

十分。鳥捕共は已に下山したと見えて姿が見えぬ。最後の食事をして荷物を出來るだけ減じたが、採集品がふえたので、全體の重量は恐らく多少增加したろう。

塔ノ嶽の絶頂を、南に指して下り始めたのが正三時。霧に交つて雨がハラ〳〵と二三滴襟元に入る。これは去る明治三十八年の九月に、夜行して下つた路である、當年の事など語りながら行く、灌木林の下をくゞり、深い草をおしわけ、時には笹の間を歩いて、やがてカリヤスの多い草山に出た、「馬の背」の險なども、晝間では容易なものだ、しかし概して言へば、此の路は一行の今朝登つた路に比して細く、且つ草が生ひ茂つて居る、尤も中腹以下は割合によくふめては居るが。

頂上から四百米突も下つた所に、水溜りがある、清冷とは申し難いが、飲用するに足りる。此の前の時には山麓の燈火を見ながら、つま先きで路をさぐりながら下つたのが、今日は其の患がないので足が捗どる、早川の流れ、酒匂の人家より、遠くは伊豆の眞鶴崎より熱海の初島が見える。

急行して下り、二本松に着いたのが四時半、彼の鳥捕三人に追ひついて、一緒に小憩した。此所より尾根一つ下れば堀大倉で、あとは曾屋まで畑の間を行くのだ、堀山下で水無川を徒渉し、再び一本榎へかゝつて、曾屋の旅宿へ着いたのが、吾々の時計で六時半頃であつた。風は未だ吹き荒むで、天はくもり、折々は雨が一滴か二滴顔に當る、只附近の低い山々が、黑い空よりも尙黑く見えて居つた。

（附記）丹澤山及び塔ノ嶽の登山者の爲めに、一二婆言を添へて見たい。

一、根據地は曾屋が宜しい、宿は二三あるが、水無川の橋の袂の大岡と云ふ家が、親切で、家も清潔でよい。

一、曾屋に達するには二ノ宮驛より湘南輕便鐵道によれば容易である、五十分以內で達する、片路十七錢通行稅一錢。

一、案內者は碌なのがない、丹澤へ行くと言へば、此の邊の人は丹澤の部落と早合點して、道は近

いの、泊るに便利だのと、手輕い事を云ふ、山の頂上の測量部の三角點のある所へ行くのだと云ふと、急に様子をかへてそれは話がちがう。私には案内が出來ない等と尻込みをする。獵師を頼むか、駒鳥捕を儀ふががよからうと思ふ。吾々は、木樵として丹澤の奥に入り込んだ事のある、城所鐵五郎と云ふ者を使用した。尤も此男は山頂へ登つたのは今回が初めてゞある——それはあとで白狀したのだ。日當二圓乃至二圓五十錢を要求したが頗る不當である。此男を連れゝば丹澤までは尾根道を通つての往復なら間に合ふが、小生等は推薦することは躊躇する。但し音無しい男で足も可なり達者荷もよく背負ふ。

一、丹澤山へは塔ノ嶽から行くのが順路であると思はれる、前項記載の三ツ峰へかゝつて行くのは大まはりである。尤も丹澤の村へでも泊ればどこを歩いても自由だ。

一、塔ノ嶽へ登るには　吾々の取つた道によるのは面白いが、里程は、堀山下を通つて行くのよりは、二里許りは遠くなるのと、諸戸の切通しなる峠をこえねばならぬ爲め、五百米突上下するだけ損になる。

一、塔ノ嶽の頂上までは、堀大倉を經て直行しても、四里は慥にある、これから丹澤山への往復は、三時間で充分。丹澤山頂から蛭への往復は四時間で出來得るだろうと推測する。されば未明に旅屋を出發し、日沒後歸着する豫定ならば、蛭の往復は不可能とは思はれない、但し急行を要する事は疑を容れずである。

一、塔ノ嶽だけならば堀大倉を經て上り、歸路は吾々の上つた路を東へ下り、僅にして右折して、菩提ノ山へ向つて尾根を傳ひ、大倉と横野との間に下るも面白からう、但し此の路による時は、菩提ノ山(五萬分一の地圖に一二六米突と記せるが頂上なり)の直西北の一點(一二三七米突)に達するまでの尾根傳は、樂ではなからうから、可なりの健脚と、忍耐と、時間とが入るだろうと思はれる。

◎丹澤山　武田

一、塔ノ嶽のみを只上下したいとなら、京濱から一番滊車で行けば日がへりが出來る、七時半頃までに曾屋へ歸着けば、八時五分の輕便鐵道の終列車に充分にあふから、九時五分二ノ宮發の上り列車に乘れる。土曜の午後から出て、曾屋へ一泊すれば、丹澤山頂まで往復して、前記の列車に乘る事は、左程困難ではない、但しあまり道草をするのは禁物である。

一、吾々は隨分急行したが、全體で約三時間は休憩等に費した。只一つ御斷りして置きたいのは、夕刻曾屋に歸着の折、吾々の時計が半時間許り、旅宿の時計よりも遲れて居た事だ。止つてまた動き出したに相違ないが、今となつては、其の何の邊なりしやは知るに由ない。

一、塔ノ嶽へ玄倉（クロクラ）から登る路順は、第一年第一號に高野君の記事があるから、之を參照され度い。此の方面からの登山は、最も趣味ある事と思ふ。玄倉川上流、逆木（サカサギ）から鍋割迄は、川だけを探る價値が十分にある。近年は諸士平（シヨシダヒラ）に製板小屋が出來たり、鍋割へ行く道が修繕されたりして、此の溪谷に入るの便は、昔し吾々が行た頃から見ると、數倍容易になつた譯である。

（大正二年九月於東京記）

春から秋まで

赤城山大洞日記

關口泰

五月八日は赤城神社の御祭りである、五日の御節句に澁川方面の寨者が登るのを手初めに、道のべ



赤城の夏

辻村伊助氏撮影

の殘雪も消えた赤城山は賑いて來るのである。昔は四月八日が御祭であつたのを此頃は五月八日になつて舊の四月八日は參詣人はあるが本祭りではない、此日は山麓の村々赤城神社の氏子が四方の道から登つて來て山は一年に一度の賑ひを呈する、城番小屋の原には店が出て朝の十時頃から晝の二時頃までは神社から原への小橋の上を押し返す樣な騒ぎである。

赤城根の方から勝栗干柿をもつて、石井の方から板飴をもつて、又二錢五厘の玩具店も煮染めとすしの腰掛茶屋も、前の晩から原に店をはつて、夜寒をしのぐ焚火の煙が廣い限りない暗い山の一部を赤くかゞやかす空には星がまばたいてゐる。焔が火の紛を吐く五尺にして消える山の夜は依然として靜かである。

朝の八時となれば店の裝ひも揃はぬうちから夜中起きした山麓の參詣者はポツ〳〵と登つてきて十時となれば荒廢した神樂堂には神樂があがる、笛の音も太皷の音も流石に神代めいて馬鹿踊りのあやしい手振りに山村の善男善女は樂しくもゆたかにさゞめきあふ。大洞の家は一年中の混雜を一日に集める、下の坐敷は疊を一側おきにあげて御客は土足のまゝ床にあがつて疊に腰をおろす、入れかはり立ちかはる御客はうどんよ煮染よと上を下への大騒ぎは一時二時頃まで續くが然し里の祭りの出盛る三時過ぎにはもう歸りを急がなくてはならない、四時となればもう原には散亂した竹の皮がカサコソと、原は又ポカンとしてたゞ廣く傾ゆく春の日影を浴びてゐる。

國定忠次の昔から赤城の祭日には賭場が開けた、毎年其日の前夜を鈴ヶ峰の岩穴にお籠りして夜をあかすのであるが近頃は賭博の開帳はない由である、その翌日は早夙く大洞の爐傍をおとづれて朝飯をしたゝめてゆく。親分乾分丁と半との爭ひから血を見たことも度々聞いたが、今は石井村から駐在巡査や前橋からの應援巡査に其日に何事もないのは上べだけ、五月八日に巡査が來て博奕打ちが來ないかはりに舊四月八日の蔭祭りには博徒は來るが巡査は來ない。番小屋の原の躑躅の莚を敷いて二つ

◎春から秋まで　關口

◎春から秋まで　開口

三つの賭場は開ける、參詣の人も又山越しの旅人もひつかゝつては黒い人だかりは殖えてゆく、見張り番は前橋道にポカンと立つてゐるのであらう。

五月八日頃には參詣人が蕾の赤らんだ石楠花や、躑躅の花を手折つて來るから山でも下の方はもう花に美しいのであらう、銚子の伽藍から見れば湯の澤の崖にはやしほが薄紅の花を飾つてゐやう、谷の下には綠の波が打ちよせてもゐやう、然し山の上はまだそこゝの窪には雪が殘つて參詣の少年が喜んでたべてゐる。月の半ばには雪も大方消えて原には綠りがのび猩々袴が春を魁けて花を開く、なんだか病的な色と姿とを持つた此草はあまり好ましいものではないが花のなかつた原ではやはり眼を惹きつける。此頃には蕨が出る、二本楢の牧場は此邊で一番いゝとこである、蕨採りの人達は親子連れや夫婦づれ或は馬をひいて來る程である、五輪峠の上から見ると五月の日に光る柔い綠のスロープに白い點々が光るのは之等の人々の頭の手拭でゝもあらう。夕方になると背に負ふたり稀には馬につけたりして大洞の家へ歸つて來る、其日の獲物を爐はだの土間へならべて、揃へながら束ねながら中指程の太いのや圍爐裏の火箸程の長いのを誇りあひ、其日の出來ごとのあれこれを回想して物語り興じてゐる。

蕨のみではない此頃の山にはいろ〳〵の樹の芽、草の芽、タラツペ、コゞメ、ゼンマイの類は山家らしく食膳を賑はす。或日であつた、山獨活を馬に一駄みつしり積んで一人の男がやつて來た、毎年來る男であるさうな、値段の掛合ひも山らしく簡單に運んで一夜の宿と一圓位の金を與へて、泥のまま赤ぐろい山うどは土間に小山の樣に積まれた、根元をとつて洗つて切つて鹽に漬けて夏中の用にたてるのである。

山に花が笑ふ空に初夏らしい雲が漂ふ、鳥居峠から里を見れば渡良瀬の谷から綠りの軍勢が押し寄せて來る、一日毎にのぼつて來るのが目に見える綠が若々しいすが〳〵しい初夏をのせて迫つて來る。

籠山の岩間に年老いた八汐躑躅が花を開いて山をば櫻色に染める、又の名の櫻躑躅もふさわしい、籠山の盛りがすぎれば駒ヶ嶽の嶺の懸崖に今を盛の色に榮え黒檜の猫岩に咲きそめる、同じ山でも少しの高度に二日三日の遅速はある。

氷小屋の岸の楊が淺緑り色美しく煙り、小鳥ヶ島の上のあたり又地藏の裾に若楓の葉が鮮かに萠え出でる、山の櫻は哀れに寂しく俯むき勝ちに咲いてゐる。

白樺はこまかい葉をつけた、チカ〳〵と六月の空に光つてあるかないかの風に微かな音なき樂を奏でゝゐる、すつきりとした若木の銀の幹に柔い若葉を梢にふるはして氣持のいゝ調色を示す、白樺小さき林は例へば白銀の鎧をつけた若いナイトか、細身の太刀に眉墨の濃いやんごとなき殿上人の心意氣がある。

御宮の樅の樹の高い梢に赤つ腹つぐが來てチョロンチョロンツーと鳴き、小鳥ヶ島の榛の林に四十雀が遊び駒鳥が歌ふ、啄木鳥の木をたゝく音も春の日永をなほ永くして、山鷲は初夏らしい歌を唱ふ、時鳥は霧の中に叫び啼き、郭公はカッコーンカッコーンと調子の高い聲を山彦と呼びかはす。

春に勇む駒は小馬をつれて鬣を後に靡せて蹄の音も心地よく駒ヶ嶽の裾から原へとかけて來る、カッ〳〵といふ蹄の音が彈力のある山の空氣を振はして春の心は躍る。

放牧の牛は萠ゆる若草を追ふてだん〳〵と山を登つて來る、五月もおしつまつて最初の牛が新坂を登り番小屋の原へ來て久濶の挨拶をする樣に又先頭の凱歌を擧げる樣に頸を斜にのばしてモウと鳴く、半年ぶりの物めづらしく懷しく山は久々の挨拶をかへす。

赤城山の景色は放牧の牛と馬によつて生きる、冬の雪の山もいゝ、晩秋の枯れた山もいゝ、然し赤城山らしいのはやはり牛の遊ぶ初夏の景趣であらう、牛は日毎に多くなりゆく、又五輪をこへて二本榿の牧場へつれてゆく牛飼が十數匹の大牛小牛を引いて過ぎる。

◎春から秋まで　關口

◎春から秋まで　闕口

八汐が透明な綠色の柔い葉をつける、原の馬酔木の株が朱紅色の花を開く、鳥居峠から見ると小地藏の裾を綾くひいて大洞の門口の様な森の小道から湖のふちまで起伏した高原に馬酔木の赤い花は綠の株にちりばめられる、薄暗い「ワルデン」の木の間に、覺満の澄んだ流れにニンフの様に妖艶な感じを與へる。沼田道の裾野をのぼれば六月の初めに鈴蘭が可憐に氣高い花から床しい初夏の空氣を放つ、覺満淵に毛氈苔が軟い赤味がゝつた葉を擴げて小さいながら觸手に水晶の玉の様な粘液を飾つて蟲をば待つてゐる、荒山裾の輕井澤には姫あやめが咲き、黒檜の頂には小櫻草と蟲取菫が優雅な花を開く頃にはもう月は七月に入つて湖水の浪も夏をさゝやき、山のかひに立つ雲の峰は夏の日に白く輝く。

湖水のくき（赤腹）が子をすりつけに岸によるのは時候によつて遲速はあるが大方七月上旬である、岸には石を淺く平に敷いて日光は暖かい光を底の小石に反射する、覺満の川を溯る群をなした魚は築にかゝり、岸邊には投網もつ人が待つてゐる、それは數日の間つゞく、日を夜に繼いで宿のオヂイサンは沼に出る、オヂイサンはロダンの様な鬚をもつてゐる、然し夜湖畔の石原にまろ寝するなどはロシヤの小説にでもありさうだ、又魚をまつて投網をもつて簑をきて魚籠をさげた姿は鑄金の置物の様である。清水の口に張つてをく夜網にやまめや鮒がかゝる事もあるが大抵はくきである。

その數日のうちに二十貫目もとれる、生栃には魚が重なりあつてピチャ〳〵してゐる、之が順々に夏中の食膳にのぼる、初めの内こそであるが淡水魚の口に飽きやすく、夏も半をすぎればかなり御客様はまゐらせられるのである。

その頃は手づかまいも出來た覺満川に群れたくきも或期間をふれば一尾だに岸邊によらぬ、漁期は一年の向ふに去つてしまふ、小鳥ヶ島の淺い砂の「障子返し」に風を除けた水の面を小さい魚がチラチラと泳ぎまわる、そよ風が水を搖る様に漣を立てながら。

水楢は濶い葉を青い空に擴げてその若綠を日光が透く、透明な若綠を水淺黄の初夏の空との穩かな

シムフォニーは懐しく、緑短き原に寐轉べば小さき草花は高山の土の香りを放ち、母の乳房にすがる子牛の舌と喉の音は靜かに、やわらかき日光はかぐはしき夢を誘ふ。床しき初夏の自然の懐。湖に舟せば寶玉は水棹に戯れ、底の藻草はニンフの髪の如く亂れ、梅花藻は微かな花を開く、舟底をうつ水の音の靜けさよ。

初夏は鶯の歌と一しよに逝つてしまふ、山はもう禿げた頂迄綠に覆はれて若葉は爽かに輝き躍る、七月も末になる、湖のふちの繁みに螢が出る、此處の螢は東京邊のよりは大きい、流星の尾をひいてスーイ〳〵と繁みに飛ぶ、島の樺にとまる、沼の上をとんでゆく。

大洞の家は七月に入ると急に忙しくなる、滯留の客は大方學生で近年は一高と大學の連中が多い——前は學習院が多く「白樺」の連中もいつてゐた樣であつたが——輕薄な御世辭もなく放任主義な客扱ひは居心地もよく長きは六十日の夏を此に暮す、大抵毎年書を讀く人も三四人は來る、讀書し散歩し舟遊し游泳し平和に明け暮れる山莊は時折の一夜泊りの客に騒がせらるゝばかりである、——とはいへ七月末から八月半ば迄は此種の客が中々多い——。

夏といつても室内は六十度から七十度の温度で八十度に登るは一夏に一度か二度であるから團扇をつかふ事も無く書家の連中は大抵襤袍をきて寫生にゆく、それ故游泳も永くはやれぬ、夕方を辨天のほとりに涼んでも夜となれば寒いといつて家にはいる、薄霧に家は朦朧、室についた灯が赤く懐しき色ににじんでゐる。

去年の夏であつた音樂學校の女生が三四人登つて來た中に有名なアルト唱ひの女流音樂家があつた月は十三日の隈なく晴れた夜であつた、私は小沼に月を見にゆこうと思つて八丁の坂をのぼりをはると、駒の裾炭燒きのあたりで妙なる歌曲がびゝいた、思はず足をとゞめて銀の樣な月が洩る楢の樹の下で聞きいつてしまつた、曲はヴエルディの何かであつたか、漣に照る月の湖畔に歌うたふ人と歌き

く人の幸福を祝ふて、再び歩み出したのは一節の歌がやんで暫く後であつた。

今年の夏の十三日の月も明かであつた、去年を思ひ出して友と二人又小沼へいつた、眠を驚かされた馬はかけ牛は道に立はだかる、敵襲をつぐる哨兵の叫びかもうと鳴く牛に答へるのは山彦ばかりではない、血の池の上小沼の前山の端にかゝつた頃には四方は牛に包圍されてる、牛番と誤つて鹽を求めるのか敵と思つて攻撃するのか角をむけて近よるのも不氣味である、さう〳〵湖におりる崖の端の水楢の樹に攀ぢて難をさけたが咆吼する牛は牛を呼んで數知れず地藏の方から下りて來るのが月のあかりに見える、月見どころのさわぎで無い、ネミの湖水の傳説を思はせる樣な小沼月夜の物靜かな寂寞も今日は全く別な物凄さである、樹上に臥て見る月はいつの間にか透かす梢を二つ移つた、牛は依然として叫び合ひ山は慴伏さする樣に沈默する、何時までもかくてはあられず一策を案じて思ひ切つて牛飼の眞似してバー〳〵〳〵バーアイと大きな聲で叫んだ地藏の腹に響き渡る樣に谺した、牛はなほ叫び合つて聲をたよりにやつて來る、湖水の汀を歩いては月を碎く、水を飲むそして又咆へる、待つた十分は長かつた、謀計圖にあたつて敵兵は汀に集つた間を悠々と胸を轟かせて樹を下りて八丁を歸つた歸り途には往きの樣に不氣味な牛の頭と鉢合せする事はなかつた、全くお伽噺か又小供の喜ぶ冒險談にありさうな事である。

其翌日も月がよかつた、夕方から地藏嶽へ登つた、頂上へいつた頃はすつかり夜であつた、天に月只一つ、地に我影、廣く蜒々と擴がつた木もなき山頂に月光は鈍く反射して山の輪廓は柔らげられ朧にされて限りなき廣さを感ずる、褞袍にくるまつて草原に仰臥する、何の思ひもない、寒くなつて歸らうと起あがつた時には前の瞬間は眠つてゐたのか覺めてゐたのかわからなかつた、無窮の時に居て永遠の光りを見た、昨日は原人（ウルメンシュ）であつた、今日は超人（ユベメンシュ）である。

日光程ではないかも知れぬが此山は雷が多い、雷は痛快に大きな太鼓を轟かして山から山へ渡る、大

洞の邊に落ちた事は無いが馬が電死した事は時々聞いた、篠つく雨の中をしとゞぬれて逃げ込んで來た旅人が眼の前に火柱が立つたと其時の恐ろしさを持續して語りきかす、二階の客も嫌いな連中がいつの間にか階下の一つ部屋に寄り合つてピカツと空をつんざく稻妻に眼を見合せガラ〳〵つといふ雷鳴に疊に打臥す。

熱帶地にありさうなシャワーが時々來る、湖の周圍を散步してゐたりする時鳥居峠から涌いて來た霧が山を呑み沼に迫り沼は際涯なき大海の樣になる間もなく汀にゐて水を見ない程の濃霧が來る、山の天氣は盛夏の候殊に痛快である、山を鳴らす嵐もいゝ、十丈に餘る大樅も檜も栂もミシ〳〵としなひ、遠くの樹にも怒濤の樣にうなる白樺がたほると何となく裸形の女の死骸の樣に思はれる。

山の盛夏はほんの僅である、八月も半ばをすぎれば初秋の風が訪ふ、エーデルワイスの白い氣高い花も老いて松蟲草が麗姬のかざしの樣にゆらぐ、輕い羽毛の樣な雲が黑檜の頂の上を過ぎる、空は日毎に澄んで碧い色を增す。そしてやがて九月になる、五輪峠の道を二本樅牧場へゆけば萱草尾花女郎花に藤、袴桔梗は曙のヴヰナスの眼の樣な睡を見ひらき蕾は紫の手まりの樣にふくらむ、秋の七草は路のべに亂れ咲いて、右左八重にかさなる山の裾の遙か末には遠山が秋の色にそびえてゐる。

嶺の原に秋は來た、湖畔に立つた白樺は薄く染つた、その下にたてがみ尾も垂れてジツとしてゐる馬の姿にも秋はまざ〳〵見えてゐる。牛は日向の原にうづくまつて葉を振ひ落した山を見捨てゝゆくその日を待つてゐる樣である。

空を見よ秋の空を、山の秋の空を。深碧か淸澄か限りなく澄碧瑠璃の美しき色偉大なる色、まことに宇宙を領する神の圓蓋たるに愧ぢない色である、何といふか言葉を知らぬ、強い美しい色、秋の空はクツキリと黃ばんだ山の姿を浮出させる。

山の夏は西洋畫の畫題であるが秋の山は日本畫の題材である、まだ秋に染まらぬ綠の樹間に黃に赤

に濃く淡く色さま〴〵の「木の間の秋」を見せてゐる、友染の様な山葡萄の葉は美しくからんで檜の葉のうすく黄ばんだのと繪模様をしてゐる。

山は日毎に紅葉して沼向ふに駒の肩に猫岩の斷崖に深紅に燃え立つ彩りはやがて全山を錦になして、あゝ大黒檜は錦の直垂か緋絨の鎧か、大將軍のよそほいして鈍色の湖面に美しい影をうつす。

霧によし雨によし、又雨があがればしつとりとぬれた山は色を增し澤を添えて樺も檜も楓もおのがじゝ木々の秋を競ふてゐる、湖はもう雨を忘れて薄く白光る空をうつしてゐる。

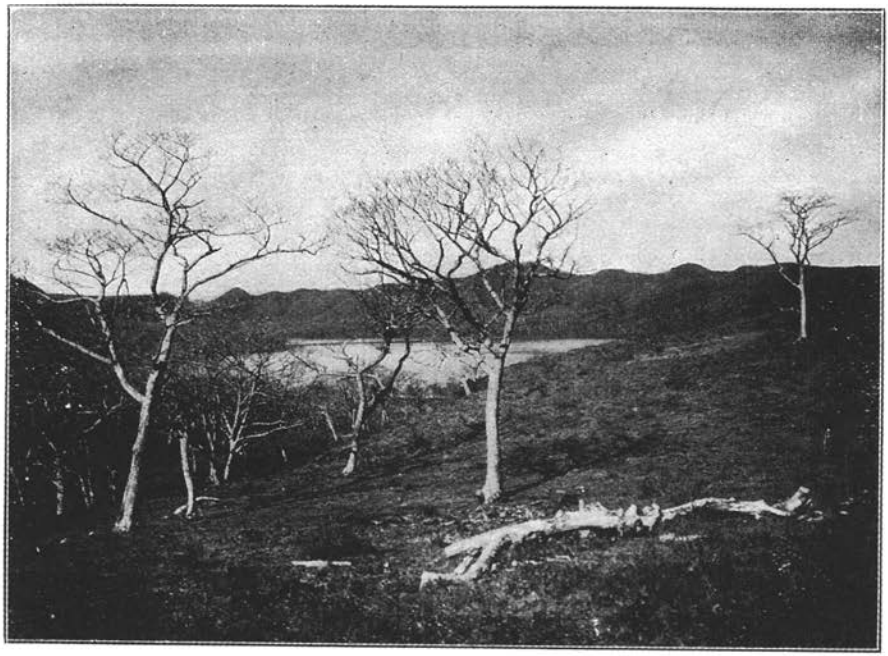
夕日が駒の肩に金の光を投げる、紅葉が火の様に燃える、深紅も紫に腮せた色も又常磐樹のその緑色も橙の様な黄色も光りを增して輝く、色彩の樂器は夕日に花々しい合奏をする。

消え殘つた霧は嶺の中途に棚びいて淡黄に薄れ、山の峽に湧き出た雲は灰白の薄光に山を横ぎる。

殊に此頃沼尾川でも銚子のガランでも谷間に紅葉を探れば美しい、清冽の水と谷間の鈍い光と透いて見える天の色とは一日の遊樂に充分である。

紅葉も嶺には早く散る、風のあたる山の角には幾日も保たない、山の方から散つてゆく、榛の木が深い綠りにひとり踏み堪へてゐたがそれも綠りのまゝにしぼんで落ちる、朝風がサッと渡ればバラ〴〵と雨の様に繁く雨の様な音たてゝ散る、散り積つた木の葉を踏んで歩むのも物哀しい、枯葉に霜がおけば踏む足にバリ〴〵カサ〴〵と音して何ともいへず氣を沈める。

此頃の月の夜半を湖に舟を泛ぶれば黒い夜と澄んだ月とまばたく星が心を遠い國に誘ふ。小鳥ヶ島へむいてゆく自分の舟が、ベックリンの「死の島を」指してゐる様で自分が月光に照らされた姿はまるで舳に立つたあの白衣の人の様である。永遠の沈默に山はものいはぬ影を深い湖面に落して、受けた湖水は漣も立てずに眠つてゐる、サッとくる夜風に一寸山の姿は亂れても又もとの靜寂、とめた櫓の手に夜は更けてゆく。



辻村伊助氏撮影

赤城山秋の大沼



辻村伊助氏撮影

高原の落ち葉（赤城山頂）

九月一杯はひまであつた山の家も紅葉の秋になれば又一としきり近傍の中學校や師範學校の修學旅行に忙しい、日曜にかけて紅葉を探る五人十人が四方から集まり合つて大きい混雑を來す夜もある、霧にまかれて行方知らず呼ぶ聲を聞きつければ迎へにも行くがわからぬまゝに野宿して、明けの朝を困憊して來る人もある。

紅葉は大抵十月の上旬五六日から十二三日の間であるが、廿日すぎ迄は客が來る、十一月となり沼のふちに朝毎薄氷を見黒檜の嶺に木花が咲く樣になればもう山はねむつた樣に靜かである、木の葉はすつかりふるひ落されて、白樺の幹の皮はヒラ〳〵とふるへる、水楢はあのセガンチニに「贅澤の報ひ」といふ書に見る樣な木の形をして寒い山の風にビユー〳〵と啼いてゐる。冬がとう〳〵來た、靜かな長い考へさせる冬がとう〳〵來た。

雜錄

高山に於ける寒暑の激變と空氣の稀薄と及び山岳病

氷河こそ無けれ、日本アルプスは、多くの高山の特徴を備へてゐるから、歐洲アルプスや、ロッキイ山ぐらゐの高山狀態なら、略ぼ想像が出來もしやうが、但し日本アルプス、否歐洲アルプス程度の山岳で、經驗の充分に出來ないことは、氣温の激變、空氣の稀薄、及びそれ等から原因する山岳病である、そこへ行くと、さすがに世界の屋棟と言はれるヒマラヤ山脈は、標高が我が日本アルプスの、二倍以上、もしくは三倍近くに達する高山を、多く有してゐるから、かういふことに最も顯著な經驗を得られる便利がある。

ヒマラヤの探檢家として名高いウイリアム、ハンタア、ウオークマン氏は、夫人を同伴して、一九〇三年にバルチスタン、カシミアの、カラコラム喜馬拉亞山を遠征され、ウオークマン氏自身は、その第一高峰ピラミッド、ピークの山肩（二三、三九四尺）まで登攀し、夫人は第二高峰、ルンム山（二二、五六八尺）の絕巓に登られ、その登山記を一、九〇八年に出版した、この本を讀むと、上記の點に就いて、我々日本アルプスの登山者には、到底經驗の出來ない事實が書いてあるから、その概略を抄譯することにする。

先づ高山の炎熱から言はう、一寸考へると、一六、〇〇〇尺から二〇、〇〇〇尺の標高で、しかも氷雲で覆はれ、日陰の光温が、白晝華氏五十五度を超えることが、稀で、夜に入れば華氏二十度、或は零近くまでなるところだから、炎熱で苦しむ

ことは、無かりさうに思はれやうが、事實は之と反對で、晴れて、一部曇つた日などは、太陽が山上に現はれるや否や、その光線の熱は、全然感觸的で、朝九時以後になると、烈々たる鎔鑛の上に座するやうな氣がする、雪が多ければ多いほど——この高度では、垂直な岩角を除いて、不斷の雪である——新らしいほど、又白いほど、熱がひどくなる、太陽の反射熱は、直射熱より、我慢がなりにくいと言はれないまでも、少なくとも同樣につらい、登山者が雪の反射に暴露されて、この熱を受けないやうに避遁することは、頗る六ツかしい、殊に新らしい雪の、午の熱と來たら、我慢がなり兼ねるところへ、高度が加はるのだから、頭痛と眩暈を惹き起す、それに歐洲人の皮膚は、反射熱が殊にひどく、影響するやうである、手や顏は、直ぐ濃い赤銅色に燒け、顏の皮は膨れ、發泡し、「火ぶくれ」が出來る、唇も同じやうに腫れ上つて、怖ろしく痛む泡疹性の龜裂が、生じ、本復するには、一ヶ月を要する、殆んど誰でも見分け難いやうに別人に見える、さうして唇の傷害から、當然齒の神經にまで、痛みが割り込んで來て、是等山岳の探檢者は、前には一向想像もして見たことのない齒の保全を、やたらに心配するやうになる。

顏面を保護するために、白布の假面を被つてみたが、鼻と口には、穴が明けてあるにも拘はらず、呼吸遣ひが苦しくて　結局無用の長物として、拋け出してしまつた、それに、この假面は、非常に不愉快で、反射熱が孔隙を通じて、强烈に燒きつけるから、殆んど堪まらない、これを最つと效力のあるものにしやうとするには、熱帶地方の人たちが、時に用ゐてゐる白い阿麻布に、黑か赤の裡地を着けたら、日光から最もよく、保護されるかも知れない。

印度平原で、一四、〇〇〇尺も、巡回旅行をして、每日朝から夜まで、印度的日光の强い熱に晒され、日蔭の日光ですら、華氏百度以上に達し、しかも顏に格別、保護器を用ゐなかつたが、是等の高山に於ける反射熱のやうに、痛みを感じたことは少しもなかつた。

ウォークマン氏は、七月十八日から、八月十七日

まで、一ヶ月間、約一四、〇〇〇尺から、約一九、〇〇〇尺までの標高の間で、午後一時の日光温度を、觀測し、明細の表を作つてゐるが、それに依ると、日向で最高が華氏二〇四度、最低が一八三度日陰で最高が同六六度、最低が五二度である、山上では空氣が稀薄で、濕氣が少ないため、太陽が強い力で燒ける、さうして光線の熱は、迅速な輻射で、消費され、大多量の氷雪との接觸で冷却される、それ故日陰の氣温が、著るしく低い、即ち高地に於ける日光の直射光線は、殆んど堪えられない程であるが、しかも氷雪は直ぐ側の、日陰地で凝結してゐる、日光が氷雪の面を離るゝや否や、氷結が始まつて、氷に貯成された寒氣が、その凝結力を擁護する、即ち標高が高いほど、空氣が稀薄なほど、太陽の光線が地を撲つ力は大になるが、併し又日中の酷熱から、夜間の大寒に、不意に變化するため、これ等亞細亞地方大山岳の暴露された岩石の、分解作用は、顯著で且つ迅速で、ウォークマン氏等が、登つた山岳の、表面に露出した岩石は、砂岩や結晶岩のやうな、硬い岩石であつたが、指で揉まれて、細砂に分解してしまつたほど、凝固密着の力を亡失してゐたと言つてゐる。

次に呼吸のことを言はう。

呼吸づかひは、寢てゐるよりも立つてゐる時の方が安樂である、二萬尺位な高さの野營で、立つたり座つたりしてゐた時分は、安樂に呼吸が出來たものが、寢たときは、困難を感じた例は、いくらもある、今一九、三五八尺の高さで、寢やうとしたとき、一行は呼吸の缺乏で、おち〳〵寢つかれなかつた、此事實は、もし野營が、二三、〇〇〇尺から二七、〇〇〇尺の高さ、及びその以上に建設されるとするならば、睡眠は血液の缺乏せる酸化作用のために、全然妨害され、干渉せられ、野營地より、翌日高く登ることを、單にこの原因からも、不能に畢らしむる範圍に及ぶであらうことを示してゐる。(最近の經驗に依ると、九人連の登山家——その內七人は歐洲人——は、(上記二〇、〇〇〇尺)より更に二千尺の高さへ野營して、この想察を適中させた。

この高さになると、永久に柔かい冷たい微風が、惡寒を催うすばかりに、上から吹下して來る、殊に日出以前は、足は寒氣のため、酷痛に苦しんで、凍傷を起しはしまひかと心配される、手だけは、羊毛で內部を包むだ、ゴムの手袋（拇指だけ離れて、他は一ツになつてゐる、ベースボール用のグローヴに似たもの）で、暖を保つことは出來得られるが、足を温めることは、別問題だ、釘靴は勿論穿いてるけれど、始終冷たい、我等は內側を毛皮で包んだ長靴を穿いた、皮は着色しないもので、靴下を三枚穿くことが出來る大きさで、しかもその上部の靴下だけは、那威の山羊の毛から製したのであつたが、ほんの消極的効果を、齎らしたに過ぎなかつた。

もし、誰でも三萬尺以上の高山で、足を暖かにする工夫を、發明するものがあつたら、それは登山家のためには、望外の仕合せであらう、吾々の仲間では、かゝる標高に達して、足を持つてるといふ知覺が、殆んど無かつたものがある、斧に力を入れて、足の安全を氣遣はれるほど、ピリ〳〵痛むまで、足をぶんなぐつて、見て、やつと稀薄な空氣の下で、靴を脫いだり、足を雪に擦りつけたりする、勞作をすることを免れた。

ウォークマン氏は、朝の七時十五分に、チョーゴ山の絕頂（二一、五〇〇尺）に達した、氣温は華氏十六度で、微風があつた、十時に第一高峰（二四、五〇〇尺）の基盤地點へ達し、こゝで暫らく夫人と別れて、夫人は十時半に第二高峰ルンマ（二二、五六八尺）の絕巓へ達した、日蔭の温度は、やはり華氏十六度であつた、この高度で、天候は一千日間に僅か一日あるといふやうな、好霽で、午餐は肉の一片と、ビスケットと、乳入チョコレートを、取つたゞけで、苦もなく空腹が滿たされた。

二萬二千尺以上の漂泊旅行では、食事といふことは、小さな役割を演ずるに過ぎない、空氣に於ける酸素の缺乏は、一寸した運動をすることすら、明亮に大儀なことに氣が注く、何もしないで、靜かに座つてゐてさへ、絕えず不安の感覺に襲はれ、屢ば位置を變動して、見たいやうな氣を起しもす

◎雜　錄　高山に於ける寒暑の激變と空氣の稀薄と及び山岳病

る。

ウォークマン氏は、十二時半に、第一高峰ピラミッド、ピークの肩部二三、三九四尺までに達した、眞の絶巓は、猶ほ一千一百尺許、登らなければならず、日は午を過ぎて、その日の中に、絶頂へ達し得られるとするも、野營地に戻り得られる望みがなく、この絶巓で、火氣もない寒氣に、曝露することは、凍死必定であるため、半時間ほど、その地點を逍遙して、三時に第二高峰に達し、又半時間休息して、七時に野營地に歸着した。

近年の說に依ると、山岳病は、氣壓の遞減と、酸素の缺乏に、うまく慣れるやうにすれば、次第に除かれる、即ち或高度から、更により高い、高度へと漸次に、身體を慣らして行くやうにすれば、次第にそれに堪へ得られるやうになるだらうと、いふことであるが、これは事實に基づいた確定說とは、肯ひ兼ねる、否吾人の經驗は、むしろ之れに正反することをすら、敎へてゐる。

一行は、歐洲人十三人、ウォークマン氏夫妻を加へて、十五人で、ヒマラヤへ登つたのであるが、內十二人は二一、〇〇〇尺の高度へ達し、七人が二二、五六尺、六人が二三、〇〇〇尺、五人が二三、三〇〇尺、三人が、二三、三九四尺の、標高へ辿り着いた、只ッた一人が、二一、〇〇〇尺で、山岳病のために、全く參つてしまひ、低地へ送還されるに至つた、他の一人は、前には二三、三〇〇尺に登攀した經驗のある人であつたが、一九、〇〇〇尺と、二〇、三〇〇尺の間で、輕微な懊惱を感じた、併し二〇、三〇〇尺の高度で、辨當（ランチ）は滿足に喰べられた、その他は、何にもそんな徵候を見なかつた、その我々一行は、海の水平線を離れてから、一ヶ月以內に一七、〇〇〇尺乃一八、〇〇〇尺の高さに達し、存外早く登られたが、この標高以上でした仕事が六週間以內であつた、が最高地點では二ヶ月半も仕事をしてゐた。

一八九九年、スコロ、ラを通過するときには、三十五人の人足を連れた、彼等は八、五〇〇尺の高原に住んで、一七、〇〇〇尺位の高地を、往來したこともあつたのだが、第一日には、三時間しか進行せず、第二日目には、一五、五〇〇尺の標

高で、山岳病に弱つてしまつたゝめ、峻嶮に曝露された山側に、野營するやうな目に遇はされた。

一九〇二年、チョゴー、ルンマを登つたとき、器械を擔がせた人夫の一人は、九、五〇〇尺の高原に居住してゐるのだが、一二、五〇〇尺で非常に弱つてしまひ、二日ばかり弱り方が續いたが、その後は回復して、一九、〇〇〇尺まで、我等と一緒に跟いて來た、次の年、この男は一四、〇〇〇尺の野營地に、二週間ばかり吾々と共に泊まつてゐたが、一五、五〇〇尺の標高ある氷河を登るときには、非常に弱り込んで、しまつた。

今回の旅行でも、海岸から高山に侵入した歐洲人が比較的山岳病に當てられなかつたにも拘はらず、平生八、五〇〇尺乃至九、五〇〇尺の高原村落に居住してゐる土人たちが、山岳病で數多く弱り込んだ、尤もこの土人は、バルチ人で、同じ土人でも、蒙古人の血を混交したスル土人は、前者ほどに、ひどく弱つてはゐなかつた。

要するに、山岳病に關しては、下の如くに言へるかと思ふ(一)人間の達し得らるべき如何なる標高に達し、如何なる事情の下に立たされても、いかに疲勞が大きくても、全然免疫されたやうに、感受せぬ人(二)或場合に、一定の標高に達したとき、疲勞の度と、健康の具合に依つて、或は感受し、或は感受せぬこともある人(三)船に酔ふ人が、少し海が荒れると、すぐやられるやうに、或程度の標高まで來ると、常に弱り込む人、等である、この內の(二)と(三)に屬する人々が、高度の常住を、漸次に向上させて、次第々々に、より高い標高に慣れ得らるゝやうになるか否かは、今後の經驗に依つて決せられるものであらう。(小島)

(Fanny Bullock Workman and William Hanter Workman=Ice-Bound Heights of the Mustagh." に依る)

◎雜錄　甲斐駒附近に就て

甲斐駒附近に就て

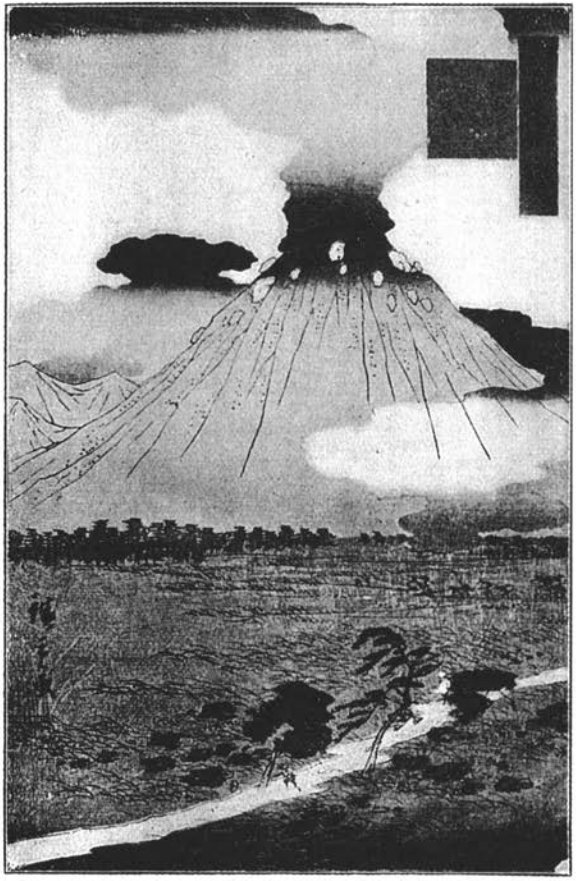
主に先頃刊行された陸地測量部の五萬一圖市野瀨號に就いて、其山名等に對する私見、並に從來の『山岳』に現はれた、此地方の記事の增補、訂正等を記して見やう。

鋸岳を鋸山としたことに就ては、已に前號に梅澤、山川兩氏の非難も載つてゐるが、私も全然同感である、柳澤の人夫は、確に鋸岳と呼んでゐたと記憶する。

鋸岳山脈中の、所謂編笠山に就ては、小島氏も最高峰登攀の記事（八年七〇頁）中に引用せられて、可也重要な地點らしく覺えられて來たから、從來の行きがゝり上、重複の嫌はあるが、一言記して置きたい。

元來鋸岳の一峰に、編笠など云ふ名があるらしいやうになつて來た起りは、七年一三七頁に私が『釜無谷に向へる西北端なる一峰は、圓錐形にして山容穩健なり（山梨縣廳の山林圖に據れば、此山に編笠山なる名稱あるものゝ如し）』と書いたのが始りで、私は只だ山林圖に據つて、右の括孤内の文句を記したので、人夫等からはその樣な山名は全く聞かなかつたのである、此山林圖の編笠山は、釜無本谷と中ノ川の間にあつて、正に市野瀨號の二、五一二米の峰に該當する、梅澤、山川兩氏（八年一七二頁）は、山林圖にある編笠山の位置は、少々明確でないのであるまいかと記されたが、決して左程不明確のものではない、横岳山脈（國界山脈）とは、明かに分れた位置になつてゐる、私は以前は此峰に三角點があるものかと思つてゐたが、それは間違ひであつた、さて小島氏の記事（八年七〇頁）に據ると、同氏は雁木峠（横岳峠と云ふものと同一であらう）から、尾根傳ひに同氏の所謂編笠山に登られ、其處には三角點があつた由である、して見ると此峰は二、六〇六・八米の峰に相違あるまいと思はれる、小淵澤邊から鋸岳を眺めると、編笠山と最高峰の間には、二つ許りの隆起がある、三角點のあるのは、此峰の一つで、それが即ち小島氏の編笠山であるであらう、要するに小島氏の編笠山と思はれた峰は、私の記した編笠山とは、全然別物であることを斷言し得られるのである、編笠山と云ふ名は、どの地方で呼んでゐるのであるか、八ヶ岳にも同名の峰があるから、そのやうな名が無いとも限らない、後に此附近に遊ばるゝ方々の調査を願ひたい。

山林圖には、丁度横岳と同じ邊に、矢張り横岳



信州淺間山（二代目廣重筆）

小島烏水氏藏



三河鳳來寺山（初代廣重筆）

小島烏水氏藏

と云ふ名がある、これは如何にも、その名の如く鋸の主脈から横に分れた山脈であるからであらう、又た鋸の最高峰の附近に、熊穴と云ふ名が記されてある。

種々の方面から撮影した寫眞を比較して見ると、鋸の最高峰と三角點のあるらしい峰との高さの差は、大約此三角點の峰と編笠山との差（約九十五米）に等しいが最高峰は二七〇〇若しくは少し以上となる譯である。

鋸岳の東方（駒の西北）に二、五九三米とあるのは烏帽子岳である、約二六〇〇米と豫想したのは、大差なかつた、其又東方（駒の北方）に岩の露れた記號の處は、南北坊主であらう。

大岩山と云ふ名は、實際その様な山名があるか、どうかは多少疑問と思ふ、私の人夫等は、あの岩壁をゼンコの大岩と呼んでゐたが、峰の名はつい聞かずにしまつた（七年一三五頁）。雨乞岳は、山林圖と一致してゐる（七年一三四頁）。鬼の窓と云ふのは、甲斐國志其他に見える、濁川の上流で、白須から五里となつてゐる。

◎雜錄　甲斐駒附近に就て

駒の頂上附近には、別段記すこともないから南方に移る。

駒から仙丈に連なる山脈の中、仙水峠への分岐點に當る峰（約二、七五〇米）は大槻禎郎氏の記事（七年四五二頁）に據ると、駒津岳と呼ぶらしい、此駒津と云ふ名は、私も作藏の手紙（これには駒津峰とある、七年一八頁）で知つてゐたのであるが、どの峰であるかは、確に分らなかつた、駒津と池の平との間にある峰は、錫杖岳と云ふ由であるが、作藏の手紙には、駒津峰の『北峰をシヤクジヨケタケと云ふ』となつてゐる、これは多分南北を誤つたものかも知れぬ、大槻氏は錫杖の方が、駒津よりも少し高いと思つたやうに記されたが、これはどうも誤らしい、私の見た處では、駒津の方が、餘程高いと思つた、地圖にもこの方が百米許りも高くなつてゐる。

仙水峠は、此圖では凡そ二、三五〇米許りになつてゐる、七年六頁に、仙水峠を二千米位と記したのは取消す、あの旅行のとき、駒の頂上から非常に下つたやうに思つたのと、大武川方面が、霧で

山　岳

全く見えず、宮の頭や、黑戸山などゝ見較べが出來なかつたので、あの樣な誤に陷つたのである、今想ひ出して見ると、峠の上の岩の表れた、可也高山的な景色は、ゴーロ澤頭と赤薙の頭との間の鞍部に餘程似て居るから、恐らくあれ位の高さはあるもので、地圖の高さは畧ぼ正しからうと思はれる、高頭氏の『白峰山脈實測圖』では、二、五〇〇米以上となつてゐるが、これは勿論高きに過るに違ひない。

アサヨ岳（朝輿岳）は、アサヨ峰となつてゐる、三角點の記號には、鳳凰山となつてゐたそうであるが（五年六〇五頁）、陸地測量部が、製圖のときに、此誤名を撤回されたのは、大に喜ばしい事で、又た勿論當然であらう、そこで岳と峰との字義に、どんな區別があるのか、私は詳しいことは知らぬが、此圖に峰となつてゐるのは、多分薗安でアサヨノミチと呼ばるゝことがある爲めであらうと思はれる（六年三二六頁）、然し山梨縣廳の山林圖には、アサヨ岳となつてゐる、又た柳澤邊では、別段岳とも峰とも言はず、只アサヨと云つてゐるらしい、兎に角峰でも岳でも問題は、此較的小さく、アサヨの名があれば、それで宜しいとして置かう、尤も私は矢張り岳の方を使用する積りである。それからアサヨを朝輿と書くことは、以前記した通り（七年一〇頁）名取運一氏から、聞いた處であるが、同氏も云はれた如く、宛字だそうであるから、大した權威は無いものかも知れぬ。さて茲に面白いのは七年一一八頁高頭氏の記事中に挿入されてある『新刊日本輿地路程全圖』（文化再刻）である、此圖には正しくアサヨ岳と思はれる山に朝湯岳と名がつけてある、今日のアサヨが朝湯の轉訛であるか、それとも朝湯が已に宛字であるか、その邊は一向判らぬが、舊來刊行の地圖に、此山の名が記されてあるのは、恐らく此古圖が唯一であるまいかと思はれるのである。元來アサヨと云ふことは、何の意味であるか、淺學な私にはトテモ判らない、『甲斐國志』には、此山の記事のみならず、それらしい名さへも全く記されて無い。

七年九頁に奥栗澤（大武川）の頭が、多分アサヨに當るらしいことを記したが、其後取調べた處

に依ると、少くもアサヨの最高點は、此澤の頭でないらしいから取消す。

市野瀬號は、アサヨを東端として終つてゐる、駒ヶ岳山脈は、アサヨから一時低くはなるが、相當に高い山脈を造つて、鳳凰山塊に連つてゐる、韮崎號が近い内に刊行されたら、又た何か記す材料があらうと思つて、今回は之で擱筆する。

（辻　本）

越中鯉鮒岳に就き

嘗て自分の紀行にこの山のことを記し、その讀み方や、名のおこりに就て、山川氏の音讀說——リフ即ち立山の轉訛ではあるまいかとの話を紹介し、大體に就て疑問を付して置いた處、其後小島氏の音讀說贊成の意見も出、種々考證されたのであります。そして小生は、農商務地圖に據り、コヒフナと訓して置きましたが、山川氏が横文字廿萬を見られて、その名の無いことを注意されたので、自分の思ひ違ひかと思ひましたが、更に四十萬を調べると、明らかにコヒフナとありました。

それで今年立山附近登山の序に、山麓芦峪寺で、この山のことを尋ねましたが、知つてゐる者もあり、知らない者もありました、併し或二三の老翁の言によりますと、やはりコヒフナ岳なのであります、しかもその名の起因は、殘雪に基づくことがわかりました、位置も今迄知られてゐたのとは、少しく違ひます。（之は後出）。即ち鯉鮒岳は、芦峪寺から有峰の方へ行く途中の山で、春雪解の頃になると、山腹に鯉や鮒の形をした雪を殘すので、この名があるといふのです。この雪が作る種々の形から、山の名が起るのは、各地にその例があり、山麓の生民の悠々とした心持が、直接に生きてゐて、面白いと思ひますが、この土地でも、その鯉鮒岳ばかりでなく、まだ「う」の字谷などいふのがあるさうです、言ふ迄もなく、その谷には雪がきまつて「う」の字形に殘るのださうです。

最後にこの山の位置ですが、この山を廣く紹介した地圖の農商務廿萬四十萬の位置と、今いふ土地の人の指すのとは、大分違ひます、一方は立山

の南に續いて大鷲岳などの南隣にあり、所謂五色ヶ原の一部か、或は越中澤岳にでも當るやうに考へられるのですが、一方のいふ所では、有峰芦峰寺間の山、即ち藥師ヶ岳續きの東笠西笠などに當ることゝなるのです。何れが正しいかといふに、無論この土地の人のいふ方を採るべきものと思ひます。尤もその山だといふ確かなことは、實際見屆けなければわかりませんが、農商務地圖にある如き位置でないことは、略察せられます。一體然らば、何故同圖がこんな所へ、この名を持つて來たものかといひますと、これは木暮君の說ですが、元來この名を書きものに表はしたのは、越中遊覽志が始めだらうといふのです、木暮君は態々それを手寫して、送つて呉れましたが、それにはかうあります。

四方を見渡すに立山は爰にては東北に當りて、なほ仰ぎ見る程なり、北より西に連りて、別山の山脈及大日ヶ嶽、早乙女嶽を見るに、皆弟姪の如し、早乙女嶽、俗には小大日といふ、南より西に續きたる山脈は、稍遠きを國見嶽とし、次で近きものを天狗平とす、少く南に偏りたるを龍王嶽とし、其半腹に平面の地あるを、五色ヶ原といふ、半腹以下斷崖峻峭にして、狀甚だ奇抜なり、なほ其南に列るを、鯉鮒嶽とし、やや距離ある一峰を藥師嶽とす、龍王嶽の西天狗平の南なる直下の谷底に、一泓の水湛へて藍の如く、見ゆるを、苅込の池とす、眞川の源實に此に發す、池の徑百弓ばかり、其深さ測るべからず、霖雨旱魃にも、水增減することなく、相傳へて神物の宅する處といふ云々。

著者は明治十八年八月十二日淨土山の頂に立つて、この記述をしてゐるのですが、見らるゝ通り、明かに誤謬と思はれる事柄もあり、一體が曖昧です、そして鯉鮒嶽は如何にも五色ヶ原續きらしくされるのです、これが農商務の地圖の位置と、略一致します。それ故、この遊覽志の記述を基にして、農商務の地圖に、その位置を定めたのだらうといふのです、そんな事かも知れません。

兎に角多少疑問であつたこの山が鯉鮒嶽（コイフナ）であつて、芦峰寺有峰間の通路に當る山であつて、その

名の起因は、殘雪にあるといふことが略分りましたので、一寸書いて置きました。猶詳しい事は追追分る機があると思ひます。（中　村）

再び北アルプス瑣談に就て

山のことで爭ふのは面白い。どんなに激しく爭つても、其れは單に事柄の爭ひに過ぎなくつて、人格問題などに立ち入つたやうなものとは、全然性質を異にしてゐるから、御互が聊も感情を害せないことは、明らかな事實のやうに思はれる、などと云ふ恁麼勝手な理屈を付けて、執念くも今一度述べさせて頂き度いことがあります。それからまた爭ひになつて居らん事どもを、併はせて記述させて貰ひます。

一、不動堀澤岳などのこと　八年一號一五八頁上欄に於て、中村氏の「不動堀澤ノ頭」は私の「東澤ノ頭」と同一であるといふことなどを伺つて、非常に面白味のある事實を得たやうに存じました。あの御說は、如何にも御尤だと思ひました。所で同じ頁に、どれが不動堀澤の頭に當つてゐるかは、堀澤を溯つて見れば、判然と云ひ兼ねるから、不動堀澤の頭、又は岳なる名は、確かな調べが付く迄、用ゐずに措くことが、然る可きであらうとありますが、然しその澤の發源する蜂を、確めるには、必ずしも堀澤を溯るといふ方法を採るに限つたことは無いので、能くその地貌を觀察し得られるやうな、箇所から目擊しても、分ることゝ思はれます。さうして堀澤の發する峰が、確かめられた時には、御說を換言致しまして、最早不動堀澤なる名を用ゐることが、然る可きであらうと存せられます。

所で私が舟窪岳から不動嶽への脊梁を通りました折、東の脚下に深裂する不動澤へ落ち込む所の、堀澤の源頭を爲す峰を、瞭らかに認めましたが、その峰こそは、私の申す不動堀澤岳で御座います。尙本年（二年）の夏、針木越の途次、大出を通りました時、丁度兵三郎に出喰はしましたので、道傍の草の上に尻を下ろして、暫く話を交はしましたが、私の申す、その岳の大きい特色ある巓が、

遠山家の前から、明瞭に仰がれましたので、私はそれを指して、不動の堀澤はあの岳から出て居たやうだが、あれを不動堀澤岳と云つたら可いなからうか、誰れにも解らないだらうかと申しましたら、彼れの答に、「それや解る所でねえ。獵に出る者だつたらば、へえ如何なこと、それで通じますに。何んしろ御前さあ實地に見て來さしたで、間違は御座んしねえだ」。彼れのことですから、幾分御上手はあつたかも知れませんが、不動堀澤岳なる名稱を以て、その峰を呼ぶことに、全然同意して居たことは、事實のやうで御座いました。それから平小舍で品右衛門翁に對して、更に此話を持ち掛けました所が、翁も大賛成だと云ふやうな意味の答をしました、序乍ら、劃物岳に就いて一言申しますが、八年一號一五七頁下欄に於て「ノ頭」を岳と改める云々と、仰せられましたけれども、「ノ頭」が爾く嚴なる意義を以て、從來通用して居たものとは、どうしても思へないやうで御座いますっこのことも、品右衛門に話しましたら、劃物岳といふ名で、充分通用もするし、紛らはしいことも無いから、無論さう云つて呼ぶのが可いと申しました。小鷲のことも、詳細話しましたが、さう云ふ名を付けられたら、紛らはしくもあり、又一向俺等には解らないと申しました。——勿論私は品右衛門、兵三郎、又吉、玉作位な少數の山の人々が是認した丈けで、絶對の權威を認め度いとは思つて居りません。

一、位置のこと

陸地測量部五萬分一地形圖に據つて、兎に角私の考へを、一と通り茲に述べさせて頂きませう。立山圖幅の東南隅に近く、蓮華岳から南へ、國境線を見て行くと、二、五五一米の黑點が眼に着きます。私の申す七倉岳の絶巓は、此れで御座います。大町邊から仰いで、小凜々しい輪廓の、二つ頭になつた峰（實際は三つ頭）土地の人々が、七倉岳とか乘鞍岳とか云つてゐるその峰頭に立つと、丁度この地點になる譯で御座います。尙國境線上に眼を辿らして、少し許り西南に向ひますと、岩石の記號の爲めに、國境線の切れた部分が有ります。中村氏の地圖の名稱に據りまして、此の近くの鞍部を、七年二號六二

頁で、七倉乘越と申しました。國境線は尙西南に向つて、急に西北へ轉向する所から、傾斜の至つて緩漫な狹長な峰頭が、南に向つて伸びてゐる、その南端の稍低い所に、二、四五三・五米の△標が印してあります。これが不動堀澤岳と私の申した山です。最高點が頂の北端に在ることは、七年二號六五頁に記るして置いた通りです。但し私は頂を南の端迄辿つて見ませんでしたので、三角標は氣付かずに過ぎました。

次に國境線が、西北から眞西の方向を取つて行くあたりの、同高線を注意しますと、不動堀澤の背筋が、二、二〇〇米線の所迄下つて行つて、鞍部をなした所から更に西へ、二、三二〇米線迄登つて、峰頭の形をなした部分があります。此の山を私は東澤ノ頭と申しましたっそして今云つた二、二〇〇米線の鞍部を、七年二號六七頁最後の行で、無名の鞍部と致して置きました。東澤ノ頭から尙同じ國境線上を西に辿つて、二、二四〇米線迄行きますと、又鞍部になつてゐるやうに記るしてあります。中村氏に據りまして、七年二號七一頁で、舟窪乘越と致したのは、此處で御座います。尙も同じ線上を西に向ひまして、二、四四〇米線の峰頭迄眼を辿らしますと、其處は舟窪岳と申した地點に相當致します。それから以南の脊梁線に就きましては、もう申し上げる程のことが御座いません。

三、高瀨天上澤のこと　七年二號一五四、一五五頁で、天上澤へ這入る貧乏澤（當字）のことに就いて、同年一號一四八頁の推測圖に關し、御非難が有りましたのに對して、同年三號一四八、一四九頁で、大西又吉から聞いた時の模樣の概畧丈けを、聊か記述させて頂きましたが、更に再びこれに關して、申し述べ度いことが出來て參りました。

本年（二年）の夏、針木越の出立前、大町對山館に於て、又吉と山物語の折、このことを持ち出しまして、「山岳」を讀み聞かせて說明をしました所が、彼れは彼れの以前、私に敎へた事柄が、決して誤つて居らぬと言ひ張つて承知致しませぬ。若しお疑いの方が有るなら、實地にお連れ申して、

◎雜錄　再び北アルプス瑣談に就て

口元貧乏から中貧乏、奥貧乏の澤をお目に掛ける。何んしろあの邊は、俺が何遍も殺生に這入り込んだ處だから、自宅の裏の勝手を知つてる程能く覺えてゐる。それは飛んでもないことだ。「その爭ひなら、へえ俺ら何處でもお引受け申さす。」と隨分力んで居りました。――福島宗八は氣が觸れて、昨年の夏、鹿島の奥の山の中で、首を吊つて死んださうですから、遇つて確める譯には參りませなんだ。

それから平小舍で品右衛門に、其れとなく此の事を尋ねましたら、翁の諄々と說明した言葉が、又吉の說明と全然一致して居りました。そして翁は更に附け加へて申しますに、昔某なる男が、節の無い良材（男の名も材名も忘れました）を伐り出して、大に儲けようと、あの方面の山中に這入つて、伐木事業に從事したが、思はしく行かないで、却つて貧乏をしたといふ所から、貧乏澤の名が附いたんださうですと。

序に一と言申し添へますが、槍岳△點近くから落ち込んでゐる澤、即ち天上澤の源の名を、翁は槍窪（やりくぼ）と申しました。

四、高瀨瀧の澤のこと　七年三號四八五頁記載の模式圖へ、僭越乍ら少しく補ひの說明をさせて頂きます。資料は品右衛門、兵三郎及び又吉の三人から、業と別々に聞いて、一致した物を撰びました。お讀み下さります方が有りましたら、陸測五萬分一槍岳圖幅と御對照を願ひます。

高瀨の本流と分れ、瀧の澤に沿つて溯つて行くと、左手から「東澤」といふのが來る。私の考へでは、此の澤は餓鬼岳の尾根續き、池田圖幅に及んだその尾根の北端、一、九〇八・八米△點の稍北方なる鞍狀地點の近くから、發するものらしく存じます。

東澤のごうの少し手前（北方）、上流に向つて、左手に「化物屋敷」といふ地點があるさうです。（此の密度の地圖では分りません）そこは極僅かの平をなして居て、今何物も殘つてゐないさうですが、昔木挽が小舍を立てゝ、毎日起臥してゐた所が、或夜女の化物が現はれたんだとか云ふことですと。

「どう」から少しく溯ると、右手から「野口澤」が這入る。これは地圖に黒線の入れてあるものでせう。それから上流に向つて行くと、右から「新助澤」(當字)が來る。これは野口澤東南の尾根と、一、五三三米の黒點ある尾根との間にある、窪みが其れらしく思はれます。この澤の源近く、鳥渡右手(上流に向つて)の尾根へ登ると、「鍋小屋」といふ地點があるさうです。今は何もなく、唯ほんの尾根の一部に附いた名に過ぎぬといふことです。兵三郎からは、鍋のやうな一枚岩が有ると聞きました。

新助澤の「どう」から少し溯ると、左手から「しの澤」といふ小い澤が落ちる。模式圖の「赤瀧」とあるものが其れでせう。五萬分一圖の崖の記號の入つた所らしく思はれます。此の澤の「どう」から直ぐ上流に「つばくら澤」が右から來るのに出喰はすさうです。地圖の黒線ある澤が、それに違ひなさゝうです。

本谷の上流は、「小舍の澤」といふさうで、その源頭附近から、左手の高い所へ登ると「蕗畠」(當字、ふきばたけ)と云つて、稍平らな箇所が有ると聞きました。

今度は高瀬本流と、瀧ノ澤との「どう」から、本流に沿つて少しばかり溯ると、野猿澤の「どう」へ出る迄に、「土あらし」と稱するのが、左手から落ちるさうです。林道の拓ける以前には、このあらしを、へつつたものだと云ひます。

五、高瀬東澤のこと

この澤に就いて少少記るして見ませう。資料は前項記載の三人から聞いたものです。偖高瀬本流から分れ、東澤に沿つて溯ると、最初右手から來る澤を「縦あらし」(當字)と云ふさうです。其れから又少し行くと左から「一ノ澤」が落ち込む。これは大分大きい澤で、そのどうの對岸(東澤の下流に向つた左岸)に、段のやうになつた小さい平がある。これを「おけさの段」と聞きました。昔おけさといふ女が發狂して、何處かへ出奔して了つたので、里の人は驚いてこの山中へ、足跡を尋ねつゝやつて來たらば、此處にその狂女が居たと云ふ。(私の思ふに、その女は多分「きえ」とか「けい」とかいふ名だ

つたんでせう。）

一ノ澤に這入つて少し溯ると、右から「あほり」といふ小い澤が落ちる。尙溯ること暫くで、澤が二分する。右が本谷で、左を「おやぢ」といふ由です。

更に東澤本流を暫く溯ると、左から「二ノ澤」が來る。それから僅かの上流に、右から「ちせむ」といふ小い澤が這入つて、その少し上流に、今度は左から「あだけ」と云ふ、名の表はすやうな暴れた形狀の澤が落ち込み、尙その上流に同じく左から「くるひ」といふのが合流し、その上流少許のところに、右から「小澤」が、そして其のまた上流に、同じく右から「大澤」が合し、本谷は燕から餓鬼へ繋がる尾根の、凹鞍部へ向ふんだと聞きました。

六、高瀨北葛澤のこと　近來此の澤へ獵に這入り込む人々は、絶無の有樣で、細かしい澤の名稱などを知つて居る者は、品右衛門を除いて、他にあまり無いやうです。その理由は、峻嶮なが爲めと云ふよりも、獲物が昔のやうに、無くなつたからださうで、今では正月の少數の休み日を利用して、遊び半分のやうに、ほんの小口の邊迄出掛ける連中が、たまさか有る位に過ぎないさうです。以下此の項目中に記述する資料は、全部品右衛門から聞いたものです。

高瀨川と分れ、この澤を溯ると、暫らくで右手から「一ノ澤」が這入り、その一寸上流で、左手から「びりむき」といふ小さい澤が落ち込み、その又上流僅かのところに、左から「もち小屋澤」といふのが合し、その上流少許にして、右から「いら窪」といふ、澤とは稱し難い程の、小つぽけな窪が落ちる。此の窪の落ち込む所、本流は斷壁を削り立てゝ「檜のたる」と呼ばれるたるになつてゐる。

檜のたるから少し溯ると、右から「深澤」が合し、そのどうの近くの上流に、左手、鳩峰からも同じ名の「深澤」が合する。この鳩峰の深澤は、源近くに「臼の目」と云ふ所があつて、其所には臼の目のやうな幾條かの薙が扉列直立し、獵夫もそれを攀ぢ登ることが出來ないさうです。そして

若しも、しゝが其れへ逃げれば、最早如何なことがあつても獲るわけには行かないといひます。

深澤の「ごう」から尚暫く本流を溯ると「七釜」といふに出喰はす。其所は瀑布の潭下に深を湛へ、潭水溢れて更に瀑を落とすと云つたやうな具合に、澤山の瀑布と深潭とが、交互に連續をしてゐて、潭はどれも絶壁に圍まれて、釜の如うな形をしてゐる。この部分が、澤中隨一の難所で、溯行不可能ではあるが、冬は勿論のこと、夏でも横を廻れば、登つて行けぬことは無いさうです。(七年二號五一頁七行目の記事の意味を茲で訂正致します。)

七釜の上流少し許りにして、右から「二ノ澤」が這入り、その上流稍遠く、右から「三ノ澤」が合するさうです。二ノ澤、三ノ澤、及び左右の深澤は、支流中の大いなるものだとか聞いたやうです。

七、名稱のこと

よそもの澤　高瀬湯俣の一ノ澤と空谷(カヲ)との間、空谷に近い方へ、硫黄岳から北流して落ちる澤の名です。尚七年三號一四九頁上欄に於いて、やすけ澤の疑ひを書きましたが、あれは誤りで、中村氏註記が正確ださうで御座います。そして縦澤は一帶にごうとう續きで、惡い所だとか聞きました。

口元薙(當字)　高瀬不動の大薙澤(七年一號一五〇頁臆測圖及び同年三號一四八頁上欄八行目以下數行參照)が、不動澤に合する少し下流に於て、不動岳の南の肩から、殆ど東の方向を取つて落ち込む澤。陸測五萬分一鎗岳圖幅に據れば、不動岳の「嶽」なる文字の近くに、薙の記號があるのは、この澤の源附近かと思はれます。

尻無澤(當字)　黒部東澤に這入る澤の名として、六年一號地圖に載つてゐますが、平小舍で品右衛門と又吉との云ふ所に據ると、この名の澤は黒部の本流に落ちるさうです。丁度熊ノ澤(當字)のごうの些つと下流で合流するんだと云ひました。此の澤は名の示す通り、源は究め切れない程幾條にも廣く擴がつてゐるとかです。

小澤(こざは)　黒部東澤の一ノ澤と二ノ澤と

◎雜錄　再び北アルプス踪談に就て

の間に、西方赤牛尾根から落ちる小い澤です。たるが澤　黒部東澤、三ノ澤のどうの上流に於て、赤牛絶頂△點近くから發し、東澤に合する澤。六年一號地圖にあるたるが澤に就いて、前記兩名の云ふ所に據ると、如何にも其處らしく思はれる邊に、「たる」を爲した澤が懸つてゐて、ざくを曝露してゐるけれども、名は無いさうです、唯兵三郎は其れを「四ノ澤」と呼んで度々客を案内して來たと、自身で云つて居ました。それで兵三郎に從いて其處を通つて來た人足共は、いづれも四ノ澤と云つて話をして居ます。

陸測五萬分一鎗岳圖幅を見ますと、「ざく」を爲した澤の記號が、南北に二條あります。一つは三岳△點の西方から發し、概して西の方向に落ちて行くもの。も一つは五郎岳△點の西方から發し、標式的のカール（六年三號一三頁）の北方を、殆ど西北に向つて落ちるものです。さうして此の問題の澤が、果してどちらに相當するか、分り兼ねますが、或は兵三郎の四ノ澤が北方のので、六年一號地圖のたるが澤（この名稱は誰れかゝ新名を附したのかも知れません）が、同圖記載の位置から見て、陸測圖の南方のかも、分らないと、思はれぬではありません。兎に角、此附近の精細なる調査の報告が、望ましいことゝ思つてゐます。

中小屋澤（當字）　黒部東澤の、前項記載四ノ澤の「どう」の少し上流に、西方から落ちる澤。源は黒岳と赤牛との鞍部附近、僅かに赤牛へ寄つた所から、發するやうです。奥のたる澤へは、これの尾根くり返しを西へ下るんださうです。

中木挽澤　黒部川平小舍南方なる口元、木挽澤と奥木挽澤との間に、もう一本、この名稱の澤が有るやうです。

七倉澤「二」　の項に於て記るしました七倉乘越から北流する澤。つまり山梁の兩側に同名の澤が有る譯です。

北葛澤　北葛乘越附近から發して、針木澤に合する澤。これも山梁の兩側に同名の澤が有る譯です。七年二號五五頁に、此れを針木本谷の如く記述したのは、間違つてゐますから、訂正致します。

唐松澤（當字、落葉松澤？）　鹿島川の矢澤に

合する澤で、源は小冷の頭の近くから發します。

大ごう澤、小ごう澤　鹿島川冷の「ごう」の奥にあるもので、六年一號地圖の「ゆう」とあるは間違らしく思はれます。

長ざく　鹿島大冷澤へ、其の右岸から落ち込む澤で、上流は長い「ざく」になつて居て、水が無い。源は冷の池の南方近くから發します。

鎌尾根　鹿島大冷澤の、一の澤と北俣との間に、突き出た尾根です。鹿島槍へは前項の長ざくか、此れかを登るんです。これを登ると、布引ノ頭の少し上へ出られるやうです。

それから陸測圖の布引岳は、六年一號以來、我達の取扱つて來た布引ノ頭と、大分位置が違ふやうに思はれますが、あれでよろしいのでせうか。或は布引岳と云ふのは、あの山梁に、比較的廣く與へた名で、私達の布引ノ頭と呼んでゐる、頭のぼつちり尖つた、あの瘤のやうな隆起とは、別なのではないんでせうか。これは私の疑問です。

佐八の池（當字）　鷲羽の池を、昔から恁う呼んで來たんださうですが、つい近頃になつてから、山登りの方々が、鷲羽の池と云はれるやうになつたとか聞きました。昔――と云つても、明治維新から大分後迄、この池の水量は、非常に多く、溢れんばかりに湛へて居て、氣味の惡い程物凄かつたさうで、その頃は、巨大な蛇が池中に棲んで居たと言ひ傳へてます。池の主だとか。

品右衛門が十九歲頃の夏の土用に、その池畔で大きい熊を獲つた時のことは、未だに忘れられぬとか申しました。（榎谷徹三）

山岳地の蜃氣樓

蜃氣樓を、文字通りに解釋すると、蜃の氣が作つた樓閣といふことになるので、無論空想的な支那人が、言ひ出したのである、支那人は蜃氣樓の外に、之を海市とも、山市とも言つてゐる、海市は海上で見るからで、山市は山中で見ることもあるからであらう、併しながら既に蜃が氣を吐いて作るといふことが、假定せられてある以上、蜃氣樓が自然海のものにされるのは、止むを得ないこ

とで、殊に海國の日本人は大概さう信じてゐるらしい、江戸時代の國學者、石川雅望の書いた「寢覺のすさび」といふ本には、蜃が必ずしも蛤とは同一物でないことを考證して「海中にて氣を吐くものは、蛟の如き形したる、蜃といふものなり、大なる蛤をも、蜃といへるより混じて、おぼえたる人の蛤の上に、樓臺の形を畫きたるを見て、蜃氣樓なりと云へるは誤なり」と見て來たやうなことを言つてゐる。又菊岡沾凉の著寬保三年の版本「諸國里人談」第四卷には「島の遊」と題して、海上では夜間蜃氣樓の現出を見る由に記してある博覽强記の小山田與清も「松屋筆記」の中で、支那の雜多の古書をいろ〳〵引用して、蜃氣樓を辯じてゐるが、要するに海中から氣を吐くものが、蛤であるとか無いとかの論で、氣象學的に、空氣の密疎とか光線の屈折とか、反射とかに、目をつけないまでも、やゝ近い觀察を下したのは、さすがに橘南谿の東遊記（寬政七年版）である。

同書には越中魚津の蜃氣樓を、先づ記述して、蜃氣樓の起る原因を、蛤にありなどいふ說に、目もくれず、「魚津は北海に臨める地なるに、向ふの方、七八里と思ふ程に、能登國の山を、屏風の如くに見る、魚津の海は東よりの入海なり、海中より蒸登る陽氣、向ふの山に映じて、色々の形を見るなり、向ふに當なく、數百千里見晴したる大海にては、陽氣登るといへども、向ふの當なければ、映ずることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ、伊勢の桑名の海にも、三十年五十年の內には、たま〳〵蜃氣樓結ぶことありといふ、是も向ふに、尾張三河の山を受てあるゆゑなるべし、又安藝國にても偶はありと云ふ、是も向ふに山あり」と喝破してゐる。

日本で蜃氣樓の名所は、越中魚津が第一らしいが、つゞいては伊勢、遠江、安藝、周防など、いづれも海邊の土地ばかりである、又上總一の宮の海上にも、蜃氣樓があらはれたことも、新聞に見えた。そこで明治四十三年頃の「慶應義塾學報」記者は、本邦の蜃氣樓に就ての、古今の記錄を合せ考へて、蜃氣樓發生に必要なる條件として(一)海上(二)靜かなる天氣(三)霞める日(四)朝にも夕にも、出現

すること、そして就中(一)海上と(二)靜かなる天氣を、最も必要缺くべからざるものゝやうに認定してゐる、その中で、海上を必要と認める理由は、海水は陸地よりも冷たく、隨つて海水に觸れる氣層は、濃密となつて、屈折の度を加へ、光線をして、早く全反射の臨界角に達せしむる原因になるからであると、いふのであるが、屋氣樓が本邦では、海上に多く起るといふことは、或は言ひ得られるかも知れぬが、陸上でも屋氣樓を見られ得ることは、小學校時代にナポレオンが、埃及遠征に、沙漠の上で、屋氣樓を見たとかいふ講談を聞いたやうに記憶してゐるが、日本の山岳地、即ち海岸線を一寸も有してゐない上野國に、明治四十三年一月廿七日に起つたのなどは、その好例である、當時の新聞記事を抄出すると、先づ左の如きものである。

栃木縣下都賀郡大平山麓に當り、二十七日午後三時五十七分、折柄一天晴れて、微風だもなき空中に、壯麗なる一大パノラマ樣のもの出現し、其左方には、白雪に掩はれし峨々たる山岳聳え、又麓には長さ三四尺と思はるゝ籠目形のもの、連なる間を、大河流れ、附近には數戸の家屋らしきものさへありて、奇恠なる現象を呈したるが、僅か一分餘にして、消え失せたり、之を見たる附近各町村の者等は、いづれも眼を駭ろかして、何事ならんと噂し居たるが、右は壬生附近を流るゝ黒川が、雪解のため增水し、高温に會ひて、水蒸氣の著るしく昇騰したる折柄、光線が之に反射したるものにして、前記の籠目形は、黒川岸の蛇籠、左方に現はれたる山岳は、日光黒髪山の山脈なるべしと云ふ。

とある、この新聞の說明は、頗る要領を得ないが、さういふ山岳だの、溪流とおぼしきものなどが、「海無し國」の空中にも、屋氣樓となつて、出現したことだけは、事實らしい、日本の山岳などは、海に近いところもあり、靜かな天氣や、霞んだ日も、登山家のよく經驗せられるところであるが、夏といふ登山季節が、屋氣樓の製作に、便宜の少ないためか、それとも一年に一回、あるかないかの現象だから、うまくぶつからぬためか、山中で、屋氣樓を見たといふ人を、ついぞ聞いたことがな

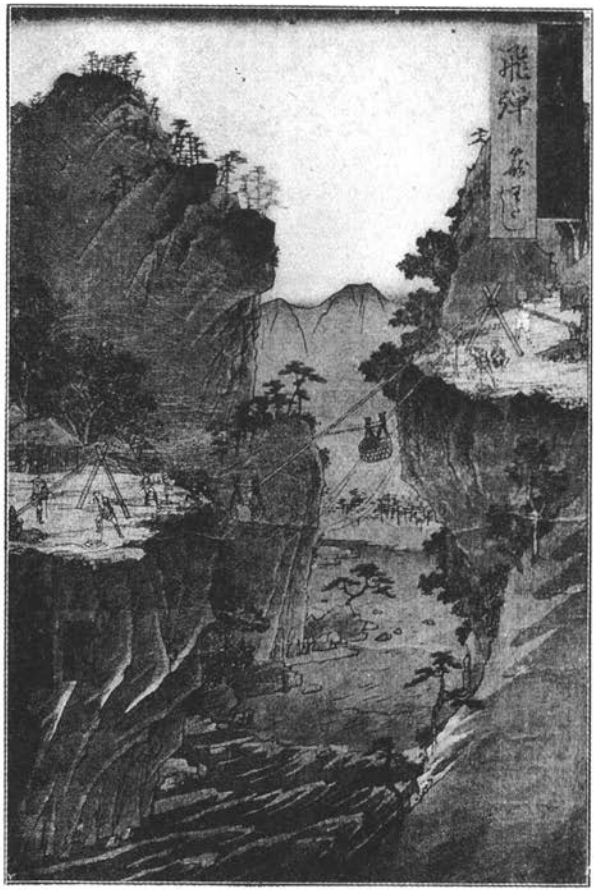
、併し海上でなくとも、見られるものであるから、いつかは誰か見られて、委細を報告せられる日が來るであらふと信ずる。（山岡恒良）

謠曲に現はれたる山岳

○山岳に關係せる謠曲としては、別にないけれ共、文章中には時々發見する事がある、然し謠曲の作家が、即ち佛法の信者であるから、從て神佛又は天狗等に關連せる山岳に限られて居る事は、無論である、今試に一二を拔書して見る事とする、

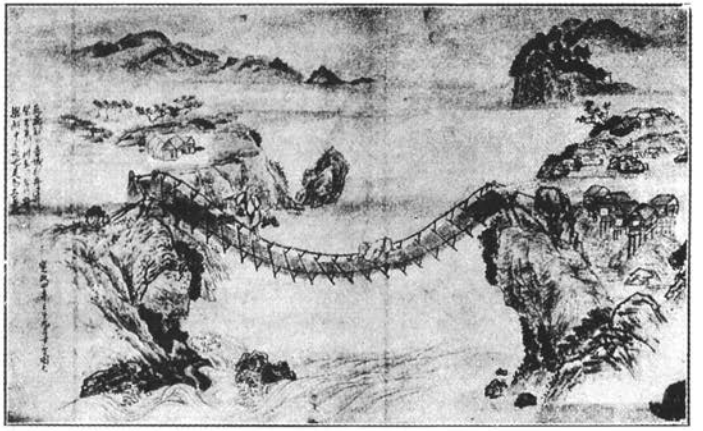
○善知鳥の一節『扨も吾此立山に來て見れば、まのあたりなる地獄の有樣、見ても恐れぬ人の心は、鬼神より猶恐ろしや（して見ると山岳會員なぞは、たしかに鬼神以上の人なのでがなあらう）山路に分つ、ちまたの數、（彌陀ヶ原、追分の邊を云なるべし）多くは惡趣の嶮路ぞと、涙も更に留め得ぬ、慚愧の心時過ぎて、山下にこそは、下りけり』古人が高山を畏敬して居た有樣が思はれて面白いではないか。

○花月の一節『扨も我筑紫彥山に登り、七つの年天狗に、とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ、まづ筑紫には彥の山、（是より天狗に誘引せられて、あるきし山々を云ふ、即ち皆天狗の住む山々なり）深き思ひを四王寺（四王寺山は、肥後の國玉名郡にある由）、讃岐には松山、（阿野郡にあり）降り積む雪の白嶺、（松山の內なり）さて伯耆には大山（八橋、汗入、日野の三郡を堺せる山）丹後丹波の堺ひなる、鬼が城と聞きしは、（大江山の事）天狗よりも恐ろしや、さて京近き山々、愛宕の山の太郎坊、（京都の西北にあり、太郎坊は天狗の名）比良野の峯の次郎坊、名高き比叡の大嶽に、すこし心の澄しころ、月の橫川の流なれ、日頃はよるにのみ、見てや止みなんと眺めしに、葛城や高間の山、（大和河內の堺）山上大峯釋迦の嶽、（山上、吉野の奥釋迦は吉野の南）富士の高嶺にあがりつゝ、雲に起き臥す時もあり。（鄕）

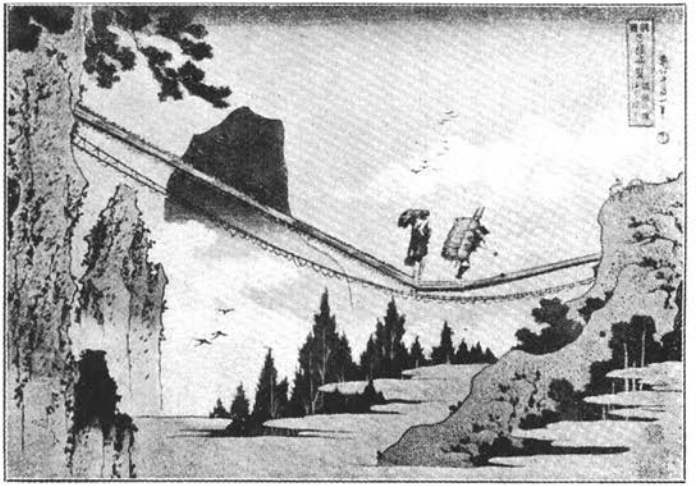


飛驒籠渡（初代廣重筆）

小島烏水氏藏



葛飾北齋飛驒つりばし



二木長嘯飛驒吊橋圖

後立山山脈旅行談

七月十二日の夜の終列車で、私達は多くの荷物を携へて、飯田町を出發した、同行者は學友伏見正三君一人、目的は先年辻村氏一行が登山された、後立山山脈縱走である、翌朝即ち十三日の朝、必ず見られると思つた白峰三山は、朝曇りで見えず、而し甲府を過ぎた頃より、雲が切れて、地藏鳳凰駒などが見えた、又日野春と小淵澤との間で、鳳凰と朝與(?)との間より、北岳の黑い雪の、班點の頭が見えたので、少しは氣が休まつた。

夫から諏訪を過ぎ、松本平に入つて、非常に雪の多い穗高を見た切り、槍も乘鞍も常念も、頭を出さなかつた、松本より北に進んで、明科に下車し、馬車で大町に向つた、途中夫は〳〵雪の多い後立山山脈一體の山を望む事が出來た。

大町へ着くと、對山館の若主人、即ち本會の會員なる百瀨愼太郎君が、出迎へられて、夏は山登りの客のみしか通さないと云ふ三階の廣い室に通された、障子を明けて見ると、蓮華、赤澤、岩小屋澤、祖父、鹿島槍、五龍、夫から白馬岳、及鑓ケ岳等の一萬尺に近い大峭壁がズラリと目に入る百瀨氏は「あのカールの樣な雪のある所が、五龍で、其向ふの白いのが鑓で……」と叮嚀に說明された、何となく身體がムヅ〳〵して來た、先日賴んで置いた、カンヂキも出來て居つた、實は私達は、カンヂキなるものを見たのは、今度が始めてなので（山岳會の大會の時にあつたかも知らぬが……）夫を見た時には、惡い氣持はしなかつた、やがて人夫の大西又吉が來る、大體の豫定を定めて後、米味噌等の必要品を買ひにやる、又吉が歸つてから、しばらくすると、品右衛門の息子の兵三郎も來た、慾ばりで「又吉と同じ日當ぢや己は行かねい」と云つて、八拾錢の所を一圓よこせと云つた、勿論客の方で食料を持つてゐある。

十四日、平常の寢坊も、こんな時には、朝早く目が醒める、伏見君も寢坊に於ては、私と好敵手であるが、私より先に目を醒して居つて、私が起きた時には、既に障子の外へ出て、煙草をふかし乍ら、朝日を受けた美くしい山を眺めて居つた。

人夫の又吉をつれて、宿を出たのは七時五十分、大出へ行つた時は、既に兵三郎は出立の用意をして待つて居つた、今日は針木峠の麓の、大澤のドウで泊るつもりであるから、急がないでゆつくりと出發した、籠川の谷や、蓮華から鹿島槍に至る迄の間は、既に精細なる紀文が、掲載されてあつた故、なる可く簡單に記す事にする。

九時三十分大出發、一體に何れの山を見ても、豫想したより數倍雪が多いので、いさゝかならず面くらつた、兵三郎の言によると、例年よりも、ずつと多いとの事である、其代り雪の壯觀を恣(ホシイ)ままにする事が出來た。

籠川の景色は、案外に平凡である、梓川や野呂川に比すれば、語るに足らぬ景色である、而し向つて行く方に、高い山が幷んで居るのはなんとなく偉大な感がした、十一時半、白澤のドウにて中食をする、そして一時間程休んだ、此邊は未だ道がついて居る、畠山の岩小家より少し先に、小さいが可なり完全な小家があつて、其傍に美くしい清水が流れて居つた、夫から一丁程行くと、道は河原へと下りて居る、其邊より上は、岩のゴロ〳〵した河原づたいで、行くのであるが、傾斜は緩かであるから、樂である、二時十五分扇澤のドウにて始めて渡渉した。

辻村氏一行は、夫より扇澤を溯られたのであるが、私達は先へ針木の方へ行くのであるから、籠川の本流へと進んだ、夫から大澤のドウ迄、二三回渡渉したが、何れも淺い所である、

大澤の「ドウ」に着いたのは、三時四十分、人夫は二十分も遲れて、やつて來た、茲から上を、見ると、スバリ岳と針木岳とが見える。

誰かゞ野宿した跡らしい所で、天幕を張つた、そして高野豆腐とウド蕗の味噌汁、及鑵詰とで、愉快なる我々に取りては幻想に近い夕食を終へ、天幕内へ、毛布にくるまり乍ら、夢路に入つた。

十五日、夜は曇つて、月が出なかつたので、翌日の天候を氣づかつたが、朝になると、曇もカラリと晴れて、高山特有の深いコバルト色の空となつた。

出發したのは、六時四十五分、約廿分許り河原

を行くと、針木峠の雪渓の下に達する、此邊よりはスバリや、針木を見上げた、景色は大樺池より北岳を見上げた時と同じ様な氣がした、雪渓にかかつてから、カンヂキを穿く始めの程は、さのみ急でもなかつたが、登るに從つて傾斜が增して來て、カンヂキを穿いて居つてさへも、時々滑る、滑つたら最後、雪渓の終り迄、大變な勢でコロがつて行くから、歩々注意をして歩む、峠の頂上が近いて來たが、餘り雪が急なのと、夫に日が照りつけて、上部が解けかゝつて居るので、餘り氣味が惡かつたから、どう〳〵左手の岳樺や、矮松の茂つて居る籔へと分け入つた、人夫達は向から來て、其急な雪渓をポッ〳〵と登つて行くのが見える、流石商賣がらだと、私達二人は、思はず感嘆詞を發した。

籔へ入つたものであるから、歩行は頗る困難ではあるが、夫でも滑る氣づかひがないので、安心して進んだ、峠の麓の雪渓を發したのは七時三十五分、八時二十分マヤクボとの分岐點に達し、夫より間もなく、籔に入り、信越の國境に達したのは十時四十分であつた。

南を見ると、槍を始め、穗高、常念、大天井、燕、野口、五郎、黑岳、赤牛、藥師等が見える、何れも雪が多いが殊に藥師附近の雪の多いのに驚いた、又西の方を見ると、後立山山脈の後に、立山と劍岳との大雪渓が、雲の間から見える、其壯大なる景色に、二人アッと云つて、しば〳〵感嘆の言葉さへ、發する事が出來なかつた、實に德合峠より穗高を見た以上の壯觀である。

夫から東方即ち蓮華に向つた、頂上が近くに見えるので、悅んで登つて行つたが、漸く其頂上に達したと思ふと、こわ如何に、尙前方により高い蓮華の頂上が見えたので、二人共がつかりして、動くのもいやになつてしまつた、しばらくすると、人夫が峠から辨當を以て、上つて來てくれたので、夫を喰つて漸く元氣をつけて、頂上に向つた、而し頂上に達した頃は、既に雲で以て眺望の上部はさまたげられてしまつたので、間もなく下山の途についた、そして針木峠の頂上へ降つたのは、二時十分であつた、人夫の言によると、人夫が峠の

頂上に達した時、越中側から、一人の人夫をつれた人が、登つて來たそうで、其人はカンヂキも穿ずに、信州側へと降りて行つたとの事、見れば殆ど壁の様な急な、雪であるのに、夫を而もカンヂキも穿ないで降りて行つた人の勇氣あるに、感心せざるを得なかつた、夫に引かへ、私達の意氣地のないのに、つく〳〵愧かしくなつて來た。

二時三十五分、峠を發し、尾根の急な所を、少しく登り、夫から信州側の針木岳の中腹を降りて、三時半マヤクボの野營地に達した。

十六日、曇つて居つたので、一日滯在する事に定めた、大して雨も降らず、又割合に暖かゝつたので、午前中は岩燕や雷鳥を追かけ廻し、又美くしい高山植物を採集したりして過した、午後三時頃より、空が晴れそうになつて來たので、針木岳へと向つた、直ぐ後の雪田を登り、信越の尾根に出で、夫れよりゴロ〳〵した所を、右へ登つて、頂上に達した、立山、藥師、五色ヶ原等の大雪渓が時々雪の間から見えた切りで、遂に晴れなかつたから、下山の途についた。

十七日、やつぱり曇つて居つたが、出發した、時六時五十分、信越の尾根に達し、夫れより嶮岨なる小スバリ岳にかゝる、而して道は短く二十分ぐらいで、頂上に達した、雲の外何にも見えないから、早速大スバリに、移る、此間約五分を要した、實際は二山殆ど一峯となつて居るのである、夫れから可なり嶮しい岩の上を下つて、スバリ岳と赤澤岳との釣尾根の、スバリ乘越に向つた。

時々、立山と劍岳の大雪渓が見えるの外、ホンの近くの赤澤岳ぐらゐしか、見えない、八時二十五分、スバリ乘越に達し、夫より赤澤岳にかゝる、登路頗る容易で、十時三十分に赤澤岳の絶頂に達した、早いが茲で中食をした。

茲で始めて、立山の頂上の祠を、一刹那雲間より見る事が出た、十一時二十五分發、十一時四十分鳴澤岳との釣尾根の抵部に達し、夫より鳴澤岳にかゝる此頃より細い糸の様な、雨がしきりと降り出し始めた、此邊より這松があるので、濡れる事夥しい、夫に道が可なり急なものであるが、隨分時間がかゝつた、信州面は薙落した様な絶壁であ

つて、私達は其背を注意しながら進むのである、十二時二十分漸く鳴澤岳の、三角點に達した、此時忽然雲が切れて、蓮華、針木岳、及峠がヌッと現はれた。

雨が又しきりと降り出す、私達も降路に向つた、嶮しい事夥しい、夫に這松が密生して居つて、頗る困難である、而し降りであるのが、未だしもの幸ひ、此方面より登られた辻村氏一行は、嘸困難を感じられた事であらう、夫でもどうにかこうにか、這松の鐵條網を通りぬけて、一時半新越乘越に着した、此時にはもう雨も上つて、雲も切れ、日が照り始めて居つた、時間は早いが、豫定地であるから茲で寢る事にして、天幕を張つた、此所には水のないので雪を解して用ゐた。

十八日、起きて天幕の外へ出て見ると、劍岳と立山とが、パッと目に入る、夫は〳〵雪の多い、肌を惜げもなく天空にさらして居る、其偉大なる姿に、思はず快哉を絶叫せしめた、其他針木、蓮華、鹿島槍、白馬なども見えた、六時五十五分出發して、岩小屋澤岳にかゝる、割合に樂であつて、七時半岩小屋澤岳の頂上に達した、而し眞の頂上とも云ふべき所は、夫より尚少し許り、北方にある峰なので、人夫は、夫を奥小澤の頭と云つて居る、約二十分で、奥小澤の頂上に達した、辻村氏佐伯氏外二三の名刺が、三角臺の石の上に乘つて居つた。

奥小澤を降つてから、扇澤岳は、這松が多いので、避けて西腹の西岳と云ふを廻つた、微か乍らも、道がついて居つたので、樂である、棒小屋乘越に至る迄は、多くは木の茂みの中を行くので、餘り眺望はよくない、八時四十分西岳の大バミの前に達した、其所より大バミを隔て、立山と劍とを見た景色は、實に壯大であつて、歐洲アルプスもかくやと思はれた。

九時五十五分、棒小家乘越を通り、夫よりは道も至つて樂になり、雷鳥を追かけ廻したりなどして、遊び乍ら、愉快なる進行をつゞけて、十時五十分に祖父岳の頂上の、直ぐ下の庭園の樣な、山の肌の和い所で、休んで中食をしてしばらく午睡をした、十二時十分發祖父岳の頂上に達したのは、

一時五分であつた、夫から尙一つ小峰を越えて、鹿島槍と釣尾根に達し、尙少し登つて、二時四十五分に冷の池の野營地に達した、水はあるが、お茶の樣な色をして居つて、臭くて飮む事が出來ない、而し夫よれも仕方がないので、そんな水はこして、よく沸騰さして飮んだ。

十九日、快晴である、七時發、平三郎を一人つれて、鹿島槍に向つた、布引の頭に達したのは八時四十五分である、眺望宏大、北日本アルプスの大觀は、存分にする事が出來た、頂上に止る事約一時間餘、十時發し三十分で布引の頭に達し、十一時二十五分冷の池に歸りついた、中食を濟して出發する、昨日の道を引かへす事約二十五分、左手の信州側の絶壁の樣な所を降り始める、包丁の樣な岩が、瀧の樣になだれて居つて、私達が一步踏むと、ガラ〳〵と大きな音を立てゝ落ちて行く、一行四人、縱に降ると先行者は、後から來る人のコロがす石の爲めに、危險であるから、斜に降つた、實際針木の雪溪以上の嶮しさである、此所を長ザクと云つて、僅ばかりではあるが、茲を降るには、通常一足の草鞋を要するとの事である二時雪に達した、カンヂキを穿いて、雪の上を降る、雪は短い、少し降ると、澤は木の茂みに入つて居る、出鱈目に降つて行くと、又も木が開け、雪田に達する、夫から尙降ると、細い雪溪が、森林と絶壁との間につゞいて居つて、間もなく久しぶりで、流水に達する、時二時五十五分、夫より二十五分間、其澤を降る　左手より大きい澤が來りて會する、人夫は夫を東股と云ふが、山岳附錄地圖の一の澤と、同一であろうと思ふ、今私達の降りて來た澤は、大冷の西股である、との事、人夫の足の遲い事夥しい、今夜中に、大町へ歸るつもりであるが、人夫共は、故意に步みを遲くしたり、又は休んだりして、仲々はかどらない、そして兵三郎は、又吉の居ない所で、又吉を惡く云つて、自分のみ良案者であると云はぬ計りの事を云つて、實に不快な感をいだかしめた、而も、私がカンヂキを渡すと、一足分丈け、己の荷へつけて、他の一足は又吉の荷にくゝりつけた、こんな事は、僅な事であるが、先に又吉の老ボレ

と云つた口があるから、義理にもそんな物ぐらいは、自分が持たなければならないのである、又吉の方は、實直に、之迄やつて來たが、兵三郎は口だけは大きな事をいつて、而も言行一致せず、又「誰さんが己に禮として、時計を送つてくれた」とか「某は賃銀を餘計にくれた」とか云つて、づいぶん不快を感じた事もあつた。

三時四十分、合流點發直ちに對岸へ渡る、夫れより以下は水も多く、花崗の溪流は、可なり美を形造つて居る、少し許りの杜をぬけると、再び溪流へ出る、其邊の兩岸は、著しく狹り、激流、巨岩、淵、瀧、大變美くしい景色である、夫より降るに從つて、澤は開け徒渉する事七回、四時四十五分始めて人に出逢つた、間もなく小冷の澤が、右より會し、五時十五分鹿島川の本谷に出る、夫よりは道もあつて、坦道尚一里、六時鹿島村に入り、晩餐をなし、尚三里夜行して、九時十五分無事大町對山館に歸着した。（濱谷泰次郎）

御坐石湯より鳳凰山へ

小生去る六日、甲州鳳凰山に登りました、豫定は五日の午前七時に、日野春にて下車し、夫より小武川の上流なる、靑木湯に至り、翌日登山するつもりであつたのです。

日野春驛前では、靑木湯は、茲から二里餘りあつて、小武川に沿ふて行けば、間違のない道であると申しました、然るに新奥（日野春より三十丁ぐらい）迄行つて聞いて見ますと、昨日の雨で、橋が全部落ち、それが大きいから、澤づたいでは行けぬとの事で、又、靑木湯は、元の所には最早家もなく、二里許り里の近くへ引越したとの事ですから、御坐石湯へ行つて、夫から登る事に定めて出發しました、尤も、澤づたひで行けない、と云ふので、人夫を雇つて御坐石湯迄、山越えで行きました、里數にすれば新奥より三里とはないかも知れませぬが可なり高い尾根を四つも越すので頗る困難で、殊に第二番目の尾根より、澤に降る所などは、全然道なく、藪の中を分け降つたので

す、そして小武川の河原に出で、半里程溯り、右より來る湯澤に沿ふて、尚溯る事半里、漸く御坐石湯に着きました、日野春より、約四時間半を費しました。

新奥で聞けば、湯へ行けば、案内者があると云ふので、つれないで來たのですが、湯には湯治客のみで、山案内をする者は一人もありませんので、大變困つたのですが、宿の主人が、土地の者でもあり、比較的山に馴れて居る故、兎に角御案内をして見ませうとの事で、其親戚の者と二人で、案内をしくれました、二人共五十を越えた老人であつて、鳳凰山へは、少年の頃一度登つた切りで、夫も何所から登つて、何所へ降りたか、少しも覺へないとの事で、只下から時々頂上の地藏佛を見るだけで、殆ど始めても同樣であつたのです、二人共降りてから、可なり疲勞して居りました故、此次は山へ案内する事か、どうか分りませぬから、後に登らるゝ方は、新奥か、圓野で、御雇いになつた方が、安全だらうと思ひます。

六日の朝、七時に二人の老人と共に宿を出ました、少なくとも午迄には、頂上に達するつもりで、握飯三個宛の外、何も持つて參りませんでした、宿の少し下手の所より、湯澤の支流の南股に入り、五分程溯り、夫から左手の崩れた所を、攀ぢ、小さい澤を五分餘りも登り切ると、牧場へ出ました、牧場と云つても、身の丈程の草の生へて居る高原でありまして、今は牛も馬も居りません、此邊より所謂地藏岳が見えました。道は可なりよいのがついて居つて、牧場から漸次のオクダテの頭の峰(辻本氏のコクタテ)で、私のつれて行つた者は、オクダテの頭と云つて居りましたを指して、登つて行きます、約一時間で馬止と云ふ所に着きました、牧場の馬は茲よりは上へ行かぬとの事で、此所で道は一度絶えて居りますが、しばらく行くと、かすかなる道に出ました、歸途道を失ふれひがあると云ふので、杜の木に鎌で傷をつけて置きました、登りは左のみ急でもありませんが、殆ど道と云ふ道もなく、時々消えたり、あつたりするので、出鱈目に、高い所を左手へと、登つて行きました、杜の中では、小葡萄の葉の紅葉が、大變美麗でした。

漸く杜がなくなると思ふと、今度は熊笹の密生した、可なり急な尾根です、左は大きな崩れであつて、其崩れの向ふにも一つ笹の茂つた尾根がありました、其向側の尾根の下が、燕岩と云つて、Y字形になつた崩れの合點に終るので、歸りに夫を降りない樣に、用心せねばならないとの事です。

九時三十分に一寸した崩れを横切つて、漸く燕岩の尾根と合し、十時十五分漸くオクダテの頭に出ました、此所は笹の茂つた掌大の高原で、此附近より鳳凰山の頂上、地藏嶽、駒ヶ嶽、八ヶ嶽、又遠く北日本アルプスの祖父嶽と鹿島槍(?)とを見ました、老人達は、此所をオクダテの頭と呼んで居りますが、尾根つゞきで、尚高い所を通りましたから、果して其所がオクダテの頭なるや、否やは甚だ疑はしいものです、辻本氏の第二鳳凰山登山記中の、柳澤道は、此邊にて合する筈ですが、つい氣づかないで通り過しました。

夫から上は尾根づたいの、森林中を行くので、前の熊笹の尾根を登つた事から思へば、餘程樂でした、夫に道も大抵微か乍らも、あつたので、左程困難をしませんでした。

澤を離れてよりと云ふものは、一滴の水もなく、水筒も疾くに、空になつたので、渇する事非常でしたが十二時三十分、絶壁の上に達し、夫から密林中を分け入つて、降り氣味に行くと、間もなく少し許りの水のある澤に出でました、時十二時十五分、誠によい水ですが、夏にはあるかどうかは疑問です、夫から幾度も、巨岩の麓や崩れの樣な所を横切り、一時十分、頂上直下の大ザクの所へ出ました、辻本氏の北御室なるものは、何所邊を云はれたのか、さつぱり見當がつきませんでした。頂上に着いたのは、一時半、既に雲が多く出て、地藏嶽の左に富士を見た切りで、折角樂しんで來た白峰の方は、少しも見えず、又鳳凰山なる山は、地藏嶽から、駒ヶ嶽を結びつけた山脈の支峰の樣で、餘り高くないので、いさゝかがつかり致しました、南御室から藥師、地藏を尾根づたひで來れば、面白いかも知れませぬが、御坐石湯から、オクダテの頭を經て、只鳳凰山に登るには、苦しいのみで割合に無趣味でした。

頂上を發したのは、二時少し過ぎでした、降りは早いつもりであつたのが、案外に道ははかどらず、行きにつけて行つた樹の傷を、見失なつたりして、可なり手間が取れました、夫に霧が降りて來て、方向が分らなくなりましたので、大に困りました、オクダテの頭に着いたのは、四時過、夫から間違つて燕岩のY字形の中央の尾根を降り始めましたが、途中で霧が晴れて、間違つたのに氣付き、引返しました、夫から以下二三度道を間違へ、森の中へ來た頃は、眞暗で、行きにつけて置いた樹の傷や、踏跡などは、少しも見えず、出鱈目に左の方へと、斜に降つて、行くと、偶然にも馬止に達しました、日はとつぷりと暮れ、七日の月はあれども、曇つて、甚だ暗い夜でした、夫から又も、道を迷ひ、澤に出たので、夫を矢鱈に降ると、南股に出ました、そして御坐石の湯に着いたのは、七時半でした。

登りは六時間半、降りは五時間餘り、費しました、道さへ間違はなければ、四時間ぐらいで充分降る事が出來ます、夏日なれば、朝早くに立てば、日歸りに、充分ですが、秋は日歸りするなれば、餘程山に精しい人夫をつれて行かなければ、明るい內に歸るのは困難でせうと思ひます。

歸りはヅサと云ふ峠を越えて、圓野村に出で、穴山停車場（日野春韮崎間に新設）へ出ました。湯より小武川に出で、ヅサ峠の上迄、一里餘、夫から圓野迄約一里、穴山停車場迄、御坐石湯から三里に近いでせう、日野春へ出るよりは、道も近い樣ですから、若し小武川の橋がないと思つた時には、穴山で下車して、ヅサ峠を越えて行つた方が、道もよく、又新奥より山越えで行くよりは、樂であります。

私の連れて行つた老人達は、地藏佛即ち鳳凰山の頂を、地藏ヶ嶽と呼び、所謂地藏嶽は何と云ふ名の山か、知らないと申しました。

御坐石湯と云ふのは、澤の中にある、汚い温泉で、景色も平凡ですから、芦安から杖立に登り、南御室か霧明ヶの小屋邊りで一泊して、鳳凰山へ登られた方が、趣味があらうと思ひます、尤も温泉附近には、アケビヤ、マタヽビ、グミ、山葡萄

なぞが森の中になつて居りますから、夫を取りに行くのも、可なり面白い仕事として、私の頭に殘つて居ります故、そんな事に趣味を持たるゝ方なれば、此邊で一日ぐらゐ、呑氣に過すのも愉快でせう。（濱谷泰次郎）

登山者の注意

一、登山の効果　三伏の候、高山の頂に登り、白雲の上に立つて、自然の花園、然も平地と全く其種類を異にする異花稀草の間に逍遙せば、精神の高潔、氣宇の濶大、求めずして得らるゝのである、又科學上よりも、得る處が多いものであるが、かかる精神上學術上利益多き登山も、時としては、種々の困難に遭ふ事がある、此困難は、又吾人が處世上に於て受ける處の困難に抵抗する處の力を養ふ事が出來て、自ら修養上得る處があるものであり、困難に勝ち得た時の感じは永く忘れる事の出來ぬ嬉さを覺えるものである。

此頃の、中筭輪小學校の駒ヶ嶽登山に於ける慘事は、實に悼むべき事である、余の如き多年の登山によつて、困難の經驗あるものは、殊に同情に堪へぬのである、而して余は、此變事によつて、利益多い登山熱が減退するのを恐るゝものであるから、登山者の注意を御話し様と思ふのである。余は二十年來、毎年一回、若くは三四回の登山をして、多くは前人の足跡なき處を選んで登つたが、自分が困難と感ずる困難に遭つたことは、單に一度のみであつた、準備さへよくば、左程恐るべきものではない。

二、登山者の遭難　登山者の遭難は食料の缺乏、凍死、烈風の爲の呼吸困難、岩石の墜落による打撲、自體の墜落による致死等であつて、此他腹痛、下痢、山岳病、水腫、瓦斯中毒等より來る困難がある。

三、精神上の修養　登山者に最も必要なるは、如何なる場合にも、常に精神を落ちつけて居ることである。精神が平なれば、時に應じて、適當の處置を採る事が出來る。又數多の困難に抵抗する力を益すものである。精神錯亂の爲に、益々深い谷

に迷ひ込んだり、驚怖の爲に手足の自由を缺いて、絶壁より落ちる事などは、時として見ることである。

四、食料　道に迷つたり、風雨に遭つたりして、食料の缺乏して死ぬものは、登山者の死者中、最も多いのであるから食料は、常に一日分位の餘裕を持つ事が必要である、食料の種類は、米、餅、味噌其他なるべく輕い副食物である、或は水の無い處で、雪を用ゐて炊事せねばならぬ處なれば、前以て洗つて置くがよい、餅は、水の無い處に露營する場合に必要である。之に少し砂糖を加へて搗くがよい。登山の初の一食か二食は、握飯を持つがよい。鮨ならば、永く腐敗しなくて更に結構である。味噌は少し砂糖を入れて、前以て擂つて置くがよい。汁の身は干瓢、氷豆腐等が輕くてよい。鰹節も必要である、山では汁さへ甘ければ、殆ど他の副食物はいらぬが、尚辨當の菜として牛罐、海苔の佃煮、福神漬、梅干等がよい。人足は副食物として、乾鱈、鹽鮭等を好むものである。晝食は、少しづゝ二回位に食べるがよい、間食用としては氷砂糖、菓子、コンデンスミルクなどの類がよい。甘いものは直に疲勞を醫するものである。此他炊事用具、食器等を持たねばならぬ。又昔の探險家は、蕎麥粉を持つて登つたものであるが、輕くて且つ簡易の食料である。

山中で、食料の缺乏した場合には、其場所に應じて、夫々食すべき動植物があるから、之を食ふべきである。高山の頂には岩苔、依蘭苔等、食ふべき地衣類が多いから、之を煮て食べるか、又は生食すればよい。草本帶以下では、クロマメノキ、シラタマノキ、アカモモ、コケモモ、ツルコケモモ、ミネザクラ、ミヤマザクラ、イハナシ、ズミ、ヤマナシ、ツノハシバミ、クロウスゴ、イチゴ、アザミ、ヤマボクチ、ウハバミサウ、シロウマアサツキ、レウブ等の莖及び葉は煮て之を食することが出來る。ヨブスマサウ、ヒメ等の果實は食ふことが出來る。少し低い處ではフキ、ギバウシ等の葉柄及ネマガリザサの筍等がよい。若し之を炊くべき鍋がなかつたならば、土を堀つて之を埋めて置いて、上で火を焚くと、蒸されて煮た樣になる。

十字科植物には一種も有毒のものがないから、安心して食べてよい。地衣類では、イハタケ、ツメゴケ、カブトゴケ等は、食べることが出來る。又動物としては、イハナ、サンショウオ等がある。山には、かく食ふべきものが多いから、此等を利用せば數日間の生命を維持するに、困難ではない。只精神を過勞すると、早く疲勞するものであるから、注意せねばならぬ。

五、寒氣　高山に於ける寒氣は、最も恐るべきものであるから、注意せねばならぬ、特に雨に濕れると、體温を失ふことが多いものである、此が注意としては、第一、腹卷である、人間の體は、腹を冷さなければ、餘程まで、寒氣に抵抗する力があるものであるから、毛絲の腹卷を着けるか、若くは晒布を卷くことが必要である、腹を冷すと、下痢を起し易い計りでなく、遂には全身の感覺を失ひ、自由を缺いて凍死するに至るものである、露營の用意としては、毛布、綿入、足袋等が必要である、毛布は袋にして、此中に這ひ込んで寢ると暖いものである、雨具としては、防水布の外套、油紙の外套等がよい、着莫蓙は敷物として必要であり、又少しの雨は防げるが、暴風雨の際には殆ど用をなさない。

露營はなるべく避けて、小屋のある處に泊るがよい、中箕輪の登山者も、若し本岳の西にある、木曾の小屋に泊つたならば、此慘事はなかつたのである、又露營せざるを得ざる場合ならば、早く露營地點を選んで、岩窟の下に宿るか、又は岩石を疊んで、壕壁を作つて、防水布又は馬桐油などを以て、屋根を張らねばならぬ、森林中の山蔭ならば、温くてよい、總て廣い小屋のない所では、露營に困難であるから、多數の團體の登山をせねばよい。

火は炊事にも、防寒にも、最も必要のものであるから、如何なる場合に於ても決してマッチを濕さぬ樣にしなければならぬから、其二三は、鑵に入れて、油紙で包んで置かなければならぬ、又薪は日の暮れぬ間に、一夜間の分を集めて置かなければならぬ、尙又、風雨中で火を焚きつける事は、一つの技術であつて、此が出來れば、登山者として

の資格があると云つてよい、雨中で火を焚くには、焚附として豫め松節樺木（シラカンバ）の皮などを用意して行けばよいが、さもなければ、先づ火の附き易いもので多くの削屑を作るがよい、山頂では、ハヒマツの枯れたのゝ節を選んで、之を削ると、水分が少くてよい、又杖などを削るもよい、此は股の下で削ると濕れない、此削屑を澤山作つて、此上に、ハヒマツ、ツガザクラ等の枯枝を積んで、上には、ミヤマハンノキ、ハヒマツ等の生木を切つて、山の樣に積み重ねて、火を附けるのである、火が盛になれば、生木でもよく燃えるものである、枯枝でも腐蝕したものは、多くの水分を吸收して、却て燃へ難いものである。

六、烈風　高山に於ける烈風の際には、砂石を飛ばして危險の事があるばかりでなく、烈風が、口吻を吹き切ると、口に蓋をした樣になつて、呼吸の困難を來すことがある、先年、平湯の浴客が、乘鞍岳に登つて死んだのは此が爲である、烈風に遭つたらば、なるべく岩窟の間に居つて、風の止むを待つがよい、若し步かなければならぬならば氣を急らずに進むべき地點を見定めて、岩蔭や凹地を選んで置いて、其處まで早足に進んで、息續をするのである、それでも尙、呼吸が困難ならば、地に伏して、兩手を以て、口邊を蔽ひつゝ、呼吸するのである。

七、岩石の墜落　多數登山の際の危險は、上に居るものが、誤つて岩を踏み落すことである、穗高岳や荒川岳の樣な岩の脆い山は、殊に危險である、穗高岳では、犬が岩を落して困まつたことがある、此頃も、余が赤石登山の際、同行者は、此が爲に頭部に負傷したことがある、されば登山者は、よく注意して、落ち易い岩には、足を踏まぬ樣にせねばならぬ。

八、墜落　懸崖より落ちることは少いものであるが、稀には見ることがある、先年、駒ヶ岳の本澤及び寶劍岳から落ちて死んだものがあつた。

吾々の運動機關は、四肢があるから、此中、一つにても、確なものに據ることが出來ればよいが、時として、賴とする草が抜けたり、岩が缺けたりして落ちるのである、據るべき植物では、木なら

ば、細くても強いものである、枯木は太くても危險である、草では、イタドリ、ウハバミサウの樣な、莖の脆いものや、又は根の淺いものには、據るべきものではない、スゲの類は、割合に丈夫である、岩は、確なものを選んで據るべきである、又懸崖などは、繩を岩角又は木に掛けて此に縋つて上下すればよい、此頃、槍ヶ岳方面登山の歸途、上高地温泉に於て、日本アルプスの命名者ウエストン氏を訪ふた時に、同氏は、繩を示して、此に依つて、槍ヶ岳の背面、未だ人の登らなかつた處から登つたと云はれたが自分も、此迄、登山に繩を用ゐたことは、二回のみである。

總て危險の場所は、なるべく二肢以上に體重を托する樣にするがよい、さうすると、其一がきかなくても、他で支へることが出來る。

九、疾病　高山に於ける疾病は、多くは胃痛、腹痛、下痢等であるが、此は注意によつて避けられる、高山では、寒くて寢られぬ樣なことが多く、又雨や霙に遭つて非常に冷へることがあるが、嘗て風邪に犯されたことがない、此は實に不可思議に感ずることの一つである。極の探險などをするものが、風を引かぬと同一の理由であらふが、未だ確な說明が出來ぬ或は塵埃なき空氣中では、風は引かぬものであるとの說もあるが、よく解らぬのである。

富士山以上の高山では、呼吸困難より來る山岳病があつて、登山者の一時卒倒することなどがある、此は山を下れば癒へるものである。

余は先年、白馬五龍間の連山に於て、殆ど一週間、烈風暴雨と闘つて、或夜の如きは、小屋の屋根は吹き捲くられて、氷雪の間に、終夜濕佛となつて居つたり、或は越中の黒部川に下り、或は人跡未到の溪谷を攀ぢたり、最後の日は午前六時より午後十二時まで山中を歩いて、暗夜に、北安四ケ城に下りた事があるが、此時は、下山の晩から、全身膨れ上つて恰も脚氣の樣に、何處を推しても、ボコ〳〵凹んだことがある。今度中筭輪の遭難者中にも、同樣の病狀があるとのことである、此は過勞や、寒氣の爲血液循環の不良や、或は腎臟炎や、食物の不良や、種々の源因から來る樣であるが、

◎雜錄　登山者の注意

充分なる説明が出來ぬ、此は、靜養すれば、一週間位で平癒するものである。瓦斯中毒によれる死亡は、先年、白馬山不歸（カヘラズ）の谷に一度有つただけである、余の知れる有毒瓦斯の出る處は、右の外、乘鞍岳に一ヶ處あるのみである。

右の外、擦過傷、挫傷、脫臼等、不時の負傷があるから、應急藥繃帶等の必要がある。

十、天候登山　殊に多人數の登山には天候を見定めて登ることが必要である、一般に言へば、七月末、及び八月末の天候は變り易いから、なるべく避けるがよい、又測候所の豫報を見るも必要である。

十一、案內者　高山、殊に登山者少き高山に登るには、良き案內者を選ぶが、最必要である、先年帝國大學敎員養成所の生徒が、早田文藏氏に引率せられて、八ヶ岳に登つて、風雨の爲に道を迷つて二日二晩、食はず飮まずに、谷底に居つたのを發見して、自分が救つたことがあるが、此時は、案內者の爲に迷されたのである、又此頃余が、赤石連山の荒川岳から下る時も、自分は正しい道を下りつゝあるのに、案內者の爲に、却て道を誤られて、大井河の上流、駿州安倍郡の小西俣の谷に下りたが、此も案內者の惡いからである、案內者は、獵師が一番良い獵師は、獸を逐つて、如何なる處（ドン）でも歩いて居るから、能く地理を知つて居るものである。

十二、登山者の携帶品　登山者は前記の物の外、小田原提燈、地圖、磁石等を携帶することが必要である、草鞋も一日一足以上を要する、尙充分なることを求める處ならば、懷中電燈、空氣枕、懷爐、水筒、鋸、山刀、及び乾酪、チヨコレート、コーヒー等を持てばよい併し自分は、動植物の採集用具、寫眞機械等、多くの荷物があるから、なるべく器具食料を簡易にして居る。

歐洲アルプス等に於ては、登山鐵道があつて、山腹のホテルに通じ、山上には、小屋、炊事用具、食料等の設備があるから、登山が容易である、本縣などでも、高山には、皆小屋を造るがよい、又此には、鍋釜食器等を備へ附くるが必要である、此等の設備は、特志者の寄附金、或は入山料として、登山者より少しづゝの金を徵收すれば、出來る事である。（河野齡藏）

山岳畫漫評

○近頃大分山岳が繪畫の題材として取扱はれて來た、私は之を喜ぶ然して悲しむ。山の繪は見る然しそこに山岳があるか、山の繪は描く然し山岳畫家が居るか。私は山を愛する然して藝術を愛する、山を描いた畫には殘念乍らひきつけられる、そして常に一樣の憤滿と侮辱とを感ずる、山岳と藝術とは共に踏みにぢられてゐる、我が尊敬する山岳と藝術とは所謂山岳畫家によつて美事に其の尊嚴を傷けられてゐる。

○文展ももう第七回である、初めて文展によつて畫を見る眼を開かれた者もはや七年の生長をなした、然して文展は依然として模倣と芝居氣と商買家との展覽會である事に呆れてゐる、眞實がないのだ、筆先の遊びをしつゝ畫道と自己を一握みに輕蔑してゐる。然らば文展以外にぎれ丈の藝術家があるか不幸にして私は餘り多くを知らない、(近頃は個人展覽會や其他の小さい展覽會に多少の生命と眞實とを見るが)太平洋畫會も光風會もやつぱり文展以下といはねばなるまい、此の如くして私が山岳畫として論ずる處は彼の勸工場の如き文展に見出さねばならぬのである。

○昨年は吉田博氏の「飛驒の深山」に呆れたが今年は眞山孝治氏の「初秋」である、之は恐らく上高地の河童橋邊から穗高を見た處であらう、成程山の形と楊の樣子に上高地へいつた人はそううなづけるであらうが、之によつて其の畫が穗高の眞を傳へてゐると思つてはならない、初秋を畫く爲に一時の拜借物とあつてもそれは近頃迷惑である、日本アルプスの重鎭穗高の姿は初秋のうしろをしきる屛風の役をつとめるには餘りに尊い、それよりも私にはワザ〳〵德本峠を越えて不自由な上高地に幾日かを費した畫家の心がわからない、穗高を朝に夕に見、霞ケ岳を見ながら温泉に俗腸を洗つたなら、もう少しは山らしい山が表はせさうなものだと思ふ、何といふ貧弱な畫だらう、山の樹は疲せてはゐる、然し雪と風とに鍛えられた幹は鐵の樣に堅く根は磐石の樣に固い、白樺は病人の樣にヒヨロ〳〵してはゐない、綠色も秋となれ

ば露ひも失せやう然しあの畫の線には命がない、あゝ一萬尺の穗高は扉風の樣に立つてゐる、薄つぺらに不安定に。バサ〳〵に乾いた畫面は口の中の唾液を吸取紙で吸取られた樣に不快にさせて長く見てゐるに堪えない。

○眞山氏は毎回山村の秋や湖畔の夏を畫いてゐるが、何だか畫がだん〳〵惡くなつてゆく樣に思ふ、第二回の「殘暉」などはよかつた樣に覺えてゐるが。

吉田博氏もよく山岳に畫材を採る、第三回の「千古の雪」は有名であつたが誰かの惡口の樣に肝心の「千古の雪」はおすと膿が出さうに思はれた、たしか立山室堂邊で畫かれたものと聞いたが、立山の雪があゝいふものであつたわけでもあるまい。此時の「雲表」其次の年の「釼ヶ峯より」の小品の方がよかつたかと思ふ。第四回の「雲界」はスバらしいものであつた、大變だつたらう、十五六貫の荷をしよつて飛驒山脈を縱走する人夫を後から見送つて感服する樣に感服した、とても出來ぬことだ一寸眞似は出來ない。畫室で拵へるのも或處まではしかたもなからうが、去年の「飛驒の深山」の樣に眞實からすつかり離れてゐるのは如何のものであらうか、創造といふ言葉を寫眞といふ言葉より私には尊くひゞく、然し畫室に於て畫筆をもてる勞働者が作りあげる大作物は寫眞ともいへまいが創造とは猶更遠いゝ樣に思ふ。努力は勞働であり大作は面積の大を意味する文展は餘りに我々を疲れさす。

○山本森之助氏の「春の山」「炭燒く煙」は夢の樣にボーッとした春の光に紫の山も惡くはないが、山に骨骼がなかつた、十里の裾を四方に張つて地球の中心から根のはへた山岳が春風に春の霞と一所に消えてしまひさうであつた、夢二の女には骨がないけれども人體を書くには骨骼や肉附は面倒な研究を要するのであらうに山岳は地質も何もめつちやくちや、神保博士に地質學の講義を聞かなくても自然を見る眼をもつた藝術家には自ら自然科學の結論がわかつてゐさうに思はれる、古畫の山の皺法は流石に山を平面盤にはしなかつた。吉田氏が早春の「妙高山」を畫き、中川八郎氏は雪

の妙高山を太平洋畫會に出陳されてゐた、中川氏には「高原の花」又那須野のあたりの馬つゝじを畫いてゐる、私は割合に中川氏の畫は好きである、「北國の冬」もよいと思つた、又山本氏の第一回の「森の奥」は非常にいゝと思つたが近頃の山本氏の筆が細かく神經質な冷いのはいやに思つてゐる。

○一體風景畫家は自然を何と見てゐるのであらう、自然の懷にとび込まないのであらうか、草でも原でも川でもそれを機緣に自己と自然との冥合といふ樣な境地に至る事がないのだらうか、山を畫く人に山に對する愛着があるのかしら、畫かないではゐられないといふ衝動を感ずるわけではないのかしら、それとも一坪の畫面に引のばすので空虛が出來たり、感興が失はれたり、何等の「自然」の臭ひもうせ、人格の色もなくなつて、只苦しさうな勞力と冷い固い顏料のみが殘るのではあるまいか、何故引のばすのだらう、あんなものにして藝術家の心は傷まないだらうか、それとも藝術家の心は勞働者の腕の樣にかたくなつてるのであらうか。技術といふものが人間を殺すのだ、畫家が「自然」に醒された心は「技術」といふものに一律にされた腕に裏切られる、反覆と模倣とは先覺の藝術家の畫法から死んだ技巧のみを傳へる、畫家の心は技巧と傳習に壓せられて、畫面にあらはれるものは只反覆であり模倣である、何處をかいても同じである、畫室で作りあげても同じである、「自然」との冥合はない、畫家の創造はない、只死んだ顏料がカンバスにぬりつけられる。

○哲學も心理も美學も知らない私が畫論はしない方がいゝ、も一ぺん頭を文展に回らさう、前の人人に比べては無名の畫家ではあるが文展の山岳畫を論ずる場合に見逃し難い一人がある、それは第四回以來つゞけて赤城山を畫いてゐる小林眞二氏である、氏の畫が特別に傑出してゐるとはいはないが其質實なる虛飾のない芝居氣と商買氣とを離れた態度を喜ぶのである、今年は「夏の濱邊」に別趣の畫を出してゐるが再び赤城山に歸らんことを自分は待つてゐる、上滑りのしない器用でない筆は數年を續けて赤城山を畫く山を愛する熟心と一

所になつて私が心に待つてゐる眞の山岳畫が氏によつて出現するかもしれない。

「深く汝の立つてる其足下を掘れ、必ずそこから泉が湧き出でる」といふ様に自分の愛する處に深く突き入つてもらい度い、あまりに中途半端な、世間次第な、今の畫界が己れに忠實な歩を進めて貰ひたいのである。

○今年も赤城山の畫が三つ程出てゐる、水野以文氏の「赤城の山」は小沼あたりの山の傾斜を見せてゐるが私は之よりも「葉つゝじ」の方がいゝ、前年太平洋畫會に見た磯邊忠一氏の赤城山の繪はよかつた様に思つてゐたが今年の「けぶり」は何處の山だかしらないが色鉛筆の様に弱い薄べらな畫はいやだつた。又故大下藤次郎氏が秋の黒檜山をかゝれたのを中學時代に感服した事をおぼえてゐる、大下氏は實によく歩いてをらるゝ、先覺者だ、尾瀬も上高地も早く畫いてゐるが、どこを畫いてもそこに「山」が認められない、尾瀬沼は御庭の池の如く穗高さへ巧なる箱庭の様にかゝれてゐた。丸山晩霞氏の如き所謂「山岳畫家」山岳の國に生れ山岳の間に育つた日本のセガンチニともいはれて然るべき氏の藝術は我々に失望の外に何も齎らさない、歐洲土産を帝國ホテルに見た時もやつぱり之では駄目だと思つた、歐洲アルプスもモノクロオムの滑かさと小奇麗さに全く着色寫眞で見る以上の感興はなかつた、之では何處を畫いても同じではあるまいか、どこへいつても同じではあるまいか、繪畫の約束はもうちやんと胸の中にあり構圖も色彩も筆觸も一つの約束の下に整然と動いてゐる、多い經驗は心を富ます養ひではなくて背負うに苦しき荷となるのにすぎない。自然が外物として存在する間は自己に對する敵手であり重荷である、自然を自己に取容れるのか自然に自己が歸一するのかは知らぬが自然と自己が一體になり、自然の心に入つた時に自然は自己に生きる、畫面に生命が躍る、自然の風物がカンバスの上に永久の生命を得る。

○茨木猪之吉氏の作には流石一道の山岳の氣が流れてゐる、文展第一回の「深山の夏」といふのは記憶に存せないがかの「北國街道」は氏の最も得

意の畫面ではあるまいか、今年の太平洋畫會に見た「桔梗ヶ原」もよかつた、山岳誌上に見たあの積上る樣な裝飾化された構圖の卷頭畫は面白いと思つた、然し氏の細かい筆づかひは或は山岳の雄大に確固たる姿を表はすに不適當ではあるまいか、もつとのんびりした氏の筆を見たい。又氏は北國街道に代表された樣に山民の生活、自然と人間との交涉に興味をもたれる樣に思はれる、此點に於て吉江孤雁氏の作品との共通點を見出す。

○アルプスの畫家セガンチニの如きもなほ山岳を周圍として取扱つてゐる樣に思はれる、勿論實物は知らずに只寫眞版でとやかくいふのであるが、羊飼の女がまぶしさうな眼をして日向に編物をしてゐる畫や、「アルプスの眞晝」の皮膚を快く刺す樣な太陽の光と澄んだ空の色鮮かな草の色は如何にも心を惹きつける、高爽と清澄の氣が畫面に漲り溢れてゐる、之を敢て上述の貧しき我國の大家諸君と比較しやうとはしない、寫眞版なりと雖も標準を別にして論せなければならない。

私はアルプスをなほ周圍として取扱つてゐるといつた之は一方に於て更に山岳に直接に迫つてもらい度いといふことを意味する、云ひ方を知らないがセガンチニの畫ではなほ自分が一ぺん畫中の羊なり羊飼の女なり、引いてゆかれる牛なり、鋤をひく馬なりになつてアルプスの懷に抱かれなくてはならない、中間の物を要する、私は更に一段論法的に即身即佛といふ樣に畫と自分と對立したままアルプス山中に居たい。なまじつかの言葉を費やすことは自分の眞意から遠ざかることであるかもしれないが、私は山岳そのものを畫家の心に生かしてもらいたいカンバスの上に再現してもらひたい、山岳を對照として外部に置いてをかないで。

又一方に於てこういふ事かも知れない、形式的にも山岳を主題として貰ひ度い、又エーデルワイスやアルペンローズンを裸形の女に象徵しないで物そのものを直ちに描いて、山岳に自然の生命を見出して呉れ、山岳をそのまゝに表現して呉れ、と。

○ホドラーの「遠い國の歌」は眼も逢けき高原を思ひおこさせる、高原の深い沈默と無音の歌を想

はせる、その「ユングフラウ」は初めて見た山らしい山であつた、ホーフマンの「雪の山」は山が畫家の心に一遍融けてやさしく弱められてあらはされたが、此のユングフラウは色のわからないのは惜しいが簡單な大まかなブラッシュで山の生命が躍動してゐる。

○歐洲に如何なる山岳畫家がゐるか知らぬ、昨年の山岳誌上に見たセザンヌとゴッホの繪はまだ山岳畫といひにくいがあゝいふ力と命とをもつた畫が見たい、然し寫眞版ではやはり物足らない再び我國の畫界に戻つて來なくてはならない、私の今迄展覽會で見た山岳畫のうちで山らしい氣のしたのは去年の文展で瀨野覺藏氏の「高山の一部」と此間の生活社の展覽會に於る高村光太郎氏の作品である、瀨野氏のは何だか燒岳の枯木立の邊だと思へたが、その土の色と空の色とが如何にも高山らしくてうれしかつた。

高村氏のは今夏上高地に於て畫かれたものゝ由で、霞ヶ岳、燒岳、穗高、乘鞍、などが表れてゐ、黃と紫の病的な色彩で畫かれた燒岳の畫はいやだつたが、上高地の白樺の林道はよかつた、梓川は霞岳の下を流れる、山本氏の濁らぬ水、吉田氏の奔湍の樣に詳細に畫かれてゐないが却つて無雜作な一刷が眞を表はしてゐる、楊のしげみは白い河原の向ふに煙つてゐる、眞山氏の楊の樣に乾涸びてはゐなかつた、强烈な眞夏の高山の日光に輝いて崖の繁りも白雲と深碧の空も快い階調をなしてゐる、豐かな然しケバ〳〵しくない綠濃き六百、初秋の色に彩られた三本槍、私は初めて山らしい山の畫を見た。

○以上は專ら西洋畫に就てゝある、日本畫に於ても山水畫といふ位故山は多く描かれてゐる、然し此にいふのは高山性のある山である、今年の第一科に田中賴章氏の「木曾の殘雪」がある、有明の月と見る迄に吉野の里に降れる白雪といふ位故此殘雪が容積も重量もない月影とまがふのも滿更理窟がないでもあるまい、左半双の雪の遠山は古い形だけに却つて無事であつた。

山本春擧氏の纖巧な筆は夏空に燃える火山岩の高山を畫くには適せなかつた、今年のでは寺崎廣業

氏の千紫萬紅の第四に秋らしいコバルトの遠山のある幅が山らしい氣がして嬉しかつた殘雪の白線は無雜作にすぎた、第三回溪四題と一しよに出陳された秋山雨後は新味もある苦心の作であつたが同時に失敗の作であつた、然し此繪には何者かゝあつたと思ふ、聞けば寺崎氏は澁温泉の邊に書室を有して居らるゝ由である、溪四題に表れた新味と瀟湘八景に示された優秀なる技倆とを以て高山に圍繞された山上の書室に山岳畫を大成さるゝの日あらんことを期して待つ。

秋山雨後の出た年に吉岡華堂氏の高嶺殘雪といふ長い横物があつた、之が今迄で一番高山を主として描いたものであつたが、へんなギザ〳〵した雪を冠つた山嶺が只雲の上にならんでゐた様なものだつたと記憶する。

○中心のない漫筆はだら〳〵と續いてもういゝかげんに切上げなくてはならない。

○何にしても私は不思議でならない、穗高の岩にミケロアンヂエロの力の彫刻を忍び赤城の火口丘地藏岳の斜面にロダンの女の柔い手ざわりを思ふ、苟も藝術的天分を有する畫家諸君が何故に此の如くくだらない作品を出すのであらう、山岳はしかく貧弱に畫家の眼にうつるのであらうか創作の心理を私は知らない、然しあんなにうつるつまらない山岳を勞力と費用とを拂つて畫くのであらう、靜物よし人物畫よし又都會の街も郊外の川もよからう、山岳を特に撰ぶ理由が何かあるのであらうか私にはわからない。虎を描いて猫に類すとかや、山岳を畫いて何と見せやうといふのか海鼠か對た自然薯か。

○私は泣きたくなる、偉大なる山岳は色つけ寫眞の如くボヤけてしまひ、高山植物は友染の模様にされてしまふ、我々は山を此の如くは見ない、我我の愛する山は死んではゐない乾涸びてはゐない、崇高であり雄麗であり、優美であり又壯快である、我々は山を此の如く上つ面に見てはゐない、山の心に深く入り自然の懷にかたく抱かれる。忠實なる寫眞は寫眞の復製ではない、鏡の様に只反射させるのは畫家の眼ではあるまい、生命を握め、自然の大精神を見よ。何故に畫家の筆に何等の內

◎雜　錄　机上談山

心の躍動の一部もが表はれてゐないのか私は奇怪とせざるを得ないのである。

○技巧は内容とはなれてはない筈である、然るに空しき技巧の形骸が畫家の心を襲ひ繁雜なる約束が畫家の腕を高手小手に縛める、漢文の紀行文の様に何處を書いても同じである、美しさうな文字が奇麗にならんでゐるだけである、未來派や立體派はわからない、後期印象派の主張はほんとうだと思ふ、埃及邊の彫刻を見やう、自然に反れとルソーの言葉を繰り返さう。然し實の所は自然の中心に迫る誠がないのだ、物の本體を執へる熱心がないのだ、いつまでも畫かきとして畫筆を握る職人としてカンバスをぬりつぶしてゐるのにすぎないのではあるまいか。

○私の心は一番中村清太郎氏の畫に共鳴する、前號の口繪の木版「大日峠の眺望」もコロタイプ版の「硯島本村」のスケッチも、今度の第二號に於る「澤の木」や「朝」や其他も皆とり〳〵に山を慕ふ心を躍らせ又慰める、うそがない、心をかくす技巧、運筆上の手品がない、山を愛する心が其傍に畫面に溢れてゐる様に思はれる、暗い南アルプスの澤を通ふ濡つた風も、雲伏す曙の山頂の空氣も私の胸にしみ込んで來る、又表紙畫に於ても昨年度のが一番好ましい、殊に第一號のはすきであつた。愈々之で筆を擱く事にする、小島氏の「浮世繪と後印象派に於る山岳畫」を論んせらるゝの日を樂んで待つてゐる。

（安曇梓麿）

机上談山

前號に鵜殿正雄氏は「山名につきて」と云ふ一文をものせられて、種々山名について論議せられ、吾人の日常誤り用ゐつゝありし山名に快刃亂麻を切るの快擧を取られしは、吾人の等しく、喜ぶ所なり、然れども、總て物事の斷案は歸納的ならざる可らずして、萬事は一方より觀察すべからず、富士も見る位置に從つて山容を異にする如く、物は、總ての方面を盡さゞれば絶對の斷案を下し得べからず、極端に論せば、人類の智識は全智全能に非ざれば、絶對的斷案と云ふ事は夢想に過ぎざ

るなり、然れども現在の人類、現在の日本の山岳界の智識の程度に於て、絶對的なりと思考し得べき斷案はあり得べし、即ち總ての方面、現在に於て、調査し得べき總ての材料と方法を盡せるものは即ち現在の最後の斷案なるべし、語を代へれば、總ての斷定は、科學的研究の方法に由らざる可らず、只一方の材料に由り然らずとは斷定し得べからず、鵜殿氏の一文を視るに、其斷案は、決して科學的研究法に由りしに非ず、鵜殿氏の感情に由り斷案を下したる如き點見ゆ、吾人は吾人の智識が最全なりと主張するものに非ず、又敢て鵜殿氏に優れるものありと思考するものに非ず、然れども吾人の鵜殿氏の一文に對して多少の異議なき能ず異議ありて語らざるは、科學的研究法を唱ふ素意と相反するを以て、敢て愚見を述ぶ。

△割谷山　鵜殿氏は惡谷山なりとせられたり、鵜殿氏の筆意を借らば割谷は、谷が割れたるを表す、即ち谷が崩解したる事を示せり、故に惡るい谷なり、敢て惡谷の字を當てずも惡谷の意は、自から含るゝ事となるべし、一山民が「ワルダ」と云ひしダの意味は、山だ、人だと云ふダに過ぎざるには非ずや、「アノ岳の西はワルダ」と云ふたりとせんか、ワルダは即ち惡谷とは、なるまじ、確たる、理由なくば、成る可くは Priority を尚ばれたし、吾人は敢て望む。

△割菱岳　此山は三枝氏の五龍岳と云ひしものにて、恐らく、此岳の存在を、發表したるものも亦三枝氏なるべし、吾人は後立の字が正當なるか、五龍の字が正當なるか、知らず、恐らくゴリウなる地方語の意味は他にあるべきか、言語學者の解釋を待ざるべからず、發音それ自身と沒交渉の意ある漢字を列べて、敢て漢字の山名を作る要あらんか、後世「神立（ゴリウ）」の字を見れば、恐らく、字そのものゝ意を考へてゴリウなる發音の眞意を思ふものなけん、眞の意義不明なるものは、寧ろ假名書きこそよけれ、鵜殿氏は五郎岳の頂に Priority を尊重せり然らば、此頂亦 Priority を尊重せざる可らず、神立、神嚴の意ありとせば、五龍決して、壯嚴の意なしとせざる可し、吾人は神立の字に一顧の價なしと云ふべし、ゴリウの言葉は、今三枝氏

◎雜　錄　机上談山

に聞合せざる故不明なれど、思ふに前年、松澤菊一郎をつれて、初めて該地を旅行せられたる時菊一郎より聞きしなるべし。山名は面白いからとて當字を一々換へられては、後の世のものは、異名辭書でもなくば、中々に判らぬ事となるべし、「一寸よい思ひつき」がなくば、變更されざるを希望す。

割菱は、鵜殿氏の説の如くなるべし、白馬地方のヒシとは、崖……絶壁の意に用ゐつゝある事、自身聞き知りて確かなり、前には、ワリビシの頭と云ひたるを聞けり、頭も岳も時に混用さるゝ事あれば、割菱岳の名は將に異名と云ふべし、Priorityは正確なる方法に由り、適當の圖書に發表されしものに非ざれば、其權なし、口傳てに斯く云へりとのみにては、遂には水かけ論に了るべし。

鵜殿氏の結論の方法（一八一頁下段十一行）を借りて云へば「兎に角是等は何れも附會の嫌あるかもしれぬ故、判然する迄は、舊記に從ひ五龍岳と書して置く方がよからうと思ふ五龍を後立と書した事はつい近代の事だらうと思ふ世が文明になつたからとて、山の名迄も無茶苦茶に改めると云ふ事は、ちと考慮せなければならぬ事と思ふ。」

又山脈名は其山脈中にある主要なる山名を取らねばならぬのに存否不明の山名を何故採つたのであらうかと云ふ事で、後立山脈と云ふ字を非難されたるが、飛驒山脈に、飛驒山と云ふ山は一つもなし、後立山脈の名は日本の地學に關する古い雜誌を見らるれば、誰人が名付けられしか、判明すべし。氏は後立山脈の名が不適當なりとせられたり、何に故に不適當なるか吾人は其意を推知するに苦しむ越中の山（茲では立山）の後ろにありと云ふ意ある、山名なるが故に即ち他府縣の山に屈從的名稱なるが故に不適當なりとせば、吾人は鵜殿氏の理由の餘りに薄弱なるに驚くものなり、敢て同氏の一言を聞きたし、

學者の命名は絶對の權威あるものに非ず、然れども專門家以外のものに比較せば、其權威の差、非常なるべし、云はんや、專門雜誌に、學術的記文として、發表したるものをや、鵜殿氏は敢て權威なしと云ふべきか。

鵜殿氏は後立山山脈をゴリウザン山脈と讀れる如くなれど、（一八〇頁上段前半）其前文（一七〇頁下段中央）に於ては明に、立山の背後の意に解されたり、論議の立脚點として、動搖なき能はざる可し。

吾人は同氏の全文に就て云はんとする事尙ほ多し、敢て筆を擱く。

（九月初旬……ウメモドキ生）

甲州山村の三升桝の記事に就て

山岳第八年第二號一九四頁に於て、小島氏は、甲定甲重の兩小判に松木の印を刻するは、松平の誤り歟、何故なれば、鑄造せし柳澤氏は松平の姓を賜はつて居るから、と云はれしが松木を正しとす、松木は鑄造する金座の姓にして、武田氏以來金座を司りし人なり松木、の外に志村、野中、山下の三家ありしと云ふも其金今に傳はるもの稀なり、甲金の種類一百三十六種ありと云ふ、（大村忠一）

「信州大鹿村に於ける岩鹽の存否」の一文は都合に由り、本號に揭載せざりき、乞ふ諒せられよ、



雜報

駒ヶ岳の慘事

各新聞紙の報道、其他の諸材料、其數極めて多し、何れも大同小異にして、總てを通じて、本欄に載せたる伊那教育會の草せる一文を、最も正確なるものと信ずるを以て、徒らに重複するのみなれば、全々本號には集錄せざる事とせり乞ふ諒せられよ（編者）

●駒ヶ嶽の慘事に就て

志村烏嶺氏は山岳の研究者として其名夙に著はる氏は毎年夏季休暇を利用し實地高山を踏破して研究するを例となせるが本年も既に木曾御嶽、日本アルプス峻嶺を單獨にて跋涉しし數日前歸長せられたるものなるが偶々駒ヶ嶽の慘事が傳へらるゝを聽き登山者の爲めに注意を促さんとの旨意にて特に本文を本紙に寄せられたるものなり（一記者識す）（國民新聞）

近來登山熱非常に勃興して或は團體を作り或は個人にて登山を試むる者多く本年の如きは晴天久しく續きしを以て數年前までは無人の境たりし日本アルプス地方登山客踵を接し峯頭には笠影相望み深谷には鞋痕の狼藉たるを見る多年高山地に出入する吾人は心ひそかに快感を禁ずる能はず然るに今回突然駒ヶ嶽の慘事を聞き茫然自失せり此悲慘事を聞きて誰か潸然として泣かざる者ぞ今回の責任者たる赤羽校長は自己の最善と信ずる方法手段を執り遂に其の職に殉ず其の人格實に敬服の外なし故に今本文を草するも決して其の死屍を鞭うつにあらず又如斯際に當り如何なる手段を執るべきかを說述するも決して死兒の齡を數へて新に悲哀を得られたる最も同情すべき父兄に對して一層の痛恨を覺えしむる者にあらず吾人は唯如斯慘事の再び生ぜざらんが爲前車の覆轍を見て後車の誡と爲さんが爲なり且つは如斯悲慘事を生ぜしにより僅かに勃興の機運に向ひたる登山熱の冷却を恐るゝを以て相當の準備と周到の用意を以てせば登山の決して危險なる者にあらざる事を述べんとするなり之れやがて多年登山の氣風を作興鼓吹せる吾人の責任なり世人は一言に木曾の御嶽及駒ヶ岳と呼べども御嶽は本邦の高山中富士の次ぎて山中の設備完全殆んど何等の準備なくして登山することを得べし即ち到處宿泊すべき完全の小舍あり飮食物の如き頂上に於ても一通り完備何等の不足なも感せざるなり故に遽かに風雨に遇ふも直に避難することを得べし又登路の如きも條內者なくとも迷ふところ殆んどなし之れに反して駒ヶ岳に至りては登路甚だしく荒れ果て處々に設けられたる小舍の如きも大低

腐朽せり余は曾て御嶽及駒ヶ岳なる一文を著『千山萬岳』を草して『荒廢せる駒ヶ岳』と叫べり『荒廢せる駒ヶ岳』なる一言は駒ヶ岳の現狀を喝破せる者と信ず故に駒ヶ岳に登るものは必ず防雨防寒の準備と十分の食料とを用意せざるべからず。

日本アルプス地方原始的峻峯に登ると同一の覺悟を有せざるべからず特に伊那方面内嘗口は木曾方面德原口に比すれば登路遠く伊那町より普通八九時間を要すべし然るに今回の一行は正午頃内嘗を發し途中採集を爲し雨を犯して午後六時頃頂上に達せし由頗る元氣の旺盛なりしを見るべし何人も一旦決行して其の八九分に達し之れを中止するは何人も欲せざるところ特に多人數の隊に於て然りとす故に雨を犯して頂上を極めし如きは意氣の壯なるを想見すべし吾人が普通登山中露宿を爲す際は遲くも午後四時までには適當の位置を選定して其準備を爲すなり(一)露宿地たる必ずや風雨を避くるに適當なる地點(二)飯を炊く水を容易に得らるゝ地點(三)附近に焚木とすべき燃料ある地點(四)附近に殘雪なき地點等之等の要件を具備するところならざるべからず故に數十里に亙る日本アルプスの嶺上に於ても僅かに五尺の體を携へて露宿すべき地點某の個所某の地點と略一定到處之れあるにあらざるより此地方の人夫の如きは老練なる者は皆此等の地點を暗記せるなり。

今回の如き頂上に於て既に午後六時に達せり特に三十幾名の多人數速かに露宿の用意を爲さゞれば天候不良にあらざるも頗る困難せざるべからず況んや雨中をや此際第一の上策は頂上より少しく木曾方面に下り玉窪の小舍に入るにあり此小舍は四十人内外を容るゝことを得べく且つ十分風雨を避くることを得るなり(四十年小生登山の際の所見による)第二策は速かに下山して立木あるは灌木帶或は喬木帶に降るべきなり頂上附近樹木なきところにありては平時と雖も風劇しく寒氣堪え難く完全なるテントを有するも經驗ある登山家は決して斯の如き場所に露宿することなし殊に附近に殘雪あるときは夜半に至り溫度著しく下降し晝中と雖も殆んど氷點に達するを常とす今回の登路も八合目以下に下れば樹木多く七合目附近に於てはツガ、モミ等の喬木太古の儘なる鬱々たる森林を爲せり故に速かに此内に避難すべし此處にては安全に烈風を避け强雨を防ぐことを得べし林下に莫蓙を以て被覆物を作らば適當なる露宿地を作り溫度も絕頂附近に比すれば著しき相違なり又全身雨に濡れては高山の夜間堪ふべからず故に何事を措ても第一に著衣を乾かすの方法を執らざるべからざるなり普通高山に露宿の際服及襤衣は冬季の者にして外套毛布を纏ふも翌午前二時頃に於ては寒氣の爲眠る能はず此際不注意に睡眠を貪る時は感冒に罹り易し故に此際は一同起き出で盛んに火を焚きて天明を待つ若し睡眠不足の際は日中午睡を爲して之れを補ふなりされば吾人は萬々止むを得ざるの外決して露宿を爲すことなし如斯なるが故に十分なる燃料を集め置かざるべからず之を午後四時を過ぐれば露宿の用意を十分に爲すこと能はざる所以なり燃料としては白樺の皮、偃松の枯枝を最良とす此等は雨中にありてもよく燃ゆる者なり今回の一行前二策を執らずして伊那の小舍の燒跡に露宿せしは返す〳〵も遺憾の極なりしなり防雨、防寒の設備なくして一夜風雨中に曝露せるが如き其の困苦實に名狀すべからざりしならんことは吾人の庭前にありても風雨の夜庭上に立たば强壯なる者と雖

◎雜　報　駒ヶ岳の慘事

◎雜　報　駒ヶ岳の慘事

も必ずや危害を被らざる者なかるべきを思はゞ山上の一夜實に悽慘を極めしならん翌朝遂に自由の行動を執らしめしは最も機宜に適せる最良の手段たりしなり若し統率者にして此決斷を猶豫せば猶多數の凍死者を生ぜしなり幸にも速かに自由の行動を執らしめしが爲めに身體の强壯なる者及び降路を誤ざりしものは萬死の中に一生を得たるは不幸中の幸福なりしなり如斯の例は乘鞍に於て貴族院議員小牧昌業氏令息篤彦氏以下五名凍死せる際に於て之を見る此際は飛驒船津の行者を先達とし一行十一名飛驒方面より登山し摩利支天の峰に達せる時强雨襲來し一步も進むこと能はず行者は此風雨は必ず夕刻に至らば收まるべければ附近の岩陰に之れを避くべしと稱し一同の前進を止めたり此時一行中の五名は風雨の益々劇しきを見て行者の言を用ゐず風雨を犯して石室に達し命を全うすることを得たれど行者始め六名の者は夕刻に至りても風雨の收まらざるに止むなく薄暮風雨を衝きて石室に至らんとし途中算を亂して凍死の厄に遇へりこは明治卅八年七月廿七日夜の出來事なりしなり。

當夜余は一行廿三名と白馬尻の石室にありたり其の風雨の猛烈なりし事其の前後殆んど知らざりしところなり非常の困憊を極め翌日止むなく下山せしも溪流怒漲渡る能はず人夫がしきりに架橋に苦心の際全身雨に濡れ疲勞困憊せる一行中には强雨中にありて危難の身に近づけるを思はず嶺に居眠りを始めたり此の際彼等は全く何物をも忘れ心地よげに眠れるなり此際全く睡眠せしむれば其の儘凍死せんこと必定なれば余は架橋を止め直に森林中に敗れたる炭焚き小舍を見出し此處に露宿し僅かに危難を免れたり今回も疲勞の極に達せる一行なして自由行動を執らしむること遲かりしならんには必ず猶ほ多數の凍死者を生ぜしこと必然なり幸ひに速かに自由行動を執らしめしが故に疲勞の極に達せる一行も必ず山麓に達せざる可からずとの決心意氣がよく其身體を山麓に運びしなるべし思ふて一旦こゝに至れば余は儼然として五體の戰慄を禁ずる能はず九死に一生を得られたる諸君は危機一髮生死の間に彷徨せられしなり今回の一行が災難は全く防水防寒の設備なかりしに原因せり（乘鞍の慘死者は單衣に網シャツを著けたりと聞く吾人は又云ふところを知らず）一行諸君が防水防寒の用意十分なりしならんには多少困難を爲すも貴重の生命を失ふことなかりしならん吾人が日本アルプス地方旅行の際は防水防寒具及食物、採集器械等にて僅かに二三日の登山にても二名の人夫を要し之れを減ずること能はざるなり故に一夜露宿にても毛布外套等を負擔せしむる爲に五六名毎に一名の人夫を率ひざる可らず前述白馬尻にて苦みし際は一行九名に十四名の人夫を率しなり而も僅かに凍死を免れしなり余は今擱筆するに當り吾人の經驗より後の登山者に左の數言を呈せんとす。

一、登山者の第一に注意す可きは防水、防寒及食料

二、小學時代の生徒及女學生の如きは原始的にして何等の設備なき日本アルプス地方の高山にて即日下山することは能はざる高山に登るは危險なれば爲すべからず。

三、何等の設備なき高山に登るに十五名以上の團體なるときは多大の準備を爲さゞる可からず完全ならざる準備は普通不能なり。

四、未知の高山に登る者は必ず確實なる案内者を率ふべし。

五、個人或は團體にても十分の經驗ある人夫を率ひずして登山すべからず。

六、萬々止むを得ざる場合の外露宿を爲べからず。

困難に堪え不足を忍び剛健の氣風を養ふ身心の修養上登山旅行の最効果あるは吾人の夙に之を認むるところ一二の事故を以て之を廢すべからず稀れに覆沒することあるも船に乘らざるべからず時に衝突あるも汽車を廢することを得ず火災を恐れて火を用ゐざるを得ず過失は常に用意の周到ならざるより生ず登山旅行の如き特に然りとす畢竟世人が常に山嶽を知らざるより今回の如き災難不幸を生ずるなり山岳の研究益々忽にすべからざるを思ふ彼の山岳研究會の如き御祭的の大會の如きを廢して眞面目に山岳研究に從事せんことを希望して止ざるなり(完)(九月二日—四日國民)

御嶽山

▼今年のお山さしは去年よりは隨分多かつたが何うも何處へ行つて仕舞ふのか歸つて來るのは尠いとは福嶋町川合峠の峠茶屋の爺さんの話

▼三岳村橋戸の檜の木瘤を並べた茶屋には端の方へ『通る人々こちら向け酒も肴も女もあり』と書いた半紙一杯に風俗壞亂の畫が大きく書いてあつた

▼王瀧村大峠頂上御嶽山遙拜所鳥居の根の標示板には

◎雜　報　御嶽山

從是　木曾福嶋驛へ三里
　　上松驛へ　三里(半)

と福嶋への下の一字は黃色く削つて其代りらしく上松への下へ細い字で『半』の字が足してある

▼今年は大岩橋が無かつたので此鞍馬を通る人が多かつた一人八厘宛で十人組五人組だと丁度勘定が宜いが郡役所の旦那達でも八厘の處へ一錢宛呉れて行く、お山さしは置かずにぐん〳〵行つて仕舞ふのもあつて仕方がないが錢を使つて仕舞つたからと幾らか置いて『おん賴まうおん賴うと』行くのもある、五六日前東京の某諸だとてお山で荒れられて菅笠の骨折りになつたのを冠つて來たが家へ歸ると此歷に荒れられても神樣の利益で無事で歸れたと有難がるのだからそれを戴くと瘡も落ちると云つてやつたとは王瀧村鞍馬の茶屋の髮の前が立つた形から膿の突き出た形最もよいのは笑ふ時の口の形が仁王尊其儘の婆さんの話

▼今年の登山者は去年よりは三割以上平年よりでも一割の增加で先月の二十三日夜など三百五十人も泊つてそれから一週間計りは二百人宛も續いた、今年は歸途を瀨戸御料林道を上松へ拔けたのが大分あつた樣子なれば來年の登山期前には御料局へ借地を願つて途中四五ヶ所へ休み茶屋を搆へる計劃が駒ヶ根の方にもありとは王瀧一旅舍の主人の話、此瀨戸川林道は木曾御料林中屈指の美林で道は王瀧よりは大體が下り勾配の頗る容易なので里程も四里計り關係村の其設備は旅客へ親切な話だ

▼登山者の內で一番我儘で大騷ぎをするのは何う云ふものか小學校の敎員でこれは何處の縣からでも皆同じい、後若無人の惡騷ぎ

◎雜報　淺間山

をするは皆教員だとは王瀧村の一旅舍主人の話

▼王瀧口新瀧の十三ヶ年壽命の盡きる迄の行者棚橋堯舜の籠り堂の屋根上には

自神我尊　棚橋堯舜

とべた墨で板へ書いて置いた下の格子には『無斷にて此巖窟へ入るべからず元年七月王瀧村』の半紙の掲示があると柱へは木札で『此岩屋は登山者は入るとも差つかへなし元年八月王瀧村』と掲示してある何方がほんとうやらわからぬ

▼王瀧口田ノ原茶屋サイダー廿三錢うどん五錢

▼王瀧口大覗き不動堂の横手には『愚昧なる先達人をたばかる勿れ神は山に非ず宇宙大靈が分支即ち人心名けて神と云ふ神即ち不動とす迷信家目を覺ませかッつ觀澤山人』と大分憤慨した文句が書いてあつた

▼登山者の内で何と云つても儉約なのは美濃、尾張で皺を負つて來て水で搔いて飲んで行く何とつても關東のお客だとは黑澤口頂上小屋主の話

▼繪ハガキを出すは關東が多くて美濃、尾張は殆んどない有樣だ、山上の事で人手は足らぬし窓口で繪ハガキも賣る樣な譯紀念スタンプ捺印は一つ一錢宛貰つて居るが三分の一位しか貰へぬ、猶此程長野から局長が見えて立山では紀念盃を賣つて居るがよく賣れる此處でも拵へて二十五錢宛位で賣つたらよからうとの話だつたとの頂上郵便局員の話

▼頂上酒一本二十五錢草鞋六錢

▼黑澤口尾松瀧饂飩三錢五厘草鞋五錢

▼百草一束十五錢では全く只一錢の儲けだけだとは黑澤口大祓瀧茶屋での話

▼毎年關東は舊盆前で盆中一寸隙でそれから美濃尾張關西方面が盛んに來る次第とは福島區旅舍の話（記者）（八月廿二日信毎）

●御嶽山登山者は著しく增加せり

七月二十一日より開始せる御嶽郵便局は愈々今二十日を以て閉鎖する筈なるが其間取扱ひたる郵便物は約一萬三千通にして八月上中旬最も多く上旬の取扱數は三千二百八十七中旬四千三百六十通にて同局にて調査せる登山人員の概數は八月中下旬最も多く何れも五千五百内外にて總數としては二萬千人以上に上り前年よりは登山者に於ても郵便物に於ても著しく增加し居れり（九月二十日長野新聞）

●御嶽局の閉鎖

木曾御嶽登山者便宜の爲め七月二十一日より同山山顚へ設置しありたる御嶽郵便局は昨今冷氣次第に加はり登山者は滅切り減少したれば去二十日限り閉鎖したり因に同局に於ける郵便事務は前年に比し非常に增加したり（九月二十二日信毎）

淺間山

去る十九日の淺間山爆發に就ては其際詳報する處ありしが更に同觀測所出張員理學士文學士碧海康溫氏より長野測候所へ報告し來れる所に依れば左の如し

記象を檢するに地動の始めに表はれしは午後一時三分卅九秒三（デント時計）にして最大東西動は約六センチメートルにして主なる動きのみにて約三十七秒間繼續したり、音響を聞きたる時は午後一時〇四分十一秒（多少の誤あるべし）にして極めて急激にして强大なる『ドーン』と『パン』との中間に位すべき性質の音にして之を形容すれば極近距離にて聞ける空彈發射の際に於ける大砲の音に似て數百層倍大なるものなり、當時前掛山の半以上霧に被はれ只西方に於てのみ少しく霧の薄き處あり此處より見たる噴煙は黒色と云はんより寧ろ濃灰色と云ふべきものなりき爆發後四五分間のは其音響四邊に反響するものかガラ〳〵と云ふ物悽き音を聞けり此は小使の談によれば六月十七日夜のものに比して一層大なるが如し燒石の落下は夥しく當觀測所より北東方十八間の處に落下したるものは最も近きものにして直徑六尺の穴を穿ちて一部地中に埋沒したり又觀測所より火山舘に至る道路にある小橋の少しく手前（六月十七日に落下せし處より約二間前方）へ落ちたるものは其破片及び土砂の飛散せる區域が百坪以上に及べるより見れば餘程大なるものなりしなるべし其他觀測所の向側なる牙山の一部に唐箕の口下鑓岩下邊にも稍大なるもの落下し盛に土砂を飛散せしめ又近傍の草を燒けり其他人頭大位のものは觀測所附近にも可なり落下したるもの〳〵如し、當觀測所にては板の間の硝子障子六本（六月十七日の硝子二枚破壞せられしもの）は家屋動搖のため骨を破摧し硝子四枚破壞されたり火山舘にては戸障子は大方外れ一個の茶碗は二ツに破れたり水道の竹筒も一個所破損せしが直ちに修理したり

◎雜　報　燒岳の狀況

◎測候所位置竝の平に變更せん

▲大爆發の場合被害の虞あり

近來淺間山は何を感ずつてか頻りに怒り出して爆發又爆發、鳴動に次ぐに鳴動を以てし殊に最近の如き巨大なる燒石や熔岩が噴出し落下し來り滿山火と化する悽慘なる光景を呈し火山舘の主人も登山者なき爲め疾くに退却したるが流石に巡査だけは職掌柄滯在し居るも郵便局員も碌に居らずと云ふ始末にて觀測所は目下震災豫防調査會より碧海、加藤兩氏出張し居るも唯りをなして大石が前後に降下し屋根に損所を生ずると云ふ次第にては何時如何なる危險狀態に陷るや測られず到底此中に於て觀測事業を遂行するは覺束なしとありて廿二日大森博士は小諸に來り松屋旅舘に宿泊本縣へ照會し來りたれば西澤長野測候所長も同日午後二時出張會見の上廿三日登山し實地踏査の上湯の平より十五六町下なる字芦の平の淺間舘へ觀測所を移す事につき協議する筈なるが微動計の外觀測用器械とて格別のものなければ位置變更は容易に行はるべし（長野新聞）

燒岳の狀況

理學博士　大森房吉

△緒言　昨明治四十五年六月廿六日付を以て燒岳の活動に關して報告せる所あり燒岳の噴火は明治四十四年に於て最盛なりしが爾後漸次其の勢力を減少したれば噴火現象の週期に徴するも南信地

◎雜報　鐵道院登山案

方養蠶の時期たる八月下旬迄は格別の破裂降灰無かるべき趣を發表せしが幸にして昨年夏期中は何等の變動を示さざりき本年八月二十七日より卅一日迄再び燒岳の實地調査に從事したる結果に據り同山の現下及び將來の狀況に關する意見を述べんとす

△燒岳の現狀　燒岳は昨年二月に五回四月に一回五月に二回多少の噴煙降灰ありし以來は全く靜穩の狀態にありしが本年九月一日に至り鳴動あり山の西北側半腹以上に二三寸の降灰をなせるも格別のことなくして止みたり此は新しき變動と見るべきに非ずして既存噴孔底の一部より噴煙せるものなりき而して山嶺北側の崩落により深さ約百メートルある噴孔の底約五十メートルを埋めたる外には各噴孔とも昨年と異なる所なく噴煙の量は非常に減少して北側噴孔内並に舊噴孔壁の外終くり發生する數多のものも悉く事實上硫氣孔の狀體となり終れり

△將來は如何　燒岳は一昨明治四十四年六月及び七月に於て屢々强き爆發をなし殊に七月十二日の破裂によりて北側の深噴孔を現出したりし以來は新噴孔の生じたること無く昨年及び本年夏期の上高地の於ける簡單微動計觀測の結果に徵するも燒岳に起因せりと認むべき地動は殆ど皆無なりき要するに燒岳は今後顯著なる變動を發することなきものと推せらる抑々我邦に於ける噴火現象は單獨に生起することは稀にして數年間に各地に相續きて起るを常とす今より百三十年前にあてり安永、天明、寛政年間に亘り櫻嶋青ヶ嶋淺間山溫泉岳等皆な激甚なる破裂をなしたるが如きは其の好例なりとす最近數年間は天明後に於ける最大の火山活動期に當り明治四十年十二月より燒岳は噴火を始め翌四十一年より淺間山の强震ありて次年よりは同山の爆發は頻繁となり明治四十四年より本年始めに及びては伊豆大嶋の大噴火連續せり但し隨時的火山の大活動は永く繼續すべきものに非ずして大嶋は本年三月を以て先づ鎭靜に歸し淺間山は目下最後の變動狀態に近づきつゝあり燒岳は一昨年より勢力を弱めたるものなるべし噴火の豫知に關する科學的研究は困難なる問題にして燒岳の將來に關しても素より確乎たる說を爲し得べきに非ざるも以上は余の信ずる所を記述せるものなり

△觀測事業　上高地に於ける簡單微動計の臨時觀測は此際一と先づ廢止して差支無しと思はる但し平時と雖も附近の地動は精細に調査し置くを要するを以て松本測候所に相當なる微動計を据へ付け噴火的並に局發的地震及び微動の震原、原因等を研究するの設備をなさんことを冀望す（大正二年九月十三日認）（九月十五日信毎）

鐵道院登山案

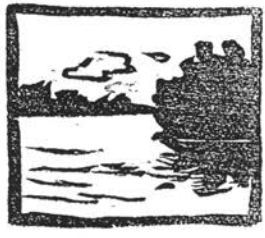
夏季旅行の施設

避暑のシーズンも漸く近くなつた今日此頃鐵道院にては目下夏季旅行に關し種々計畫中なるが近年著しく登山が流行するより本年は此方面に對する施設を充分になす筈にて間宮鐵道院營業主任の話に『海濱の旅客も決して減じたと云ふ譯では無いが此處數年以來非常に青年の登山が熾になつて來て、年々一割位宛增加する傾向である其れも富士、箱根、妙義山等の如く容易に登山が出來

得る山ではなく木曾御嶽、戸隠裏山、乗鞍などいふ所謂日本アルプスの峻険で深い山に探検的の登山が流行して來たのである之れは登嶽が青年の身心鍛錬上頗る裨益する處が多いと云ふ論が一部の學者間に喧しいのとやはり旅行趣味の發達した爲とで誠に結構な現象と云はねばならぬ且つ昨年は諒闇で遊控へた向きが多かつた反動として本年は一層激増する見込であるから本院でも此方面には特に注意を拂つて考案して居る』云々

白峰山の秋雪

十月二十八日夜甲府附近に雪雨ありたるが爲氣溫遽に低下したるが同二十九日朝に至り赤嶺なりし白峰山の北岳より農鳥山白河内岳に亘る白峰連嶺一帶に白雪の皚々たるを望みたり黎明より殊に美觀を極め居たるが午前十時頃雪は山と共に全く雲の内に影を沒し去りたり因にいふ、同山昨年の所謂初雪は九月三十日なりしといふ



會報

英國大使ジェームス、ブライス氏より、本會への口信

英國前自由黨内閣の司法大臣、現内閣の米國駐在大使、ジェームス、ブライス氏は、本年七月、本國歸任の途次を以て、本邦に立寄られ、暫く横濱なる本會名譽會員ウォルタア、ウェストン氏の邸宅に足を留められ、英米人の歡迎を受けられたるが、七月二十八日朝、本會の小島幹事は、ウェストン氏に招せられ、ブライス氏及夫人、ウェストン氏及夫人等と、朝餐を共にし、ブライス氏より、榛名妙義登山談を聽きたるが、氏は日本の氷河遺蹟問題に興味を感せられ、白馬岳氷河の痕跡なるものに就き、質問せられたるも小島は同山に登りたることなきため、何とも答ふるところなかりき、ブライス氏は更に、日本にて富士に亞げる高山の名、及びその岩石等に就き、問はるゝところあり、日本山岳は、熱心なる食卓會話の中心となりたり、食畢りて、氏は小島幹事の乞ふが儘に、別室にて日本山岳會に寄する口信を述べられたり、本號の卷頭に揭げたるもの、則ちこれなり。

ブライス氏は、オックスフォルド大學に於て、羅馬法を講せられ、倫理哲學等の問題に就きても、論述せられたるところ頗る多く、就中米國の經濟狀態を精査討究したる「アメリカン、コムモンウェールス」の一著は、氏の名を不朽にしたるものといふべく、本邦にては、人見一太郎氏の邦譯（民友社發行「平民政治」）まで出でたり、一方山岳研究家としては、阿非利加のアララット山（一九、五〇〇尺）を始め世界の諸高山を探檢し、曾て英國

山岳會々長に就任せられたることあり、遣米大使としては、加奈陀條約を締結して功あり、政治家と言はんより哲學者らしき氏の風采と品格は、親しく面晤したる小島幹事に、深き印象を與へたり。

英國前山岳會頭フレッシュフイールド氏來る

前英國山岳會々長、現今英國地學協會副會頭ドーグラス、フレッシュフイールド氏（Douglas Freshfield）は、十日來朝せられたるを以て、本會にては、十一月十一日夕刻、氏を正賓に、本會名譽會員ウォルタア、ウエストン氏（同夫人）及志賀重昂氏を陪賓にして、東京兩國龜清樓に招宴を張れり、來會者は、木會幹事高野、梅澤、三枝、小島四人に、會員近藤茂吉氏、及加賀正太郎氏を加へ、席上志賀氏は、フレッシュフイールド氏、及ウエストン氏夫妻のために、菊花と月とを題として英語にて、日本思想より看たる兩者に就きての小講話ありフ氏等は、當日恰も宮城の觀菊御宴に陪して、後この席に列せられ、折しも氷輪高く空に懸りて、清光大川の水に落ちたる時とて、講話に、一層の興味を添え、傾聽せられたり、畢りて席上の舞妓を呼び山岳に因める山姥、菊花に因みて「菊の壽」二番を舞はしめたるは、主人側の心づかひなりき、フレッシュフイールド氏は、ヒマラヤ山の探檢家にして、二萬一千呎の高峯を攀ぢられ、又高加索の最高火山、一萬八千五百呎を征し、この二大山嶺に就いて二著作を出版せらる、本會は、偶ま氏の高加索登山記二冊を藏本とせるを以て、扉紙に氏の署名を乞ひ得、志賀氏は、即席一聯を口占せられ、フレッシュフイールド氏は、原作者の解說を聞きて、之れを英譯するなど、清興深かりき、フ氏は、山岳趣味の旁ら、日本の美術を愛好せられ、北齋の風景版畫を、多く藏せらるゝ由にて、大川端の夜景を、櫺干より眺められ、本國に於けるウイスラアの夜景畫に似たりと、賞せられぬ、宴終るころ、氏は答辭を述べられ、本邦山岳研究の盛運に向はれんことを祝福し、且山岳研究を精神の修養上にも及ぼされたき希望を述

◎會報　英國前山岳會頭フレッシュフイールド氏來る

◎會報　伊太利山岳會の五十年祝賀　會員青木忠次郎氏の逝去

べ、當夜の歡迎を謝して、八時半頃散會したり。

（在朝鮮の城幹事は、歡迎費用の一部を寄附せらる）因に言ふ、フレッシュフイールド氏は、本邦滯在中、京都に遊ばれ、信州に入りて、島々より上高地に赴かれ、燒岳を峠まで登り、梓川に沿うて白骨温泉に出で、それより歸京して、本會の招宴に臨まれ、十三日加那陀に向けて、本邦を出發せられたり、氏は本年八十九歳の高齡なれども、壯健なること壯者を凌げるやに見受けらる。

伊太利山岳會の五十年祝賀

伊太利山岳會は、本年が設立以來、第五十年に該當するを以て、本年九月五日より十二日迄、五十年祭を行ひ、同月七日に祝賀儀式を擧げ、汎く世界に於ける山岳會員の參列を乞ふ由にて、我が日本山岳會へも、伊太利山岳會頭、及同チュリン支部々長の連名を以て、案内狀を發し來れり。

同會の書狀に依れば、有名なる高山探險家及山岳專門寫眞家、クインチノ、セルラ氏等が、Viso の登攀を企てたるは、一、八六三年（文久三年）のことにして、この登山は、伊太利山岳會の歷史に、第一頁を占むべきものなりき、いかにとなれば、同山に登れる間に、セルラ氏は、伊太利山岳會設立の念を生じ、同年を以て、山岳會の實現となりたればなり、爾來同山岳會は、駸々として隆盛の運に向ひ、五十年目の今日にては、支部を有すること三十七ヶ所、會員は實に九千人の多きに達したりといふ今回の五十年祭は、中央部とチュリン支部の聯合を以て擧行し、參列員のために、ピドモントに於ける、アルプス遊覽旅行を企て、伊太利アルプスの雅にして且美なるところを示すべく、又五十年祭終了後、間もなく記念の大冊子を刊行して、五十年間に於ける同會の成績を、詳述し、之を頒布すべしといふ。

會員青木忠次郎氏の逝去

本會々員青木忠次郎氏は、本年九月十七日、拂曉、頓かに病歿せられたり、享年三十二。

同氏は大阪高等商等學校出身にして、山岳を愛好せられ、旅行は則ち山岳旅行、寫眞は即ち山岳寫眞の概あり、平生健康體にて、十年間、藥餌に親しみたること、殆んど無く、本年の夏は、故ありて登山旅行をなさざりしが、九月末に、いづれへか旅行せらるゝ心算にて、山岳地圖をくりひろげ、旅程を考究せられ居り、十六日は生駒山に登られ、夜九時頃歸宅せられ、明月を賞し、十時頃、平生の如く就寢せられしに、十七日の朝、溘焉眠るが如く、逝去せられ居るを發見し、家人の驚愕喩へんに物なく、早急に醫を迎へて、有らゆる手段を盡くしたるも、及ばず、死因は或は腦溢血にては、なかりしかといふ。

しかも氏は平生酒を嗜まず、寡言にして、家人とすら、多く語を交へず、山岳寫眞は最もその長技とするところにして、遺稿の寫眞集「紫嶺遺稿」一冊には日本北アルプスの影像を、多く收む、紫嶺は氏の號なり。

同氏の逝去に就いて、大阪の會員榎谷徹藏氏より余に宛てられたる私信は、岳友の厚き交誼を見るに足るべきものなれば、こゝに抄載の許可を、榎谷氏に請ふものなり。（小島）

突然この報を、貴兄に致さねばならぬ悲しみは、譬へられません。當地の山岳會員の方々は、多く私の宅を訪ふて下さいます。さうして青木患次郎君も、私の最も親しい友達の一人でありまして、度々床しい訪問を受けたことでした。其れに……嗚呼、それに……君は急病で十七日午前五時死去せられました。母と妻とをその家庭に殘して。

幾十年の昔、君の父と私の祖父とは、親戚の間柄だつたさうでした。しかしその兩人が死亡の後は、家庭上の交際など久しく絶えて居たのでした。次第に榮え行く青木家の患二郎君が、當地の高商を卒業してから家政監督を自身でやるやうになられた折は、一つ年下の私が、昔日の榮華に空しい憧れの想ひを寄せ、物質的に淪落し行く家庭の狀況を嘆きつゝ、中等教員の生活を、日々續ければならぬ頃でした。恁うした豪家の若主人と、貧困に泣く一教員とが、不思議にも親しい間柄となつたのは、やつと兩三年以來のことです。私は母から昔物語を聞かされてゐますけれども、何んだか今の生活狀態から比べて嘘て、耻しいやうな氣がしますので、君に對しては、一と言も亡き人々の親しかつたことなどを申しませんでした。私は唯、君と交際をすることに依つて、山岳を本位にした、現在の生の充實を追求するばかりでした。

君は文學ものを好んで耽讀せられたやうです。分けても自然（風景）を描いたものに最も興味を有つて居られたやうで

◎會報　本會幹事の外遊・三高山岳會に本會幹事の派出

す。「文庫」の飛騨客信だとか、乘鞍の紀行などは、猛烈に君の心を躍らしたさうです。「扇頭小景」の話も幾たびか出ました。それから花袋氏の「南船北馬一」なども愛讀されたやうです。「あはれ乙女！」、が出んとその頃は物足らないやうな氣がしましたよ。などゝも云はれました。然しダイアポリズムなどの話は、餘り興趣を感ぜられなかつたやうです。

君は又、繪畫（西洋畫）を觀ることに、非常な興味を有つて居られました。たしか春鳥會などにも這入つて居られたやうでした。畫の參考書などは、大分取り寄せて居られたやうでした。言ふ迄もなく山岳畫を好まれたのでした。そしてデリケートなものが、お氣に入つて居たやうでした。

君はまだその外、寫眞の技術に長じてゐられました。從來は發表をしない方の流儀でしたから、會員でも知つてゐる方は尠いやうですが、隨分面白いのが有つたやうです。大町の百瀨慎太郎君に送られた上高地の森林なんかは中々美事なものです。

しかし君の體質は、頗る強健だと云ふ程では無かつたやうです。昨年も烏帽子から槍へ縱走された時など、梓川の磧あたりでは、もう本當に弱り切つて居られたとか云ふことでした。それにしても、突然死んで了はれるとは……。よしや從來の「山岳」誌上に於て、資料の發表は無かつたにしろ、向來どんな貢獻が有るか知れませなんだものを。却すゞも惜いことでは御座いませんか。取り敢へず大兄迄に御報告申します。

本會幹事の外遊

本會幹事高頭式は、歐米觀光の爲め海路伊太利に至り瑞西に入り、獨逸、佛蘭西、英國を經、北米に渡り、十一月中旬無事歸朝したり。

同辻村伊助は、學術研究の爲め且つ瑞西に遊ぶ目的にて十月廿日敦賀より出發歐洲大陸に向ふ、明年夏期は數十日を瑞西に送る豫定なれば、新しき報道は活目して待つべきなり、約一年半にして歸る豫定なれば、明後年の本會大會には歐大陸の山岳談を開くを得べし。

同武田久吉は兼て植物學研究の爲め英京ロンドンに滯留中なりしが、今年暑中休暇を利用して歸朝、約一ヶ月滯在再び英國に歸る。

三高山岳會に本會幹事の派出

十月十八日京都市帝國大學學生集會所に三高山岳會主催の講演幻燈會開かる、本會よりは特に幹事小島久太、辻村伊助、高野鷹藏の三名出張して、

各講演、幻燈說明をなせり、詳細なる事項は本欄の記事を見られたし。

京阪神日本山岳會々員有志晩餐會

自分は、山の會で一番愉快であつた集りは、此晩餐會であつたと云ふ事を躊躇しない、自分には京の山も、水も家も人も忘るべからざる印象を殘したが、此會位ゐ心から嬉しく、忘れる事の出來ない印象を留めたものは、今度の京上りにはない。名を聞て、會つた事のない同志、久しく會はない諸君、加ふるに期待しないで居た人々も來られた、そして今尙ほ心から嬉しい事は、初めて會つた諸君も、古い〳〵仲間の樣に思はれた事である。十月の十八日に三高で開かるゝ三高山岳會に幻燈講演をする爲めに、自分達三人は上つたのである、そして、此れを機會に京阪神在住の會員諸君を會して、自分達の爲めに一日の會合をしてはと云ふので、今村幸男氏、石崎光瑤氏が色々と盡力され最初の計畫では十七日晴天であつたならば、朝から比叡山に登り、大津に下り、京に歸つて、夜、此晩餐會を開かるゝ豫定であつた、然し不運にして、夜來の雨は止ず、十七日の朝になつても時に思ひ出した樣に降るので、比叡登りは中止となつたのである、そして夜、三條麩屋町上るの萬養軒で、自分達三人を主客として、此會を開いて下すつたのである、晝間の豫定は全然雨の爲め加茂川の水と流れてしまつたけれど、此夜の淸興は忘れる事の出來ない一つである。

わざ〳〵神戸大阪から出て來られた方御多忙の中を吾々の爲めに此會を開いて下すつた京の方々又東京から折りよく上洛せられた近藤、茨木二氏も列席された事は自分達にとつては、非常の光榮として喜ぶのである、デザート、コースに入ると今村幸男氏は、此會の主旨と山岳會の爲めに多大の賛辭とを述べられ、次で其月の廿日に渡歐の途につく自分達の一人辻村の爲めに其前途を祝福して、乾盃された、次で小島が、自分達の代理として、一場の挨拶をした、食後、紀念に寫眞を撮ら

◎會報　京阪神日本山岳會々員有志晩餐會

せ、話は愈々出で、興のつきる樣も見えなかつた。

自分達が、盡きぬ思を殘して、御別れをしたのは十時を過ぎて居つた、雨止みて加茂川緣りの燈火は、京の情調に一しほの趣を添へた。

くれ〴〵も、此會を司られた今村氏石崎氏の厚意と友情とを感謝しなければならない、そしていつまでも〳〵此夜の嬉しい思ひ出を殘したい、此日御出で下さつた會員諸君にも心から御禮が申上たい。

小島久太、辻村伊助、高野鷹藏、
近藤茂吉氏、近藤悌助氏、茨木猪之吉氏
小山源治氏、森平藏氏、栄野善次郎氏、田中清之丞氏、吉田孫四郎氏、大内武治氏、仲庄太郎氏、加賀正太郎氏、芝川又之助氏、小島榮氏、佐双定雄氏
石崎光瑤氏、今村幸男氏

（歸つて後、扁生記す）

第十一回有志晩餐會

天高き秋、九月廿六日田端「松ヶ枝」に開く、場所は眼下に關東平原を望み、遠く筑波、日光、赤城の紫嶺を眺む、黃金なす田の面を吹く風、空翔ぶ赤とんぼも秋の香身にしむ、會するもの二十、

田中阿歌麿氏、志賀重昂氏、山崎直方氏、加藤鐵之助氏、小島久太氏、近藤茂吉氏、辻村伊助氏、高野鷹藏氏、中村清太郎氏、服部與兵衛氏、加山龍之助氏、木村鐵吉氏、今村巳之助氏、小幕理太郎氏、バウンフェルト氏、岡埜德之助氏、梅澤親光氏、加藤鐵之助氏、丸山晩霞氏、茨木猪之吉氏

次回の幹事を薦選して會を了る、中村清太郎氏、梅澤親光氏、小幕理太郎氏の三名次回を司らるゝ事となれり（當番幹事報）

高山深谷第五輯の發行

高山深谷第五輯は明春を以て發行さるべし、載する所の寫眞は、愈々、撰擇されたる、逸物のみなり、製作部數は、僅めて少し、詳細なる事項は本紙廣告欄を見られたし。

一高山岳會團體旅行概況

我會今回の計畫の如きは、現今已に熟知せられたる易路により

たるものにして、何等新事實の報知すべきものなしと雖ども、吾會成立最初の企としては萬事好都合に運び、我會の基礎、之が爲めに鞏固なるを得、會員約四十名、廿日間に亘りて、無事豫定の行動を執り、多大の成功を以て、今回の旅行を終れり、左に各班の概況を報告す。

△七月十九日　先發隊二名上野驛午後十時出發。

△同　二十日　第壹班上野出發。(途中より參加せるものあり)

△同　廿一日　第壹班中房着登山準備。

△同　廿二日　第壹班(班長守島伍郎以下八名、人夫檜澤類藏、島山菊一等五名引率)午前八時中房發、十二時廿分燕岳頂上、午後四時五十分大天井頂上、五時五十分二俣小舍着。(當小舍及燕小舍は今年新たに屋根を設けたり)

第貳班上野出發。(途中より參加せるものあり)

△同　廿三日　第壹班雨天の爲め一日滯在、之が爲め糧米不足を告げ、人夫二名雨中歸房せしめ、一行は中食を廢す。

第貳班中房着。

△同　廿四日　第壹班午前七時二十分二俣小舍發、九時五十分常念頂上、五時半赤澤小舍着、糧米益不足を來し、粥を啜るに至る。

第貳班(班長小島鎌朗以下九名)人夫類藏、善作等六名を伴ひ、午前七時十五分中房出發午前十一時廿分燕岳頂上、二時半燕小舍出發、大天井登攀の際、夕立に襲はれて、困却せり、夜七時半二俣小舍着。

△同　廿五日　第壹班午前六時半赤澤小舍出發、午前九時三十分槍の絶頂を極む、十時半頂上出發、途次赤澤にて晝飯の爲め、二時間を費し、午後六時遂に上高地着。

第貳班朝七時二俣小舍發、十時十分常念頂上、二時二十分二俣泡着、晝飯四時半、同所出發、七時赤澤小舍到着。

△同　廿六日　第壹班午前八時半上高地温泉出發、十一時燒岳頂上、歸途田代湖に遊び、四時半歸宿。

第貳班午前六時赤澤小舍發、八時五十分槍絶巓、天氣快晴にして眺望絶佳なり、零時廿分赤澤小舍到着、七時上高地温泉着、第壹班の健兒等、之を河童橋畔に迎へ、萬歲を高唱し、夜は兩班合併して、大コンパを開く。

第參班午後十時上野驛出發。

△同　廿七日　第壹班午前六時温泉發案內中島作太郎十時四十分穗高岳一等三角點到着、天氣晴爽四周の眺望眼界に入らざるなく、一同痛快を叫ぶ。午後十二時半頂上出發、六時半歸宿。

第貳班燒岳登山。

第參班中房温泉到着。

△同　廿八日　第壹班松本に出で解班。

第貳班穗高登山、天氣晴爽眺望雄大を極む。

第參班(班長宇佐美六郎以下七名人夫五人引率)午前七時中房發中食後零時半燕岳頂上、午後六時半二俣小舍着。

△同　廿九日　第貳班七時半上高地出發、信州淺間温泉に一泊して、翌日一同解班。

第參班七時半二俣發、十時常念頂上、午後五時赤澤小舍着。

△同　三十日　第參班未明より、降雨十一時迄待ちたるも雨愈烈しく、赤澤小舍亦凌雨に便ならず、意を決して槍岳登山を斷念

◎會　報　一高山岳會團體旅行概況

し、上高地に下る。

第四班午後十時上野驛出發。

△同　卅一日　參班昨日に引換へ、晴天、午前七時半出發穗高岳に登る十二時頂上眺望よし五時半溫泉歸着。

第四班午後六時中房溫泉到着。

△八月一日　第參班燒岳登山內二名は上高地へ、殘餘六名は飛驒方面に降り、中尾蒲田を經て、午後六時半平湯着、此日夜に入りて、燒岳新らしく噴煙を出せり。

第四班（丸山敎授及班長大木操以下七名人夫類藏善作等八名引率）午前八時中房溫泉發、一時濁澤三角點、三時燕岳頂上、燕小舍宿泊。

△八月二日　第參班午前五時半發、乘鞍岳登山、十一時頂上に達す、三時半平湯歸着、四時半白骨に向ひ、途中日暮れて暗を犯しつゝ、一同困憊午後十時半白骨溫泉到着。

第四班午前六時半出發、十一時大天井頂上、午後四時半二俣小舍着此日天氣快晴にして、且行路の易き爲め、諸所にて撮影採集又は晝寢等に費し、呑氣を極めたり。

△八月三日　第參班九時白骨發、午後一時稻核着、午後四時島々を經て、松本市着、辨天樓にて送別會を開き、解班をなす。

等四班六時半二俣小舍發、八時二十分嘗念岳頂上、寒氣强し午後四時半赤澤小舍着。

△同　四日　第四班五時半赤澤小舍出發、八時槍岳絕巓、四周の眺望絕佳頂上にて一時間ばかり寒歌など怒鳴り、九時半出發、午後五時三十分上高地溫泉到着。

△同　五日　第四班燒岳登山、田代池逍遙。

△同　六日　第四班午前六時半溫泉發、十時四十分穗高岳一等三角點到着、一時出發、六時歸宿。

此日丸山敎授、所用ありて獨り歸京の途に就かる。

△同　七日　第四班事實上の解班を行ひ、五名歸京し、殘り三名は、尙一日上高地に滯在せり。

以上極めて簡單なる日程を示せるものにして、其他米味噌等の食料品、或は携帶品等につきて、記したけれど、一高校友會雜誌と重複するを以て、之を避くることゝせり。

經費は各班共、東京よりの往復瀛車賃を算入して、一名十五圓を出でず、中には十三圓餘にて、一切を辨せし班あり、詳細なる報告は、校友會誌上に於てす。

人夫に關しても、少しく不滿の點あり、日本山岳會に依頼して、彼等の賃金一定、其他所謂祝儀等に關しても、何等かの方法を設けて、以て一般旅行者の便を計り度きものなり。出來得べくんば、吾等率先して、之を改良しても可也。

上記せし日程は、即ち吾一高山岳會今夏の豫定計畫なれども、解班の內四名は、乘鞍岳に登り更

らに木曾駒、御嶽に行きし者あり、第二班は殆んど全部八ヶ岳登山を敢行し、第三班は槍ヶ岳行が雨天に流れし爲め、全部豫定をのばして、乘鞍岳を極めしものなるが、其後木曾駒に登りしものあり第四班は內二名白馬岳を極め、越後方面に下りて、無事歸京せり。

要之、一高山岳會今春勃發してより、其發展著しきものありて、夏期に於ける活動も、未だ其意に充たずと雖も、此二三年を出でずして、必ずや全日本アルプスを征服せんとする意氣込中々に凄きなり。山岳同好者諸君よ、今後吾山岳會の飛躍に、大いに注目せられんこと希ふものなり。

（一高山高會一委員）

三高山岳會主催講演會

自分等は、三高で或る運動選手をして居るため、一日も缺かさず、放課後は、グラウンドに出てゐる、京都の山は、吾三高を取捲いてゐる、東には比叡、如意岳、西に愛宕、嵐山、南は明いてゐるが、金剛、生駒は、この方面で、北に鞍馬連山がある、とりわけ山らしいのは何と言つても比叡愛宕だ、自分等は、毎年、日本アルプスに分け入つて滿足してゐるが、秋になると山が戀しくなる然し未だ程經ない夏の登山を追懷して慰めてゐるが、初冬になると、既う槍や白馬が目にチラついて堪らなくなる、毎日山と、兎に角名のついてる四明、愛宕を見るにつけ、アルプスを想ひ出す、誰か此間えを除いてくれるものはないか、さうかと言つて、この時期、この境遇で、アルプスに入れやうかと煎じ詰めると、全く悲觀せざるを得ない、或日名案ッと、自分は躍り上つた、さうだ、これなる哉〳〵と決心して、多忙中の一瞬を惜み、同志と奔走して、出來上つたのが意外に成功をした、三高山岳會主催日本アルプス幻燈講演會である。

ことしの夏、突如として一高に山岳會が成立した、自分等は大に喜こんだ、と同時に亦悲觀した、喜こんだわけは言ふ迄もないが、悲んだのは吾三高で成立しないうちに、先鞭を着けられたからだ、イヤそれどころではない、自分の學校では迚も成立が覺束ないから情ないなあと、自團駄踏んだ、一高山岳會のアルプス入りは、大に成功をした、あゝ羨ましいなあ、殘念だと思つた、何こつちでも出來ない事があるものか、今秋歸洛したなら山岳會を實行するために、飽く迄も奮闘しやうと、同志のものと、所存の臍を堅めた、

九月の末に、三高の揭示場は、黑山のやうな人だかりであつた それは悲憤慷慨の對校試合の揭示でなく、足曳の山鳥の尾よりも長い本會の趣意書であつた、前の取越苦勞は無駄であつた、翌日から驚くべし、「僕も」「己も」と入會申込みが續々あつて、或クラスの如きは、全部贊成されたので、御當人目をパチクリしてボーツとした位であつた。

◎會報　三高山岳會主催講演會

この機を外さずと、矢繼早に手を廻して、只講演會のみでは初歩者には興味が薄い、奮發して幻燈を添へ、ならうとなら、當地より大學教授、日本山岳會より幹事諸先覺の、御出演を乞へば、申分がないと空想したが、滿場の時に、ホームランと言つたやうに調子のいゝ時には、ボカ〳〵當るもので、或機會と前記諸氏の深厚な御同情とに依つて、理想が實現される事になつたので、吾々發起者は、正に欣喜した、雀躍したが、サア心配だ、折角の講演會を、不成功に終ると一大事だ、今回は三高生徒のみの、内輪にしないで、關西一般に、山岳趣味を普及したいから公開する事にした、會場はかゝる會合に、最も適當な京大學生集會場を、木村理學士を煩はして、借りた、これから不馴の面倒臭い事業に取り掛るのだ、市中に散布するビラの繪は、蕪岳より見たる鷲羽小鷲一帶のスケッチを、怪しくノタクツて、四色刷にした、印刷屋に毎日足を運ぶ、名士宛の招待狀を刷らせる、ビラを鴨川京極三條通紙園邊に配る、新聞社に趣意書を書いて紹介を頼む、市中の山岳會員を訪問して、出品を乞ふ、あらゆる方面に遊說する、毎日こんな風で、努力してゐる、これで不成功だつたら、既う知らんさと、お互に血眼になつた。

愈よ當日になつた、即ち十月十八日の土曜は、先づ好天氣だ、早朝から會場に詰めかけて、整理をする、掲示をセッセと書くが、會場はガラーンとして、何だか頼りなさうな氣持がする、其中に「昨晩は失禮しました」と白皙明眸の石崎（光瑤）さんが、立山の寫眞額數枚を持つてこられ、說明札をつけて、九時頃飯られる、自分は昨夜の樂しい會合を默想した、萬養軒の階上に、京阪神の山岳會員が、遙々入洛の幹事諸氏のため、招宴を張り一騎當千の强者共が、和氣藹々と、歡語談笑して、忽ち親睦になつて、お互に祝盃を擧げた時の、愉快さは無かつた、一委員が小山（源治）さんから、出品の書籍や地圖を車に積んで來る、山岳會からの出品も搬入した、そろ〳〵陳列にとりかゝらうと、長机六脚を長方形に並べて、陳列し始める、大學から技師の望月さんが來て、階上に幻燈機械の据え附を濟ませ幻燈畫はありませんかと催促して來る「高野さんの旅館に、電話をかけろ」「待てよ、番號が見つからないぜ」と慌てゝゐる最中に、小川博士が一寸來られて「出品はどうだ」と一巡して歸られる、あゝ忙しい〳〵、晝飯も食へないと喞ち乍ら働く、少し怪かつた空は、沛然と銀箭を降らし、靄ろに見える比叡の山相が、物凄い、忽ち雲が斷れて、日がカッと照らしてきたので、ホッと胸を撫で下ろす、二時頃、小山さんが御出になつて挨拶もそこ〳〵に、出品物を具合よく陳列して下さる、學校歸りの學生が、ポツ〳〵見に來る。

既う陳列室もよし、會場の整理も出來た、ヤレ安心と、椅子にグタリと腰を下したのが三時半頃、十八人程の役員に赤いリボンを渡す受附に机二脚を置いて、來會者一同に署名をして貰ふことにした。

先づ自分等はやつと落ちついて陳列室を一巡する、陳列品の說明を、ザッと書いて見やう、

入り口の長机には、山岳會の出品物一切で、泰西各國の山岳雜誌數十部と「山岳」全部がある、泰西山岳會の雜誌中には、流石に日本アルプスにも見られない、豪宕雄大な山岳寫眞の逸品が多い

ので、思はず立ち止つて恍惚とする、次の机上には、石崎さん得意の立山の寫眞額、及び「高山深谷」の體裁ソックリの寫眞帖がある、何しろ前後六回登山の苦心の結晶物だ、無からう筈はないと、紋切型の劇評家の口吻を拜借する、隣りは大谷光明さんの、マッタアホルンの大寫眞額、ヒマラヤ登山の長幅寫眞が、異彩を放つてる、山にも依るが、矢張り擴大した寫眞は、氣持がいゝ、次が小島烏水さんの新輸入登山用具各種、何れも初めて拜見する、成程便利に出來てるわいと、嵌み込みランプをいぢくる、日本アルプス諸高山頂の岩石は、多大の興味を引いた、山岳暦は東京の會よりも、以上に注目された、次の机上には、小山さんの出品で、多年御研究の植物に關する、和洋の書籍は殆んどこの一室に集まつた觀がある、挿入のアルペンフロラの彩色版は、實に綺麗なものだ、五萬分の一地圖や、紀行文集は、遖早く完全に集められてゐる、傍には今村(幸男)さん出品のアイスアックスや、リュックサックは、珍奇なので、熱心に見物された、次の机は京都大學出品で、白頭山や白馬岳の寫眞は、吾々にはさまで珍らしくないが、アルプス山の大模型は、大に喝采された、一學生にどちらが北ですかと聞かれて、面喰つた、いくら赤いリボンを挿して居ても、他人の出品物は、解説されないとサッパリ分らない、加賀(正太郎)さんの銀製模型のマッタアホルン外二點は、誰でも賞讃し、當日の白眉であつた、壁間には、古圖やアルプス繪ハガキ、地圖、スケッチ等で埋つた。

さあ、これ丈け揃つたら、もう安心だと、北叟笑んでる中に、何となく表が騒がしい「オイ受附の方に應援してくれえ」と呼んでゐる、アッもう四時過ぎだ、入場者が、列を作つて押し寄せる。

受附へ行つて見ると、驚いた、今日の入場者は、二百人位と思つてゐたら、ゾロ〳〵際限なしに入つてくる、各自受附にて署名するため、一ぱいになつてゐる「ヤア素敵々々」等と陳列室で聲がすると、停滯してゐる人々は、署名を待ち兼れて、陳列室に吸ひ込まれる。

日本山岳會員と、招待狀を持つて居られる方は、特別休憩室へ、御案内する、今村さんは先登に御出になるをキッカケとして、接待係は、目の廻るやうに多忙だ、電燈がつき初めた。

此時門前の砂礫に、轟轍の音がする、それぞなたかのお越だと、出迎へると、これは〳〵、日本山岳會幹事、及會員諸豪の面々凛然と馬車から飛び下りて、御入場になつた。

休憩室も食堂も、賑かになつた、陳列室は、人の山で「御覽濟みの方は二階の會場に願ひます」と追ひ出しをかけたが、熱心に熟視してゐて、動きさうにもない、五時半頃思ひがけなくも、大阪から榎谷(徹藏)さんが、奥さん同伴で御出になつた、出品の事も前に願つたが、例の謙遜で、辭せられたから、油斷をしてゐたら、山岳畵二十餘枚と、長幅スケッチ數枚を持參されて、拜見した時は、實に嬉しかつた、早速室の中央に長机一脚を置いて、擴出した十數枚を陳列するの光榮を得た、それ繪が出たと、學生連は、再び雲霞の如くに押し寄せて來た、壁間に掲げられた長大スケッチは、委員も張りながら見惚れてしまつた、惜しい哉、時間が迫つて、十分鑑賞する暇がなかつたのは、殘念で堪らなかつた、六時の鐘が鳴ると、同時に運參者には、お氣の毒であつたが、講演が

◎會　報　三高山岳會主催講演會

◎會報　三高山岳會主催講演會

差支へるので、室をヒタリと閉鎖した。

さあ愈講演だ、幻燈だと、胸を躍らせながら、階上に行く、之は又何事ぞ、あの二百疊敷の廣濶な會場は、聽衆者でギッシリ詰つてゐる、南側寄の丁度昨年の文展入賞南薫造氏の「五月の日」の油繪の附近に、幻燈機械が設置され、其正面に白幕が垂れてゐる、下手の壁には、演題順序が張られて、懐かしい幹事諸氏の芳名が見える、聽衆は今か今かと待ち倦んで、シーンとした、此時に小川博士、山岳會幹事、及會員、諸名士、來賓、酒井三高校長、笑戸教授、其他數十名、肅然と正面より入場されると、拍手が割れるやうに起つた。

さあ開會の辭をやらなくてはならぬと、思ひ切つて演壇に飛び上る、もうアがつてしまつて、自分にも分らぬやうな、お耻しい脱線演説をやつて、御免を蒙る、第一席の小川博士を紹介して、壇を下つた、博士は山岳に關する至極有益な、通俗的な御話しを！て下さつた、噛んで啣めるやうに、全般に渡つて、詳細に諄々と一時間餘、委曲を盡されたので、聽衆は耳を倚てゝ、靜肅に聽いて居た、中には要點を筆記してゐた、熱心家も見えて、頼母しかつた、大喝采の裡に降られた時は、既に六百人を越え、所謂滿場立錐の餘地もない位であつた。

次の委員は小鳥烏水氏を紹介した、急霰の如き拍手に迎へられて、登壇して、瀟酒な痩軀を現はした、胸間には山岳會員章が、ピカリと燈光に光つてゐる、時間切迫のため、氏獨特の快辯の上に、更に輪をかけたから、堪らない、飛行器と競走する、全速力の自動車のやうな速さで、多年藏蓄の所説を、縱横無盡に論述された、泰西山岳會の設立から、吾國に及び日本アルプスを説き其風景を略述された、聽衆は、時々のユーモアに笑倒し、特に不二山のスカイラインから火山の件に及ぶや、演説が高調に達したやうに見受けられた。

これから呼物の幻燈である、八時半から初まる、大學の技師望月さんと、小使と三人がヽりで、寫し初める、委員の紹介で、高野鷹藏氏は、其扁々しい體格を壇上に運び、連日の疲勞を推して、登壇された、最初に立山登山路の草原を寫せば、恰も實地に臨むが如く、詳細なる説明あり、出る寫眞、變る映寫、一として聽衆は讃嘆の聲を惜まなかつた、立山及槍ヶ岳より、有峰村に至る傑作三十餘枚、早く取換へるのが惜しい位で、いつもながら、槍ヶ岳が諸山脈の上に、ピーンとハネ上つてるのを見ると、フルへつきたくなる、定規の閉場時間に遲よいと、御話をハショられるのが、マザ〳〵見えて、御氣の毒でならない、九時二十分頃、大喝采の裡に降壇されて、最後に辻村伊助氏が立たれた。

氏は明後日敦賀を出帆されて、歐洲漫遊兼ねてアルプス登山に赴かれるので、繁忙中の一夜を割愛されたのは、感謝に堪へないのである、あの八寸二分の長大に似合はず、小鳥の如き柔かな、穩かな語調で、日本アルプス中、最も雄偉崇高な立山及後立山々脈縱走の御話を、伺ふのである、聽衆は一言一句を洩すまいと、座を進めた、何れも優劣なき逸品のみ、是亦三十枚餘、鮮明に映寫し、摘要の説明で、後立山々脈は遺憾なく紹介された、殊に五色ヶ原の高山植物、千紫萬紅亂咲裡に、人夫が熟睡して居る實況は、觀衆の永久に忘れられぬ印象であつた、前回と同樣、不馴の助手

が、往々寫眞をトッチッたのは御詫びを致して置きます。

閉會の辭を述べた時、六百有餘の聽衆は、殘り惜しさうに起つた、かく大成功の裡に解散したのは、十時であつた。

兎角雨と緣のある東京の山岳會と異つて、快晴であつたのは、何よりで、萬事好都合に行つたが、只一つ殘念であつたのは、時間の豫猶のなかつた事で、舌端より迸ばしむる御演說を、どなたも切り上げて、終を急がれた事と、矢張り時間のため、司會者の吾々でさへ、垂涎に堪えなかつた陳列室の出品も、定刻に閉鎖しなければならなかつたことであつた。

一般の公衆を入れて、こんなに靜肅に、秩序だつた會合は、未だありませんと、受附氏の言は、如何に眞面目な山岳熟愛者が、集まつたかゞ、裏書されて、一方ならず嬉しかつた。

來賓を全部送りだして、一同退出したのが、十時半、既う全く疲れ切つて、二度とやれるものぢやあない、と呟き合つたものゝ、こんな痛快な夜は、初めてゞここの後も實現したいものだとも思つた。終りに臨んで、本會の大成功は、左の方々の賜物であることを、謹謝して筆を擱きます。(三高山岳會一委員)

御講演を辱うした小川博士、小島、高野、辻村三幹事氏、種々の御便宜を與へられた今村幸男氏、酒井校長、陳列室に出品の光榮を得たる京都大學小山源治氏、石崎光瑤氏、加賀正太郎氏、大谷光明氏、槇谷徹藏氏、山口松香氏、久保雅友氏、當日御寄附下された小山源治氏及芝川又之助氏。

尙三高山岳會の手始めとして、近々の冬比良伊吹に登山をします。

◎會　報

東京地質學會に於ける飛驒山脈の地質及び氷河作用に就ての講演

東京帝國大學理科大學地質學教室に於て、十一月二十二日、午後一時半から、同會の例會を開かれ、飛驒山脈の地質及氷河作用に就いて、加藤理學士及山崎理學博士の左記二講演があつた、いづれも日本アルプス研究には、最も注意すべき題目で、當代の地理學者及地質學生の外に、我が山岳會からは小島が、案内を受けて參會した、山岳會員辻村太郎氏も參會された、信濃山岳研究會長矢澤米三郎氏も、滯京の機會を以て來聽されてゐた。

飛驒山脈の地質に就て

理學士　加藤鐵之助氏

飛驒山脈は、松本市から屏風立ちに見える一帶の高山で、北は日本海で盡きてゐるが、南は御岳までを含めていふのか、それとも南の方を切り捨て、乘鞍岳の北方までに止めて置くか、不明確であるが、私は乘鞍附近から北のところまでゞ、止めて置きたいと思ふ。

從來富山圖幅では、黑部山脈の名に書かれてゐたが、黑部山脈といふ名は、多く知られずに終つた、この飛驒山脈には三、〇〇〇米突以上の山は、わずかで、穗高岳の山稜から、槍ヶ岳に止まつてゐる、最高は槍ヶ岳の三、一七三米突であるが、その外は、二、九九八米突といふ、際どいところまで達してゐるもあるのが、

先づ三、〇〇〇米突に達したのはない、南は御岳、乘鞍が三、〇〇〇米突以上であるが、その里數は、平方一キロ米突コンマ五である、穗高岳より北の方、三、〇〇〇米突に近い高峰が、長く列なつてゐるが、之の高さの斷面を作れば、平均二、五〇〇米突の高位である、それに比べると穗高岳から南は、概して低く、平均一、七〇〇米突高位である、しかも乘鞍や御岳の火山を加へてさうなるのであるが、この二大火山の塊を除けば、猶ほ低くなつてしまう、火山のために平均高位が、引き上げられてゐるわけである。

この山脈の山形を見ると、二、五〇〇米突以上は、一般に急傾斜で高山性をなして、中には槍ヶ岳のやうに槍形に尖つてゐる、のもある、又一般に低い方の地形は、中山性のもので峨々たる山相を呈してゐないが、谷に臨んだところは、急傾斜をしてゐる、二、五〇〇米突以上が、高山性を作してゐるのであるが、それも槍ヶ岳及穗高岳を除くと、立山や劍ヶ岳すら、ズツと上へ行かなければ、高山性の形を見られない。

山間には、何の原、何の平といふ奇妙な平地がある、槍ヶ岳のズツと北に、雲の平、これから立山溫泉の南に五色ヶ原など、美くしい草花の野で、なだらかである、立山の彌陀ヶ原も平らである、岩熔岩浮流（ラヴァフロウ）で、谷の一部を埋めたところと思ふ。

川の傾斜は、本流に著るしい變化がなく、川に沿つて行けば、上流まで、行き得られる、瀧になつてしまふやうなところはない、尤も小さな支流には、瀧となつて、本流に落ちてゐるのもある、この小支流には懸谷（ハンギングヴァレイ）が多い、大きな谷は、皆上流が背合せに、他の大きな谷を持つてゐる、例へば高瀨川右俣左俣の谷と蒲田川に於ける、又は黑部川と双六谷に於ける、梓川と烏川に於けるやうなものである。

加藤氏は、これから山上の風の方向、雪線、及び殘雪、勃植物、人里、岩石、鷲羽岳火口湖のこと、及び飛騨山脈地質構造に亘つて詳述せられたが、紙面の都合で、略すことにする、壁間には參謀本部五萬分一圖を繼ぎ合せて、着色せられた地形及地質圖が掲げられ、これに依りて、講話された、最後に飛騨山脈に就いて以下の如く結論された。

飛騨山脈の土臺は、古生代の、一ッの褶曲に依つて出來たのではあるまいか、北東から西南へ走る走向は乘鞍岳の麓で、他の異つた走向と三角形になつてゐる、飛騨山脈の走向は、北から南西へと向つてゐるが、鉢盛山もさうである、木曾山脈も木曾の川東に、同じ走向をなして走つてゐる、赤石山脈も略ぼ同じ走向で走つてゐる、山脈の方向が太古紀の走向の方向及び片麻岩系の方向と并行（パラレル）になつてゐて、之の間に火山岩が、三十度位の角度を取つて噴出してゐる、則ち山脈の軸と、山稜（リッジ）の走れる方角と、土臺と走向の方向（ストライキ）が并行（パラレル）になつてゐるから、飛騨山脈は褶曲山脈と言つてもよからうと思ふ。

從來飛騨山は斷層山脈と言はれてゐた、成程高臺の端に隆起してその一方の斷層に依り、屏風立ちに高峻になつてゐるのは、事實であるが、假にさういふ落ち込が無いとしても、山の成因としては、褶曲山脈である、斷層でたとひ切られてゐなくとも、高山としての存在があつたものである、

赤石山脈の如きも、峯無の山で截られてゐるから、單にその截り口だけを見て、名を付けたら、斷層山脈にされるかも知れないが、併し成立は、褶曲山脈であるから、さう言つて差支へがない、既に飛驒山脈が褶曲山であるとすれば、近來一般に流行して來た日本アルプスといふ名は、地質に關係してゐるものが言つても、不適當では無からう、日本アルプスの範圍は北に飛驒山脈中央に木曾山脈、南に赤石山系を引つ括められてゐるが、飛驒山脈は斷層山脈であつて、アルパイン建築（ストラクチュア）でないといふ理由で斥けられてゐるのであるが、これが褶曲山脈といふ說明が付けば、そこで極く平和に解決がつくと思ふ。

たゞ山脈には、火山が噴出して、御岳乘鞍岳のやうな、高山が出來てゐるが、之れ等を日本アルプスに入れて、火山の高さをアルプスの高さと見ることは少し困るだらうと思ふ。

飛驒山脈に於ける氷河作用に就て

理學博士　山崎直方氏

日本の氷河問題に就いては、一、八八〇年、ジョン、ミルン氏が、アヤック、ソサイエチイに於て發表したのが初めであらう、日本人でその頃飛驒山脈を歩いたものは至つて少なかつたし、外國人の中で、飛驒を歩いて、或ところには萬年雪がある、或は氷といつても宜からう、小氷河があらうぐらゐの未確定の考へを述べたものはあつた、ミルン氏は自分の考へは述べずに、東北地方を旅行したとき、月山の地形から想察して、氷河があつたらうといふことを、模型圖を示して述べてゐる、さうしてそれを直接の證據（エヴイデンス）と言つてゐるが、肝心の月山の記述は、僅か五六行しかない、その記述は、いかにも淡泊で、委曲（デテイル）を盡くさず、捉まへどころに苦しむわけで、本年の夏、私は東北地方旅行の次手に、月山に登つて、ミルンの蹤跡を逐うて歩いたが、氏の所謂ルンド、ヘッカアと稱するところ、ハンモック形の地形をなしてゐると思しきところは、生憎雨に雪さに妨げられて、よく見ることが出來なかつたから、いづれもう一度踏査して、見たくもあるが、ともかく初めて唱へたのはミルンであるが明確なことは、一寸判斷に苦しむのである。

その後氷河に就いての發展はなかつたが、明治三十六年、私は白馬岳に登り、翌年は針ノ木峠より立山に旅行して、地形上から氷河があつたらうといふ考へを述べた、殊に著るしいのは高山性の特色を有し、その地形にはカアルが到るところにあつた、氷河の辷べつた谷の形も見えるし、山腹にも堆石らしいものが見える、さういふ立派な特色があつたが、不幸にして私の說は、一般に容れられなかつた、尤も公然と書いたもので、受け入れないことを言はれたのは、石川成章君の「地球發達史」だけではあつたが。

然るに私の說が、亞米利加の「サイエンス」といふ雜誌に、氷河學者ライト氏の手で、發表された、誰が通信したものであるか、不審に思つてゐたが、世の中には篤志の人もあるもので、それが後になつて、目下日本興業銀行の副總裁をしてゐられる小野英二郎氏といふ銀行家の手に、飜譯されて、彼地へ送附されたことが解つた、この「サイエンス」に出た文は、歐州の二三の雜誌に轉載されたが、當時の檢分は淺薄で、地形圖の出版も無かつた時分で、不便であつた。

◎會　報　東京地質學會に於ける飛驒山脈の地質及び氷河作用に就ての講演　一九五

◎會報　東京地質學會に於ける飛驒山脈の地質及び氷河作用に就ての講演　一九六

氷河問題を決するには、地形も大切である、遺物も必要であらう、氣候等の間接研究や、化石的研究に待たねばならぬところもあらう、第三紀第四紀の化石を調べて見ると、この邊の氣候も寒かつたといふことが解るかも知れない。

然るに一昨年、横山博士は、それと反對の結論を公けにされた、博士は東京灣に近い房州で、珊瑚紀に屬する化石を調べ出され、洪積紀の日本の氣候が、暖かであつたことを推論された。

私は化石のことに、門外漢であるが、東北大學の友人、矢部教授が、又之れに反對の意見を言はれた、同氏は第三紀第四紀の地層の區別に、苦心研究の結果、化石だけで、こういふことを決めるのは、困難であるといつて、地盤全體の隆起及陷落等に就いて立言したいと言れた、いづれ同氏も研究の結果を公表される筈である。

私は氷河の特色ある地形として、先づカアルを第一に擧げたい、それは傷のついた堆石（モレイン）もあらうが、最も豐富で多く見られるのはカアルである、普通の谷は、上へ行ほど、狹くなるが、カールは釘の頭のやうに、上の方で開いてゐるといふ特色を持つてゐる。

カアルが、氷河から造られた地形であるといふことを、唱へたのは一、八六二年に、チンダルが初めである、然るに一、八七一年に、ポン子イが、カアルは流水作用で出來たものであるといふ說を唱へてゐるが、近頃一、九〇二年に、ポン子イは、依然アルプス研究で流水作用說を唱へてゐるが、それ以上に、流水說は一人もない、米國や、歐洲や氷河研究の最も便利の多いスカンヂナヴイアの學者でも、凡べて氷河說に一致してゐる、只だ氷河が「如何にして」カアルを作つたかといふ委曲（デテイル）に就いては、種々議論がある。（博士はこゝでリヒテルやジョンソンの說を紹介されたが、それは省くことにする）カールは大概同じ水平（レヴエル）のところにある、水の浸蝕なら、高低到るところに、諸方に作り得られるが、カールの水平（レヴエル）は、同一高度にあるのが常である、我が飛驒山脈では、シユルンド、ラインは、繼續的に追蹤（トレース）することは、困難であるが、その氷の溜まつた平位は、略ぼ同じで、黑部の五郎岳の高さは二、九一四米突であるが、カールの在るところは二、五五〇米突三ツ岳や赤岳のそれは二、六〇〇米突、黑岳のは二、五〇〇乃至二、六〇〇米突、藥師岳のは、二、六〇〇米突、立山雄山のそれは二、五〇〇乃至二、六〇〇米突で、多くは二、六〇〇米突の高さにカアルの床（フローア）がある即ち、同一水平に在ることは、雪氷と密接な關係を有してゐることが解る、併しそのカアルを作つた氷河は、私の考へでは、谷を一面に埋めるほど、氷のシートを成してゐた氷河でなく、山腹に處々に懸つてゐる、氷河で、今日のカアルの在るところに、存在してゐたものと見たい。

カールの緣（ふち）のところに堆石（モレイン）と思はれる破片岩（デブリス）の圓（サアキユレーション）輪が、今見ることも出來るが、私は之を堆石（モレイン）と斷言することは、躊躇する、何となれば氷河が去つて久しい後だから、風化や雪氷の作用で、高い緯度には、Solifluction が行はれ、石は流れ落ちて、カアルの盆地（ベーゾン）を覆ひもするし、雪の侵蝕作用、即ちニヴエーションも行はれてゐるから、現在に見られる石を、直ちに堆石と言ふことは、出來まいかと思はれる。

更に最近、新らしい現象が發見せられた、先頃獨逸へイデルベ

ルヒの、ヘットナア氏が、中仙道を通過されて、飛騨山脈に入り、梓川の谷に沿うて旅行せられたとき、氷河の條痕（ストリエーション）を有する花崗岩の、プロックを發見された、その發見の塲所は、島口から少し上の梓川の上流で、私も實見した、この梓川は、深谿（ゴルヂ）を成してゐるが、谷は氷河作用から成つたものではない、即ちU字形を作してゐないで、浸蝕谷のV字形をしてゐる、殊に稻核附近は、立派なV字形谷の標本である、稻核は水面から五六段もある段丘（テレース）の上に築かれてゐて、川の屈曲に、水のブツかつたところの小部分に作られた段丘もある。

この條痕（ストリエーション）のある石は、川の彎曲部の、小段丘の中に、上から轉がつた石の中に交つてゐるが、氷河のために削られて、表面にストリエーションの筋を見せてゐる、外國の氷河が削つた堆石標本の中で、岩床を削つたのに似てゐる、石の方々、どこにもトリエーションがある、こゝに石の上に、紙を當て赤鉛筆で擦（コス）つた石刷がありますから、お目にかけますと刷紙を示さる尤もこの附近に、まだ外にあるかと思つて探したが、見當りませんでした、この條痕ある岩石はツー、マイカ、グラニットで、產地は、鉢盛山であらうと思ひます、但しこの山は二、四四六米突の高さで、高山性の山ではありませんが、太古紀の岩石を貫ぬいて、噴出した岩石である。

飛騨山脈地方では、一年の平均温度が、僅か下つても、このくらゐな氷河を搾へたらうと思ふ、冬や夏の平均温度を、ウインの平均温度と比べて見ますと、殆んど差がありません、即ち高山、長野、松本の平均温度は一〇、一で、ウインのか一〇度であります

◎會　報　東京地質學界に於ける飛騨山脈の地質及び氷河作用に就ての講演　一九七

コンマ以下一の相違です、一月一日の温度は、ウインの百年間の平均が減（マイナス）コンマ一六ですが日本のは減コンマ一九です夏は、どうかといふと、日本の二二、一に對して、ウインが二二、五で、殆んど同じです。

氣候の上から言へば、もう少し山を高くすれば、氷河を得るゝことが出來やうかと思はれます、もし飛騨山脈が三千米突以上の山になれば、カアルが二、八九〇〇米突ぐらゐなところに、出來たであらうかと思はれます。

講話が畢つてから、机上に置かれた氷河の條痕ある花崗岩塊の周圍に、聽衆は眞黒にたかつて、檢分をした、室内が暗くなつたので、蠟燭が點された、その蠟燭を立てた反對の側に、細い擦痕の線が、胡麻白の肌を、引つ掻いたやうに浮び上つて婉れつてゐる。岩塊の側には、歐洲から取寄せたといふ氷河の擦痕ある、諸種の岩から成る堆石などが、比較對照のために、數個竝べられてあつたのは研究上の便利であつた、神保博士が氷河に關する質問を連發され山崎博士がこれに答へられてゐたが、それに就いては、記事が無い、中にはこの石一ツで、氷河を斷定するのは早計だと、大きな聲をして否認してゐる人もあつた、因（ちなみ）にいふ、この氷河の條痕ある石なるものは、天然紀念物保存のため、信州の所轄官廳の手を借りて、保護をして、濫に加鎚（ハンマー）毀損を許さないことにするさうだ、その石の所在地は、梓川の明（ミヨウジ）ケ平といふところで、石は山崎博士が發見者の紀念のために、ヘットナア石（スタイン）と命名されるさうである。

講演が終つて、室を出たときには、雨あがりの夕の空に日が黃

◎會報　山梨山岳會設立　會員登山報

色くさして、銀杏の並木が靜かであつた。（K生）

この講演筆記は、私のノートと、記憶に依つたもので、演者の檢閲を全く、經てないものであるから、正確を保し難いことを斷はつて置く。

山梨山岳會設立

山梨縣にして一の山岳會をも持たぬと云ふ事は奇怪である、とは縣下の山岳愛好者の間に屢々繰返されて居つた所だが遂に機熟して一部人士の間に山梨山岳會設立の議が起り十一月一日夜甲府市舞鶴公園内圖書館の一室に其相談會が開かれた、寒い暗い寂しい晩が特に嬉しく思はれた、石塚師範學校教諭が已を得ぬ事情の爲に來會せられなかつたのは遺憾であつたが日川中學校の糸賀佐々木田中三教諭に甲府商業學校の小澤教諭外二三の者はいづれも來會した。そして今年の夏いづれも白根へ登山した人達の事とて奇談快談湧くが如く座は意外に賑やかで趣味のあるものであつた協議の結果は廣く縣下の同好者の入會を得て來る十一月二十三日山梨山岳會としての第一回の會合を開いて會則をも議したる上名士の講演を乞ふ事に決定して散會した依つて何人たるを問はず山岳に趣味を有し會員たらんとする者は甲府市内廿人町九十三番地青柳氏方へ申し込まれたいと云ふ。

會員登山報

△榎谷徹三氏は八月三日大町出立、四日針木峠を越して平小舍に一泊、五日同所滯在、六日刈安峠、中ノ谷乘越を越えて雄山澤を溯り、一ノ越附近に露宿、七日立山の雄山に登り、大汝、富士折立、眞砂、別山の眷梁を傳ひて、別山頂邊硯水池畔に露宿、八日別山裏の雪を傳ひて劍澤の雪渓を下り、左岸より合する二つ目の大雪渓（五年一號に所謂長二郎谷ならん）のごうに露宿、九日この大雪渓を溯行して劍岳の最高點に登り、再び來路を降りて前夜の地點に露宿、十日前々日の路を辿りて再び別山頂に登り、立山眷梁を傳ひて淨土山頂に出で、同所に露宿、十一、十二、十三、十四日迄は間斷なき風雨の襲來を受けて同所に蟄居、十五日午後二時尾根傳ひに龍王岳に登り、佐良峠の頂に下り、五色原に登りて△標附近に露宿、十六日同所滯在、原頭を逍遥して寫生に費し、十七日佐良より平小舍に下り、針木澤を溯りて北葛澤のごう附近に露宿、十八日風雨中を針木越えに大町へ下らる。

△志村鳥嶺氏は、八月三日より、約一週間、白馬岳に登られ、同二十四日より一週間、高瀬入方面に旅行せられたり。

△會員南日重治、木暮理太郎兩氏は七月三十一日東京を發し信州上高地より槍ヶ岳、鎌尾根、双六、蓬萊、黒部五郎、薬師、越中澤岳を縦斷して五色ヶ原に出で、全處に滞在せる中村氏と共に立山溫泉に下り次て立山諸峯に登り、最後に劍ヶ岳を別山續きの縦嶺によりて極め、早月川を下りて伊折に出でられたり。

△同中村清太郎氏は七月廿一日東京出發富山より芦峅寺を經て立山溫泉に到り五色ヶ原に上り同處に八月七日迄天幕生活を續け、（其間木挽山、鬼ヶ岳の連嶺等に登る）南方より山脈傳ひに來れる木暮南日兩氏と會合、立山溫泉に下り前記立山諸峯及劔ヶ岳登攀を共にし雨の早月川を伊折に下り湯川に出で南日氏に分れ木暮氏と共に歸東したり。

△同武田久吉、梅澤親光兩氏は八月初旬三峯川を溯り信州荒川岳及前岳に遊ばれたり。

△武田久吉氏は八月末相州丹澤山に登られたり。

△同山川洵、山川默兩氏は七月末大町より針木岳、蓮華岳に登られ針木峠を越え黒部川に出で木挽山の一支山に登り重澤より黒岳、赤牛岳、赤岳に登り「ワリモノ」澤を下り湯股より高瀨の地獄に出で水股を下り東澤より中房溫泉に越えられたり。

△同山崎帝大教授（直方氏）は七月に學生見學の爲め東北地方を旅行せられ、一行と別れて本道寺により月山に登り手向に降り（七月廿五日）又二十七日には山形の西方白鷹山地方に行れたり、越へて八月七日會員加藤畿之助古山志郎氏と邊山兵三郎を連れて高瀨川を溯り鳥帽子岳、三ッ岳、野口五郎岳、赤岳等を縦走し黒岳鷲羽岳を經て雲の平を縦走し、黒部川に降り薬師峠に至り、天候の爲め薬師岳に登らず、有峰に出で飛驒より岐阜に出でて歸京さる、此行本邦高山の特色殊にカールに就て得られし所多しと聞く。

△同濱名增雄氏は八月中旬白馬岳より蓮華溫泉に降り糸魚川を經て歸らる。

△會員甲藤新氏は八月五日友人一名と東京を發し七日乘鞍岳に登山、山中にて發病爲めに平湯に下り、上高地を經て歸京さる。

△同高橋政次郎氏は七月廿一日北城を發し白馬岳より祖父岳まで縦走、天候頗るよく、たゞ白馬頂上小屋にて細雨の爲め一日滞在したるのみにて、八峰も明かに探られたり。

△同伴野清氏は七月廿一日東京發大町より山川洵、山川默氏と針木峠を越へ廿四日蓮華岳（針木）に登り廿五日平の小舍泊廿六日黒部の左岸を朔り中コビキ澤よりコビキ山の一峰を乘越して、奥コビキ澤を下り東澤の堂に出で、黒部を徒渉して、東澤を溯り二ノ澤の堂附近に泊り廿七日には東澤を朔りて赤岳雪渓下に野泊廿八日黒岳を東より登り赤岳に登らる、途中中村考二郎氏と會合赤岳に野宿廿九日山川氏一行と別れ野口五郎より烏帽子岳より濁の頭にて一泊卅日大町に歸らる。

卅一日中房溫泉着、八月四日有明山登攀九日東京高等師範學校附屬中學校山岳會と共に燕大天井を經て二俣小舍より十日常念岳を經て赤澤小舍泊り、十一日槍に登り上高地着、十五日霞澤岳に登られたり。

△名譽會員ウオルター、ウエストン氏夫妻は八月上高地に滞在槍ケ岳に登られたり。

△會員藤井乾助氏は十一月十五日臺灣嘉義を發し籔峠に一泊、徒

◎會報　會員登山報

◎會報　會員登山報

歩にて阿里山登山、十八日万歳山に登らる。

△同加賀正太郎氏は八月日光湯本に滞在さる。

△同加山龍之助氏は八月十一日芦安より地蔵鳳凰に上りそれより野呂川谷の廣河原に下り白峰に登らんとして降雨の爲め失敗夜刃神峠を越へて歸らる。

△同加藤竹三郎氏は八月廿二日甲州七面山に登らる。

△拜啓秋旅十九日より連日の快晴に紅葉を觀賞いたし候十九日横濱ー青梅（坂ノ上）。廿日青梅ー氷川ー日原（氷原屋）。廿一日日原ー仙元峠ー鷲川（因）。廿二日鷲川ー三峰山ー栃本（大村與一）廿三日栃本ー十文字峠ー梓山（白木屋）。廿四日栃本滞在。廿五日梓山ー金峰山ー黒平（黒平鑛泉）。廿六日黒平ー御嶽ー甲府。同行は會員忽滑谷君而して同氏は天龍川を下り小生は富士川を下りて歸途につき申候　（豆州長岡温泉にて十月廿九日北澤某幸）

△小生等去る十月十六日東京發三峰に泊り十七日、十八日、大雨の爲栃本に滞在十九日の晴天に乘じて十文字峠を信州梓山に到り二十日好晴に浴して金峰山を越えて黒平鑛泉へ下り二十一日夜東京へ歸着致し候

紅葉は栃本の奥より黒平迄は眞盛にて殊に落葉松の黄葉の煙るが如きがうれしく存候梓山の寒きこと置水なぞ朝は薄氷に閉され、畑、原、橋におく霜は雪の如くにてこゝの西方に聳立せる八ヶ岳連峰、甚冠山は雪を以てその容皺を飾りその山おろしは肌をさかんばかりに候金峰山頂の眺めは申分なく北アルプスの北半（南半は八ヶ岳にかくれ候）針の木岳以北の雪山を明瞭に觀取仕候金峰には未だ雪降り申さず御室は本年九月下旬に二間三間程のもの新築され候楢峠附近一里餘の間溪谷紅葉の林間に夕立を貪ふて堤の如く競ひ立てる甲斐駒白峰三山の偉大な風姿に幾度か足すべらせ候梓山より黒平迄は十里程の里程に候匆々　（岡埜德三郎、冠松次郎）

△七月三十日金峯山、奥千丈、國司嶽の縦走を企て東山梨郡中牧村楢峠より登る、同行七人、其日午前三時出發午後十時半金峰山下の寒川磧に達せしも山麓の室堂燒失せしが爲目標を失ひ登山口を探すに手間取りたり室堂の川磧の右岸大岩壁の下に於て露營の跡あり五月中旬、南、中村、木暮氏等一行の跡なりしならん歟、午後一時二十分金峰の絶頂を極めしも天候不穏の兆ありし故に奥千丈、國司嶽の登攀を斷念し歸途に就けり頂上の眺望は八ヶ嶽の中腹以上を雲に妨げられしのみにて他は千里の目を極むるを得たり、途中キンバイ草、九カイ草、ヤナギ草、キヨウカノコ等の花咲亂れて見事なりし　（大村忠一）

△本月三日より屋嶌眞師及黒薙温泉主外一名と共に黒部方面より劔山登攀を企て候、一日、黒薙温泉、二日鐘釣温泉、三日小黒部を溯り劔大窓附近にて露營、四日劔岳北峰の一角に登り、劔澤に下り劔山の背面、梯子坂落合附近露營、五日、別山に出で尾根傳ひに大汝富士下り立より立山頂上に向ひ候此途中にて槍谷氏の劔岳登攀出發に逢ひ少時面談、それより室堂に立寄り立山温泉に至り五百石町より輕鐵にて湯川に出で官線にて三日市驛に着致し候兎も角此行により立山と黒部との連絡容易なるとを確め申候今後此方面の登攀を見ることゝ存ぜられ候併し人夫の撰擇は何より肝要に

候小生等は音澤村の助七を伴ひ候助七は黒部の神と云はれ居る者に候祖母谷温泉は本年開湯しません、黒薙温泉の附近に二見温泉ができました。（吉澤庄作）

△（前畧）北澤氏と別れて後、廿六日上諏訪泊、廿七日時又泊、廿八日時又發五里の下御供（オドモ）迄船、三里陸行し平岡村滿島泊、廿九日滿島より中部（ナカツベ）迄筏夫關屋某に懇願の後、筏に乘りて所謂悽絶愴絶を極むる中隊下を決行致し候、滿島中部間の難場次の如くに御座候。水神、新瀧、上下の高瀨、さふんどのせつちん、同大輪、川尻のひげ石、たばこ石、ちやうな、ほらがい、おこぜ、上下のこんにやく、白浪、上里岩、杣石、ひきぎの輪、よりが瀧、やまぶろの瀧、（第一の難所）、萬丈が瀧、瀧荒、湯の島、天狗石、殿乙（ドノオツ）（當字）

松島の釜等に候

筏流も十月上旬より四月中旬頃までとの事に候

廿九日秋葉神祠參籠卅日下山東雲名村より五里の下鹿島まで船それより濱松迄輕便鐵道にて候（忽滑谷安美）

△那須へと志して七月廿二日出立いたし候夕刻湯本松川屋につき候、其夜より降り出したる雨に、廿三、廿四、廿五日と三日閉ぢこめれ候、廿六日朝出發、辨天、大丸を經て、荷置場邊よりまづ毘沙門、劔が峯、旭嶽、三本槍と尾根づたひをいたし候、三本槍は最後の點までゆかず班林（四一、四二）とある處より引きかへし候、それよりまた熊見曹根を經て茶臼山にかへり、火口をめぐりて絶頂につき候、歸路は八間石、彌陀の原、高雄俣と行者のとほる道をとり候、湯本にかへりたる五時過ぎ、茶臼山の立派なるはもとよりなら、往く人の少きと途中の趣あるとは、旭三本槍の方面なるべく候、（なほ土地の者の中には毘沙門附近のきはめて近きところを三本槍と申すもこれあり候）二三ヶ所大分嶮なるところも候、廿七日には八幡を經て北湯に赴き候、浴後白川道より折れ餘笹川をさかのぼりて駒が瀧をみ候、三本槍の方は多少の困難を覺悟してゆきたれどこの澤はさまでならざるべしと思ひたるに徒渉をさせられ候、同夜歸京。其後八月中八ヶ岳に登攀仕候（編者曰本號記載の紀行參照）（別所梅之助）

本會々員茨木猪之吉氏の
山岳畫頒布に就て詳細は
本誌廣告欄御覽を乞

發起者　同

風景畫家

歌川廣重傳

小島烏水

未定稿

緒言

一、廣重沒してより、半世紀あまりを經過したるに過ぎず、製作版畫の世に存在するもの、未だ少なしとせず、歐米美術批評家の多くは、早くも彼を世界に於ける大風景畫家の列に入れたるにも拘はらず、傳記は本國なる我日本に於て、却つて短かし、少なくとも余が知れる邦人の浮世繪史類は、彼のために、僅に二三頁を割愛せるのみにして、その生涯の事蹟も、版畫の海外流出と共に、年を逐うて堙滅せんとす、余が浮世繪に造詣なくして、本傳を立てたるも、幾分か零細の事實を拾収補綴して、散逸を防ぐくらゐの、役目を務めんと思へばなり。

一、本傳に於て、余が參考に供したる、もしくは本文中に引用したる書籍雜誌は、左の如し。

◎浮世繪編年史（關場梅屋氏）◎浮世繪備考（梅本塵山氏）◎浮世畫人傳（關根金四郎氏）◎歌川廣重傳（「みづゑ」雜誌所載、作者不知）◎光風（白馬會編輯雜誌、目下癈刊）◎趣味研究大江戸（江戸研究社發行）◎古今實業圖繪（商業界第十卷第五號）◎日本風俗史（藤岡作太郎氏平出鐵二郎氏共編）◎此花（宮武外骨氏編輯雅俗文庫發行）◎美術新報◎明治三十一年浮世繪展覽會目錄（エルチスト、ヒフ、フエノロサ氏著）

Colour Prints of Japan (by Edward F. Strange. 1906)

Japanese Wood Engravings (by Prof. W. Anderson. 1908)

The Arts of Japan (by Edward Dillon. 1906)

Catalogue of the Happer Collection of Japanese Colour Prints (by J. S. Happer. 1909)

Collection Hayashi (林忠正 1909 Paris)

The Dating of Japanese Colour Prints from 1842 (by J. J. O' Brien Sexton, The Studiao vol, 58 No, 242.)

一、米人 J. J. Happer 氏が一九〇九年に出版したるカタログ (Catalogue of the Happer Collection of Japanese Colour Prints) 第二卷は、既刊書類中、最も多く廣重版畫の目次を網羅し、且各版畫に就いて概略の解說を附せり、我が本文の廣重畫譜は、右を骨子として、余の所藏に係はる分は原版畫と逐一對照し、傍ら確實と信ずる見聞に依りて增補改訂せり。

一、著者素より材料乏しく、所藏版畫亦きはめて少なし、定めて本文にも過誤多かるべきをおそる、されば本傳に於ける誤謬脫漏疑義等を、細大となく御指摘ありて、示敎を賜はらん事は、著者が最も熱心を以て希望するところなり。

大正二年十一月二十八日

著者

一、世相畫と民衆藝術

史に稱す。

慶長年間に、岩佐又兵衛といふ畫工が、大津街道に店を出して、佛畫や、又は當代風俗の寫生畫を賣つてゐた、後には、追分、伏見、大谷邊にも、同じやうな店が出たらしい。

今までは、公卿か大名でなければ、容易に持たれなかつた繪畫が、安いお錢で、平民の袂にも、無造作にねぢこまれるやうになつて來た、元祿十六年板の『俳諧日本國』といふ本には、『追分の繪佛に後世をうち任せ』(土山林)又『大津繪に回向して行く鉢たゝき』(一睡)といふ附句がある、日が暮れて寂びしい宿驛に、泊まりを急ぐ旅人たちも、この大津繪の前には、ちよつと足を停めて、覗いても行き、默禮ぐらゐはしたものらしい。

この大津繪が、日本全國、可なりの片田舍までひろがつてゐたことは、飛驒の山の中に、毛坊主といふ俗體の僧があつて、平生は農をやつたり、木樵をしてゐるが、人が死ぬと、出かけて埋葬の導師になる、本尊は路傍の石地藏であつたり、又は大津繪の十三佛であつたと、古い隨筆本に見えてゐるが、懷中から大事さうに、大津繪を取り出して、死人に引導を渡すなどは、日本アルプス山中の陰鬱な生活を思はせると共に、こんな粗末な一文繪も、いかに人々の生活に、交涉してゐたかゝ解るであらう、我が王朝時代の貴族的藝術が、佛畫佛像から先に發達したやうに、浮世繪のはじめも、やはり佛繪で、當時の人心を深く占領してゐる宗教の方面から、切り込んでいつたものであつた。

岩佐又兵衛の勢力は、德川氏の初年、明曆萬治まで殘つてゐたらしいが、又兵衛自身の時代は、まだ繪入草紙などの刊行が無かつたゝめに、汎く民衆と亘る機會を得られなかつたが、寬文年間に菱川師宣が出て、一方に粗末な大津繪を革新し、一方には一層汎く世間に普及するやうに、一枚摺の版畫

◎附錄　歌川廣重傳

◎附錄　歌川廣重傳

を出して、浮世繪の新紀元を開き、民衆の向上求美の心を滿足させるやうになつた、彼はその目的に向つて、肉筆ものよりも、版畫を多く出したらしい。

かくの如くして慶長の大津繪は、元和延寶になつて、一枚繪の板行となり、元祿の丹繪となり、享保の紅繪となり、寬延の彩色畫となり、明和の吾妻錦繪となり、何枚續きかの長繪となつた、當時政權が江戸に移つて、新開都市の人口が、繁殖すると共に、今までは關西に發達した土佐風の繪を修行してゐた人たちも、又兵衛に剌戟されて、型よりも眞、粉本よりも現實を描寫するやうになつた、もう山水花鳥でもなければ、朝比奈と鬼と首ッ引するやうな、强がつた繪でもあるまい、市民は後生を願ふよりも、現在の享樂を希望してゐる、市民行樂の中心點は、歌舞伎芝居に向ひ、吉原の遊女に向つた、相撲取でさへ、前髪に櫛をさし、うす化粧するものも出て來た、宗教畫は顧たれて、今樣の風俗畫が、勃興したのは當然である、俳人嵐雪が『菱川やうの吾妻俤』（みなし栗）と時世粧を咏嘆するやうになつたときには、さすがに美術には、權威の府なる京都からでさへ、鳥居清信は流行の菱川ぶりをスタデイするために、節を屈して江戸に移住した、さうして後に一流の鳥居風を工夫して、歌舞伎の繪看板や番附を描き、時代の好尙を支配するやうになつた。

大名貴族の御抱繪師からは、町繪師と侮蔑されて、藝術界の穢多扱ひにされても、彼等浮世繪師は、江戸の殷富と、市民生活の向上に伴なつて、時代に適應するやうに、種々新傾向の畫風を起した、殊に色摺に就ては、種々驚嘆すべき發明をして、厭人刷工に、名人上手を輩出した、一方に於て大商店や工業家のために、或は廣告のデザインを考へ、器具の模樣を案出したり、新奇を競ふ俳優や遊女のために、新意匠の衣裳を描いたり、染めたりして、髪の結ひ振りから、下駄の鼻緒にまで、影響を與へ、最早市民日常の生活とは、切つても切れぬ密接の交涉を有するやうになつた、狩野派や土佐派の繪師のやうに、かの十八世紀、佛蘭西宮庭の生氣なき美術家を憶ひ出させるより外に能のない、抽象

した、虚僞の製作を、貴顯の權勢に、保護されて、拘束と、舊習と、傳統の下に、産出してゐるのに比べて、彼等浮世繪師は、過去もなく、先例もなく、傳統もなく、自由と、歡喜と、或ひは放逸なる肉慾や、無檢束の歌舞の天地にあくがれて、自分たちの本然を、忌憚なく、さらけ出した、又兵衛が大津に店を出した、といふ浮世繪史上、冒頭の第一節は、やがて江戸の吾妻錦繪店に、參勤交代の御伴をして來た田舍武士や御江戸見物の旅客などが、群がつて土産に買つてゐる舞臺面を、先づ構成したものといつてよからう。

先頃米國で死んだ、我浮世繪の紀念すべき紹介者、かのアーチスト、フエノロサ氏（この人はボストン生れで、明治十二年、わが東京帝國大學に聘せられ、政治理財を敎授したのであるが、日本美術の復興に就いて、最も有力な働きをしたので、却つてこの方面に名高くなつてゐる）が『日本では德川時代になつて、始めて平民の美術を見ることが出來た』と言つたのは、さすがである、浮世繪の中でも、殊にその版畫の特色として、歐洲近代の印象派にまで、影響を與へたのは、線と形と色の調和であつた、この方面で、歌麿、北齋、廣重等は、西の國の美術批評家たちに依つて、世界の巨匠天才と比肩する高位置にまで押し上げられた、それが法外な買ひ冠りであるか、ないかは、暫く別問題とするも。

浮世畫が、「平民の美術」であることは、浮世繪師が御抱畫師の如く、俸祿に衣食しなかつたといふばかりでなく、又粉本に依らないで、現實の世相を端的に寫したといふことのみに止まらない、彼等は幸か、不幸か無學者であつたゝめに、非常に日本人といふことの自覺が强かつた、この點に於て、外國の經書典籍を、崇拜して、自ら東夷と稱した物茂卿こと、荻生徂徠のやうな、大儒先生とは、心意氣からして全く別な人間に生れついてゐる。

菱川師宣は、自ら「日本繪師」と名乘り、その作品には、堂々と日本繪師なる肩書の下に、署名したゝ

◎附錄　歌川廣重傳

◎附　錄　歌川廣重傳

めに、貴族的傳統的畫家から忿怒と反感を買つたが、彼は實際のところ、さう確信してゐたのである。かの筆意骨法、狩野土佐の二流を出入呑吐して、浮世繪に一旗幟を立てた西川祐信は「繪本倭比事」（寛保二年版）第十卷で

上古の繪、多く唐畫を師とし、學びぬれば、唐流に着して、其圖する所、皆聖賢又は詩人　仙客の類のみにして、本朝の人物は稀なり、偶ま神像などを畫くと雖、皆唐流を用ひ、宛然唐土天竺の人倫の如し、筆法又唐に着して、和人に應せず、故にたま〳〵、和人形を畫けるも、唐めきて精神こもらず、是偏なるにあらずや、この故に、その得たるところに本付て、和流を卑しめ、圖形を、なすにも、唐山水、唐耕作、唐兒遊びなど、皆唐に歸して本朝を捨つ、これ遠き他の國を信じて近き我國を卑むるの心ならずや、この國にして、この國の風俗を見識せば、豈樂しからずや。

と、先づ挑戰の鬨の聲を擧げた。

下つて天明四年版、喜多川歌麿の「繪本詞の花」といふ狂歌本に、宿屋飯盛が、浮世繪と狂歌の二つばかりは古を師とせず、全くそれ自身獨歩のものであるから、大才が今ではこの道に輩出したことを誇り顏に

浮世繪は菱川を祖とし、ざれ歌は曉月を師とす（云々）そも〳〵よろづの道、みな古を師とし侍れど、ざれ歌と浮世繪のふたつばかりは、水より出づる氷の冷たきがごとく、すぐれたる人は、今の世に多かり。

と力說してゐる、又天明六年「繪本色あらそひ」には、日本和歌の古典なる古今集の序を、巧にもぢくつて

やまと繪は、人の心をたねとして、よろづの姿をうつせり、世の中にある人、ことわざ、見るもの、きくものにつけて、花をかざる商人、泥水にすむ遊女、いづれか粉本ならざらん

と、浮世畫が世相一切畫で、拘泥も嫌忌もなく、人の心の自由の天地に駈けてゐることを言明してゐる、かくの如く彼等は第一に反抗的革命的の藝術家であつた。

反抗的革命的の藝術家は、破格者や脫走組に多い、我が日本で漢畫から脫奔して、ともかく日本國の鄕土の匂ひのするやうな藝術は、繪畫では何と言つても、土佐派と狩野派に見られるのである、されば浮世繪師の藝術的系統を溯つてゆくと、その土佐派と狩野派から更に脫走した人々が多い、岩佐又兵衛は土佐派から出た、英一蝶、西川祐信、月岡雪鼎等は、狩野派から脫走した、堤等琳は雲谷派から、喜多武清は文晁派から離反して、孰れも夫れ々々特立獨歩して、自分たちの行く途を開拓した。

藝術の革命は、必ず固定した形式の破壞と、沈滯した氣運の攪亂とに初まつて、新規蒔き直しの地均らしから、築いてかゝる、彼等浮世繪師は、典籍からの方則儀式、粉本からの模型を捨てた代りに、見たまゝ、在るがまゝの、實物寫生から、改めて第一歩の發足をした、この點に於て、彼等はむしろ、駭ろくばかり智識的で、經驗的であつた、彼等の靜物寫生や動物寫生は、一線の細きから、一點の微まで、洩らさずに、もしくは洩らすまいとして、寫し、着色の生彩は、むしろ科學的と思はれるほど、如實で精緻であつた、古くは勝間龍水の「海の幸」長谷川光信の「日本山海名物圖會」下つては喜多川歌麿の「蟲えらみ」「汐干のつと」蒔繪師月の「山海名產圖會」鍬形蕙齋の「鳥獸略畫式」「魚貝略式」葛飾北齋の「百馬百牛」同爲齋の「花鳥山水圖式」河鍋曉齋の「繪本鷹かゞみ」と算へ來り、更に我が大風景畫家、一立齋廣重の「魚類畫譜」を加へて、農業工藝水產動植物等博物學上に、本邦では空前の貢獻をしてゐる(これが正しく利用されてあるか、ないかは別問題として)のみならず、更に名所畫の地相學的(トポグラフィカル)なると、肖像畫の寫眞式なると、建築圖式や、彫工圖式の設計圖案的なると、——私は何も應用上の効果如何を以て、藝術の價値に、加減を加へるつもりではないが、ゴンクウルも言つた

◎附錄　歌川廣重傳

といふ、日本の羈絆藝術が、純正藝術と全く同等の價値にまで進歩してゐるといふことは、實に彼等の力である——彼等の藝術が、根本的に新らしい土壌から、若々しい、輕く明るい芽を萠したものであることを、否みがたくおもふ、かくの知く彼等は、第二に破壞者であると共に、創造者であつた。

且彼等が出身した階級は、どんなものであつたかと見ると、先づ左表の如きもので、當時の社會からは、侮蔑された階級に屬してゐるものが多い。

雛屋立圃	人形師	菱川師房	染物業
烏居清元	俳優	宮崎友禪	染物業
奥村政信	本屋	烏居清滿	三味線屋
小松百龜	藥種屋	富川房信	本屋
北尾政演	煙草入屋	橘峨江	縫箔師
戀川春町	戲作	松屋耳鳥	骨董屋
菊川英山	造花業	窪俊滿	彫金工
石川豐信	宿屋	溪齋英泉	戲作
蹄齋北馬	武士	岩窪北溪	魚屋
歌川一豐	八百屋	歌川國信	御小人目附
曉鐘成	味噌屋	岳亭春信	戲作
吉田魚川	彫刻師	葛飾北齋	鏡磨

彼等の大多數は、素町人である、あまり大手を振つては、往來の眞ん中も通り兼ねたのである、さうして最も當時に卑しめられた俳優と遊女とを、流行の中心圈として、そこから江戸の新文明を形ち作つた、と言はれないまでも、通と粹とを生命とする、最も垢ぬけした新市民を作つた。

我が歌川廣重は、この江戸文明の爛熟した天保年代に榮えて、浮世繪の頽廢末紀ともいふべき安政年代に凋落した、彼は光榮ある浮世繪史の結末を附けるために、數多くの江戸市民から選出されたやうに、前にはその存在をも認められなかつた風景畫なるものを完成して、特殊の位置にまで押し上げ、その大事業の終局と共に、彼も世を去り、間もなく浮世繪も、德川幕府の顚覆と共に、敗亡してしまつた、しかしながら江戸末期の文明から、たとひ凡てを引去るとするも、北齋と廣重は、鑛滓の中の精金のやうに殘らなければならぬ、又光つてゐるのである。

二、誕生

歌川廣重の本姓は、安藤氏で、寛政八年江戸八代洲河岸の、火消屋敷に生れた、幼名は明治の小說家、尾崎紅葉と同じく德太郎である、後に十右衛門（一に十兵衛）又德兵衛と改め、名は元長（元長の名は浮世繪派畫集に、見えてゐるが、その他に所見がない）といふたとは、傳記家の說くところである、廣重の父の名は、知られてゐないが、役目は定火消同心であつた。

浮世繪の大畫家の家系が、いづれも當時卑しめられてゐた、下層の階級から出たことは、前章に述べたが、我が大風景畫家も、その例外ではなかつた、定火消といふのは、慶安三年に、始めて二組ほど置かれたもので、その後增減はあつたが、寶曆元年、八組に定められた、俗にそれを火消屋敷といつて、その屋敷が、江戸城の周圍に、八ヶ所設けられた、八代洲河岸もその一つである（享保四年に、名高い町奉行、大岡越前守が、町火消四十八組を組織したが、それと混同してはならぬ）火事は江戸の花などと言はれて、繁華の市に唉く、怖ろしくも美くしい毒の花瓣であつた、江戸市民の生命財產の安固は、之に襲はれるから、幕府もよほど用心をしたものと見えて、常に消火夫を集めて、非常に備へさせてゐた、されば定火消役は、四千石以上の旗本から命ぜられ（或はいふ役高は三百人扶持）

◎附　錄　歌川廣重傳

若年寄の支配に屬して、與力六騎、同心三十人を指揮することになつてゐる、さうして與力は百五十俵、同心は三十俵二人扶持の手當を頂戴することになつてゐる、廣重の父は、この三十人の同心の、一人であつた。

町火消とは違ふ、と言ひながら、同心は武士の格ではない、今日で言つて見れば、同心は刑事巡査のやうなもので、手下には探偵諜者の類、即ち目明し、岡ッ引を使つてゐた、まあ怖持てのする、品のよくないお役目で、帶刀はしてゐるものゝ、身分は至つて輕い、その上役の與力となると、さすがに、もらひ高は多く、相應に立派な邸宅も構へることが出來たものゝ、格から言へば、賤しいものであつた、併し三百年も、泰平の夢に醉つてゐる御役人であるから、怖らしい役目にも似ず、粹と澁いのを悅んだ人たちが多かつた、紺足袋を穿き、黑紋附の羽織を着ながし、獻上博多かなんかの帶をずつと下げて締め、雪駄をちやらつかせなどして、往來を步いたものだといふから、今日の刑事巡査とは、ちつと違ふやうである、かゝる役人の家から、大なる藝術家を產み出したことは、さまで僭上ではなかつたらしい。

與力も同心も、株になつてゐて、賣買が許されたもので、與力の上を徒士といひ、徒士からは、士分となり、株の賣買などは出來なかつたものである、廣重の父は、同心と言ひながら、定火消附きの方であるから、普通の刑事巡査とは少し違つてゐたにもせよ、先づ武士などには、齒ひせられないほど、輕蔑された格である。

併し廣重の父が、同心であつたことは、廣重が後來畫家として、自分の運命を開拓して行く上に、大なる援助となつたと、想像せらるゝ、それは時の官吏に知り合ひを多く持つてゐたゝめ、官尊民卑の時代には、他の素町人出の畫家などが、及びもつかぬ便宜を有することが、出來たらうとおもはれる、後に記する如く、官吏に隨つて東海道五十三次を旅行して、それから彼の出世作、東海道五十三次

を出だすやうになつたのも、その一例である、又廣重が最も親しい友達として、往來して畫道を研究した岡嶋林齋（狩野素川の門人で、素岡又は梅齋、半仙などいふ號がある、俗稱武左衛門）は、八町堀の定火消與力で、階級にいくらか上下はあつても、同じ役目で、年齡も似たり寄つたりであつたため、互ひに尊敬し合つて、啓發もしてゐたらしい、併し廣重が、繪で世の中に立つやうになつてから、この火消屋敷を出て、大鋸町に轉住したが、この時は同心の株は、もう賣却したものと思はれる、刷毛を持つ手で捕繩十手は持たれなかつたらうから。

三、入門

德太郎は、幼少から描くことが好きであつたが、この少年の畫に對する好奇心を、顯著に刺戟することが、一つ出來た、それは文化二年、彼が十一歳の時であつたが、冬十一月琉球人が、江戸に來貢した、正使は讀谷山（ヨンタン）王子といふので、半熱帶國から、筑波おろしの寒い風の吹く江戸まで出て來たところ、生憎この年は、關東一帶强い寒氣で、江戸も大雪が降り出した、琉球人はみんな弱り込んだが、一行の中、比喜親雲上と呼ぶ老人が、どう〳〵風邪を引いたのが因で、十二月二日といふに、死んでしまひ、高輪の大圓寺へ、埋葬されたが、この事は、江戸の評判になつた、殊に琉球人が江戸市中へ練つて入つて來たときには、物見高い江戸の事とて、見物人が黒山を築いた、廣重は人混みの中に交りながら、其奇異なる結髪や、物珍らしい簪から、服裝に至るまで、全體に視覺を鋭くされる異國の風俗に、興味をそゝられて、その行列を畫いたが、この繪は、ついこなひだまで、安藤家に保存されてあつたさうである。

江戸の繁昌を誇る中でも、外にない自慢のあきなひと言へば、針金買、羅宇のすげかへ、縫針賣、印判の肉墨賣、酸漿賣といつたものである、それは價がわずかに二三文から、十文ぐらゐで、品物の

◎附錄　歌川廣重傳

性質から言つて、買ふ人も少ないのに、廣い江戸なればこそ、人口の多い江戸なればこそ、こんなものを商なつても、店賃を拂ひ、妻子を養つてゆけたからである、も一つは釣鐘である、これは俳人其角も「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」と咏んだが、出來合ひの釣鐘が、店先に吊る下つて、それが賣れるのが、江戸自慢である。

以上は江戸の繁昌を說明する商賣であるが、當時の文明の中心なる江戸を、美くしく裝飾したものに、江戸紫に因んだ紫染がある、紫染よりも更に美くしいのは、色摺の所謂吾妻錦繪である、吾妻錦繪は江戸の繁昌を描寫した證劵である、浮世繪の中でも、吾妻錦繪なる名稱が始まつたのは、鈴木春信が、明和のはじめからやり出したことで、吾妻錦繪なる名は、今日でこそ廉價にして、非藝術的なるコロタイプ版や、寫眞銅版などに取つて代られ、さしも繁昌を誇つた江戸の繪草紙屋なるものも、殘らず退轉して、わづかに古本屋か骨董商の店頭に、色の褪せた、蟲の喰つた錦繪が、塵塗みれにブラ下つてゐるに過ぎないが、私が小學校で地理を習つた時分、武藏國の物產に、錦繪が交つてゐたのを記憶してゐる、この名は私の少年時代を支配した、懷つかしい名の一つであることを忘れない。

例の蜀山人の寢惚先生文集といふ本には、鳥居風の一枚刷の紅繪（紅彩色の繪で、享保の初めから行はる）が、吾妻錦繪に壓倒されたことを詠じた狂詩がある、「忽自(ヨリ)ニ吾妻錦繪移(トツテ)一。一枚紅摺不(ベニズリウレ)レ沾(ザル)時、鳥居何敢勝(カナハンハルノブニ)ニ春信一男女寫成當世姿」錦繪が當時市民の好尙を支配したのは簡單なる紅繪よりも、色彩の複雜で、濃厚美麗なこと、紅繪のやうに役者を描くに專らでなく、男女の風俗を寫生して、變化も多く、日常生活に近かつたこと等の原因であらう、江戸ッ兒で、繪が大好きで、上手な廣重が、少年時代に、この「江戸自慢」の錦繪に心をそゝのかされないで、どうしやう、彼は當時の浮世繪師が、生ひ立ち時代に、誰もするやうに、師匠を求めた、さうして歌川豐國と歌川豐廣の二人の內を、賴むことにした。

彼は先づ當時江戸で全盛の、歌川豐國へ入門を願ひ出たが、豐國は門人が、日に日に多くなるばかりで、到底世話がしきれないからと言ふ理由のもとに、謝絶した、彼は當惑した、さうして豐國とは同朋輩の關係ある、歌川豐廣の方へ、知り合ひの貸本屋の紹介で、申し込んだがこれも斷はられた、實際、當時浮世繪師の大家には、隨分遊び半分の食客が、轉がつてゐて、弟子を新らしく取り立てるといふことは、費用からも、勞力からも、容易でなかつたと見える、併し廣重は、豐廣に面會して、細さに自分の希望を、熱心を面にあらはして頼み込んだので、豐廣も見どころのある男と、快く承知した。

廣重が豐國にことわられて、豐廣に容れられたことは、彼の一生涯の第一の回轉期である、彼が畫家として立つた第一の分水嶺である。

それを論ずるには、先づ師匠と仰がうとした豐國と豐廣の、如何なる傾向の作家であり、且つ如何なる關係の間柄であるかを、知らなければならない。

四、廣重の名

豐國と豐廣とは、歌川家の始祖なる歌川豐春の高弟として、負けず劣らず肩を並べてゐたのであつた、師なる豐春は、安永から天明寛政文化のころまで、榮えた人で、流行の風俗畫を描くに於ては、かの名高い喜多川歌麿にも、匹敵するほどの、譽れを取つてゐたが、その傍、芝居の看板繪を描くのに、彩色の妙を得て、この方面では、時代の權威なる鳥居家をも壓した、その相並んだ高弟として、豐廣は風俗畫の方面をおもに受けついだが、豐國の特色は、役者繪の方に力を入れたところにあらう。

豐國は當時の人氣役者の似顔と、美人繪を、華美な畫風に描き、それが大當りに當つてからといふもの、浮世繪師の人氣をしよつて立つたありさまである、今日でも、師の豐春や、同輩の豐廣の名を

◎附錄　歌川廣重傳

知らぬ人は多くても、豐國といへば、誰も知つてゐるほど、彼自身が人氣役者であつた、傳記者のいふところに依れば、彼の名は、遠く海外にも聞えて、支那人も西洋（蕃人）人も、その繪を求め、身分の高い貴族の子弟も、名を門生に列したと言つてゐる、浮世繪師の冠（豐國先生痤筆の記）「中興の祖」（增補浮世繪類考）などいふ讃辭は、彼に浴びせられた、同門の豐廣は、豐國に比べては、遙かに影の薄い人であつた。

併し豐國と豐廣とは、肌合ひも違へば、畫風も違ふ、日常のやり方まで、凡べてに於て、反對してゐるほど、性格の別な人であつた、豐國は華美で、豐廣は資素だ、國は廣告の名人で、どこへでも出張する方だが、廣は陰氣で引つ込み思案の方である、國は似顏を描く關係上、盛り場へ顏を出して、材料を拾收するが、廣はさういふことを避けて、似顏繪は一生涯御免を蒙むり、草筆の墨繪を板行して、張交畫などを描いてゐる、極端に寫眞的なる似顏繪（鳥山石燕に始まつて、勝川春章で、ずつと進んで來たといふものゝ）は、國の創始したところであるが、敵討の草紙の續物を描き出したのは、廣から始まつたのである、國は彩色の艷々しきを心がけ、廣は筆力を尙んでゐる、國はどこか職人肌である、山東京傳と氣が合つてゐると見えて、その作を最も多く畫いてゐる、例へば京傳の代表作ともいふべき本朝酔菩提、稻妻表紙、櫻姬全傳、雙蝶記、善知鳥安方忠義傳などがそれだ、就中文化四年京傳作、お六櫛木曾仇討には、卷中の人物を、時の投者の似顏繪で描いてゐる、廣は學者肌なる曲亭馬琴に親しみが深いかして、最も多く馬琴の作を畫いてゐる、俊寬島物語、松浦佐用姬石魂錄、夢想兵衛胡蝶物語、朝比奈巡島記、雲妙間雨夜月、絲櫻春蝶奇緣、松染情史、秋七種、括頭巾縮緬紙衣等は、その筆に成つてゐる。

同じ美人畫でも、豐國のは線が荒く太く、輪廓の急な屈折が目立つて、鳥居風の芝居の繪看板を見るやうに、羽子板の押繪を見るやうであるが、豐廣のはおだやかに、細く、婉曲して、肉も豐麗である、豐

國の女はいなせでおきやんで、豐廣のそれは、おつとりとして、しかも、どこかすつきりとしてゐる、豐國の手訣（テクニック）の大膽で奇拔なところは、豐廣のそれの、デリケートな、感情の微細に行きわたつてゐるのに比べて、藝術品としての、品位が下がつてゐるが、江戸市民の何より好きな芝居と藝妓を取り込んだところが、豐國の機敏なところで、その藝術的實質に、空虛な割合に、門戸を大きく張り、門人を多く引立て、世間の評判を巧に取つて、大師匠になり濟ました點に於て、彼は俳人寥太に、どこか似てゐる、增補浮世繪類考に「或人云、豐國は骨法、豐廣に不及事遠し、筆力劣れども、人目を喜しむる事、妙を得たり、戲場流行の時に逢ひしものなり」と喝破したのは、豐國が盲目的に崇拜せられてゐた時代に、こういふ鑑賞家のあつたことを、むしろ不思議とすべきものであらう。

門人の數に於ても、人材を網羅したことに於ても、勢力家なる豐國は、遙かに豐廣の上に出てゐる、就中國政、國直、國重、國貞、國芳などは、いづれも一粒選の大名題であるが、豐廣はこの點に於ても、やはり不仕合せである、廣昌といふのがあたが、この人は、駿州沼津宿の人で、二三種の錦繪を出したが、我が大風景畫家の兄弟子であつたといふ名譽の外には、聞えずに終つた、廣恒、廣政などいふのも、名簿には見えるが、傳はる程の製作をしてゐない、實子に豐清（通稱金藏）があつて、錦繪、草双紙、讀本二三部を描いて、上手と言はれてゐたが、早世してしまひ、その實子豐熊（通稱熊吉）即ち豐廣の孫は、後に廣重が名を成すやうになつてから、師の遺念として、親切にどこまでも面倒を見たが、名家に二代なしの喩へ通り、さまでに發達せずに終つた。

廣重が豐國に入門を謝絕されて、豐廣に敎へを受けるやうになつたのは、勿怪の幸ひといはねばならぬ、彼の風景畫を見ても解る通り、詩人肌の廣重が、どうして職人肌の豐國と、そりが合ふわけはない、廣重が强ひて柄にない、婀娜濃厚な美人畫や、役者の似顏繪を、描かなければならなかつたとすれば、それは彼の前途には、かの痛ましい非運の天才畫家、寫樂の運命が待つてゐたであらう。

◎附錄　歌川廣重傳

◎附錄　歌川廣重傳

寫樂は齋藤十郎兵衛（一に八郎兵衛）東洲齋（或はいふ東周齋）と號す、江戸八町堀に住む阿州候の能役者であつた、「歌舞伎役者の似顏繪を寫せしが、あまりに眞をかゝんとて、あらぬさまにかきなせしかば、長く世に行はれず、一兩年にて止む」と、傳記はこの二行しかない、三馬の考證では、一兩年どころか、半年餘行はれたゝけだといふ、寫樂の作をしたのは、寬政六年の頃で、五代目白猿、幸四郎、半四郎、菊之丞、仲藏、富十郎等の顏を半身に書き、多く蔦屋から出板された、その似顏書は、豐國派のやうな、肉づきの模倣でなくて、內心的の表情がある、或場合には、顏の皺から頰の黑子まで、細かにかいてゐる、それがために、偏心的で、歪面的で、いかにも風變りの筋肉を、隨分大膽な誇張と思はれるまでに、表現してゐる、さうして背景（バック）は、一面の銀色に塗り潰してゐる、所謂雲母（キラ）繪又は銀摺なるものは、全く彼の創造に出でたもので、後に歌麿、英山、北齋、榮之等も、この雲母繪を、眞似をしたものであつた、似顏を美くしいものと考へてゐる人たちから見ると、いかにも癈頹的で、荒惟なものに見える、強ひて言へば、飄輕なところは、大阪の耳鳥齋に似てゐるかも知れぬ、フエノロサ氏の言ふところに依ると、浮世繪蒐集家の中でも、米國人は之を好まないが、佛蘭西人は非常に愛好してゐるとのことであつたが、今日では、もはや寫樂が浮世繪師中、稀代の天才であることに、疑を容れるものはない、似顏繪の作家として、寫樂のやうな運命と、位置を占めたものは、空前絶後であらう、一枚の版書の價、五六百圓に上つてゐるが、しかし世に行はれなかつたゝめ、多く描かず、その作品は今ではごく稀少である。

とにもかくにも、廣重が風景書家となつたのは、豐廣の感化を受けたことが、隨分大きかつたらしい、何故かといふに豐廣は、師豐春の風景書法を傳へて、自然を題材とした描寫には、氣品の高い、見るべき作を出してゐる、豐國が遊里戲場の男女の人物を描いてゐるのと對して、豐廣は市民に多く人氣のなかつた植物や動物の、寫生を、美人書の傍らに研究してゐた、これは廣重も、師の沒するま

では、隨分手傳はされ、描かされてゐる、廣重が「魚づくし」（これはブリッチシュ、ミュージアムに藏せらせてゐる）や、その他の張交や、短冊ものなどに、巧妙精緻なる靜物や花卉動物の寫生をしてゐるのも、師の感化で、浮世繪に一生面を開いた風景畫も、それ等の忠實なる純粹正直の寫生が、その根本の基調ともなり、デッサンともなつてゐることは疑はれない、私の藏してゐる豐廣の近江八景の張交版畫（比良の暮雪）は、淡彩の線畫であるが、山の皴法も、水の點尖も、風情ある雪の樹木も、只つた一人を點綴した簑笠の翁も、蕭疎淡宕の趣に富んでゐる、たゞ豐廣の繪に缺けてゐるのは、豐國に見る潑溂たる生氣である、豐廣は、義太夫節が好きで、三味線が中々上手であつたさうで、今日のやうに、素人が寄席へ出る端緒を開いたのも、この人であるといふことだ、豐國のやうに氣稟の烈しくない、どこか有德の隱居然としたところが、あつた人らしい。

このやうな反對した傾向を有する豐國豐廣の二人が、同門の出で、しかも同時に並び立つて、ひいきひいきが、兩方に附き、双方とも畫に於ける着眼點を、異にしてゐたのだから、いきほひ仲も惡るくなつたと見えて、軋轢が始まつたゝめ、小說家式亭三馬が、大層心配して、書肆文龜堂主人と共に、調停を試み、文化七年、不破名古屋の留男といふ格で、「一對男時花歌川（いつついをとこはやりのうたがは）」といふ、双方に花を持たせた本（全十二冊）を著はし、二人にその本の挿繪を合作させて、仲直りをさせたと、「浮世畫人傳」に見えてゐる。（「戲曲小說通志」には、作者の三馬と、挿繪かきの豐國と、仲が惡るくなつたのを、この本で調停したとあるが、一對の歌川といふ名からしても、三馬は、當の相手ではあるまい）が、豐國豐廣の合作は、外にもいくらもあるらしく、豐廣豐國兩畫十二候といふ三枚續の立繪には、毎月違つた節季に、豐國と豐廣とが、各自競技的に、美人畫を製作してゐるが、この合作に於て、豐國はさすがに愼んで、豐廣の好敵手たる技倆を充分に示してゐる。

廣重は師の豐廣の人格と、技倆には、よほど推服してゐたものと見えるが、文化九年豐廣も、この

◎附錄　歌川廣重傳

有望な弟子に、初めて歌川の姓を名乘ることを許し、廣の一字を與へて、廣重といふ光輝ある名が、初めて我が繪畫史の上に生れた。

廣重の入門の年は、審かでないが、文化六七年の頃らしいから、先づ入門してから、二三年で、正式の名乘が上げられたわけである、時に廣重の年齡十七歲、かゝる少年で、免狀を得たことは、仕附方のやかましいその頃では、異數と言はれてゐるところで、筆力を見拔かれたものと見える、この免狀は、傳へて安藤家にあつたが、後に清水清風氏の所有となつたさうで、免狀には、元祖歌川豐春、同豐廣印、あとに門人廣重としるし、文化九年九月吉日としるしてある。

從來浮世繪師の名乘は、師匠の名の一字を貰つて、頭字に戴いてゐる例になつてゐる、例へば菱川師宣の後に、師房、師永、師重があり、西川祐信の門弟に、祐尹、祐代あり、勝川春章の門人に、春潮、春英、春朗、春好等がある類で、廣重の師なる豐廣も、又その競敵、初代豐國も、前に述べた如く、共に歌川豐春の相弟子で、師の一字を頭につけてゐるが、廣重は師の頭字、豐をもらはずに、尻の廣の字を頭に戴いてゐる、これは豐といふ字では、豐國の門下か、豐廣の門下か、辨別が出來ないためもあつたらうが、師匠の名乘の頭字を附けるのは、敬意を缺くといふ、遠慮もあつたらしい、豐國門人の國貞の名が、やはり同じ關係である、この國貞、廣重等が例になつて、以後の浮世繪師は、言ひ合せたやうに、師匠の頭字を拜領することを避けてゐる、即ち豐國の門人は、國貞の外に、國重、國芳、國九、國政の如く、皆國の字をもらひ、國芳の門弟は、芳虎、芳年、芳艷、芳幾の如く、芳の字をもらひ、國貞の門弟は貞の字をもらひ、貞秀の門弟はみな秀の字をもらつてゐるやうに、廣重の門人も、後に見える如く、重宣、重房、重清、重春、重歲など、重の字を襲つてゐる、明治になつても、浮世繪師の間には、この風が遺つて、芳年の門人に、年方、年英、年恒、年延、年峰がある、その年方の門人に鏑木清方、池田輝方などは、師匠の一字を、下に名乘つてゐるが、かやうな藝術名は、

老舗から暖簾を分けられたやうなもので、系譜調べには、尤も便利でもあり、且つ師弟の情誼が覗はれもする。

五、初期時代

入門は濟み、師の一字名も許された、併しながら廣重が、風景畫家として、我が浮世繪史上に一生面を開くまでには、未だ多くの年月を假さなければならなかつた、この間、廣重は多くの浮世繪師と同じく、草雙紙を描いたり、美人畫を出版したり、或は賴まれて廣告引札の圖案などをして、生活の助けとしてゐたらしい。

先づ草雙紙の方からいふと、師の豐廣は、前章に述べたやうに、馬琴ものを多く描き、その敵手初代豐國が、京傳ものを多く描いたやうな、さういふ大家の原作に、挿繪をかくやうなことは、彼の如き若輩未熟ものは、あきらめるより外はなかつた。

その頃麻布三軒家に住居する御家人（御普請役）で、細川浪次郎といふ通人がゐて、京傳の門人になつてゐた、これが東里山人、又九陽亭と號し、鼻形の印章を用ひてゐたところから、京傳鼻と異名を呼ばれ、自分も鼻山人などゝ稱してゐた、風變りの男であつた、少しく文才のあるに任せて、京傳物や、其他先輩の作を、いゝ加減に剽竊して、草雙紙を作つて出版したが、廣重はこの男に賴まれて、初めて草双紙の挿繪を描いた、その挿繪の處女作は「音曲情の絲道」といふ三冊本で、文政一年、岩戸屋から出版された、又天保二年も同じ人の作「出放題無茶論」六冊を描いた、やはり同じ板元である、けれども東里山人の作に、當り物は一つもなく、この作者は、晩年喰ひ詰めてしまつて、芝の切通で、傳授屋といふいかゞはしい看板を掛け、奇方妙術などを小さい紙片にしるして、いかさまものを賣りつけなどしてゐたが、その終り方を、誰も知つてゐる者はなかつた、折角の廣重の作畫も、や

はり作者の運命と同じく、埋沒して世に聞えずにしまつた。

文政十年には、江南亭唐立作、「筆綾三筋繼棹」、六冊を書いた、唐立は狂歌師で、中田慶治と呼び、十返舍一九の門人で、狂歌號は愚舍一得といつてゐたが、これぞといふ當り作もなかつた。

この初期時代に於て、廣重は一幽齋と號してゐた、三枚續の役者の樂屋を描いた、或錦繪（岩戸屋版）には、歌川廣重と署名してあるのを見た。

天保年間となつて、廣重の技倆が、世間に認められるやうになつてからは、柳亭種彦作「ふしみときは熊坂物語」後編二冊（西村與八板、天保三年）を書いて、前編の作書家國貞（後に二代目豐國）と、競技をしてゐる、又柳亭門人瓢亭吉見種繁作、旗瓢菟水の葛葉六冊（天保五年、鶴喜板）を描いたが、この種繁はいかなる人か、審でない、「江戸作者部類」にいふ、「種繁は種彦の弟子歟、天保四年の春新板に、好色團七島（西村屋板）といふ繪草紙の作見えたり」などある。

廣重はこの間も、草筆の貼交書などを多く書き、賣れ行きのあるまゝに、鳥羽繪も描き、又美人繪も少しは出板した、美人繪の中で、米人ハツバア氏のカタログに見えてるのは「外と内姿八景」の中の一枚田甫の落雁で、吉原の土手を急いで行く駕を、上部に小さく出し、衣々の晩鐘で、しどけなく肌をくつろげた女郎の、寢起姿が描いてあるが、重ね布團の上に、羽織をしき、其上に脛もあらはに乘しかゝつて、右の手には、ものうげに帶を抱へて、枕がうしろの方に拋げ出してある、綠と紅と紫と黃の色調で、フエノロサ氏の浮世畫人傳には、この作を文政三年と認定して、且つサア、ヨシユアレイノーズの作品、悲劇の女神としてのシツドンス夫人の、烈しい感情を憶ひ起させるやうな、力强さに駭かせると、評してある、又「今樣子寶遊び」といふ年代不詳の作には、燈籠を持つた美人を描いてあるが、これは鶴屋の七里といふおいらんの繪姿である、それから同じく文政三年の作と鑑定されてゐる岩戸屋板、美人風俗合には、京の島原の太夫在原を描いてあるが、そのデツサンは、丈が短

かくて、猫脊で、署名がなかつたら、溪齋英泉の作かと、疑はれるやうなものである。

今日殘されてゐる美人畫で見ると、彼はその方面の作家としても、おそらく第二流以下の、腕前ではなかつたかも知れぬが、この方面ではおそらく菊川英山以上に、出られやうとも思はれない。

この外に、ハツバア氏のカタログに依れば、彼は淺草奥山に出る貝細工の見世物のために、番付を描いてゐるが、さすがに氣が引けると見えて、應需と斷はつてあるさうだ。

私は廣重のそれをまだ見ないが、貝細工の見世物は、人物や、動物や、鳥に花木のやうなものを組み立て、龍の眼の下一間、鳳凰の尾先まで七尺、二間あまりの大庭、一丈二尺の鯉の瀧登りなどゝ、むやみに大きなものをしつらへ、當時江戸で時々開場したものと見え、林忠正氏が巴里で出板したカタログ(一、九〇二年)には、番附面が載つてゐる、双六樣の認め方で「かひさゐく」と題を書き、下に左の文言が、細字に認めて、枠外には、文政三辰の春本所回向院境内において、とある。

御町中樣、益御機嫌克被遊御座、恐悦至極奉存候、隨而當三月より、芝神明御境内におゐて、貝細工奉入御覽候處、殊の外御意に叶、大入大繁昌仕、難有仕合奉存候、猶又此度、當御境内におゐて、金の大屏風、近江八景之圖、亦大庭之風景、其外あらゆる名花草木鳥獸魚蟲古今珍敷工夫仕奉入御覽候間、初日より御賑々敷、御見物之程、偏奉希候。

月　日

滿亭一等
細工人　寶亭平輔

木戸錢を取つて、貝細工をげんぶつさせて、それが大入繁昌するところに、江戸市民の、たわいない享樂も覗はれる、さうして廣重が錢取仕事に、そんな廣告畫をかいてゐた時代の、呑氣さも偲ばれる。

併しながら、草雙紙も、美人繪も廣重の長所ではない、殊に草雙紙は、廣重一生涯の製作中、その

◎附錄　歌川廣重傳

初期時代に、五六部ぐらゐしかなく、天保五年吉見種繁の前記の雙紙を以て、絶筆としてゐる。

この點に於ても、廣重は他の浮世繪師とは、獨歩の位置にゐることに、注意しなければならぬ、當時名高い浮世繪師は、大體名高い作者と組み合つて、夫婦役者になつてゐた、北齋又は豐廣と馬琴、初代豐國と京傳、二代豐國（實は三代）と種彦などは、その代表的なもので、果は作者と畫工と人氣爭ひのため、絶交したことさへある。

馬琴と北齋は、二人とも負け嫌ひなために、仲が破裂したが、京傳は如才ない男だけに、豐國の御機嫌を取つて、草紙の終にも、豐國畫、京傳作と、豐國の名を一段上に刻ませて、一目も二目も置いて、友情をつゞけてゐた、二代豐國が、種彦の田舍源氏を、畫の力で賣行よくしたことは、有名な話であるが、既に挿繪かきといふからには、原作の羈絆に繫がれないわけにはゆかない、いかに見識を持した繪師にしてからが、人の作つたものに、當て嵌るやうな畫を作るといふことが、羈絆工藝に墮つる素因をなしてゐる、廣重が風景畫家として、草雙紙の作家から、獨立したことは——全然獨立とは言ひ得られないかも知れぬが——彼の藝術のために、幸福な結果を齎す一因となつたに違ひない。

美人繪も廣重ものは、板元でも歡迎しなかつたらしく、今日世に殘つてゐるものとては、いくらもない、當時は浮世繪師が、隨分と多く、さまで名のない後進が、板元を納得させて、自作を市に出すといふことは、容易なことではなかつたのであらう、初代豐國ですら、初めて賣出しのときは、芝神明前の繪草紙屋、和泉屋市兵衛（屋號泉市）に、下繪を持つて行つて、潤筆料は一文もゐらぬから、錦繪に出板してくれと頼んだのを引き受けて、賣り出したのが大當りをして、豐國のなら、數を言はずに、文句なしで出板されるやうになつたといふことである、この間に立つて、何の誰と認められるやうになるのは、容易ではなかつたらしい、廣重も其一人で、何かで賣り出さなければならなかつた、いづれかの新方面へ、出るより外はなかつた、——竟にその機會と時節が到來した。

六、海景及山岳景の寫生旅行

廣重の一身上に、變動が起つたのは、文政十一年(或は云十二年)師なる豐廣が、五月二十三日といふに五十六歳を一期として、歿したことである、この時廣重は三十二歳(文政十一年として)豐廣に師事すること二十年間であつた、もう獨立して、自身で自分の途を拓いて行かなければならなかつた、或說に豐廣の名を襲ぐやうにと、勸められたけれど、畫道未熟で、思ひも寄らないと、辭退して受けなかつたさうである。併し彼の號が、從來の一幽齋から、一立齋に改まつたのは、おそらく師が死んでから後であらう、歌川家の始祖豐春は、一龍齋と號し、その門人豐廣は一柳齋と號し、その又弟子の廣重が、一立齋と號したのも、祖師以來音讀に於て、同じ號を繼承してゐるのであるから。

翌くる年は、天保と改元した、その元年のこと、幕府から年々八朔の御祝として京都へ御馬を進獻する古例になつてゐる、廣重は同心の家から、畫工に出身したといふ緣故もあり、且つ動物寫生などに、妙を得てゐる人であるため、匹夫では見ることの出來ない駒牽の例式を、畫きたいために、內々運動して、默許を得たらしく、役人の御伴をして、東海道を京都へ下ることになつた、さうして寫生の目的を果したが、この駒牽の畫卷物は、今も某家に秘藏せられてゐるさうである、或は幕府の命を奉じて、寫生の役目を承はつて往つたとも、傳へられてゐるが、公式に作畫を命ずるとすれば、格式のある御抱畫師もあることで、市井無名の町繪師に、內命を下すといふことは、有り得ないことだらうと、私にはおもはれる。

(參考)駒牽のことは、「公事根源」などにも見えて、その例甚だ古い、天保十三年北村季文が作つて幕府に獻じた「幕府年中行事歌合」には

廿五番

◎附錄　歌川廣重傳

◎附　錄　歌川廣重傳

左　御馬進獻

久堅の雲のうへまて行くものは
秋の月毛の駒にぞありける

註に「御馬進獻は、馬屋の中の、駒を撰ばれ、八月朔日に、在京の大番頭を御使にて、内裏へまゐらせらるゝ事なり、これ等は古の駒牽の名殘にやさふらはん」とある。

この東海道の旅行がいかに、廣重の心肝に泌みわたるばかりの、自然の情趣を味はせたかは、これから專ら山水を畫く志を起して、間もなく東海道五十三次の製作となつて、あらはれ、しかもそれが廣重の出世作となつて、文學に於ける一九の膝栗毛と共に、當時の人たちに、東海道及びその道中といふことが、大なる影響を與へることになつたのでも、わかる、勿論廣重の東海道旅行は、只つたこの一回でなく、何回となく、寫生旅行に、東海道を上下したことがあると信ずべき理由がある、又同じ天保年間に、木曾街道六十九次も出板してゐるから、無論中仙道も通行したに違ひない、とにもかくにも、天保元年に、東海道旅行をしてから、廣重の日記に旅行の記事が、俄に增加して來たのも事實である。

廣重が羈旅の詩人として、雪や雨や霞の、多濕國に於ける水蒸氣の詩人として、一言にして言へば、日本に生え拔きの自然詩人として、我浮世繪史上、北齋と並んだ大風景畫家となつて、西の國の印象派なるウイツスラアを驚嘆させ、彼等の製作にまで形と色の諧調を學ばせるに至つたのは、この東海道旅行にあることを思へば、私は廣重の年譜を卑しながらも

一、八二八年（文化十一年）師豐廣沒す

一、八三〇年（天保元年）官吏に隨ひ京師に旅行

の境界こそ、廣重のために、あらず近代日本美術史のために、第二回轉期であり、第二の分水嶺であつたことを、信じないわけにはゆかない。

御馬進献の、東海道旅行に就いては、廣重は驛々の景色をスケッチしたり、又綿密な日記を作つたりして、その稿本は、安藤家に傳はつてゐたが、三代目廣重（既に沒す）が、それを表裝して、二卷に綴ち合せ、後に望む人があつて、讓つてしまつたとかで、今は存在の有無さへ解らない、又天保七年には、一官吏に從つて、東海道の諸川を巡遊し、水脈を探査して、その略畫を卿した、立繪三枚繼ぎの東海道川盡は、或はこの旅行から、思ひついたものかもしれない。

その頃、廣重は、度々旅行をしたが、その裏面には、美くしいロマンスが傳へられてゐる、當時廣重は、既に同心の株は賣つてしまひ、火消屋敷を出て、大鋸町に住してゐたらしいが、旅費の缺乏で、どうともしやうがなかつた、然るに彼の貞淑なる妻が、夫の心根に同情して、自分の櫛や、笄や、衣服を賣り拂つて、可なりの金を調達して、夫の手へ渡した、廣重はこの金を懐中して、三年間諸國を寫生して歩いた、それから江戸に歸つたときは、もう欝然たる風景畫の大家であつた。

廣重の作でも、實地の寫生か否か、疑問になつてゐる六十餘州名所圖會の材料も、おそらくこの時代に、諸國を放浪して、スケッチ帖を滿たした賜物ではなかつたらうか、現に諸國に遊んだときの日記も、あつたのださうだが、惜しいことに、散逸して、どこに紛れ込んでゐるのか、わからない、廣重の生家安藤氏に傳はつてゐる日記として、好事家の間に傳寫されてゐるのは、僅に甲斐、安房、上總に行つた時の日記で、甲斐の日記は、天保十二年四月二日から始まり、二十三日で中絶し、同年十一月十三日から、再び始まつて、二十二日で終結してゐる、上總へは同十五年三月二十三日に赴むき、鹿野山に登つて、四月江戸に歸つた、この旅行は、單に鹿野山へ登るのが目的であつたらしく、日記の標題は「日記」とあつて、天保十五辰年彌生の末と註してある。

◎附錄　歌川廣重傳

◎附　錄　歌川廣重傳

嘉永五年閏二月二十五日、再び上總に赴き、又鹿野山に登り、安房に入つて、小湊誕生寺と、清澄山に參詣し、東房州海岸の風景を眺め、更に西海岸に出て、那古、勝山、保田、鋸山をさぐり、四月八日江戸に歸つた、これは小湊の誕生寺參詣をおもな目的として、傍ら海景（シースケープ）のスケッチを、努めてした形跡が見える、尤も最後の八日、江戸に歸つた記事は、日記から缺けてゐる、海上無事で、それも江戸に歸つたので、別に記することがなかつたものと見える。

甲州の日記を讀むと、晩年の彼の作、富士三十六景や、富士見百景に、描寫してある犬目峠のことがある、「野田尻を立て、犬目峠にかゝる、此坂道、富士を見てゆく」とある、六十餘州名所圖會や、又立繪二枚續ぎ、甲陽猿橋の圖も、無論この旅行で寫生したものらしく、「猿橋まで行道二十六町、この間甲斐の山々、遠近に連りて、山高くして谷深く、桂川の流れ清麗なり」「猿橋向ふ茶屋にて、晝食、やまめの燒びたし、菜びたしなり」等見えてゐる、大月の宿で、富士登山道の追分で、熔岩流の谷などを見て、「谷川流れすさまじく、奇石多し」と言つてゐる、笹子峠にかゝつて、横吹の原を通行したとき、始めて甲府平原を俯瞰する日本南アルプスの大觀に接し、「右は山にて、山の腰を行く、左に谷川、高山に巖石聳え、樹木茂り、向ふに白根ヶ岳地藏ヶ岳八ヶ岳など、高峰見えて古今の絶景なり」と駭ろいてゐる。

それから今日の甲府に入つてゐるが、その目的は、町芝居に賴まれて、幕の繪を細工（畫くと言はずに、細工といつてゐる、今日では、意匠とでも言ふべきところであらう、さうして幕を畫くために、定められた場所を、細工所といつてゐる）するためで、一番目狂言は、いろは四十七人、中幕が安宅問答、大切が契情阿波の鳴門で、廣重は四月五日、到着、湯へ入つて、髭の月代をして、六日は芝居の世話人に、初對面の挨拶をして、八日江戸から着いた荷物を受取り、幕を染める霞の色合を相談し、九日は芝居を見物したり、世話人に御馳走になつたりして、十日は鐘馗を描き、十一日は五尺の屏風

を揮毫し、十二日は襖を四枚したゝめ、十三日は狂歌の會に出席して、十四日襖を又二枚描き、十五日は息抜きに祭禮をけんぶつし、十六日も休み、十七、八兩日には、幟に孔明をかき上げ、十八日晝過より、夜にかけて、幕をかき始め、二十日までに出來上つたらしい、畫料として受取つたのが、二百疋、饅頭一重、胡瓜一籠、なまり節一本、幕の畫代は五兩貰つて、その中四兩一分二朱を、江戸へ送金したと、しるしてある。

甲府滯在中は、御嶽から身延山へも、登山したと見えて、別冊に、甲州御嶽外道の原、鞍掛岩、象ケ鼻、大門、鍬澤、不二川、洗濯岩、釜無川、早川等の寫生圖もあり、裏富士の繪には、狂歌で讃がしてある、是等の日記を見ると、旅中に江戸人や、又江戸の講中と、道連れになつたこと、目指す宿舍をことわられて、穢さ苦しい、埃だらけの破れ疊の上を、蟲の這ひずつてる木賃宿に、一夜を明かしたり、名所舊跡の謂れを聞いて、手帖にうつし取り、酒の惡るかつたことを忘れずに書き、狂歌や發句を詠んだりしてゐたことが、よく解る。

廣重は、酒量は可なり強かつたらしく、日記に依ると、甲府滯在中も、上總安房の旅行でも、大分飲んである。

廣重のスケッチ帖を、引き裂いて、そのまゝ刻板にしたのではないかと思はるゝ卿筆畫譜、初篇には、富士川の藤橋、不二川、猿橋、諏訪湖からの不二及八ヶ岳などの、略圖が見えて、後の名畫猿橋の原稿も、この旅行とスケッチから、胚胎したことを、愈よ確かめることが出來ると思はれる。

七、寫生と粉本

廣重の旅行に就いては、日記に依つた分だけを、前章に述べて置いたが、それ以外に彼が後年寫生旅行をした範圍は、隨分と廣かつたに違ひない、彼が晩年の作六十餘州名所圖會は、日本全國を大概

◎附　錄　歌川廣重傳

一國一景の割合で、(たゞし武藏は、淺草や隅田川の二枚を見た)描いてゐる、さうして民衆的に、その國の代表風景になつてゐるところを描いてゐる、例へば美濃では養老瀧を、甲州で猿橋を、信州で姥捨山を、飛驒で籠渡しを、越後で親不知を、岩國で錦帶橋を描いた類である「日本湊盡」では、長州下の關から、讃州丸龜に及んでゐる、「山海見立相撲」では、越中立山と劍ヶ岳とおぼしき山岳にまで及んでゐる。

是等が實際諸國を遍歷して、寫生したものであらうか、もし然りとすれば、交通不便の、その當時としては、その寫生行脚は、長日月に渡らねばならぬ、廣重の生活に、それだけ多い時間の罅隙を許すことが、信じ得られるであらうか、右に就いて「浮世繪派畫集」の作家小傳に、「他人の作れる圖畫に依りて、描き出したるもの多かるべし」といふ疑を存してある、さうしてそれは、或程度までは、事實であらうと私も信ずる。

私の知人某氏は、廣重自筆の日本名山草稿一冊を藏してゐる、小形橫本で、鼻紙風の粗末な半紙へ、八折大に、スケッチしたものを、二十二書ばかり、集めて、後に家人が貼りつけて製本したものと見え、或ものには、廣重が落款に用ひた片假名のヒロの菱形朱印を押してある、全くの見取スケッチで、遠山、近水、人家、木立、海の檣船、溪水の石まで、疎筆に描いてある、さうして雜とした山名の註や、解說がしてある、開卷すると

日本名山圖の草稿は、初世廣重翁の筆なり、此草稿は、二世廣重子の藏たりしを、同子の亡後、親籍(戚)小菅某の所有となりしが、亦改めて、予の藏に期(皈)す、傳に曰く、初世廣重翁諸國遊歷之際、寫生せしものと云ふ。

明治三十四年十一月十五日　　清水晴風

この清水氏は、純粹の神田兒、好事家として世に名高い人であつたが、本年病沒せられた(遺稿と

して出版されたものに「神田の傳說」一冊がある）三世廣重の沒後まで、安藤家のために、世話を燒かれた人であるさうな。

併し不思議なことに、その山は、谷文晁の日本名山圖會にあるものに限られてゐるのみならず、その山の皴法や、山名までが、あまりに酷肖してゐるので、對照して見たところが、全然文晁の日本名山圖會を、疎畧に模寫したものと解つた、自然から直寫したスケッチでないのに、失望したもの丶、廣重が何かの參考に、さういふものまで、寫し取つてある用意が、覗はれもした（敎育の普及しない當時では、書籍は貴澤品の部に屬してゐた、その必要があつた時は、筆耕で謄寫したものである、寫本なるものが、流行したのは、必ずしも原本が、珍奇で、獲難き場合のみには限られなかつた）

私はそれから、廣重が、この種本を、如何に利用したかを、彼の版書に就いて考究して見た、ところが前記「山海見立相撲」越中立山の版書に於て、劒ヶ岳連峰の奇恠な、直立をしてゐる覇王樹形の、山頭の輪廓が、文晁の名山圖會から、粉本を取つた形跡が、推知される、さうして立山とおぼしき山の皴法も、上半部は、文晁のそれに類似してゐる、只立山と劒ヶ岳とおぼしき山の位置が、文晁のとは反對になつてゐる。

六十餘州名所圖會は、江戸や東海道のやうな、人間的興味（ヒューマンインテレスト）から離れて、山谷水石の姿、そのものが活き々々と、特殊な力強さと、濃彩を以て、表現されてゐる、さうして寫生の方面から言ふと、中には空疎で、なつてゐないものもあるが、又中には至つて駭ろくばかりの精確と、緻密に寫生されてゐるものがあつて、むしろ自然に引き摺られ過ぎて、ゐはしまひかとおもはれるまで、忠實精刻である、到底「他人の作書に依つて描き出」したものとは、思はれないのである、例へば飛驒籠渡しの圖などはその一例で、本圖に就いて、聊か左に解說を施こして見たい。

飛驒の籠渡しや、吊橋を、始めて描いたのは、描いて世に行はれたのは、おそらく同國の國學者津

◎附錄　歌川廣重傳

◎附錄　歌川廣重傳

野滄洲（畫名三木長噸）が、始めであらう、滄洲の原作は、浮世繪などとは、大分趣の變はつた、素人が餘技で、漢畫をやつたといふやうな、風であるが、寫生畫であり、且つその題材の、荒惟にして、ローマンチックなところが、人の好奇心を刺戟したゝめであつたか、世に傳寫され粉本にもされた。

浮世繪の風景版畫家として、北齋は諸國名橋奇覽に、飛越の境として、吊橋を描いてゐる、只だ見る、兩崖突兀、谷深くして一水を見ず、森林の梢頭、遙かに橋下に及ばず、吊橋は往來の樵夫二人の重量のために、V字形に折れ、虛空には、高く尖れる塔狀の峰を、懸けてゐる、例に依つて、至つて大膽な、些細の寫實に拘はらない、曠古のいきほひを示してゐる、さうして、その構圖は、荒惟で、威嚇的で、空想的で、いかにも北齋の獨創に屬するものであつて、背景の黑く尖れる高山の如きは、（パロマイト）蜀の棧道などに見まほしき石灰岩質の山である、もしくは伊太利の白雲岩系に屬するアルプス山を憶ひ起させる山である（かゝる岩質の高山は、日本アルプスにさへ、見ることの出來ないものである）併し大體の構圖から見ると、北齋も、或部分は滄洲の原作を粉本としたかとおもはれるところがある。

廣重のは吊橋でないから、北齋のそれと、比較することは出來ないが、滄洲のそれと比べて、遙かに日本的に、北齋のと比べて、遙かに現實的である、彼が精緻なる寫生は、流水の渦から、又溪水の侵蝕に依つて、分離した岩片から、又その岩片の圭角からも、覩はれるが、殊に背景の山岳は、飛驒地方に最も多く發達して居る斑岩質山岳の輪廓を、如實に描いてゐる、一方の側崖に、彼は綱引くおやぢと、籠の戻つてくるのを待ちつゝある虛無僧（籠渡しに虛無僧が、いかに草雙紙趣味であるか）を描いてゐるのに對して、北齋は二頭の鹿を點出してゐる。

空想と深秘を狙ふ作家と、現實を平面に見て行かうとする作家と、この二人の風景畫の出立點が、この岩の上でも覩はれる。

且つ同じ畫集の中で、この附近の國々の描寫地域を、調べて見ると、飛驒の籠渡し（飛驒越中の境）

から、越中笹津川の船渡しとなり、越後の親不知となり、佐渡の金山となつて、その路筋は、同一人の通行した路として、連絡がついてゐる、他人の寫生した、個々別々のスケツチを、補綴して作製したものとしては、順序がよすぎる、勿論私は六十餘州名所圖會全體、悉く實寫生より成ると斷定するほどの、強い主張を有してゐないが、さればとて「他人の作畫に依りて、描き出せるもの多かるべし」といふ假說に傾聽するほど、しかく廣重の寫生旅行區域を、縮小する理由を得ることが、出來ないのである。

こゝに一つの疑問がある、廣重が豐廣に入門したのを、假に文化六年とすれば、彼の出世作、次章に記するところの東海道五十三次が出版されたのが天保五年であるから、その間二十五年を經過してゐる、廣重の代表作は勿論、大多數の製作が、皆この東海道五十三次以後、即ち天保五年、彼の年齡に於て三十八歲以後に出てゐるとすれば、その間彼は何をしてゐたのであらうか、私の考へでは、その間に於ても、彼は東都名所、及び江戶名所の或部分を、可なりに出板してゐたのであらうとおもふ、それから彼の旅行區域も、その間にひろげられたのではあるまいかとおもふ、實際彼が東海道五十三次を出して、聲名が隆まつて以來、彼は多大の精力を傾注して、多大の製作を產出してゐるから、到底それ以後は、長年月の旅行を許すほど、餘裕が無いものと見たいからである。

本文に附隨せる揷畫は、廣重の代表作として、世に名高きものを避け、あまり世に知られずして、山水の忠實なる寫生を、覗ふに足るべき作を選びたり、「籠渡し」は本文の第七にて說明せり、三河の鳳來寺山は、塊狀火山の岩石を、巧みに寫生し、且つ一味疎岩の氣橫生せるを見る、惜しいかな、網版にては原畫の色彩を出だすこと能はず、却つて描線のうるさく混亂したるが、目立ちて、おもしろからざるものとなれり。

大正二年十二月十四日印刷
大正二年十二月十五日發行

著作權所有

定價金六十錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　橫濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　橫濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂